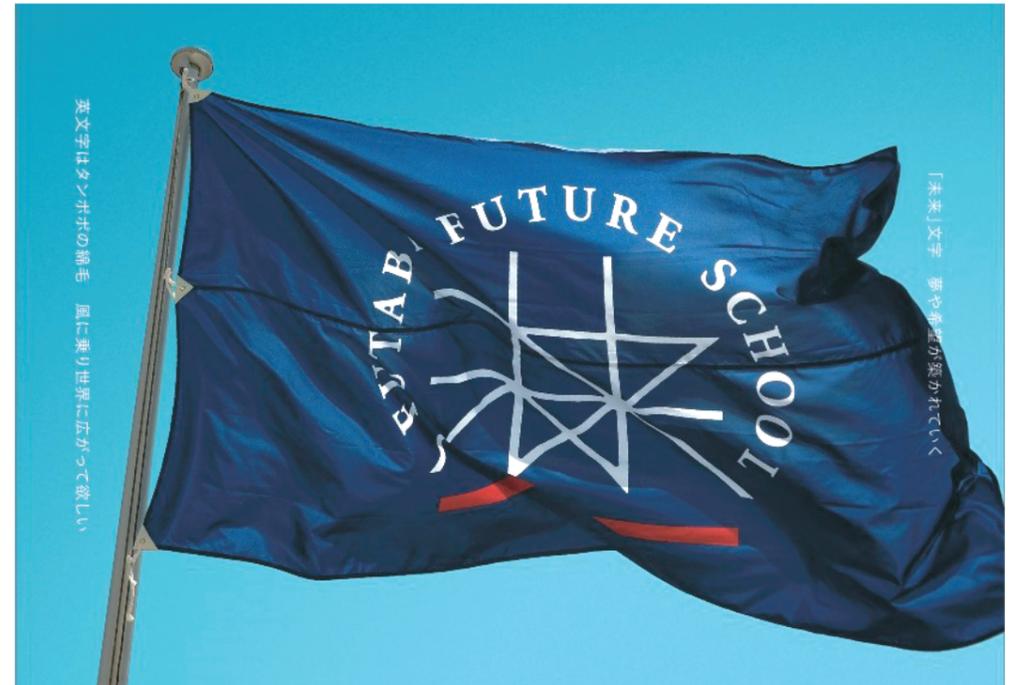


令和2年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
【グローバル型】
研究開発実施報告書

第1年次



令和2年度指定 地域との協働による高等学校教育改革推進事業【グローバル型】研究開発実施報告書 第1年次



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 柳沼英樹

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から10年が過ぎた。「日常」と考えていたことが「特別」だったんだと気づかされた10年前に比べれば、私たちを取り巻く環境は、避難指示が徐々に解除されたり、学校が元の場所で再開したり、食べ物を安心して食べることができたり、町にも賑わいが見られるようになったり、一步一步着実に復興の歩みを進めているように思える。その一方で、未だにふるさとを離れた生活を余儀なくされている方々が3万人を超える状況であり、双葉郡をはじめ福島で生きる私たちは、否応なく次のような課題に向き合っていかなければならない。

第一に、全国の地域が直面する課題である。双葉郡、福島県では、日本のあらゆる地域が直面している、少子高齢化、過疎化の急激な進行などの課題が、震災と原発事故により先鋭化しており、いわば「課題先進地域」となっている。第二に、原発事故特有の課題である。故郷を汚染され、帰りたくても帰ることができないという現実。長期にわたる避難生活。差別と偏見。コミュニティ内での対立と分断。第三に、以上の課題は、同時にグローバルな課題として私たちの前にある。例えば、2030年に向け国際社会が合意して取り組んでいる『持続可能な開発のための目標』である、「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」「安全な水を」「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「住み続けられるまちづくり」「海や陸の豊かさを守ろう」「平和と公正をすべての人に」など、これらのグローバルな課題は、この双葉郡、福島県においては、今、目の前にある危機に他ならない。

このような中、私たちは、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現、自立した新たなコミュニティ・まちづくり、再生可能なエネルギー社会の実現など、新しい生き方、社会の建設を目指し、変革を起こしていくことが求められている。

このミッションに応えるチャレンジが、本校のSGH研究開発であり、今年度からは文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、引き続き研究開発に取り組んでいる。特に、県・学校・双葉郡8町村・高等教育機関・地域関係者によるコンソーシアム協議会を組織し、様々な意見をいただきながら、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進してきた。生徒たちは、コロナ禍の中、人との接触に今までに無かった配慮が求められる状況にあっても、たくましく、前向きに探究を深め、役場や商店、病院、企業などを訪問して出会った、解が見えないような困難な課題を題材とした対話劇を創り上演し、協働性、寛容性などコミュニケーション力や本質をつかむ力を身につけている。さらに、海外研修に代えて実施した、ブリティッシュヒルズでの合宿研修、徳島県上勝町スタディツアー、広島国泰寺高校との交流も実施した広島研修、国連日本政府代表部及び Youth Delegates とのオンライン対話などを通して、現代の世界が直面している抜き差しならない課題と向き合い、OECD諸国をはじめとした国々で共通して重要と認められている普遍的な「共通価値」と邂逅し、否応なく、これまでの価値観、社会のあり方を

根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現へ向けた課題意識を深めている。加えて、地域の課題を解決する 100 を超えるプロジェクトを自分たちの力で立ち上げ、地域の様々な主体と協働しながら実践を積み重ねている。

このような、企業、行政、NPO、研究機関など多様な主体と協働する学びを通して、多くの生徒が、失われた故郷を取り戻し自分たちで新たに創造していこうとする意志、困難な状況にあるからこそ可能なことを構想する力を身につけ、困難を乗り越え、夢に向かって着実に前進している。

これまでの取組を継承するだけでなく、学校と地域がさらに連携を深め、生徒の探究が、学びと地域復興の相乗効果の創出につながるとともに、探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しできるよう、取組を推進していきたい。

結びに、私たちの挑戦を支えていただいたすべての方々に深く感謝申し上げるとともに、多くの困難を乗り越えてきた生徒たちと彼らを導いてくれた教職員に敬意を表する。

目 次

巻頭言		
第 1 章	研究開発構想の概要	1
第 2 章	活動実績	19
第 3 章	研究開発の内容	
	3.1 産業社会と人間（1年）	25
	3.2 未来創造探究（2年）	35
	3.3 未来創造探究（3年）	54
	3.4 研修	72
	3.5 発表・交流	81
第 4 章	カリキュラム・マネジメント	
	4.1 探究活動の指導方法	91
	4.2 未来研究会	104
	4.3 外部連携	106
第 5 章	オンライン授業の展開	109
	5.1 経緯	109
	5.2 内容	109
	5.3 考察	111
	5.4 今後の展望	114
第 6 章	実施の効果とその評価	117
	6.1 ルーブリック分析	117
	6.2 アクセンチュア株式会社によるルーブリック分析	122
	6.3 自己の在り方生き方への影響に関する評価	126
	6.4 「グローバル型」目標に対する評価	130
第 7 章	課題と今後の方向性	137
関係資料	教育課程表	141
	ルーブリック表	143
	第 1 回コンソーシアム協議会記録	144
	第 1 回グローバル型運営指導委員会記録	148
	4 期生未来創造探研究生徒研究発表会テーマ一覧	153
	5 期生ブレ発表会テーマ一覧	158
	報道記事	163

第 1 章

研究開発概要

1.1 研究開発概要（事業構想）

1 教育目標

① 管理機関における教育目標

ふたば未来学園中学校・高等学校は東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県双葉郡に平成 27 年に高等学校、平成 31 年に中学校が開校した。現在、双葉郡では原発の廃炉、地域コミュニティの再生、風評との闘いなど地域を分断する困難な課題が山積している。世界と協働しながらこれからの復興・地方創生を進めていく人材の育成が、この地域にとって喫緊の課題である。このため、グローバルな課題である原子力災害からの復興をテーマとして設定し、地域との協働による地域の課題解決に向けた探究・実践と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラムを開発する。

② 学校の教育目標

本校は震災と原発事故により休校となった 5 校の伝統を引き継ぎ開校した。世界が経験したことのない困難な課題に直面した本地域の課題は、極端な少子高齢化や人口減少が進行する未来の全国の地域や、異なる立場や価値観を排斥する世界の分断と重なり合っている。本校は、こうした地域と世界の課題解決に貢献する人材を育成し、全国の学校や地域の変革を牽引する強い決意のもと、「新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や社会を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方と根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者』を育成する。」 【補足 1】

【補足 1】学校概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、福島県、特に双葉郡とその近隣市町村に深刻な影響をもたらした。地域住民の避難が長期化するなか、教育環境の整備と震災を踏まえた諸課題に対応できる人材育成のため、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、本校は平成 27 年 4 月に新設された。

本校は、募集停止となった双葉郡内の 5 つの高等学校の歴史と伝統、教育内容や特色を踏まえた幅広い学びを可能とした総合学科高校として、以下の 3 つの系列の科目群を設けている。

- ◇「アカデミック」系列：大学等上級学校に進学するために必要とされる主要教科を中心とした科目群
- ◇「トップアスリート」系列： トップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーとして活躍することを目指し、バドミントン、サッカー、野球、レスリングで高度な技術・理論を習得することを目的とした科目群
- ◇「スペシャリスト」系列：農業、工業、商業、福祉の分野において地域を支える職業人として将来活躍するために必要な知識・技能を習得することを目的とした科目群

本校はふたば未来学園中学校も併設している。中学校は 6 年間を通した最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学び、グローバル教育、シティズンシップ教育の 3 つを中高一貫教育の柱に掲げ平成 31 年 4 月に開校した。

平成 27 年の開校当初、校舎は、広野町の本校舎、猪苗代町の猪苗代校舎（「トップアスリート」系列バドミントン生徒が在籍）、静岡県三島市の三島長陵校舎（JFA（日本サッカー協会）アカデミー福島生徒が在籍）の 3 つに分かれていた。平成 31 年 4 月に中学校が併設されると同時に広野町に新校舎が完成し、猪苗代校舎は閉鎖となった。現在は本校舎と三島長陵校舎の 2 校舎に生徒が在籍している。

在籍生徒数 (令和 2 年 1 月)	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年	中学 合計	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	高校 合計
本校舎（広野町）	59	13	8	80	123	118	120	361
三島長陵校舎	-	-	-	-	20	19	21	60

2 構想の目的等

① 構想の目的

「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」として、これまで SGH で行ってきた研究成果の分析を生かしつつ発展させ、目的として以下を設定する。【補足 2】

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

【補足 2】 構想の目的と背景、求める地域人材

本校は平成 27 年の開校と同時にスーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」という構想のもと、これまで 5 年間研究開発を行ってきた。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きた地域に立地していることから、原子力災害からの地域復興に関する様々な活動を行ってきた。また通常教科・科目においてはアクティブラーニングの手法を積極的に導入し、グループワークやディスカッションなど生徒の主体的な取組を導入してきた。開校当初から SGH 指定となり、学校文化を作りながら研究開発も同時に進め、これまで以下のような成果が得られた。

- 「総合的な学習の時間」において地域の課題に向き合う活動を行い、課題の発見、課題の解決に向けた取組を学校全体で推進するような学校文化が形成された。
 - 本校の教育活動全体で育成すべき資質能力をまとめたルーブリックを作成し、これに基づいて評価を行うシステムの礎ができた。
 - 海外との連携先として、ドイツ、ニューヨークを選定し、現地の同世代の生徒と交流する場の形成、世界の課題を捉える取組づくりをすることができた。
- 一方で、以下の点が課題として明らかになってきた。
- 「総合的な学習の時間」は 2 年生から始まり、探究活動という視点からは 1 年生での取組が手薄となっている。1 年生では、関連する教科・科目として「産業社会と人間」を履修している。ここでは学習指導要領に基づき職業観の育成や進路選択等を行い、さらに表現力育成のための演劇等を取り入れているものの、探究的な視点が欠けており、課題があった。
 - 探究活動における教員の指導方法について整理されておらず、教員個人の力量に任される部分が多かった。研究開発校として汎用的な指導法の開発を目指してきたところであるが、現在も道半ばである。
 - 海外研修について試行錯誤をしながら実りのある研修先や研修方法について検討してきたが、地域と世界の関係を深く考察するまでには至らなかった。
 - 福島県双葉郡復興ビジョンのもと、地域との緊密な連携を行いながら教育を行ってきたが、これまでには学校の開校が重視され、広域の地域連携については課題があった。

上記のような課題も踏まえ、また地域課題の解決に向けてさらに発展的な取組を加え、今回、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(グローバル型)に申請することとした。構想の目的として、以降に示す達成目標と紐づけて、以下の 3 点を設定した。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発 (3 年間を通して切れ目なく地域探究活動に取り組むカリキュラム、また地域課題とグローバル課題を効果的に往還するカリキュラムに関する研究開発)
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成 (調査研究ではなく、真の意味で

の課題解決に向けた実践を行うことのできる人材の育成を特に重視。また定量的評価に基づいた目標の設定を実施。）

C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及（学校と地域の協働による、学びと地域活性化の相乗効果を創出、高校での探究活動を核とした学校文化と新たな地域の創造、探究活動における生徒と教員の関わり方に関する提案などを実施。）

② 求める地域人材像

本校は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン（25年7月）」が建学の礎となっており、同ビジョンにおいて地域が提起した求める人材像を踏まえつつ、本校開校後にルーブリックで人材像を具体化してきた。今後本ルーブリックを地域とのコンソーシアムにおいて主に下記の視点を重視し改訂していく。 【巻末のルーブリック参照】

- 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する、協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、地域に新たな価値を創造する力

3 達成目標（関連資料：「目標設定シート」）

① 定量的目標※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的B、Cに関する達成の判断材料として、以下の定量的な目標を設定する。

- 本校では育成したい具体的な知識・スキル・人間性等をルーブリックにまとめ、10項目0（低）～5（高）のレベルで規定している。目標の最重要項目として「3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上」を掲げる。これまでレベル平均値は上がっているが、3.5という値は、挑戦的なレベルである。 【巻末のルーブリック参照】
- 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。
- その他、最終年度で「地域と協働した課題探究プロジェクト50件以上」「協働する地域の方延べ200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」を目標とする。【補足3】

② 定性的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的Bに関する、生徒に習得させる具体的能力は①定量的目標記載の通り。

目的A、Cに関する達成の判断材料としては、以下の目標を設定する。 【補足3】

- 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。
- 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
- 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【補足3】 本構想の目的A、B、Cに紐づけて達成目標を以下の通り設定した。目的の内容を踏まえて、目的Aについては定性的目標を、目的Bについては定量的目標を、目標Cについては定量的目標と定性的目標を設定した。また定量的目標については関連資料：「目標設定シート」に記載した。

目的A「地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発」に対する目標

総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。また、2, 3年次に履修する「総合的な探究の時間」において地域課題に向けた探究活動を行い、探究活動の効果的な進め方について整理する。探究活動を効果的に進めるための方策、例えば、探究活動ルーブリックの開発、探究段階に応じた教員の関わり方についての整理、探究段階に応じた発表会の設定等についてモデルを構築する。

また、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。海外研修などを通じて生徒による地域探究活動と世界の課題事例との共通点を探り、本質的な課題解決に向けた取組を行う。また最近特に注目されている SDGs を紐付けたマップやエッセイの蓄積、海外来校者やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の視点を生かした新たなアイデア創出等を行う。なお、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生について、本校は平成30年度から受入れを行っており、令和元年度は2名の留学生が滞在している。

目的B「原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成」に対する目標

本校では教育活動を通じて育成したい具体的な資質能力をルーブリック（添付資料3）にまとめている。本校のルーブリックは知識、技能、人格、メタ認知といった学力概念のもと10項目あり、定性的に表現しているが、それをレベル0（低い）～5（高い）の数値で規定している。「0」は全く達成できていないレベル、「3」は教員が求める学校で達成してほしいレベル、「5」は「変革者」を達成できることが想定される極めて高いレベルである。ルーブリック評価は入学直後から卒業まで数回実施し、生徒の資質能力の伸長度合いを測定している。今回、定量的目標の最も重要な項目として、「3年生最後のルーブリック10項目のレベル平均値で3.5以上」を掲げることとした。これまでの推移では年を経るごとにレベル平均値は上がっている（一期生（平成29年度卒業生）：1.99、二期生：2.63）が、3.5という値は実現できておらず、挑戦的なレベルである。なお、ルーブリック評価は自己評価であるが、客観性を高めるため、生徒同士によるピアレビューや教員との面談を試験的に実施しつつあり、本事業ではこの評価システムを確立する。

また地域社会への貢献についての目標として、「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。本校では、高校卒業後、就職希望が30%程度、進学希望が70%程度である。就職希望の生徒はほとんどが地元就職するのに対し、進学希望の生徒のほとんどは地域外の大学等へ進学する。これはこの地域に高等教育機関がほぼないことが大きく影響している。そこで地域への貢献の指標として将来的な地域貢献への期待度を示すアンケートを取り上げることとした。地域に根差した探究活動を行うことにより地域の魅力を発掘し、将来、この地元に関わりたいと感じる生徒の割合は高くなることを確信している。

目的C「双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及」に対する目標

本校は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、地域との連携を重視して開校したが、これまでのネットワークを一層拡充し、教育と復興の相乗効果の創出のための地域協働体制を確立する。そのためにコンソーシアムを組織的かつ実働的なネットワークとして機能させる仕組みを構築する。コンソーシ

アムでは8町村という広域での連携をカバーし、行政、民間、教育界といった幅広い業種による連携を目指す。本校が行う活動に協力をいただくだけでなく、連携側も本校の校舎を積極的に活用する等、学校を核とした多方向の連携、ネットワークの構築を目指す。

また、モデル校としての高等学校教育改革推進への波及に対する達成目標としては、多面的な定量的目標として、「保護者アンケートによる本事業への70%以上の肯定的評価」、事業への外部からの関心の度合いとして「視察、研修、発表会、聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数250人以上」等を掲げることとした。さらに地域と連携を測る指標として「地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数50件以上」、「本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数200件以上」を掲げることとした。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位： なし
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数					単位： 件
	22	31	40	45	50	50
目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位： 人
	調査なし	200(見込み)	200	230	250	250
目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位： 件
	調査なし	30(見込み)	35	40	45	45
目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数					単位： 件
	133	150(見込み)	165	180	200	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数(人)		421	440	463	480
本事業対象生徒数			381	403	420
本事業対象外生徒数			59	60	60

4 実施体制

(1) 管理機関及びコンソーシアムの実施体制

①管理機関における実施体制や事業の管理方法

双葉地区の未来を創造するリーダーの育成を具現化するために、双葉郡8町村、高等教育機関、地域、産業界、NPO等がコンソーシアムを構築し、協働して双葉郡ならではの教育を推進するとともに、子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、地域ならではの新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

②運営指導員会の構成

氏名	所属・職	備考

飯盛 義徳 氏	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊 美保 氏	経済開発協力機構 (OECD) 教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村 学 氏	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

③コンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会 (双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表)	笠井 淳一 氏
福島大学人間発達文化学類教授	中田 スウラ 氏
公益社団法人福島相双復興推進機構 (福島相双復興官民合同チーム) 専務理事	新居 泰人 氏
公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之 氏
認定 NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	長谷川 勇紀 氏
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	丹野 純一
福島県教育委員会 教育長	鈴木 淳一

④コンソーシアムにおける実施体制や事業の管理方法

本校建学の礎である「福島県双葉郡教育復興ビジョン」推進のための「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」がこれまで定期的開催され、管理機関及びふたば未来学園も参画している。同会議における全体ビジョンの検討と、学校における地域協働による個別の探究実践との間をつなぐ実働的な枠組みが求められており、コンソーシアムはこの役割を果たす。コンソーシアムは管理機関が統括し、本事業の方向性や人材育成要件の確認、カリキュラムへの助言、参画各機関の特性を活かした生徒の探究活動の支援を行う。

⑤カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置や活用に関する計画

カリキュラム開発等専門家：長谷川勇紀氏 (NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長) 探究活動のカリキュラム策定や地域探究活動の効果的な進め方について助言をいただく。
 海外交流アドバイザー：島田智里氏 (ニューヨーク市役所公園局都市計画&GIS スペシャリスト) 海外との連携について国際協働と地域開発の専門的観点から助言をいただく。
 地域協働学習支援員：平山勉氏 (双葉郡未来会議 代表) 双葉郡 8 町村の住民主体の復興活動のハブとしての立場から、地域探究活動における連携先について助言をいただく。

⑥管理機関及びコンソーシアムにおける活動計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
管理機関	<ul style="list-style-type: none"> ○第 1 回コンソーシアム協議会の開催 (計画策定) ○活動計画の実施や教育課程特例取得に向けた指導助言 	<ul style="list-style-type: none"> ○第 2 回コンソーシアム協議会の開催 (事業の進捗確認) ○第 1 回運営指導委員会の開催 ○教育課程特例の申 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校訪問による指導助言 	<ul style="list-style-type: none"> ○第 3 回コンソーシアム協議会の開催 (成果の検証) ○第 2 回運営指導委員会の開催

		請		
コンソーシアム	○事業構想、人材育成要件、役割等の確認、共有 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○生徒探究発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用	○生徒中間発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用 ○1年間の総括

⑦事業終了後の取組計画（カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置・活用計画やコンソーシアムのコミュニティースクール化等を含む。）

本事業終了後についても、地域参画でカリキュラムの改善や地域協働の深化を継続するため、コンソーシアムの枠組みを維持することを検討する。また、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習支援員の協力を仰ぎながら、同様の事業を継続するとともに、両者の役割を一部でも教員が担えるよう、本事業実施期間内にノウハウの伝達を行い、地域協働の取組の持続可能性を高める。費用については引き続きの事業継続が可能となるよう管理機関において支援するとともに、地域から持続可能な体制の構築について助言をいただき、各種団体の助成金等を活用し自走できるようにしていく。

⑧学校と地域団体・大学等との連携協定の概要

○双葉地区教育長会（双葉郡8町村）がまとめた「双葉郡教育復興ビジョン（25年）」に教育復興の方向性と本校開校の方向性が示され、現在も同会と継続的に協働している。
○ふたば未来学園と関係機関による協働コンソーシアム連携協定（令和2年度締結予定）

（2）学校の実施体制

①学校における研究体制、教職員の役割、事業実施への支援体制等

○本事業の企画運営を専門的に行う校務分掌として「企画研究開発部」を設置し、本校高校教員の1割程度を配置する。同部では、探究カリキュラム全体の企画立案および運営、地域との接続、国内研修、海外研修、外部講師との交渉、教員研修等を所管する。
○地域との協働による探究活動は「全教員が担当」しつつ「数名のチーム」体制で指導にあたる。学校全体の探究活動の指導力を向上し教員意識を変革していくため、チーム内での週次会や、担当教員同士が課題を共有し解決策を検討する月次会を設定するとともに、全教員参加の研修会「未来研究会」を年間10回程度開催し、組織的な研究開発を進める。

②カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け・役割、活用方法

○各専門家・支援員を教職員の重要なパートナーとして位置づけ、校内にも専用の机を確保し、いつでも来校して担当教員と密接な連携・議論ができる環境を整える。
○カリキュラム開発専門家は企画研究開発部と週次の会合を行い、学校設定科目「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間」、各教科における指導法等について検討する。
○地域協働学習実施支援員は年間フィールドワーク計画や生徒の探究課題の方向性を共有し、地域の団体等との協働計画を協議するとともにコーディネートする。
○海外交流アドバイザーは海外との連携に関して教員、生徒共に助言を行う。

③定期的な確認や成果の検証・評価等を通じた、研究開発の進捗管理や改善の仕組み

- 各取組の際には生徒の「振り返り」を設定し、記述内容から成果・効果を検証する。
- 各学年で年2回、資質・能力のレベルを自己評価する「ルーブリック評価」を行い、能力伸長を測る。評価では自己評価の他に、生徒同士のピアレビューや教員とのルーブリック面談を実施する。これにより多面的な評価を実現するとともに、形成的評価として生徒自身が次の目標設定に向かう成長の機会とする。面談は全教員が担当する。
- 卒業時に「将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）」のアンケートを行い、地域社会への還流を見据えたカリキュラムの効果と課題を検証する。R2 年度入学生以降は入学時にもアンケートを行い、卒業時との意識変化も測定する。
- 全体の検証、評価は「企画研究開発部」が中心となって進め、全職員への報告・協議の機会を設けるとともに、コンソーシアム、運営指導委員会に報告し助言を頂く。

④学校における外部有識者等の支援・活用体制

- 運営指導委員：定期的に本事業に対する意見交換や指導をいただく。委員の専門性を活かして、カリキュラムの方向性、地域との協働における指導方法、有効な評価方法など、多面的な視点からの指導を仰ぐ。特に、世界的な教育の方向性、日本における探究活動やその評価方法等について議論を深める。
- アクセント（株）：人材育成に関する豊富なデータを必要に応じて提供いただきながら、ルーブリックをはじめとする本校の評価について、評価軸の立て方、データの見方考え方、評価のフィードバックと形成的評価への活用の在り方等について支援いただく。
- 発表会審査員：生徒の発表について大学、企業、NPO 等の視点から意見をいただく。結果に対する意見やアドバイスだけでなく、その先の活動の進め方についても伴走者的な立場で協力をいただく。

⑤これまでの教育課程等の研究開発の実績

年度	研究開発実績
平成 27～31	スーパーグローバルハイスクール

5 研究開発計画及び内容

※関連資料：別紙様式 3（ビジュアル資料）

①研究開発構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

②研究開発の概要

- カリキュラム開発：全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で 3 年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
- 地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
- 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。【補足 5】

③研究開発計画に対する仮説の分析及び事業実施より期待される効果

- 3 年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」を構築することで、資質・能力の育成と、地

域に根ざした在り方生き方の涵養をより深化することができる。これを一般化し、全国の高校の探究活動の活性化に繋げることが期待できる。

○地域の課題と自らの在り方生き方を重ね合わせて思考しつつ、世界の課題に向き合う経験により、地域と世界の課題の共通性を見出し本質的な解決策を見出すことに繋がる。その上で課題解決の実践を行うことで、地域で新たな価値を創造する力が育成される。

○高校と地域の広域連携モデルによって、生徒の姿が住民にも影響を与え、地域全体の課題意識や行動力が喚起され、創造的な地域を実現することが期待できる。 【補足5】

【補足5】 研究開発の内容、仮説の分析、期待される効果

○カリキュラム開発の内容

地域課題解決の探究活動を本校の教育活動の核とする。そのため教育課程の特例により「産業社会と人間」（1年次2単位）を新たな学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」に代替した上で、「総合的な探究の時間」（2・3年次各3単位）と3年間を貫き、地域課題解決の探究活動を実施する。その際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくようカリキュラムを構造化する。

○カリキュラム開発における仮説の分析、期待される効果

・学校設定教科・科目の設置と教育課程の特例の活用

本校では現在、1年生で「産業社会と人間」（2単位）、2・3年生で「総合的な探究（学習）の時間」（各学年3単位）を実施している。これまで地域探究活動は主に「総合的な探究（学習）の時間」において実施しており、探究活動も年を経るごとに活発になっている。しかしながら1年次と2・3年次の間の接続に課題があった。具体的には、1年生で履修する「産業社会と人間」においては「高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）」に示された通り「職業と生活」「我が国の産業と社会の変化」「進路と自己実現」の3項目で構成し、特に「職業と生活」の指導事項として求められる「各種企業等の見学及び職業人等との対話を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに必要とされる能力・態度、望ましい勤労観、職業観を養うための学習」も実施してきた。一方で、2年次からの「総合的な探究の時間」では時代の変化を踏まえ、地域社会の課題解決に取り組む中から自らの在り方生き方を見出していく学習を行っている。H5年の報告ではある面で職業の種類や特徴は所与の固定的なものとして捉えられている一方、地域課題解決の探究においては産業や職業も自らが地域において創造していく対象の一部である。そのため、「産業社会と人間」では職業について学ぶ他に、新たな地域創造の活動を行っている先人に学ぶ単元を別途設定するなど重複も生じている上、実施してきたものが2・3年生の地域探究活動にあまり活かされていないという課題がある。この課題を解決するために時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成して「地域創造と人間生活」に代替することとし、地域での活動をより重視することとした。このようなカリキュラム編成にすることにより、3年間を通して地域課題に切れ目なく取り組むことができ、地域探究活動を現状以上に活性化させることができる（仮説）。さらに探究活動が活性化することにより、生徒の地域や実社会の課題に向かう意欲や行動力が喚起され、地域に根ざした在り方生き方が涵養されることが期待できる（期待効果）。

・探究プロセスの確立

一般に探究活動は「調査」「課題発見」「テーマ設定」「課題解決」の各プロセスが挙げられ、これらを、PDCA サイクルを回して進めていくことが言われている。多くの探究プロセスで活用できるものの、実践しようとするとう漠然としているあまり、指導教員は戸惑うことが多かった。また「課題解決」の段階においては単なる調査研究で終わってしまうケースが多く、真に解決に至るケースは少なかった。また探究活動のステージに応じた生徒と教員の関わり方についても、これまでそれほど多くの関心を持たれてこなかった。そこで本事業では下表に示すような本校独自の探究プロセスや指導方法を構築する。

表 本事業で構築していく探究プロセスの概要（◎はその時期における主要な姿勢、関わり）

時期	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
探究段階	系列選択、職業観 育成(産業社会と 人間の内容)	調査のためのアクション		解決のためのアクションと考察		まとめ
		地域の 現状分析	問題発見 課題設定	アクションー 考察サイクル	アクションー 考察サイクル	論文作成
生徒の 探究姿勢	守(受容的)	◎守(受容的) 破(生成的)	守(受容的) ◎破(生成的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)
教員の 関わり方	インストラクター	インストラクター	インストラクター ◎ファシリテーター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター

具体的には探究の大枠として「調査のためのアクション」と「解決のためのアクション」を明確に分けるプロセスである。いずれの段階も重要であるが、特に本事業では「解決のためのアクション」を重点化していく。また、これらの段階を明確に生徒に意識させるため、区切りとなる時期に発表会を実施し、対象生徒全員がそのステージをクリアしながら探究活動を進めていくようにする。また、生徒と教員の関わり方について、上記のステージに応じて、インストラクター的、ファシリテーター的、メンターの役割を担うことができるよう、整理をしていく。このような探究プロセスの明確化、特に「解決のためのアクションの重視」により、生徒が地域の課題としっかり向き合い課題解決にむけて着実に取り組むことができるようになる。また教員の関わり方を明確にすることにより教員の指導力向上や生徒の主体的な探究活動の質的な向上につながることを確信している（仮説）。さらにこの取組を一般化することにより、地域探究活動進め方の先駆的事例として広く活用していただくことができれば、全国の地域探究活動の活性化につながることを期待できる（期待効果）。

○地域課題解決の探究の内容

1年生の学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」では、「産業社会と人間」としての内容を実施しながら地域課題解決の探究の導入を行う。「産業社会と人間」の内容として具体的にフューチャーマップによるライフプラン作成、系列選択等を行い、職業観の育成、進路意識の高揚を図る。また地域課題解決の探究活動の導入として双葉郡の現状を知るフィールドワーク、マインドマップ等によるスキル学習、地域調査と演劇、グローバル課題に関するワーク等を実施する。

2, 3年生では「総合的な探究(学習)の時間」において地域に関する課題探究活動を行う。地域の特性や特に重視すべき領域に焦点をあて、以下に示す6つのゼミを設置し、生徒の希望により振り分ける。その際、本校の系列(アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列)についても考慮する。

原子力防災探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究する。廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わるべきなのか、避難や帰還の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティーをどう復活させるべきか、といった課題に取り組み、解決に向けて実践する。	地域におけるメディア・コミュニケーションのあり方について探究する。誤解或いは意図的に加速させられている分断・対立を止揚する情報発信やコミュニケーション、災害時のメディアの効果的な活用方法、災害と巨災の教訓の発信と伝承などに向けて、メディアが果たす役割等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	歴史的に全国のエネルギー供給地であり、原発事故以降、特に再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する本地域の特性を活かし、再生可能エネルギーを中心としてエネルギー全般について探究する。科学的なアプローチのみならず社会的なアプローチでも考察し、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究し、実践を行う。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	スポーツと健康探究ゼミ	健康と福祉探究ゼミ
地域の復興を農業、商業の観点から探究する。地域資源を活用した新たな産業の創出、農山漁村の6次産業化など、ビジネスや生業の観点から探究し、実践を行う。特に地域の農水産物や商品について、風評の実態調査、その解決策、地域の食を活用したコミュニティー形成等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	Jビレッジが所在しスポーツが身近な環境を活かし、スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康増進、子供のスポーツ環境支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現や、アスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行う。	少子高齢化や人口減少が一段と加速した福島の地域を全国の課題先進地域として捉え、健康長寿の実現の方策を探究する。中核病院・地域医療・介護・福祉が結びついた地域包括ケア、地域の高齢者・大人・子供などの多様な世代の共助による生きがいのある生活の創造等の課題を設定し、解決に向けて探究と実践を行う。

これらのゼミで扱う課題は双葉郡で特に重視すべき課題であるが、同時に世界的にも共通する課題である。地域に焦点をあてる一方で、世界でこれらの課題にどう向き合っているかという視点も加えながら、実践を進める。

ゼミでは生徒の探究ステージに応じて柔軟に指導し、生徒の主体性や行動力を育む。また探究ステージを明示し、調査研究に留まらず、課題解決のための実践を重視した取組を行う。

地域課題解決の探究活動については、本校舎（福島県広野町）の生徒全員を対象とする。本校には系列が3つあり、多様な生徒がいるが、それぞれの系列の特徴を生かした活動が可能になるように工夫する。系列と関連したゼミを選択する場合、自分の専門分野を地域の課題と関連させ深く学ぶことができる。一方、系列に縛られず自由な発想でゼミを選択した場合においても、系列とゼミテーマを関連させながら、多様な見方考え方を獲得することが期待される。

○地域課題解決の探究における仮説の分析、期待される効果

震災、原発事故に見舞われた福島県双葉郡には復興に向けた意欲の高い方々や団体が多く、探究活動においてもこれらの方々と連携して取り組むことが多かった。また連携先は本校の位置する広野町が中心であった。しかし連携の在り方についてはいくつか課題が残った。具体的には、双葉郡8町村とは「双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」における年複数回の協議の場でビジョンについては共有しているものの、具体的な地域協働については本校に委ねられており、連携の糸口が教員個人の繋がりに依存してきた点、連携が単発で一時的な依頼になりがち点、連携先との意思疎通が低い点（学校教育についての理解不足）、地域が近隣町村に偏りがちである点等である。これらを解決するために本事業ではコンソーシアムや地域協働学習実施支援員の活用、連携先の特性に応じた連携の在り方の整理をしていく。コンソーシアムは、連携の在り方についての議論を深めることを主目的とする。またコンソーシアムには双葉郡8町村に関わるメンバーにも加わっていただき、これまで以上に広域での活動を促進する。地域協働学習実施支援員については個々の取組についての適切な連携先についての情報提供をしていた。これにより学校と連携先の組織的な繋がりが可能となり、また双方向の意思疎通がよりスムーズに運ぶようになり連携事業をより深化させることができる（仮説）。さらに地域連携が進展することにより、本校が目指している地域と学校の一体化が実現できると期待される（期待効果）。また、広域市町村を「地元＝立地」と捉えた高校を核とした地域活性化のモデルは、今後学校統廃合が進む全国の地域

にとって、統廃合を契機として地域の活性化に繋げるモデルともなることが期待される（期待効果）。

○海外研修等の内容

原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりを主要テーマとしたドイツ研修、ニューヨーク研修を行う。ドイツ研修では地域住民のまちづくりへの参画やエネルギーに対する考え方、ニューヨーク研修では持続可能な社会づくりと若者の役割について学ぶ。これらのテーマは地域的にも国際的にも共通する課題であり、同年代の生徒と深く議論する機会を設定する。なお、これらの研修は希望者を対象とするが、研修の成果は全生徒に波及するように工夫する。具体的には発表会の開催、SNSを通じた海外高校生との連携企画、地域課題解決の探究活動のテーマによる意見交換の機会の設定などが挙げられる。

また本校で受け入れている「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生やALTも活用し、異なる価値観の人たちと日常的に協働して探究活動を進めていく。

○海外研修等における仮説の分析、期待される効果

本校ではこれまでいくつかの海外研修を実施し、グローバルな視点を持ち行動力の高い生徒の育成に繋げてきた。海外研修にあたり、従来の位置づけ（グローバルな視点の獲得、外国語コミュニケーション力の育成、福島の現状報告）をより具体化、深化させ、以下のように位置付ける。

- ・地域課題と世界的な課題との共通性の発見から本質的な課題解決へ

本校で実施する地域課題解決の探究活動は6つのゼミに分かれて実施する。各テーマは地域に根差したものであるが、本質的には世界でも共通する課題である。例えば原子力防災探究ゼミでは原子力災害からの復興課題を掲げているが、天災人災を問わず、災害に対する適切な対応は、東日本大震災以降、特に注目されているところである。またメディアコミュニケーション探究ゼミで実施する課題には教訓を次世代に活かすことが大きなテーマとなっている。世界を揺るがす多くの事案の後には必ずこの課題が伴っており、世界から学ぶところも大きい。生徒自身が自身のテーマを持って海外研修を行うことにより、自身のテーマの普遍性を学び、本質的な解決策への足がかりを得ることができる。また、単発の研修に終わらず、海外研修後の継続的な実践や議論に接続することが可能である。

- ・社会の構造的な課題

双葉郡は震災、原発事故により避難を余儀なくされ、一時は住民が誰もいなくなった地域であり、地域を初めから構築し直す経験をしてきた。この経験から住民のまちづくりへの参画の在り方については特に注目すべき点がある。ここには日本が抱える「少子高齢化」はもちろんのこと、多くの課題が山積している。一方で「一から」地域社会をつくるという観点からは、従来の施策に縛られない創造性豊かな未来を描くことも可能である。このような観点から世界の先進的な地域社会を学ぶことは非常に意味が大きい。海外では、住民と行政が一体でまちづくりを進めている事例が多く、これを学ぶことで自分たちが住む地においても、住民と行政が深く関わりながら課題に向かう取組に発展させることができる。

- ・異質からの学び

福島県は健康被害、食、観光等において未だに風評被害や差別に苦しんでいる。これらの本質の一つは、異質なものに対する違和感やイメージ先行の見方考え方にある。多民族が共存する海外は異質なものの宝庫であり、偏見・差別等の共通の課題をどう乗り越えていくのか多くを学ぶことができる。

- ・主体性の育成

これまでの海外研修経験者の様子から、研修実施後には主体性が大きく育まれていることが伺えた。この能力をさらに育成するために海外研修の在り方を再検討する。これまで教員側が様々な指示を与えながら実施してきたが、教員が担ってきた役割を極力生徒側に委譲し、生徒中心の研修運営を促進する。具体的には研修先の選定、事前研修、事後研修といった計画策定等が挙げられる。教員はファシリテーターとして生徒の運営をサポートする。また海外研修アドバイザーに生徒と積極的に関わっていただく。

④研究開発のスケジュール

ア 3か年の計画

年度	1年目	2年目	3年目
内容	【本事業の整備、運用】 ○コンソーシアムの立上と運営 ○カリキュラム整備 ○人材育成ループリック改定 ○探究ループリックの新たな策定と運用	【本事業の本格運用】 ○カリキュラムの確立 ○探究活動の定常化 ○ループリックを活用した評価方法の確立 ○本事業の普及拡大	【本事業の総括と継承】 ○本事業の課題の抽出と対策の検討 ○継続的、発展的な活動に向けての環境整備 ○本事業の普及拡大

イ 令和2年度の計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
内容	1年：進路、職業選択、人間関係形成に関する活動 2年：地域探究の導入、ゼミ、テーマ探索 3年：地域探究（解決アクション） 《全学年ループリック評価》	1年：地域を知るためのフィールドワーク 2年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索） 3年：地域探究（まとめ、発表）、ループリック評価	1年：演劇による地域の表現 2年：地域探究（テーマ決定、調査アクション）、ループリック評価 3年：地域探究（論文作成） 《全学年学校評価》	1年：国際理解活動、ドイツ研修（希望者）、ループリック評価 2年：地域探究（解決アクション）、ニューヨーク研修（希望者） 3年：論文完成

⑤地域との協働により実施する学習内容と教科・科目における位置付け、相互の関係

学校設定科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究の時間」で地域との協働による探究活動を行う際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくことを目指し、教科の視点から知識を学ぶ単元も設ける。一方、各教科においても下記のように探究と接続した内容を取り扱い、教科を学ぶ意欲を喚起し発展的な知識の学習に繋げていく。【補足7】

例) 理科、数学：一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、地球温暖化、廃炉技術
 地歴公民：エネルギー供給地としての地域の歴史と背景、原子力災害と地域の未来

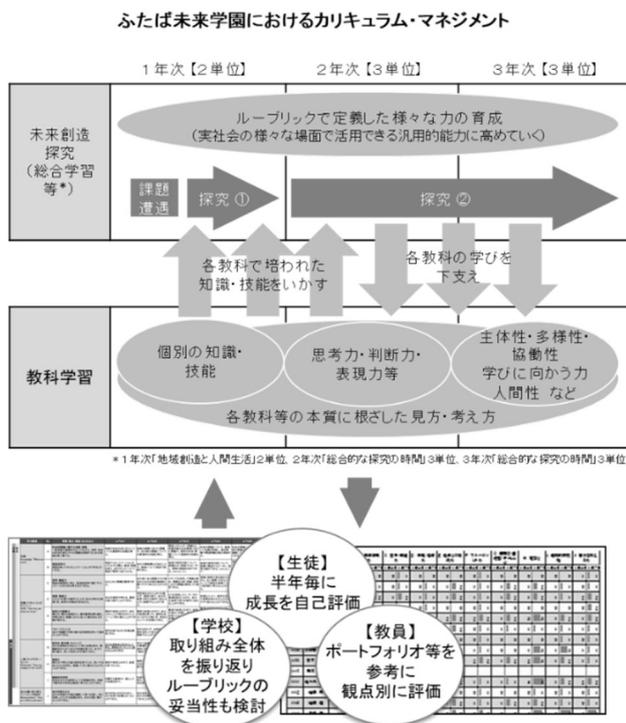
【補足7】地域との協働により実施する学習は主に学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」の探究活動で実施する。その際、学校全体の意識を統一するループリックの設定を始点としたカリキュラムマネジメントを重視していく。

いずれの探究においても、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、本校がループリックで定義した汎用的な能力に高まっていくことを目指す。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、実社会での探究を通じて知識の必要性を痛感する体験等から各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。

同時に、下記のように本校の全教科においても、地域と関連したテーマを扱っていく。

「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」における探究と各教科のつながりを意図的に生み出し、通常各教科・科目を探究活動と組み合わせることにより、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、より深い学習となる相互作用が期待できる。

また通常教科・科目において地域のテーマを扱う場合、複数の教科が連携して行う教科連携がより効果的である。教科連携を本校の教員研修「未来研究会」の重点的な取組の一つとして位置づけ、また強化期間を設定することにより、その推進を図る。



国語	レポート、論文の書き方、論理的な考え方
地歴公民	エネルギー供給地としての福島県の歴史とその背景、原子力災害と地域の未来（福島学 社会編）
英語	英語×演劇×地域
数学	データから分析する少子高齢化
理科	一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、廃炉技術（福島学 理科編） 日常生活と地球温暖化、福島県の地形と再生可能エネルギー
体育	J ビレッジの地域における役割、スポーツの地域に与える力、
情報	地域の情報発掘とプレゼンテーション
家庭科、福祉	健康と地域活性化
工業	地域エネルギー（学校設定科目）
農業、商業	地元の食材を用いた商品開発

⑥他校や他地域への事業成果の普及方策

- 管理機関主催で全県立学校の教員が本校で研修を行い、各校への取組の普及を図る。
- 学校公開日を毎月設定し、本校への視察を積極的に受け入れ発信する。
- 学校ホームページに事業に関する報告や成果を掲載する。
- 生徒の地域課題解決の探究発表会を公開し、成果を発信する。
- 最終年度には教員による成果報告会を実施し、成果を総括し、その普及を図る。

6 学校設定教科・科目、教育課程の特例を活用した取組

① 学校設定教科・科目を設定	○
② 教育課程の特例を活用	○

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	地域創造と人間生活
単位数	2単位
対象学科・学年	1年次
必修修・選択の別	必修修
設定する教科・科目の内容	<p>1 目標</p> <p>地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>ア 社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う。</p> <p>イ 地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 地域社会の創造へ参画していく自覚と態度の涵養</p> <p>地域を知る学習（双葉郡フィールドワーク）、地域人材インタビュー、国際理解講座等を通して、地域や世界で困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れる。</p> <p>(2) 地域社会を創造する力</p> <p>コミュニケーションワークショップ、スキル学習、地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、複雑な地域課題を多面的に理解し、新たな地域を創造していく協働力や想像力等の基本的な技能や態度を養う。</p> <p>(3) 生き方と進路</p> <p>自己理解から職業人インタビューを通して、自己・地域・世界の未来を重ね合わせたライフプランを作成し、次年度の系列選択に繋げる。</p>
その他 特記事項	教育課程の特例を活用して本科目を設定し、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を代替する。

教育課程の特例に関する説明資料

教育課程の特例を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
教育課程の特例を活用する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

教育課程の特例を活用して設定する科目の内容

科目名	地域創造と人間生活
単位数	2
対象学科・学年	総合学科・1年次
必修修・選択の別	必修修
特例を活用して設定する科目の内容	<p>(1) 目標 地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 内容</p> <p>ア 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、社会の変化の中で主体的に新たな地域社会の創造に参画する自覚と態度を養う。</p> <p>イ 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p>
代替措置	総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を本科目に代替する。
特例が必要な理由	<p>○「産業社会と人間」は総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされ、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）において具体的指導内容が提言され、各校にはこの内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。</p> <p>○一方本校では Society5.0 の社会像と求められる人材像を踏まえ、地域社会において新たな価値を創造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。</p>
特例の適用範囲	令和3年度入学生から適用する。

第 2 章

活動実績

枠組	活動	日付	氏名	所属、役職		
2年 未来創造探究	原子力防災探究ゼミ	2020.7	吉川彰浩	一般社団法人AFW代表		
		2020.7.1	伊藤靖之	富岡町役場 企画課		
		2020.7.8	南場優生海	大熊町役場		
		2020.7.8	斉藤陽介	大熊町役場		
		2020.11.14	下枝浩徳	葛力創造舎 代表		
		2020.11.24	下枝浩徳	葛力創造舎 代表		
		2020.11	永井祐二	早稲田大学教授		
		2020.11	中津弘文	広野町振興公社		
		2020.11	山根麻衣子	いわき経済新聞		
		2020.11	渡邊伸	ふたばプロジェクト		
		2020.11	門脇秀典	まほろん		
		2020.11		双葉町づくり		
		2020.11	五味馨	国立環境研究所福島支部		
		2020.11		東日本大震災原子力災害伝承館		
		2020.11	吉田学	浜通り30		
		2021.1.13	西本由美子	特定非営利活動法人ハッピーロードネット理事長		
		2021.1.27	石ヶ森久恵	(株)アルマ・クリエーションズ国際マスターインストラクター		
2021.2.24	松本淳	(株)FiveStar代表取締役				
2年 未来創造探究	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2020.7.15	安部 正明	FMいわき局長		
		2020.7.15	BETTY	FMいわき契約パーソナリティ		
		2020.7.15	大坂 行	FMいわき放送制作部		
		2020.7.15	中川 敦	FMいわき放送局次長		
		2020.10.14	西崎 芽衣	ならはみらい		
		2020.10.14	木村 英一	ならはみらい		
		2020.7.1	北郷 功	広野町役場復興企画課		
		2020.7.1	大和田 徹	広野町役場復興企画課		
		2020.7.8	石田 祐一郎	大熊町役場企画調整課		
		2020.7.8	南場 優生海	大熊町役場企画調整課		
		2020.8.	中津 弘文	広野町振興公社		
		2021.2.10	中津 弘文	広野町振興公社		
		2020.9.30	西崎 芽衣	ならはみらい		
		2020.9.30	木村 英一	ならはみらい		
		2020.9.30	早川 良一	檜葉中学校長		
		2020.9.30	松本 涼一	檜葉南北小学校教頭		
		2020.9.30	志賀 真穂	Jヴィレッジホテル		
		2021.2.3	志賀 真穂	Jヴィレッジホテル		
		2020.7.	戸村 富美子	カフェふう		
		2020.8.	下枝 浩徳	葛力創造舎		
		2020.10.3	下枝 浩徳	葛力創造舎		
		2020.10.	磯辺 吉彦	ぶらっとあっと		
		2020.12.12.	阪本 真由美	人と防災未来センター		
		2020.12.12	高原 耕平	人と防災未来センター		
		2021.1.13	高原 耕平	人と防災未来センター		
		2021.1.13	永井 祐二	早稲田大学		
		2020.12.24	菅波 香織	いわき法律事務所弁護士		
		2020.12.24	永井 祐二	早稲田大学		
		2021.2.3	李 洸昊	早稲田大学		
		2021.2.3	永井 祐二	早稲田大学		
		2020.12.16	坂上 英和	NPO法人コースター		
		2020.12.16	植田 一成	NPO法人コースター		
		2020.12.16	高橋 結	東北大学		
		2021.1.21	坂上 英和	NPO法人コースター		
		2021.1.8	佐藤 真喜子	おおくままちづくり公社		
		2021.1.20	岡田	富岡町役場		
		2021.1.	山名 隆弘	請戸の田植踊保存会		
		2021.1.27	代田 岳美	NPO法人栖		
		2020.11.29	ヤマグチ ユウキ	長崎ホテルBW		
		2021.2.3	大川原 こころ	広島在住		
		2021.2.10	菅波 香織	いわき法律事務所弁護士		
		2021.2.10	永井 祐二	早稲田大学		
		2021.2.24	赤間 徹	浪江町犬猫シェルター		
		2021.3.15	佐藤 真喜子	おおくままちづくり公社		
				2020.7.8	大久保 智	東京電力ホールディングス(株)福島復興本社副部長
				2020.7.8	飯野 康雄	(株)JERA 広野火力発電所副所長

2年 未来創造探究	再生可能エネルギー探究ゼミ	2020.7.13	鈴木 晴彦	福島工業高等専門学校 教授
		2020.7.15	大久保 智	東京電力ホールディングス(株)福島復興本社副部長
		2020.7.15	飯野 康雄	(株)J E R A 広野火力発電所副所長
		2020.9.23	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
		2020.10.3	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
		2020.10.5	小野 陽洋	古河電池(株) 技術開発本部
		2020.10.26	森 俊貴	大熊町役場 企画調整課
		2020.11.14	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
		2020.12.5	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
		2021.1.25	菅波 香織	いわき法律事務所 弁護士
		2021.2.3	永井 祐二	早稲田大学 環境総合研究センター 研究員準教授
		2020.10.21	遠藤 未来	東日本大震災・原子力災害伝承館 スタッフ
		2021.2.22	滝沢 日佐人	高校教育課 指導主事
		2年 未来創造探究	スポーツと健康探究ゼミ	2020.10.28
	岩清水 銀士郎			株式会社いわきスポーツクラブ いわきFC
2020.11.7	いわきサン・アビリティーズ			
2020.11.18	阿部 隼人			株式会社いわきスポーツクラブ いわきFC
	鈴木 秀紀			
2020.12.9	阿部 隼人			株式会社いわきスポーツクラブ いわきFC
	鈴木 秀紀			
2020.12.9	大和田 幸弘			広野みかんクラブ
2020.12.18	佐川 康則			広野町老人デイサービスセンター 広桜荘
2020.12.23	林 和久			Life カメラマン
2021.1~				広野町保健センター
2021.1~	雪森さん			株式会社広野町振興公社(ニッ沼公園)
2021.1.27	池上さん			ミツフジ
2021.1.20	松本 優梨			東日本国際大学国際部長
	田久 二三男			東日本国際大学国際部次長
2021.1.26	岩清水 銀士郎			株式会社いわきスポーツクラブ いわきFC
2021.1.27	原田 友加			富岡支援学校
2021.2~	雪森さん	株式会社広野町振興公社(ニッ沼公園)		
2年 未来創造探究	健康と福祉探究ゼミ	2020.7.15	古内 伸一	広野町社会福祉協議会
		2020.10.18	小林 誠	高野病院
		2020.12.9	鈴木 正範	広野町観光協会会長
		2020.12.25	小林 誠	高野病院
		2021.1.20	岩室 克弘	広野町公民館
		2021.1.20	坂本 理恵	広野小学校
		2021.2.10	永井 祐二	早稲田大学
		2021.2.10	江川 賢一	東京家政学院大学 人間栄養学部人間栄養学科 教授
		2021.2.10	猿渡 洋子	Café.ふう
		2021.2.22	猿渡 洋子	Café.ふう
		2021.2.24	岩室 克弘	広野町公民館
		2021.3.4	小林 誠	高野病院

枠組	活動	日付	氏名	所属、役職
3年 未来創造探究	メディア・コミュニケーション 探究ゼミ	2020.4	榊 裕美	合同会社はまから
		2020.6～	高橋あゆみ	
		2020.6～	井出拓馬	福や
			吉川彰浩	一般社団法人 A F W
		2020.7	菅波香織	未来会議事務局長
		2020.3～	蟹江杏	アーティスト、「NPO法人3.11子ども文庫」理事長
		2020.3～	佐藤あゆみ	相馬市立中村二小教諭
		2020.7	小松理虔	へキレキ舎 代表
3年 未来創造探究	再生可能エネルギー探究ゼミ	2020.7.10	芳賀 吉幸	農業法人フロンティア広野 代表
		2020.8.26	芳賀 吉幸	農業法人フロンティア広野 代表
		2020.9.23	芳賀 吉幸	農業法人フロンティア広野 代表
		2020.10.14	低引 稔	自然電力株式会社
		2020.10.14	嘉数 菜利子	自然電力株式会社
		2020.6.17	坂本裕之	福島復興本社 部長
		2020.6.17	加藤正人	福島復興本社
		2020.6.17	平山勉	ふたばいんふお
		2020.6.26	平山勉	ふたばいんふお
		2020.6.30	平山勉	カフェ135
		2020.7.1	平山勉	カフェ136
			松本愛梨	NPO法人3.11を語る会
			宗像涼	NPO法人3.11を語る会
			手塚純教	富岡町観光協会
			三瓶秀文	富岡町役場 健康づくり課
			山根麻衣子	一社とみおかプラス
		2020.7.8	平山勉	カフェ135
			鞍馬新之助	読売新聞社
			西崎芽衣	一社ならはみらい
			志賀正則	元大熊町梨農家
			加藤正人	福島復興本社 部長
			小野田洋之	福島復興本社
		2020.7.15	平山勉	カフェ135
			鞍馬新之助	読売新聞社
			塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.7.22	平山勉	カフェ135
			塩史子	二ツ沼直売所 組合長
			志賀正則	元大熊町梨農家
		2020.7.25	佐藤一也	有) 菓匠庵 代表取締役
		2020.7.27	佐藤一也	有) 菓匠庵 代表取締役
			佐藤一也	有) 菓匠庵 代表取締役
		2020.7.28	山内康一	農家レストラン「げんき庵」
		2020.7.31	滝澤淳浩	千葉商科大学 准教授
		2020.8.1	岸川政之	皇學館大学 教授
			山岡茂治	一社未来の大人応援プロジェクト副代表
		2020.8.3	佐藤	広野町米農家
			西崎芽衣	一社ならはみらい
			渡辺愛子	カフェY (ワイ)
			平山勉	ふたばいんふお
		2020.8.4	加藤正人	福島復興本社 部長
			小野田洋之	福島復興本社
		2020.8.5	高橋正行	(株)磐城高箸 代表取締役
		2020.8.6	久常宏栄	県立津山東高校 主幹教諭
			木村英一	一社ならはみらい
		2020.8.7	木村英一	一社ならはみらい
	平山勉	ふたばいんふお		
2020.8.23	岸川政之	皇學館大学 教授		
	山岡茂治	一社未来の大人応援プロジェクト副代表		

3年 未来創造探究	アグリ・ビジネズ探究ゼミ		武井史織	アドビシステムズ(株)
		2020.8.26	木村英一	一社ならはみらい
			志賀正則	元大熊町梨農家
			平山勉	ふたばいんふぉ
		2020.8.31	佐藤一也	有) 菓匠庵 代表取締役
			福塚裕美子	Fuku Farming Flowers
		2020.9.14	平山勉	ふたばいんふぉ
			矢内優美	道の駅ならは
		2020.9.16	志賀正則	元大熊町梨農家
			廣瀬みお	慶応大学1年生
		2020.10.1	松本愛梨	NPO法人3.11を語る会
		2020.10.3	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.10.6	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.10.18	松本愛梨	NPO法人3.11を語る会
			青木 淑子	NPO法人3.11を語る会 代表
		2020.10.21	志賀正則	元大熊町梨農家
			吉田淳	大熊町町長
			横山善幸	大熊町総務課
		2020.10.25	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
			松本愛梨	NPO法人3.11を語る会
			宗像涼	NPO法人3.11を語る会
			青木 淑子	NPO法人3.11を語る会 代表
		2020.11.1	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.11.8	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.11.19	松本広之	ゆず研究会 会長
		2020.11.22	志賀良信	玉屋菓子店
		2020.11.25	松本広之	ゆず研究会 会長
			菅原	檜葉町振興公社
		2020.11.26	谷平学	檜葉町振興公社
		2020.11.27	松本広之	ゆず研究会 会長
		2020.11.29	松本愛梨	NPO法人3.11を語る会
			宗像涼	NPO法人3.11を語る会
		2020.11.30	平山勉	ふたばいんふぉ
		2020.11.30	大谷敏彦	(株)大平戸農園 代表取締役
			高山陽平	(株)大平戸農園
		2020.12.2	平山勉	ふたばいんふぉ
			猪狩幸子	富岡町観光協会
		2020.12.9	塩史子	二ツ沼直売所 組合長
		2020.12.19	前川直哉	福島大学 特任准教授
		2021.2.2	内堀雅雄	福島県知事
			高山陽平	(株)大平戸農園
2021.3.7	松本愛梨	NPO法人3.11を語る会		
2021.3.10	小関大稀	MF 3.11 東北応援愛好会		
2021.3.11	滝澤淳浩	千葉商科大学 准教授		
	磯辺吉彦	広野ワイワイプロジェクト		
2021.3.12	鈴木昇	道の駅ならは 駅長		
3年 未来創造探究	スポーツと健康探究ゼミ		大和田 幸弘	広野町みかんクラブ 代表
				広野小学校
				檜葉北南小学校
				広野中学校
				檜葉中学校
			小名山	Jヴィレッジ
			明石	Jヴィレッジ
				いわきFC
				広野野球スポーツ少年団
			佐藤	富岡さくらスポーツクラブ
				NPO法人 うつくしまスポーツルーターズ

				広野町認定こども園
3年 未来創造探究	健康と福祉ゼミ	2020.4～9	磯部 吉彦	広野わいわいプロジェクト
		2020.7.15		広野町通所介護事業所 広桜荘
		2020.8.		広野町通所介護事業所 広桜荘
		2020.7.		日清製粉グループ
		2020.7.15		イオン心をつなぐプロジェクト イオン広野町店
		2020.7.1	大和田 幸弘	みかんクラブ
		2020.7.1	佐藤 むつみ	みかんクラブ
		2020.7.15	大和田 幸弘	みかんクラブ
		2020.7.29	大和田 幸弘	みかんクラブ
		2020.7.29	北郷 恵子	広野町児童館
		2020.8.5		広野町図書室
		2020.8.5	大和田 幸弘	みかんクラブ
		2020.8.26		広野町社会福祉協議会
		2020.9.		広野町社会福祉協議会
		2020.8.26		広野町通所介護事業所 広桜荘
2020.9.		広野町通所介護事業所 広桜荘		

第3章

研究開発の内容

3.1 産業社会と人間（1年次）

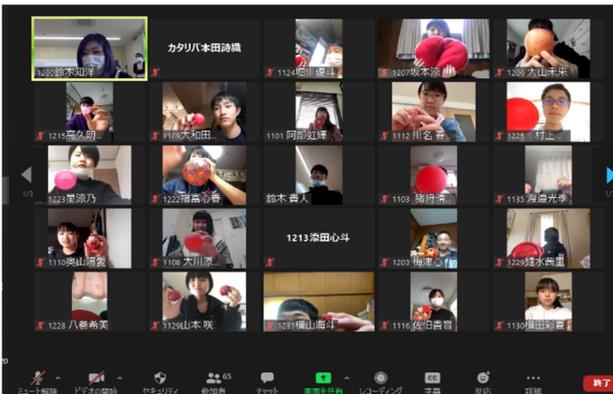
本校の産業社会と人間は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①についてはマインドマップやフューチャーマッピングを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではJICAや世界の様々な困難を肌で感じてきた方からの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大による休校措置で、当初の予定通りにプログラムを実施できないという困難に直面したが、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google ClassroomやFlipgridを使用した課題の提出・共有などに素早く切り替え、チームで代替企画を考え、コロナ禍だからこそできる学びのバージョンアップを追求した。

3.1.1 課題を知る学習

(1) 実施内容

① オリエンテーション／アイスブレイク

オンライン授業でオリエンテーションを実施した。コミュニケーションWSの代わりに、ブレイクアウトルームを使った借り物競走を行い、グループで「赤くて丸いもの」を全員が家の中から見つけるというゲームを実施。その後の生徒同士の対話の雰囲気作りにも役立った。



② 原風景マップ

バスツアーを通して双葉郡について知る前に、休校期間を利用して原風景マップを実施した。子供の頃の遊び場マップを作ることで、「過去の自分」「子供であった頃の自分が過ごした地域」を思い出す作業を行った。



その後、実際に町を歩き、過去と現在を比較させた。引越し等で場所が変わっている者はGoogle Earthなどを使いバーチャル散歩をした。自分が覚えている風景と現在を比較することが、双葉郡における大切な故郷が失われる気持ちを想像するきっかけとなった。

生徒達は、自分の原風景マップについて解説した動画をFlipgridというアプリで共有し、他クラスと同じ出席番号の生徒の動画に感想を残し合った。これも生徒達の心の交流に役立った。

③ オンラインプチ探究

休校期間中に自宅で課題を見つけるトレーニングとして、2年次から行う探究活動について紹介しつつ、「STAY HOMEでも出来るプチ探究プロジェクト」を行った。生徒は休校期間中に自分の身の回りの困り事 (Need)、自分の興味関心 (Will)、出来ること (Can) を組み合わせたプチ探究を考え、実践したプレゼン動画をFlipgrid上に提出した。

私たちが行った探究は...

富岡clean up ! プロジェクト

《当初の計画》

- ・地域のゴミ拾い
- ・公園内の整備
- ・石碑の掃除

↓しかし

《今回》

- ・地域のゴミ拾い
- ・石碑前の階段の落ち葉の片付け

need

will

can

地域が整備されていないことに気がついた！

散歩中、公園が整備されていないことに気がついた！

落ち葉の再利用について考える

生徒達にプレゼンの方法を任せた結果、スマートフォンを使いこなし、動画編集をしたりプレゼンテーション資料を作ったりしながら自宅時間を有効に使い、優秀な探究については学校再開後に表彰を行った。「冷蔵庫から

フードロス無くす」、「地名から災害の危険性を知る」、「富岡 clean up プロジェクト」、「古着でマスクを作る」などユニークな探究が生まれた。

④ 双葉郡8町村バスツアー

日 時：7月15日（水）

講 師：

1号車	富岡町	平山 勉（双葉郡未来会議） 青木淑子（富岡町3.11を語る会）
	川内村	遠藤雄幸（川内村 村長） 井出寿一（一般社団法人かわうちラボ）
2号車	浪江町	菅野孝明（一般社団法人まちづくりなみえ）
	楡葉町	森雄一朗（一般社団法人ならはみらい）
3号車	双葉町	松本佳充（元双葉高校教員）
	葛尾村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）
4号車	広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
	大熊町	吉田 淳（大熊町 町長） 渡部千恵子（大熊町ふるさと応援隊）
		木村 紀夫（3）

行 程：

1号車 富岡町・川内村

学校 ～ 富岡高校 ～ 富岡駅周辺 ～ 夜ノ森桜並木のバリエード ～ 学びの森 ～ いわなの郷 ～ 遠藤雄幸村長の講話 ～ 天山文庫／阿武隈民芸館 ～ 学校

2号車 浪江町・楡葉町

学校 ～ 浪江駅 ～ 国道114号で沿岸部方面へ ～ 道の駅なみえ ～ 請戸漁港 ～ 請戸小学校 ～ 大平山霊園 ～ 展望の宿天神 ～ みるーる天神 ～ みんなの交流館ならは CANVAS ～ 木戸川漁港 ～ 仮置き場・甘藷倉庫 ～ 道の駅ならは ～ 遠隔開発技術センター ～ J-Village ～ 学校

3号車 双葉町・葛尾村

学校 ～ 双葉駅周辺 ～ 双葉高校 ～ 葛尾村役場 ～ 葛力創造舎 ZICCA ～ 林業体験 ～ 学校

4号車 広野町・大熊町

学校 ～ 新妻有機農園 ～ 6号線・海岸沿い（徒歩にて散策） ～ 株式会社広野町復興公社 ～ 大熊食堂 ～ 大熊町役場 ～ 大川原地区 ～ 渡部千恵子さん自宅（木村紀夫さんのお話を聞く） ～ 学校

概 要：このバスツアーは、双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で探究する意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的とし



ている。休校明けの7月に実施したが、5月に予定されていた遠足が中止になったこともあり、午後だけではなく1日かけて双葉郡8町村をツアーすることにした。結果、これまで時間の都合で訪れることができなかった川内村や葛尾村、双葉町にも足を運ぶことができ、新たな繋がりも生まれた。双葉高校、富岡高校、浪江高校の訪問では、震災当時から時間が止まったままの校舎を見て震災後の10年を考えた。特に、双葉郡出身の生徒達の中には、震災以来初めて故郷に足を踏み入れた生徒もいた。トップアスリートバドミントンの生徒は桃田選手が練習をしていた体育館に実際に入ることができて興奮していた。1日かけて双葉郡を回るのは、大変ではあるが生徒達がゆっくりその土地を歩き、そこで起きたことに思いをはせ、何よりも地域の方々と交流しながら楽しむことができたことは大きく、この形で次年度以降も続けていきたい。

(2) 成果

コロナによる休校からはじまり、当初の予定通りに授業を進めることができなかったが、その分、コロナ禍でなければ考えもしなかったプログラムが多く生まれたのは成果としては大きいものであった。原風景マップを作成したことで、自分の故郷の双葉郡を重ね合わせ、故郷を失うというつらさを自分事として想像することができた。それと同時に、やはり実際に双葉郡をこの目で見るということの大切さを改めて再認識することもできた。

(3) 課題と展望

1日かけた双葉郡8町村バスツアーの新しい形は今後も続けていきたい。また、Flipgridを使った課題などは、家でじっくり取り組むことができ、他の生徒の発表を何度も見ることができるため、生徒のプレゼン能力の向上にも繋がった。オンラインと対面の良い部分を上手く使いながら、よりよい学習体験になるように授業内容の充実を図りたい。

3.1.2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、東京藝術大学アートイノベーションセンター特任教授平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「産業社会と人間」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。FW を効果的に行うため、事前にインタビューを効果的に行う方法についてのワークショップを実施し、復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、訪問先における復興に向けたありのままの姿や悩みを持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決できない課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後 2 年次から展開される課題研究（探究活動）を通じて探究することになる。

(1) 目的

- ① アクティブラーニングの導入期として、双葉郡の小・中学校で実施されている「ふるさと創造学」の継続・発展的な学習を行う。
- ② 出身中学校を問わず、学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW) を実践し、地域についての正しい知識を身につけるとともに、グループ毎に課題解決を図る。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	8月27日(水)	5・6	演劇コミュニケーションWS①	○
2	9月23日(水)	5・6	演劇コミュニケーションWS②	○
3	10月7日(水)	5・6	演劇コミュニケーションWS③	○
4	10月14日(水)	終日	平田オリザ氏による演劇WS	○
5	10月21日(水)	5・6	演劇のためのFWインタビュー①	△
6	10月28日(水)	5・6	演劇のためのFWインタビュー②	
7	11月4日(水)	5・6	演劇のためのFWインタビュー③	
8	11月18日(水)	5・6	地域の課題から対話劇を作る①	○
9	11月25日(水)	5・6	地域の課題から対話劇を作る②	○
10	12月2日(水)	終日	地域の課題から対話劇を作る③	○
11	12月3日(木)	終日	地域の課題から対話劇を作る④	○
12	12月7日(月)	終日	演劇成果発表会	○
13	12月9日(水)	5・6	演劇振り返り	

(3) 講師

平田オリザ (青年団主宰 劇作家・演出家)
わたなべなおこ (劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)
館 そらみ (劇団ガレキの太鼓主宰・脚本家・演出家・俳優、NPO 法人 PAVLIC)
森内美由紀 (青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)
宮崎 悠理 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
千田美智子 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
宮崎 優里 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、若尾 颯太 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
植浦菜保子 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、吉田 雅人 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
北村 耕治 (俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒 137 名 20 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1～4 演劇コミュニケーションWS

前半3回は、これから共に演劇を創作するチームとして協働作業を円滑に行うことが出来る雰囲気作りとして、チームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行った。これにより、生徒間のコミュニケーションが上手いきき、創作のための話し合いがしやすくなった。何より、楽しんで表現しようとする姿勢が育った。



その後、平田オリザ氏による演劇WSでは、本校で演劇を通して地域課題を知ること意義について体験を通して学んでいった。イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことをゲームを通して楽しみながら学び、そこからふくしまの問題にも結びつけて考えることができた。

震災後これだけふくしまに対するイメージが多様化してしまった今、正しいことを伝えようとしても言葉だけではイメージの共有は難しく、風評被害と闘うためには、伝え方を工夫しなければならない。その伝え方の一つとして「演劇」があるということを体験を通して学んだ。



5～7 演劇のためのFW

演劇の題材を探す（地域の課題を発見する）ために、学校周辺の様々な方にインタビューを行った。演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が選び、取材を行った。

1回目は学校に来校いただき、時間をかけてインタビューを行った。そして2回目はFWとして生徒達が現地に赴き、インタビューで伺った場所を実際に見ることで、イメージの共有をするという形式をとった。

今年度で6回目となるこの取り組みだが、地域の方々の協力なしには成立しない企画である。今回も様々な資料等を用意して下さり、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫して下さった。この場をお借りしてお礼を申し上げた

い。インタビュー先は以下のとおりである。

	FW先
1 班	平山 勉さん (富岡町・ふたばいんふお)
2 班	木暮 健さん (大熊町・中間貯蔵施設)
3 班	鷺 周作さん (楡葉町・株式会社 J-Village)
4 班	下枝浩徳さん (葛尾村・葛力創造舎)
5 班	木村紀夫さん (大熊町)
6 班	平山 勉さん (富岡町・ふたばいんふお)
7 班	北郷 功さん (広野町・広野町役場)
8 班	尾田英樹さん (東京電力福島復興本社)
9 班	林 茂さん (東京電力福島復興本社)
10 班	青木淑子さん (富岡町 3.11 を語る会)
11 班	喜浦 遊さん (大熊町・大熊町役場)
12 班	花井真里奈さん (東京電力福島復興本社)
13 班	新井和仁さん (大熊町・中間貯蔵施設)
14 班	猪狩雄平さん、松本剛幸さん (楡葉町・双葉地方広域市町村圏組合消防本部 富岡消防署楡葉分署)
15 班	四家千里さん (双葉町役場・復興推進課)
16 班	吉田奈津子さん、今野あゆみさん (浪江町役場、産業振興課/総務課)
17 班	遠藤雄幸さん (川内村・川内村村長)
18 班	松本佳充さん (双葉町・双葉高校元教員)
19 班	石井宏和さん (富岡町・富岡漁協)
20 班	青木淑子さん (富岡町 3.11 を語る会)

事前に、調べ学習の中で考えた質問内容を、演劇コミュニケーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。



8～11 地域の課題から対話劇を創る

今年度は、メイン講師として NPO 法人 PAVLIC のわたなべなおこ氏と共に授業を組み立ててきた。わたなべ氏は、全国の学校や企業などで演劇を用いたコミュニケーションWSを行っている。取材内容を基に少しずつ演劇を通してイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。今回は、これまでとは違うアプローチでの演劇創作として、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげていくエチュード方式を取り入れた。この方法に挑戦した理由は、書かれた言葉に頼るのではなく、その場で生まれる表現を大切にすることと、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすためである。実際に、どの班も全員で協力しなければならず、誰一人取り残さない姿勢が見られた。

「演劇を通して地域の課題を表現する」という正解のない問いに対してグループで一定時間内に答えをだす過程では、自分自身、班のメンバー、地域の課題とも徹底的に向き合うことを意味している。粘り強く向き合い続けた生徒達にはこの一週間で大きな成長が見られた。何よりも、チームビルディングから丁寧にWSを行ってきた成果か、生徒達が協働作業を楽しんでいた。



12 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班20作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点は以下のとおりである。

- ①テーマ（広く見てもらいたいと思う内容だった）
- ②発想力（オリジナリティがあり、ユニークだった）
- ③セリフ（心に響く、印象に残る台詞があった）
- ④構成（話の流れ、組み立て方が良かった）
- ⑤演技（迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた）

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞を選出し、表彰を行った。



	班	タイトル	FW先
A	7	どうすればいいですか？	広野町役場
	17	村長！	川内村役場
	15	双葉町と私	双葉町役場
	4	下枝さんの転機	葛尾村
	5	止まった時間と過ぎる季節	大熊町
B	3	J-village に入社するまでの過去を振り返って	J-Village
	19	守り抜いた船、守れなかった命	富岡漁協
	16	浪江町	浪江町役場
	8	おださんち	東京電力(略)
C	14	家族と原発	双葉消防本部
	11	決断	大熊町役場
	12	決断と苦難	東京電力(略)
	9	林さんの葛藤～家族か仕事か～	東京電力(略)
	10	青木淑子の葛藤	富岡町
D	18	Feeling of heart	双葉町
	6	平山勉の葛藤～Love & Peace～	富岡町
	1	とみRock と高校生	富岡町
	2	震災当時、私は海外にいた	中間貯蔵施設
	13	優先順位～家族・仕事・介護～	中間貯蔵施設
	20	葛藤	富岡町

14班は、震災当時のシーンで津波警報の音声を使用し、机を動かすなどして身体を使って津波のシーンを表現していた。数年前だったらこのような表現はかなり繊細に取り扱っていただろう。震災当時、幼稚園生だった彼らの、「震災当時何があったのか知りたい」という気持ちと、震災からの時間の流れを改めて感じた。

10班は、富岡町3.11を語る会で語り部をしている青木淑子氏の物語を演劇にした。震災から約10年が経ち、語り部の活動を続けてきた中で、聴く人の態度に時間の流れを感じるようになったという。話に飽きて居眠りをしてしまう人や、携帯電話を操作する人を見かけることがあるという。震災に対して真剣に向き合う姿勢が薄れてきている危機感を感じるという。そういった青木氏の話を生徒達は切り取り、講演会のシーンを演劇にすることで震災が風化してしまうことの悲しさを描いた。

青木氏は生徒達の演劇を受け止め、「自分の振り返りができた。今の私の姿を表現してもらい背筋が伸びた。伝承活動をしている私達は伝えることに必死になりすぎて客観的な視点を見失いがちである。それでも震災を風化させないために伝え続けたい。そのためにはこちらがど

んな努力をしなければいけないのだろうということを考えなければいけない。それを教えてもらった。」と講評で仰っていた。生徒も大人達も、震災における自分達の現在地を再確認する貴重な機会となった。

また、今回の内容については、昨年度に引き続き TBS ラジオ 荻上チキ・Session 2021年3月12日放送回 特集「シリーズ『東日本大震災10年』～福島と埼玉の高校生が演劇で向き合う震災」で取り上げていただいております。「この活動は、ジャーナリズムの訓練にもなっている大変意味のある活動だ」との講評をいただいた。

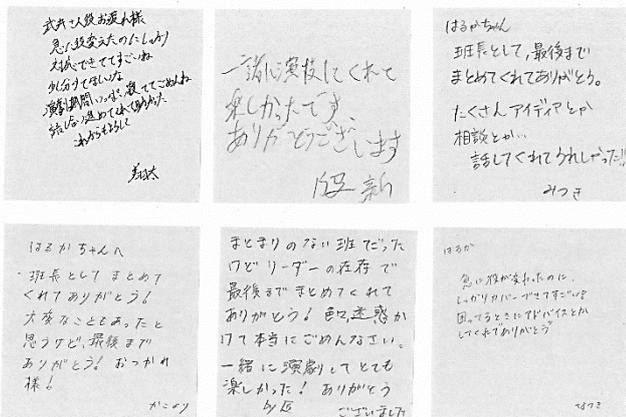
1.3 演劇振り返り

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化するWSを行った。

まず自分自身の変化を before/after、like/wish に分けてワークシートに記入し、他者との関わり方などを客観的に振り返った。その後、班の仲間にメッセージを書き、お互いの健闘を讃え合った。普段言葉にしないことで相手の気持ちが見えにくかったが、お互いに不安を抱えながら演劇創作をしていたのだということを知り、素直に感謝の気持ちを伝え合っていた。

自分はどう成長した？ 自分だけの Before / after, I like / I wish を書いていこう。	
<p>Before</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者が通うかや開けたことのない場所を探したり、扉を開けていた。 言葉が通じず、自分から言えない空気を感じていた。 	<p>After</p> <ul style="list-style-type: none"> 開けた話したことがないこと話し合うなかで少しは話したけど、どうも話さないうかがわたり、良い所を見つけたら話して、扉が開いた。 班のみんながアイデアを出したり協力してくれたり、自分の心をよそにあげて、また、良い作品を作ることができた。演劇の経験を通して「班の一員」として関わり合ってきたと思う。
<p>I like</p> <ul style="list-style-type: none"> インタビューを通して、よくなった地域の課題や、地域の人々の様子を知らることができたこと。 普段話したりできなかった人と話せることになった。 他班の発表を見て、他の地域のことを知り、演劇の発表になるものを見つけたらよかったこと。 	<p>I wish</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人、人籍枠に違いがあったこと、全員参加できなかったらどうなるだろう、と思ったり、そういうことを考えて、そういう話をしてみようと思った。

メンバーからの感謝状を貼ろう！



その後、班ごとに自分達の作品を分析し、自分達が扱った地域課題の本質について考える時間を設けた。

【生徒の振り返り】

- 僕たちが幼すぎて分からなかった震災当時のことを、多分辛いと思うのに言葉にして教えてくれたことに

感謝している。芝居にして、きちんと伝えられたかどうか不安だけど、自分なりに精一杯やることができた。あと、思ったより演じることが楽しかった。

- 最初はなぜ演劇なのか分からなかったが、アウトプットすることの大切さ、コミュニケーションの大変さを学ぶことが出来た。そして、自分は人前で何かを表現することが好きなのだと思えることが出来た。
- 今回の演劇を通して、人と協力すること、演劇の楽しさを学ぶことが出来た。本番当日までチームで話し合ってよりよい作品を作ることができて、人として成長することができたのではないかと思います。



(6) 振り返りと評価

今年度、印象的だったのは、震災当時の表面的な事象よりも、取材相手にどのような心の葛藤があって、どう乗り越えたのかという「人」としての個人のストーリーを扱う班が例年に比べて多かったということである。震災当時6歳だった生徒達にとって、取材相手の多くは親世代であり、取材を通して、当時の大人たちがどんなことに悩み葛藤していたのかを、取材対象を通して知ることができたのではないかと想像する。

今年度は、合意形成のトレーニングとして、全員で話し合いながらの作品創作を試みた。台本を使わないことで、舞台上の演技は自然になり、より観客に伝わる伝え方ができていた一方で、生徒達の興味・関心が取材対象の個人的な葛藤や家族とのシーンなどを取り扱う班が多く、その外側を取り囲む複雑な構造や対立・分断には至らなかった。ただ、それでもそこにいる大人達の心に寄り添うことができたということは、その人達を取り巻く地域課題について知ろうと思う大きな動機になるだろう。実際にこの後に行った探究接続や地域の方々を繋ぐヒューマンライブラリーでは、これまで以上に熱心に取り組む生徒の姿が多く見られた。彼らが来年度からの未来創造探究でどんなテーマを取り扱うのが楽しみである。

(7) 次年度実施への課題

双葉郡やそこで復興のために様々な役割で活躍している地域の方々の気持ちに寄り添うことができたことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地域の課題解決には至らない。生徒達自身が、演劇で取り上げた地域の課題の本質に気付き、それらを時間を掛けて深掘りする中で基本的な知識をインプットしていくことが必要である。

3. 1. 3 国際理解教育

本年の「産業社会と人間」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用や職場体験を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

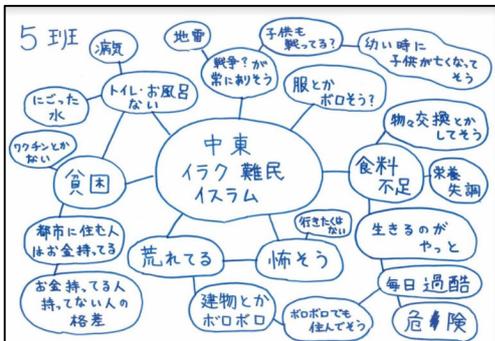
イラクで教育支援ボランティアに取り組んでいる高遠菜穂子氏に、『世界における地域課題を知ろう～紛争地イラクが抱える事例より～』という演題で講話いただいた。

高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を地域だけのものとして考えるのではなく、世界の平和や国際理解の意義を理解させることを目的としている。

- ① 日時 令和2年12月2日 (水) 5, 6校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員
※オンラインでイラクと繋いで実施した。

(2) 実施内容

事前に、高遠氏から「中東、イラク、イスラム、難民と聞いて、あなたが抱くイメージ」について自由に紙に書いてほしいという宿題があった。



その後、高遠さんから実際の様子を聞き、生徒達は少ない知識と偏った情報により自分達が作り上げたイメージと、福島について世界が抱くイメージをメタ構造的に重ね合わせることができた。

イラク支援を事例に、復興の現状と課題についてお話しいただいた。戦争と難民の問題について、「人道危機」と報じられる時には大抵事態泥沼化していることや、報道は「点」でしかなく、時々しか出てこない点と点を繋げて結論を出すのはとても危険であること。大切なのは点と点の間にある経過を知ることだということ学んだ。物事は多面的であり、少ない情報から得るイメージが全てではないのにも関わらず、そこから偏見や差別が始まってしまい、それらが戦争の素になっていることを知り、世界で起きていることをなるべく自分の力で知ろうとすることや、そのためには日本のメディアだけでは情報は圧倒的に足りず、海外のメディアに頼るしかなく、それには英語が絶対に必要であることなどを生徒達に訴えた。

イラク社会の対立と分断

- イラク戦争前は、ヨーロッパから取り入れた「家族法」を取り入れ、4割近くがイスラム教シーア派とスンニ派の夫妻だった。――→宗派対立が激化。離婚、家族離散。
- イラク戦争前は、政治は政教分離を原則としていた。――→政治政党の宗教色が強まった。
- イラク戦争前は、多民族、多宗教の共存社会だった。――→占領軍の暴力、新政府の宗派主義、過激派の台頭、煽るメディアによって人々は疑心暗鬼になり、差別、対立、分断へ。
- 難民増増とイスラマフォビア (イスラム恐怖症) が世界に広がり、世界各地でさらに分断が煽られる。

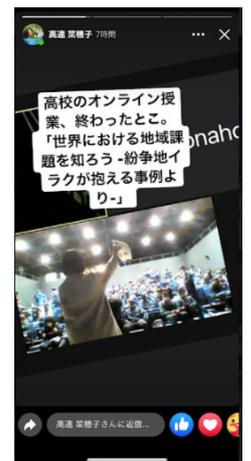
(3) 生徒の感想

- ・初めて知ったことが沢山ありました。特に外から見た日本のイメージや日本が情報鎖国であることなど驚きました。原発の被害を受けている福島との共通点もいくつかあり沢山のことを学びました。
- ・日本は世界で起きていることについてよく知らないが故に曖昧な憶測が飛び交うのだと分かりました。日本が自国を客観的に捉えていないことに危機感を覚え、変えて行くなら私たち世代だと思いました。
- ・今回のお話を聞いて、自分がどれだけ世界に対して無知なのか思い知らされました。日本、そして福島への偏見があるように、中東やイスラム圏への偏見・差別が少しでもなくなるように、世界の現状を自分事として理解することはとても必要なことだと思いました。

(4) まとめと今後の展望

今回は高遠氏の帰国が叶わずにオンラインでの実施だったが、実際にイラクにいる高遠氏と繋ぐことで、日本にて対面で行う講話とは違い、画面越しに現地の空気を想像しながらお話を聞くというメリットがあった。生徒達は集中力を切らすことなく、真剣に高遠氏の話聞いていた。

最初に行った宿題は、偏った知識によって生まれる偏見を自分事に捉えるという、若干荒っぽいやり方ではあったが、生徒達は自分達の中にある偏見に気付くことができ、衝撃的な体験となった。その後の講話は、イラク復興と双葉郡の復興を重ねながら聴くことができた。ここで感じたことを受けて、自分達はこれから何をすべきか、何が出来るか、生徒達の思考を深める授業へ発展したい。



3. 1. 4 探究接続

2年次から始まる未来創造探究とのスムーズな接続を図るためのプログラムを年度の後半に実施した。今年度はコロナウイルス感染拡大に伴う休校期間を利用して、5・6月にも Online プチ探究と称したプログラムを実施していたが、産業社会と人間の学びと2年次探究との接続をあらためて意識させる機会として設定した。

(1) はじめに

1年次で履修する産業社会と人間は2年次以降で取り組む未来創造探究の「助走」としての意味合いがある。産業社会と人間のなかで発見した地域課題等を未来創造探究のテーマに上手く接続できれば、学びをスムーズに移行し早めに探究のサイクルを回すことができたり、自身のテーマについて深く探究することができたりすると考え、年度後半に各種プログラムを実施した。

(2) 実施内容

① 1月20日(水)、1月27日(水) SDGs カードゲーム
2週にわたって、金沢工業大学開発のSDGsアクションカードゲームクロスに取り組んだ。SDGsの17個の目標に沿ったトレードオフの解消を目指すゲームであり、SDGsにおいてもっと重要な「誰一人取り残さない」という理念を実現するため、環境・社会・経済がバランスよく成長する社会を作るアイデアを出し合う。授業に取り入れた目的は、SDGsについてゲームを通して親しむことと、地域の資源や問題点について考え、その解決方法についてゲーム形式で考えながら、自らが次年度取り組む探究のアイデアを創出することである。最終的に本校(または双葉郡)オリジナルのトレードオフカード、リソースカードを作ることを目標とした。



ゲーム形式ということで楽しみながら取り組み

当日は金沢工業大学の学生がオンラインで進行を担当した。1年次生徒のなかで、事前にゲームを体験していた生徒が各クラスでサポート役を担当した。



② 2月24日(水) テーマ検討ワークショップ

探究テーマとは何か、自分が取り組みたくなるマイキーワードとは何かを考える。通常2年次の初めに行う探究のオリエンテーションを実施した。探究のテーマの設定の仕方や、テーマの素となるマイキーワードのを見つけ

方をレクチャーしたのち、実際にワークを通じてアイデア出しを行った。

③ 3月17日(水) ヒューマンライブラリー

双葉郡やいわき市を中心に、福島県浜通り地域から計9名のゲストを招き、アリーナにてヒューマンライブラリーを実施した。図書館の書籍の中から自分にぴったりの一冊を見つけるように、地域の大人に語ってもらう経験の中から生徒が考えを深めるきっかけを得るプログラムである。地域をフィールドに活動するゲストの話を直に聞くことで、「自分もゲストのようにプロジェクトを頑張りたい」と未来創造探究へのモチベーションを高めることを主な目的としている。自分が探究したいテーマは何か、ゲストの話を通して自分自身が大事にしたいテーマを捉え直す機会でもあり、今後プロジェクトを進める上で相談できる地域の大人とつながる機会として意味合いもあった。過去には未来創造探究のテーマ設定時期である2年次の7月ごろに実施していたが、探究テーマ設定についての学びを前倒ししたこともあり、1年次3月の実施となった。



(3) 成果

既存のツールや団体、地域の大人の力を借りながら、本校生徒の実態に応じたプログラムとして実施できた。1年次の年度内において探究への接続プログラムを実施することで、産業社会と人間での学びが単年度のものではなく、3年間通して学んでいくものの一部であることを認識させることができる。また、これまでSDGsの学習は各教科に委ねられており、系列によって異なる授業を選択している生徒らの中でその理解には差があった。ゲームを通してではあるが、SDGsが遠いどこかの課題ではなく、自分たちの暮らしの中にも多く存在していることに気づくいい機会となった。

(4) 課題と展望

優れたツールなどはたくさんあり、その活用次第で本校ならではの授業を作っていくことができる可能性に気づいた。重要なのは、どの時期に実施するのか生徒の実態をしっかり把握すること、また何と組み合わせるとより効果的なのかを考えることで、本校ならではの授業をデザインしていくことにつながる。

3. 1. 5 キャリア教育

本校の産業社会と人間の3つの柱「自分を知る」「地域を知る」「世界を知る」は、生徒が自らのキャリアを考えるために重要な要素となっている。3本柱を通じて、年間を通して生徒には自らのキャリアについて考えられるようにしているが、特に年度後半の時期に、高校卒業後の進路のみならず、将来どのような生き方をしたいのかを考えるきっかけとなる機会を設定した。

(1) はじめに

コロナ感染拡大に伴う休校期間を利用して、オンラインでも自らのキャリアについて考えさせるプログラムを実施した。「自分史」、「原風景マップ」といったプログラムでは、生徒らは自分たちがこれまで生きてきた15年間を約100問の質問で振り返ったり、幼いころ過ごした自らの原風景となる地域を地図にまとめていく。この作業を通して、「これからのキャリア」を考える前提として「これまでのキャリア」を確認する。年度後半のプログラムでは、キャリアプランニングのきっかけとなる機会を設定した。

(2) 実施内容

①2月3日(水) しくじり先生

元々はキャリアプランニングの一環として、卒業生を呼んでブースごとに対話をする機会を予定していたが、コロナ禍によって遠方から卒業生を招くことが難しくなったため、教員との対話に計画を変更して行った。元々の計画のオンラインでの実施も検討したが、同様の内容を提供できるのであれば、対面で行う方が効果が高いと判断しての計画変更となった。

対話に参加してもらった教員には、人生の転機や、苦しかった・辛かった時期などを具体的なエピソードとともに語ってもらった。これからのキャリアに向けて一歩を踏み出せないでいる生徒が、自分から一歩を踏み出せるよう、教員には失敗を含めた踏み込んだ自己開示してもらった。その結果、生徒は教員が経験した失敗や挫折から奮起に勇気をもったり、同じような悩みを抱えていたことに共感したりしていた。



②2月10日(水) 東洋システム代表取締役 庄司秀樹氏 「夢を叶えるために-世のため 人のために 働くこと-

前週のプログラムで、大人を身近に感じた生徒たちに向け、世界で活躍する起業家の方から講演を行っていた。例年、1年次のこの時期にご講演いただいていたが、今回は、双方向のやりとりを重視し、対話の時間を多く設定した。50分授業2コマでお願いした講演時間のうち、各コマ最後の10分間を質問と対話の時間としたことで、生徒らは疑問に思ったことをすぐに質問でき、活発な意見交換の時間となった。

庄司氏がいわき市出身ということで親近感を持ちながら、現在の地位を築くまでの壮絶な経験や社会のために尽くそうとする姿勢には多くの生徒が感銘を受けた。特に、災害発生時に地域のために献身的に行動する姿や、次世代の育成のためにはお金や時間を惜しまない姿への共感が多かった。

授業終了後も質問を求める生徒で長蛇の列となり、庄司氏には最後まで生徒の質問にお付き合いいただいた。

(3) 成果

産業社会と人間の授業内で実施した、大人との対話を通して自身のキャリアについて考える機会というのは、あくまでキャリアプランニングの第一段階に過ぎない。今後生徒自身が継続してキャリアについて考えていくことが求められるが、今回「失敗をしてもいい」「何かに一生涯懸命に努力してみる」ことに気づけたのは、今後のキャリアプランニングにとっても役立つ機会となったに違いない。

(4) 課題と展望

キャリアについての取り組みは、高校3年間を通じて行われなくてはならず、今回いいスタートが切れたからといってこれで終わりではない。コロナ禍のような大きな社会の変化によってキャリアプランニングが大きく変更を迫られることも予想される。「しくじり先生」で、大人の経験から自身のキャリアにヒントを得た生徒は、今後良き相談相手としてその「しくじり先生」を頼ってくることもある。教員も継続的かつ柔軟に生徒のキャリアプランニングに関わる意識を持たなければならない。

3. 1. 6 「出張みらいラボ (カタリ場プログラム)」(2020. 6. 11)

「出張みらいラボ (カタリ場プログラム)」とは、認定NPO法人カタリバが高校生を対象に、オンラインで行うキャリア学習支援プログラムである。生徒にとって「ナナメの関係」にあたる大学生や社会人との「対話」を通して、高校生が自身の興味関心への理解を深め、意欲や主体性を高めることを目的に行われている。

今回は進路に大きく影響する6月末実施の履修登録前に先輩の進路選択の話を聞き、対話を通して自身のキャリアを検討する機会を設けることで、生徒個人にとって最適な進路選択に繋げる。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、オンラインでの実施となった。当日は、福島大学、首都圏の大学生、ふたば未来学園高等学校の卒業生、また地域協働スペース「双葉みらいラボ」に常駐するスタッフ合わせて40名程度集まり、少人数の班に分かれて対話を行うことで、生徒自身が自己を深く内省する機会となった。

(1) はじめに

事前にクラスごとに学校生活に関するアンケートを実施し、その結果をもとにプログラムの内容を決定した。

1年次全員を対象に5、6限の110分間を使って、オンラインにて実施した。全体の授業開始のアナウンス後に、生徒はあらかじめ決めた3～4人のグループでタブレットの前に並び、担当する学生と出会う。まず学生と生徒が自己紹介でお互いの距離を縮める。次に、PowerPointを用いた先輩の話を聞き、自分の興味・関心への理解を深めるためのワークシートを用いて班の学生と個別で語り合うなどして授業は進んだ。最後に、班のメンバーの前でこれからの高校生活に向けた「明日からの第一歩」の約束を結ぶという形で、授業のまとめを行った。



オンラインで大学生の先輩と自己紹介

ションを聞く。学生は、自分の興味関心に気づいたきっかけや進路に向き合った経験談を語った。特に「向いていることだけでなく、やりたいことをやるのが大事」という学生の話に共感した生徒が多くみられ、学生のリアルな話は生徒に刺激を与えた様子だった。

○座談会

この時間では班の学生と語り合いながら、先輩の話を聞いてみた感想や小学校・中学校時代について、ワークシートを用いて振り返りながら、自分の興味・関心への理解を深めた。生徒は、この語り合いを通して改めて自己を振り返る機会となった。

○まとめ

授業の最後に、生徒はこれからの高校生活で望んでいることや頑張りたいことを、実際に成し遂げるためにはまず何から始めるのかを考え、約束という形で、班の学生や同級生と明日からの行動目標を宣言した。



先輩の話の様子



約束を考える様子

(2) 実施内容

○自己紹介

学生と生徒を合わせた4～5人の班ができると、学生から順に班全員が自己紹介を行い、場を温める。学生自身の興味関心を伝えることで、生徒も自然と自分のことを打ち明ける姿がうかがえた。

○先輩の話

生徒は「先輩紹介シート」から、話を聞いてみたい学生を4人中2人選んで、PowerPointによるプレゼンター

(3) 今後の展望

事後のアンケートでは、「モヤモヤを抱えたままなんとなく決めるのではなく、納得感を持って決めることが大切だと気づいた」、「これからの事を真剣に考えようと思った」などの回答が見られた。多くの生徒にとってこの授業が、自分の興味関心や進路について、本気で考えるきっかけとなったようだ。進路に限らず、学校生活や課外活動においても、本時を通じて発見した興味・関心を活かしてくれることを期待する。

3. 2. 1 探究オリエンテーション

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災ゼミ」、「メディア・コミュニケーションゼミ」、「再生可能エネルギーゼミ」、「アグリ・ビジネスゼミ」、「健康と福祉ゼミ」、「スポーツと健康ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心(Will)や地域の課題(Need)について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

(1) はじめに

本年度は年度当初からコロナ禍によって、時差通学による40分×4コマの変則時間割となったため四月は探究の時間が確保できず、Google クラブルームを開設し、生徒に案内を送付することに留まった。

(2) 実施内容

休校に入った数日後からオンラインによる授業が英語や数学を中心に最大一日4コマ行われ、それ以外の科目はプリント課題やオンデマンド教材などで対応した。探究の授業としてはクラブルームを通じて、先行事例の動画視聴と感想提出、福島第一原子力発電所と本校がある双葉郡に関するクイズ、自分の関心に合わせた調べ学習の3つの課題を配布した。

休校期間が想定より延長となったため、5月20日に探究の第一回オリエンテーションをZoomで配信した(写真)内容は探究の概説、休校中の課題の振り返り、調べ方のポイントについてである。



休校中登校日の5月22日は体育館で第2回オリエンテーションを行うことができた。生徒に自分の興味・関心と地域・社会の課題というふたつの視点からテーマを想像させるとともに、ポジティブ/ネガティブ両方の未来をイメージし、探究の意義を考えさせた。

特別時間割の27日は第3回オリエンテーションを行い、仮入部に向けてゼミの先輩への質問やテーマ設定を考察させた。こうして休校時、状況に合わせた形の課題配布や、オリエンテーションを行い学校教育の再開に向けて準備をしていた。

(3) 成果

生徒の調べ学習のテーマを一部挙げる。在宅でも取り組める課題であり、ほとんどの生徒が提出できた。

【原子力防災】

原子力災害が起こった原因と、どのように起こったのかを調べてプレゼンしなさい。

【メディア・コミュニケーション】

「トイレトーパー不足はデマ」というニュースをディレクターとして作成するとき、どうすれば買占めを控えてもらえるか、人が不安になる理由を踏まえてプレゼンしなさい。

【再生可能エネルギー】

福島県浜通りには、福島イノベーションコースト構想というプロジェクトが進められている。これはどのようなプロジェクトか。未来創造探究の活動と連携してできるような活動はどのようなものか、あなたの考えをプレゼンしてください。

【アグリ・ビジネス】

「六次産業」とは何かを調べ、具体的な事例も含めてプレゼンしてください。

【健康と福祉】

もし災害が起きた場合、「避難所×三密回避×弱者」という感染リスクの高い環境を避けるためにはどんなアイデアがあるか、あなたの考えをプレゼンしてください。

【スポーツと健康】競技スポーツと生涯スポーツの違いについて、調べた上でプレゼンしてください。

3. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、水曜日の5・6校時と木曜日の3校時に設定されている。木曜日の授業は、探究に関する知識のインプット学習と進路に関する学習のふたつの側面で行われた。特に進路に関する学習については、「進路探究」として、2年次のうちから自分の進路について考える時間として期待されている。

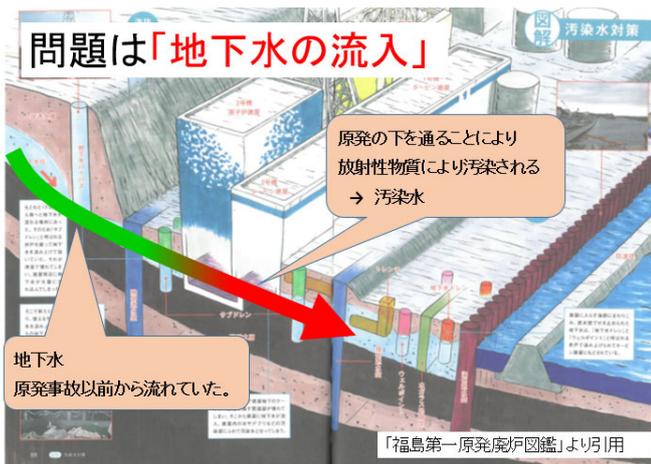
(1) はじめに

年度初めの時差通学と休校によって、年間計画の前期部分は大きく変化を余儀なくされた。休校明けから内容を精選し授業を行った。

(2) 実施内容

進路探究は「キャリア学習」と「小論文学習」の2本立てで成り立っている。インプット学習とのバランスを見ながら活動を行った。特別授業としては以下のものを行った。使用された資料画面の一部を付す。

7月2日「理科×福島学 福島第一原発のいま」

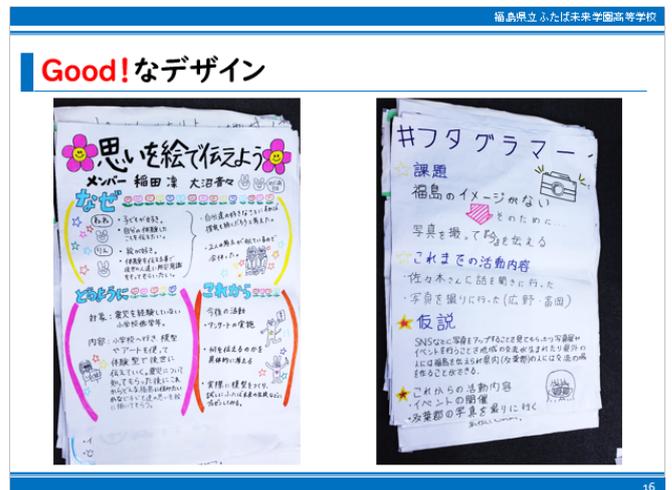


9月25日「社会×福島学 SDGs アジテート編」

Q. SDGsには17の目標を環境、社会、経済の3つの項目に分ける方があります。環境の次の基盤となる「社会」に相当する8つの目標でしょうか？ 周りと話し合ってください。



10月15日「駄作撃滅！ ポスター発表 達人養成講座」



(3) 成果

2年次になって早い時期から、進路に関する意識づけを行うことで、高校卒業後、またはそれ以降の自分の将来について考える時間を取ることができた。また、総合学科として生徒が系列に分かれるという現状から、統一した進路指導を行うことは難しく、その意味では、様々な人々からの意見を聞きながら自分の進路について考えるという形で授業を展開することができたことで、学校全体に対して、進路指導のあり方を、授業を通じて示すことができたと考える。

特別授業については、処理水問題やSDGsが話題となった時期、ポスター講座についてはプレ発表の前と、適切な時期に企画することができた。

(4) 課題と展望

1年次の産業社会と人間の中で職業体験を実施していることから、1年次のうちから自分の希望する職業について考え、2年次のキャリア学習につなげていくという連携の強化が必要になる。また、小論文学習については、国語科に限定せず教員全体で指導できる体制を整える必要がある。

3. 2. 3 原子力防災探究ゼミ

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築など、双葉郡における様々な問題を調査研究し、生徒それぞれが課題を設定しその解決を目指す。震災から10年が経過し、バナナやコーヒーの栽培など新しい事業を行うところがある一方で、期間が進まない地区もあり、地域が抱える問題や状況は大きく変わってきている。今年度の原子力防災班は、前半は調査アクションとして、様々なフィールドワークを通して自分の目で見て体験し、RESUS や各種資料を通して客観的な地域分析などを行った。その後、それぞれが課題を設定し、課題解決のアクションを実施している。(QRを読み取ると動画をご覧になることができますが、スマホアプリ“FlipGrid”で読み取ることで、この紙面上にARで動画がご覧いただけます。)

(1) はじめに

これまでの探究活動の問題点の1つに、印象だけで物事をとらえ、事実を確認しないで、探究を進めていくことがある。この地域の問題は何かと尋ねると、コミュニティの崩壊、風評被害など震災当時から言われていることを、事実を確認しないで反射的に生徒は答えがちである。さらに新聞やテレビからの印象操作に乗らず、しっかりと事実を取り出せる力をつけることが調査研究の基礎となる。5期生の生徒たちには、調査のためのオリエンテーションを行い、印象ではなく事実や数字を使う重要性から始めた。

(2) 実施内容

【調査のためのオリエンテーション】

5月20日(水)

未来創造探究オンライン講座「事実を明らかにするための調べ方講座」

緊急事態宣言による休校中のためオンラインで開催した。

【調査アクション】

7月1日(水)

双葉駅周辺 FW

夜ノ森駅周辺 FW



JR常磐線が再開し、駅ビルも新しくなった双葉駅と未だ駅前には立ち入り禁止でバリケードが張られている夜ノ森駅のFWに行ってきました。双葉駅では一般社団法人ふたばプロジェクトのスタッフの皆様、夜ノ森駅では富岡町役場企画課の伊藤様のご協力非常に学びの多い時間になりました。

8月19日(木)

福島第1原子力発電所視察

夏季休業中に廃炉資料館と福島第1原子力発電所に訪問しました。原子力発電所では事故のことだけでなく、処理水に問題な



ど現在抱えている問題についてもまなぶことができました。

【解決アクション】

前期の調査を受けて、生徒たちは、課題を設定したスタートをしました。2020年10月28日に行われたプレ発表会の発表をご覧下さい。

○生徒の探究と実践の発表

① マイクラでつくる双葉郡

マイクラというゲームを使い、双葉郡を作成している。ゲームを使うことで多くの人に双葉郡に興味を持ってもらい、将来的にはVRで実際に体験できるようにしたい。



② エネルギーからエコロジーへシビックプライドを形成する環境事業の提案

海洋プラスチックの問題の研究を通して、環境ビジネスの世界的な流れを知りました。住民と行政、そして企業が一体となって双葉郡を発展させるためシビックプライドに着目しました。



③ 村おこし in 葛尾村

葛尾村の村おこしを探究している。スポーツイベント等様々なイベントを通して活気ある町作りと魅力作りを地域の方と協働する。



④ 鉄卵という地域の可能性

地域の砂鉄を使って南部鉄器の技術で鉄卵をつくる探究と、物質が人体に与える影響を探究している2人が協働して探究している。現在は砂鉄を効果的にとる方法を実験している。



⑤ 震災を考える

震災について知り、他の地域の人たちに双葉郡や私たちの住む町について知ってもらうためにツアーやイベントを行いたい。



⑥ 絵本で記憶の受け渡し

震災の経験や体験を震災の記憶を持たない世代へ伝えていくことを探究している。記録としての震災ではなく記憶としての震災を伝えること、そしてそれを、絵本を通して伝えていくために日々探究している。



⑦ 10年越しの双葉郡-未来への築き

双葉郡にあるゴミをすべて花に変えるプロジェクト。6号線に桜を植樹しているハッピーロードネットの西本さんのご協力で双葉町に第一歩の花を植えました。



⑧ ふたばツアーデジタル化

多くの先輩方がチャレンジしてきた双葉郡ツアーを VR で海外の方でも双葉郡を楽しめるコンテンツを作っています。多くの方々が、双葉郡の魅力を VR で感じてもらえるように進めています。



探究作品

マイクラでつくった学校の動画



【スキル学習】

1月24日(日)

フューチャーマッピングによる課題設定

講師：石ヶ森 久恵 先生

(株式会社アルマクリエーションズ)

未来予測の様々な記事を使い、自分の探究をさらに深化させることができました。

フューチャーマッピングはバックキャスト思考であり、本校の未来創造探究の課題設定と同じアプローチであり、さらに、ストーリー思考で進めるため、より創造的な課題設定ができた。

2月24日(水)

ドローン講習会

講師：松本 淳 先生(株式会社Five Star)

ハッピーロードネットの西本様と本校生の渡辺空による企画で実現しました。探究を進める上で、様々な ICT 技術や他の最新技術を使うことで、質の高いプロジェクトを実践できるとこの研修を通して感じる事ができた。



(3) 成果

○探究について

1年次の産社で、地域を知る学習をしているが、そこで終わらず、探究班全員で、もう一度地域学習を行った。また自分たちで調査探究について計画し実施したことで、役場の方たちを始め、様々な方々とつながり、議論し地域について深めることができた。

地域を深く知ることで、自分が何ができるかをそれぞれの生徒が考え、これまでにはないような発想で課題設定をし、解決のための仮説を立て、進めることができた。

○生徒たちの学びについて

探究活動を通して、生徒たちは、以下のことについて深く考えるようになった。

① 事実を明らかにする姿勢

新聞やテレビ尾などの2次情報だけでなく政府が出す1次情報にもアクセスし、印象では無く、データを活用する姿勢が育った。

② 企画実行能力の向上

はじめは、探究班でのフィールドワークに参加するだけであったが、自分の知りたいことを明らかにするため自分たちでフィールドワークの企画実施をするようになった。

③ 実社会と教科に対する積極的な学びの姿勢

実社会で得られる知識に興味を持つに従い、教科学習の必要性も感じ、積極的に学ぶ生徒が増えた。

(4) 課題と展望

それぞれの探究テーマに対するプロジェクト実施を確実にいき、その考察を通してそれぞれの探究を深めていくこと。さらに、国内や世界の課題とのつながりを構造的に比較し、自らの探究から何かの提言ができるようにする。

3. 2. 3 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は地域や社会の問題を意識し、その解決のためメディアを用いた情報発信や、未来への伝達のアクションを目的としている。ゼミ開始時には 36 人の生徒が集まり、2021 年 2 月現在、34 名（女子 26 名、男子 8 名）が在籍している。注意点として、実践が進むほどメディア製作そのものが目的化してしまいがちなので、出発点である課題や伝えたいことを意識させ続けた。

（1）はじめに

五期生は震災当時小学校一年生だった世代だ。彼らには「自分たちが震災時の記憶を持っている一番下の年代ではないか」という意識が強くあるようだ。彼らの中には、下の世代に対して「震災の記憶を伝えていきたい」という気持ちがあり、使命にも似た感情を帯びて秘められている。

このような記憶の伝承といった原発事故地域特有の課題に加え、過疎化などの地域の課題、グローバルな課題の解消を目指す探究活動が四月から始まるかに見えたとき、コロナ禍による休校要請が国から発せられた。

コロナ禍休校のため、4～5 月はオリエンテーションをオンラインで行い、ネット上でレポート提出を課した。メディア班では『「トイレ紙不足はデマ」というニュースをディレクターとして作成するとき、どうすれば買占めを控えてもらえるか、人が不安になる理由を踏まえてプレゼンしなさい』『安倍首相と星野源の「コラボ」動画はなぜ賛否両論となったのか、あなたの考えをプレゼンしてください』のどちらかを選ばせた。



（活動の様子）

（2）実施内容

初回は地域の話と、「なぜ探究の授業があるのか」＝「答えのない問いを考える。問いそのものを創出することがこれから求められているため」という話をし、探究テ

マが大まかに決まっている生徒にはその洗練をさせ、テーマ未決定の生徒は自分の興味関心を考えさせたのち、翌週フィールドワークとして広野町役場の方から町の問題についての話をうかがった。

（3）成果

休校の中で始まった探究の授業も、こうしてだんだん軌道に乗り始めた。具体的な生徒を挙げよう。

A は震災の記憶の継承を目指して、自分たちの強みである絵が使えないか考えていた。初めは自分たちで絵を描くことを考えていたが、町の方と協議し、子ども達に絵を描かせる案や、子ども達への紙芝居へと企画が深化した。

Y は、原発事故で全域に避難指示が出され、現在も町内の大半が帰宅困難地域である浪江町の請戸の田植踊り継承のイベントを考えている。保存会の方と連絡を取り、一緒に双葉町に出来たばかりの東日本大震災・原子力災害伝承館にも足を運んだ。

F は福島への偏見や情報格差をなくそうという目的から、福島第一原子力発電所に最も近い本校生の立場から正しい情報を伝えようと Youtube チャンネルを作成する実践を行っている。発表の機会を意欲的に使い、全国高校生マイプロジェクトアワードや早稲田大学主催のふくしま学（楽）会の代表に選出され、発表とブラッシュアップを続けている。



（第 7 回ふくしま学（楽）会の様子）

N は「負の遺産」の継承に関心を持ち、地域の方の課題解決アクションや、本校の探究活動を保存・発信する

ことを目的にWebサイトを製作している。積極的に外部の方や卒業生に連絡を取り、本校主催の広島研修にも意欲をもって応募した。

NPO法人カタリバや早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター、地域で課題解決のために活動されている大人たちから助力を得ている事は、大変ありがたい事であり、本校の強みである。

先のNは早稲田大学を介して神戸の「人と防災未来センター」の高原耕平氏の講義を受け、実践を深化させている。また、Mたちは葛尾村の地域活動家の方と稲刈りや餅つきを企画したし、Sは帰宅困難地域内で放置されていたペットを保護するNPO法人を取材し、動物の殺処分問題について考えている。



(カードゲームを用いた地方創成ワークショップ)

全国高校生マイプロジェクトアワードやふくしま学(楽)会のほかにも、1月には福島県総合学科高等学校生徒研究発表会があった。地域のものを使ったウェディングプランのプロジェクトと、バナナの葉を使った脱プラスチック包装プロジェクトを企画中の生徒が参加した。



(オンラインで外部の方のアドバイスを受ける)



(バナナの葉)

(4) 課題と展望

第一原発最寄り校の本校生たちは、それゆえに社会の課題に向き合わざるを得ない。昨年度は地域の現状と、解の見えない課題を肌で感じた。今年度の探究の授業で彼らは理想と現実のギャップから探究テーマを設定し、仮説を吟味するための「調査のアクション」をしてきた。多くの生徒はこれからのいよいよ「解決のためのアクション」に取り掛かかり、半年後の探究活動発表、そして少しでもよりよい社会を自分たちの手で創ることを目標に歩みを進めている。



(葛尾村での稲刈りの様子)

五期生の特徴として、地域という枠組みを越えて、社会問題について考える生徒もおり、Yは日韓関係、MはLGBTの問題を扱っている。また、自分のキャリア志望と絡めて、修学旅行の際にホテルの従業員の方へインタビューを行った生徒もいる。

3. 2. 3 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見だし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではあるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒13名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広町火力発電所訪問、浅見川の清掃活動・水質調査、ふるさと創造学の講演会等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。それらのグループは大きく分けて、トリチウム水処理班、海洋温度差発電班、リモネン発電班、川探求班に分かれている。

(2) 実施内容

① トリチウム水処理班

東京電力第一原子力発電所事故によって発生しているトリチウム水処理の問題に注目した。この問題は、地域の関連性が非常に高いにも関わらず、地域の関心が低いという現状がある。このことを踏まえて、自分達でどのようにしたら、より分かりやすくトリチウム水処理の問題を伝えていけるのかを考察した。

まずは本校の生徒がどれだけ問題意識を持っているかを調査するため、校内アンケートを実施した。アンケート内容は主に「トリチウム水を知っているか?」、「トリチウム水の海洋放出に賛成か、反対か?」の2つである。しかし、準備不足により、高校1年次からしか回答を得ることができなかった。回答数が少ないため、データの信頼性は低いだが、その中でも、6割の生徒がトリチウム水について知っていることや8割以上の生徒がトリチウム水の海洋放出に反対していることが分かった。こちらの予想よりも興味関心が高いことが分かった。

次に、トリチウム水の希釈の様子を分かりやすく伝える方法はないかと考え、牛乳をモデルとした希釈の実験を行った。牛乳をトリチウムに見立て、海洋放出が可能なレベルや自然界に存在するレベルなど、様々な状態を想定して、希釈の実験を行った。実際に希釈の計算を行うことにより、どれくらい薄めればよいのかが分かった。また、牛乳を使うことで、視覚的に濃さを表現することができた。

さらにこれらの活動を「福島イノベーションコースト構想の実現に貢献する人材育成」の成果報告会にオンラインで参加し、代表発表を行った。他の高校生とも交流を行い、積極的に意見交換を行った。

今後の課題としては、更に詳しい実験を行い、廃炉資料館や原子力発電所などを実際に見学し、より知識を深め、そのことを伝えていく手段を模索していきたい。



【牛乳を使ったトリチウム水の希釈実験】

② 海洋温度差発電班

東日本大震災前は自然環境にも恵まれ、原子力発電によって、経済的にも支えられていた大熊町。しかし、東京電力第一原子力発電所事故によって、全域避難となってしまった。その結果、町外への人口流出が続いている。そんな大熊町を、再生可能エネルギーを使って魅力のある町にし、地域の復興につなげる活動をしたと考えた。その再生可能エネルギーの手段として、海洋温度差発電に着目した。海洋温度差発電とは、海の表層と深海の温度差を利用した発電方法で、発電量が安定しており、太陽の熱エネルギーを有効に使うことができる。この発電方法を大熊町の海洋で実現できないかと考えた。

まず海洋温度差発電を実現するための基礎実験として、対流の実験を行った。水槽に入った水をヒーターで温めることで、実際に対流が起きているかどうかを調べた。水槽の表層と深層の温度を実際に測定し、グラフにまとめることができた。やはり水槽

全体を温めるためには時間がかかってしまい、さらに、温度差はあまりひらかないことが分かった。

次の基礎実験として、ジエチルエーテルをチューブ内で液化させる実験を行った。ジエチルエーテルは海洋温度差発電において、冷媒となる物質でありその性質を確認することができた。

今後の課題としては、対流の実験で大熊町の海水を使用するなど、実際の環境に近いかたちでのシュミレーションが必要と感じた。また発電機の試作も行っていきたい。

③リモネン発電班

広野町の特産品としてみかんが有名であるが、あまりみかん単体として販売されていない。その理由を調べたところ、主に加工用として生産されていることが分かった。そこで広野町のみかんを多くの人々に知ってもらい、さらに地域の活性化につなげるため、リモネン発電に注目した。リモネンとは、みかんの皮に含まれている成分で家庭用食器洗剤にも含まれている成分である。

まずは広野町のみかん園のみなさんに協力を依頼し、実際にみかん狩りを行った。みんなで協力して収穫作業を行い、数箱分のみかんを確保することができた。次に大量のみかんの皮を集め、それをすりつぶしてフラスコに入れて、水蒸気蒸留でリモネンを抽出する実験を行った。はじめは油のような成分を抽出することができたが、時間の経過とともに、その成分が蒸発してしまった。2回目の実験としてウォーターバスを使用し、みかんの皮の温度を上げてから水蒸気蒸留を行った。その結果、リモネンと思われる成分を抽出することができた。

今後の課題としては、実験で抽出したリモネンと実際のリモネンの成分を比較して、その違いを確かめる必要がある。またリモネン発電にはどれくらいの量のみかんの皮が必要なのかも調べていきたい。



【みかん狩り】



【水蒸気蒸留の実験】

④川探求班

再生可能エネルギーの原点として、まずは地域の自然環境を知ることが基本として、活動を行ってきた。中でも広野町の主要な川として、浅見川に注目し、水質調査や生態調査を進めてきた。水質調査では、実際に浅見川の上流・下流の水を採取し、CODを利用した実験で、その性質を確かめることができた。また生態調査では、浅見川に生息している生物を捕獲し、飼育と養殖を試みた。その中でも広野町にしか生息していないキタノスジエビを発見することができた。これ以外の活動としては広野町役場でのインタビュー、五社山のフィールドワーク、浅見川の清掃活動などを行った。

今後の課題としては、キタノスジエビの抜け殻がCO₂を吸収することが判明したため、脱皮を繰り返すことで、どれだけCO₂が吸収させることができるかを実証していきたい。



【水質調査】



【浅見川清掃活動】

(4) 課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、再生可能エネルギー探究ゼミ全体としても、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

3. 2. 3 アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和2年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業、福祉の生徒から成り、計12名（男子5名、女子7名）で実施している。

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向開発、地産地消の推進が主になっている。

(1) はじめに

本ゼミでは、これから始まる探究活動が単なる調べ学習や自己満足的な活動にならないよう、キックオフの際に、「あなたはなぜ〈プロジェクト〉を行うのか」、「そのプロジェクトは、〈誰のため〉〈なんのため〉に行うのか」といった問いを生徒に投げかけ、探究活動の意義を考えさせ、図1のフロチャートを提示し、進め方を共有した。



図1 探究活動の進め方 (2カ年計画)

地域課題 対象となる地域が、農業やビジネス分野においてどんな問題を抱えて何が課題か、正確に把握している。

課題解決の案 課題を解決するためには、どんなことをすれば解決できるか、具体的な解決方法を提案する。

テーマの決定 地域課題を把握し、課題解決の案を踏まえ「テーマを設定」する。

仮説 まだ証明されていない事柄を統一的に説明するために仮に立てる説である。プロジェクトを進めるにあたり、課題や解決案が本当に妥当かどうか（本質は何か）、わかりやすく説明する。

実験と調査 実際に調査や実験を行い、自分が立てた根拠や妥当性を図る。

分析と考察 実験や調査から得られた情報を分析し、なぜこのような結果が出たか、分析、考察、整理する。予想していた結果との相違点の発見や、新たな課題が見つかった場合、仮説に戻る。(PDCAサイクル)

(2) 実施内容

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、原発のイメージ払拭 (①「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」)、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み (②みんなバナナすきだよねえ)、③資源の再利用の推進 (⑤「古着にもう一度光を」) ④「ニーハオはばたけ広なバナナ」地域資源を活用した商品開発 (⑤

「凍み天復活」)、⑥メディア&福祉&アグリ協働「お肌つるつるお米パック」が主になっている。



普段のゼミの様子

(広町振興公社の方より広野の現状を聞く)

① 「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」

探究内容	震災後、双葉郡の抱える課題の一つに「人口減少とコミュニティー不足」がある。本探究では、この課題に目を向け、大熊町の特産物として力を入れている「いちご」を用い、他の地域との壁はあるのか、また双葉郡のイメージを変えていくことはできないか、忘れてしまっているあの味を復活させることはできないかを考え、「双葉郡の元気」につながる活動を企画している。
活動の様子	【震災当時～現在】  イチゴのレアチーズケーキ 試食風景 
協力者	ネクサスファームおおくま 取締役兼工場長 徳田辰吾氏

② みんなバナナすきだよねえ

探究内容	震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究
------	---------------------------------------

	<p>では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関りが薄れている現状から、地域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナカステラ」を利用できないかと考えた。広野町の農産物を活用した加工品の商品開発を行い、町に訪れた人に配布することで、広野町の魅力発信を目的としている。</p> <p>広野町振興公社の中津氏の協力のもと、広野町特産のバナナを活用したカステラを製造することにした。皮まで食べられる安全なバナナを使用しており、地域復興と特産品化できないか現在企画中である。</p>
--	---

活動の様子	<p>試作の様子 (2021年2月)</p> 
協力者	<p>広野町振興公社 代表取締役社長 中津弘文氏</p>

③ 古着にもう一度光を

内容	<p>SDG s 12 つくる責任つかう責任に着目し、捨てられてしまう古着の再活用をテーマに掲げた。作業着として新たに古着のリノベーションを目指す。また、オーガニックコットンの需要と供給の調査調や、環境に配慮した持続可能な活動をめざした探究内容である。</p>
活動の様子	現在企画検討中。
協力者	協力者模索中。

④ ニーハオーはばたけ広野バナナ

探究内容	<p>震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関りが薄れている現状から、地域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナギョウザ」「バナナ春巻き」を利用できないかと考えた。</p>
------	--

	<p>商品コンセプトとして必要な、商品のターゲット (誰が)、ベネフィット (どのような価値)、シーン (場面) を考え、商品の試作を繰り返した。</p>
活動の様子	<p>試作の様子 (2021年2月)</p> <p>バナナ春巻き バナナギョウザ</p> 
協力者	<p>広野町振興公社 代表取締役社長 中津弘文氏</p>

⑤ 凍み天復活

内容	<p>震災前南相馬市で販売されていた上げ菓子「凍み天」。震災後工場が被災し一時生産中止となる。その後支援を受け、営業を再開するが、ほとんど知られていない。友人とのたわいのない会話から「凍み天」のワードに関心を持ち、「凍み天復活」を探究テーマに掲げ活動予定。</p>
活動の様子	現在企画検討中。
協力者	協力者模索中。

⑥ お肌つるつるお米パック (アグリ&福祉&メディア)

内容	<p>美容に興味があり危険な添加物・農薬を使用した美容製品があふれていることに危惧している。有機栽培で育てた米ぬかを原料に使用した米ぬかパックを作り、被災地のお米が安全であることをアピールしたい。</p>
活動の様子	現在企画検討中。
協力者	協力者模索中。

(3) 成果と課題

地域の農業生産の活性化に向け、各関係機関の協力を得ながらプロジェクトが進行している。それぞれの探究が一過性にならぬよう、各探究内容を記録・保管し、次代へ繋げていきたい。また、今年度は初めてスペシャリスト系列 (農業、商業、工業、福祉) 全科合同の特別授業を設け、それぞれの探究活動へ活かすことを目的に、SDG s 関連の授業を実施した。

最後に、本ゼミの探究活動のために、日頃よりご理解ご協力をいただいている方々にここに感謝の意を表す。

3. 2. 3 スポーツと健康探究ゼミ

概要

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から10年を迎えようとしている。この10年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちの運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もいまだに残り、福島県民の生活に不安を残し続け、不自由な環境で生活を送っている人々もおり、時間が経過したことで忘れられようとしていることや新たな課題が生まれていることも事実。将来的な課題は続いている。さらに、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらし、震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。スポーツの観点から見れば、東京オリンピック、インターハイ、国民体育大会などのスポーツの祭典が軒並み延期・中止となり、日々トレーニングに励むアスリートたちの活躍の場が失われた。

「当たり前は当たり前ではない」。これは10年目に私たちが身をもって感じたことである。そして今、、、「ステイホーム」「新しい生活様式」「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」、私たちはまたそれを感じる事態となっている。日常の一部であった「スポーツ」というものが、どれだけ多くの人に元気や勇気を与え、様々な課題を解決できる可能性を秘めたものであったのかを改めて感じるようになった。「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(1) はじめに

スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行ってグローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

①東日本大震災と福島第一原子力発電所事故

自分の2011.3.11 14:46を振り返った。スポーツゼミはトップアスリート系列の生徒で構成されている。全国各地から本校に集まってきている利点を生かし、「それぞれの3.11」を共有する時間を設定した。あの日あの時に自分はどこで何をして、どのようなことを感じていたのか。他者理解を行った。

②日本の課題調査

①の流れを生かしながら、それぞれの出身地における様々な課題を調査した。出身地のことを意外と知らないということであったり、隣県ではなく遠方でも自分の地域と同じような課



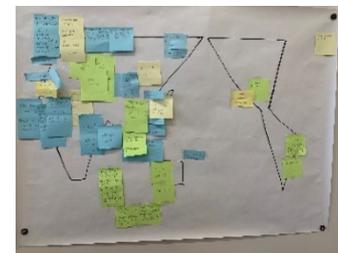
題があるということを知り、互いの共通点を見つける時間とした。

題があるということを知り、互いの共通点を見つける時間とした。



③世界の課題調査

①②の流れを途切れないようにしながら「世界」へ目を向ける時間を設定した。スポーツに限らず、様々な世界の課題を調査した。理解が困難なワードが出てきても拾い上げながら世界の状況をできるだけ広く調査した。日本と同様の課題が見つかったり、日本では見られない課題が見つかったりと視野を広げる時間となった。



④グループ学習（調査・体験）

④グループ学習（調査・体験）

世界や日本、地域、自身の課題調査からどの課題を解決するか決定し、自分がスポーツにおけるどのような立場（選手、指導者、経営者、スタジアム、アリーナ、スポーツショップなど）に関わり、最終的にどのように「win×win」の関係性を作り出すかを考えた。各々で思考を巡らせ後、アイデアが近い生徒同士でグルーピングを行った。過去の卒業生からは生まれてこなかったアイデアも出ており、思考に柔軟性があった。

“Future Change the Ability”

3期生が広野小学校と連携してスタートしたプロジェクトのスケールアップを図り、子どもの体力向上と身体



を動かす楽しさに普及を行う。いわきFCの取り組んでいる「いわきアスレチックアカデミー」を数回訪問し、指導の学習を行った。

“TikTok～いきいきプロジェクト～”

高齢者の健康増進にフォーカスし、高齢者の運動機会の拡大を行う。SNSを取り入れることで、世界を視野に入れた情報発信を狙う。保健センターや高齢者施設を訪問し、情報の収集やアイデアの提案と協力を依頼した。

“町の活性化のために何ができるのか。”

スポーツイベント型の活性化方法ではなく「チー



ム」に注目した活性化の方法を思案した。Zoomを使用していわきFCの取り組みを伺い、町にチームのある利点とチームを生かしながらどのような行動を起こすことが重要となるのかを教示いただいた。

“カメラでパシヤリ～World fly～”

「写真」という媒体を活用して多くの人たちにスポーツや運動の楽しさを伝え、スポーツや運動への意欲を引き出す。SNSも取り入れて写真を通じたコミュニティーを作り出す。各スポーツの「競技」人口の減少という課題にも働きかける。プロカメラマンに話を伺い、協力者や参加者を模索していく。

“二ツ沼公園プロジェクト！！”

地域活性化のために「公園」に注目し、愛着が生まれる街づくりを目指す。二ツ沼公園の知名度を上げて利用者の増加を図る活動を行いながら、「愛着のある、みんなが集まる場」に変えていくことを考えていく。二ツ沼公園への訪問を繰り返し、担当者との打ち合わせを行った。

“Listen & Move 熱中症予防”

高齢者の熱中症に注目し、オリジナルの予防と対策を思考していく。インターネットを活用したり実際に施設を訪問して若者と高齢者の熱中症に対する予防と対策の違いや基礎知識を学び、熱中症デバイスを自ら使用するなど、アクションを繰り返した。

“障がい者スポーツの振興”

パラスポーツやノーマライゼーションに関する考え方が今後大きく変化していく社会の流れを取り上げ、その普及と振興の力となっていくことを目指す。実際にパラスポーツの体験や支援学校の訪問などを行って、障がい者の知識などを学び、自分たちならではのアイデアを思考し続けた。



“子どもたちと公園をキレイにして手軽に使えるようにしよう”

子どもの運動能力の低下に注目し、「遊べる場所の創出」や「運動の楽しさ」「自分で遊べる場所を復活させることによる充実感」をキーワードとして課題の解決を図っていく。地域の公園の実情などを管理者



などへ調査し、実際に様々な地域の公園を訪れてアイデアを模索した。

“スポーツの力で世界と繋がる”

世界の課題を調査していく中で、いかに世界のことを知らないか、繋がりが薄いかを感じ、ソーシャルメディアなども取り入れながら「世界と世界」を繋げる新しいパイプになることを考えていく。大学へ訪問して留学生へ調査を行ったり、世界の実情や価値観の違いなどをさらに深めるためのアクションを行い続けた。

“女性必見貧血防止対策”

女性の貧血問題に注目し、女性アスリート自身だけでなく、その周囲に関わる人々へも発信することで組織的な課題解決へ導いていこうと思考した。ドーピング問題も含めて考え、栄養教諭へ調査して食事でのアプローチを試みるなど多角的に課題へ向き合った。

(3) 成果

スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、男子サッカー部、女子サッカー部、野球部、バドミントン部に所属しており、トップアスリート系列として日頃からスポーツや運動に親しんでいる。しかし、スポーツの4観点（する、見る、支える、知る）で見ると常に「する」立場にいる。

スポーツの祭典であるオリンピックが東京で開催されることが決定し、数年前から日本全体のスポーツに対する考え方や捉え方が変わってきている。選手を支える側（チームスタッフ、ボランティアなど）にフォーカスが当たることも多く、スポーツをビジネスの角度から捉えること（観光産業、スポーツメーカーなど）も多くなってきた。パラリンピックへの視点も増えた。探究活動を進めていく中で、社会の変化を知りながら「スポーツ」というものの奥深さや多面的な側面などを知ることができる機会となった。また、今年度は新型コロナウイルス感染症によってスポーツの行い方（無観客、入場制限など）や関わり方（感染予防の為の運営方法など）が変わり、「スポーツ」というものがいかに社会へ与える影響が大きく、人々の生活の一部になっているものなのかを感じる機会ともなった。

約1年間の活動を通じて「震災」「原発事故」「世界」「日本」「地元」など様々なキーワードに触れ、段階的に深めていくことができた。多くの生徒は外部への訪問や連携も進めることができた。実際にアクションを起こすことができたグループもあり、新型コロナウイルス感染症の影響で活動時間が減少した中でも成果を出すことができていた。

スポーツゼミのメンバーはスポーツを通じて集まった仲間たちである。共通の志を持っていることが大きな強みであると思う。そして何より「出身地が全国に跨っている」ことも強みである。それぞれの地に関することを共有することができ、自分の地で起きていることと同じなのか、それとも異なるのかの比較や同調ができる。関われば関わるほど知識は自然と増え、引き出しが多くなると感じている。また、自分自身が「地元のことをよく知らない」ということに気がつくことができたことも大きな成果である。「知らない」のではなく、「知ろうとしてこなかった」という



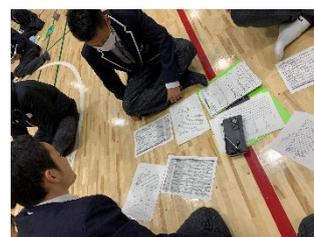
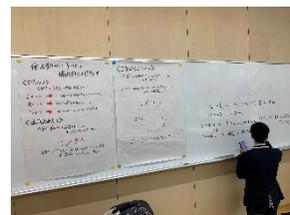
ことだと感じている。海外は世代が変わっても地元のチームを応援し続ける文化がある。逆に日本は強いチームや好みの選手がいるチームを応援する傾向が強い。「地元愛」や「愛着」という言葉が日本にはあるが、海外ではスポーツを通じて地域コミュニティーが強まっていると思う。スポーツゼミの生徒たちにそのきっかけ作りをしてもらいたい。

(4) 課題と展望

スポーツゼミに所属する生徒全員がトップアスリート系列であるため、各部活動の試合や練習日程などにより、フィールドワークや各種の体験会などにグループ全員で参加することが難しい場合がある。長期休業中も同様であり、探究活動と部活動のバランスがうまく取れない状況がある。生徒同士のコミュニケーションを大切にし、先を見据えた準備や行動を心掛けて進めていけるように変化してってもらいたい。また、「前へ進めること」を忘れないでほしい。調査やアクションを起こす場合には外部との連携や調整などを行うこともあり、電話、メール、訪問などの行動やコミュニケーションが必要となる。そこで一歩踏み出す勇気を持って欲しいと思う。「わからない」「嫌だ」「怖い」「面倒くさい」ではなく、「やってみる」を持ってもらいたい。スポーツも同じはずで、何事も「トライ アンド エラー」の繰り返しのはず。探究活動も同じように取り組むことができるはずだと信じている。

探究活動を何のために行うのか。プロアスリートになれるのはほんの一部の選手のみであり、プロアスリートも必ずどこかで引退を迎える。いわゆる「セカンドキャリア」である。高校生のうちからスポーツの4観点に触れ、様々な角度からスポーツを探究していくことは今後の人生に必ず生きてくるはずである。選手を続けている期間でも、探究で学んできたことで視野が広がったり、様々な気づきに繋がっていくと思う。

次年度は今年度を生かした大きなアクションを起こす年。単発的なアクションではなく、持続可能なアクションを起こし、周囲を驚かせる結果を求めたい。



3. 2. 3 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは、「健康」や「福祉」に興味のある生徒や高校卒業後の進路に福祉系を考えている生徒が選択している。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(1) はじめに

「健康」や「福祉」の分野は幅が広く、生徒の興味・関心も多岐にわたる。本ゼミでは個人での活動が多く、それぞれ探究活動を進めている。

(2) 実施内容

①今年度の流れ

・福祉についてのインプット学習（6月～）

本ゼミは、スペシャリスト系列福祉以外の生徒も多く所属している。そのため、「福祉」や「健康」について知識の量に差が生じていた。そこで、福祉科教員によるミニ講義や3年次健康と福祉ゼミ生によるプレゼンテーション発表を取り入れ「福祉」や「健康」についての知識を増やし、理解を深める活動を行った。



福祉科教員によるミニ講義



3年次生による発表

・仮テーマ設定（6月）

これまでの全体活動を踏まえ、自らの興味や進路と地域課題をつなげるような仮テーマを考え、ゼミ内で共有した。

・ヒューマンライブラリ（7月）

広野町社会福祉協議会の古内伸一氏を招き、「福祉の現状と課題」について講義をしていただいた。社会福祉とは何かや福島県浜通りの福祉の現状を知る機会となった。



ヒューマンライブラリの様子

・ゼミ内発表会（8月）

夏季休業中は新聞やインターネットを活用した調査アクションを行い、その内容をゼミ内で発表した。教員やカタリバスタッフにアドバイスをもらい、次の活動に生かす機会とした。

・プレ発表会（10月）

ポスター形式で仮テーマの発表を行った。これまで探究に協力してくださっている地域の方々やカタリバスタッフ、本校3年次生、本校教員より今後の活動に向けてのアドバイスをいただく機会となった。



ポスターによる発表

・オンライン講義（2月）

「高齢者や幼児」の「栄養」、「運動」、「QOL向上」に対する知識を増やすことを目的として、東京家政学院大学の江川賢一様からオンラインで講義をしていただいた。専門的な知識を得る良い機会となった。



地域協働スペースでのオンライン講義の様子

②活動内容

・広野町探検隊

～with children～

子ども達の肥満率の増加に着目し、日常的に体を動か

せる環境づくりについて考え活動している。学校評議委員の鈴木さんから広野町にある名所の歴史についてお話をいただき、広野町児童館にアンケートの協力を依頼し実行した。今後は広野町の名所を巡りながらクイズにチャレンジするウォーキングコースを検討中である。

・子どもロコモをなくす

ロコモティブシンドロームの増加に着目し、小さい頃からの運動習慣の確立をめざし活動している。広野町公民館にご協力いただき、広野小学校で放課後に行われている「放課後クラブ」に参加し、自分の考えた運動を小学生と共にいき、小学生の運動習慣の増加に取り組んでいる。

・音楽療法で認知症対策

音楽療法を実施している東京の団体のオンライン報告会に参加し、地元で高校生ができる活動について考えている。

・障害者にかかわる

将来障害者に関わる職業につくことを希望しているので、障害者のニーズを知り、どのような活動をすれば交流できるか考えている。

・高齢者に生きがいをもってほしい

高齢者が生きがいを感じるのはどのような場面かを考え、料理などを通して地元の食材を使うなどの工夫をしようと計画している。

・Make your life in a shelter better

ーこれからの災害に備えてー

学校で避難所の疑似体験を通して課題を発見し、その解決法を模索している。

・ハンドケアで高齢者と交流

ー私たち高齢者ができることー

カフェの猿渡さんからハンドマッサージに関する指導をしていただいた。今後は指導されたことを身近な人を対象に実践し、高齢者施設の訪問を予定している。

・健康に Kizukou☺

～Beautiful Life～

高齢者施設を訪問し、回想法で施設利用者とコミュニケーションをとり、そこから本来の目的の「美容」についてのアプローチを考えている。

・～心に癒しを～

Aroma & health

自分で香り付きのバスボムを作り、それを使用しながらのマッサージの実践を身近な人で行った。今後はその実践で出た課題を解決し、高齢者施設に訪問も考えているところである。

・高齢者の健康のために

高齢者の孤独死が増加傾向であることを踏まえ、一人暮らしの高齢者の生活を安全なものにしていくことをテーマとして活動している。象印マホービン株式会社が提供している「みまもりホットライン」に着目し、高齢者孤独死が増加していることへの改善に繋げることができないか検討中である。

・認知症 もっと楽しく 毎日を〈ゲーム編〉

認知症高齢者の生活をより充実したものにしていくことを目的として活動している。高野病院を訪問し、自作のカードゲームについてのアドバイスをいただいた。今後は、入所者の方々の実態に適したカードゲームへ改良し、実践を行う予定である。

・高齢者と施設

～充実した生活をおくれるために～

将来、自宅介護をしなければならない人が増えることが想定されるなか、「いざその時」になって困らないように介護についての知識を広めることを目的として活動している。今後は、介護についてのワークショップを行い、そのなかで希望者を募って高齢者施設を訪問する予定である。

・食事で健康づくり

自らの進路を踏まえ、「食」を通して高齢者のQOLを向上させることを目的として活動している。今後は、文献調査や高齢者施設訪問、献立作成することを予定している。

・ファッションと LGBT

自らの SNS の発信力を生かしてジェンダーフリーなファッションを発信していくを考えている。

(3) 成果

「健康」と「福祉」に関する知識を増やしながら探究活動を行った。福祉の視点から高校生として地域に何ができるのかを真剣に考えながら、それぞれのテーマを設定し、活動を始めることができた。

(4) 課題と展望

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、探究活動が思うように進まないことが大きな課題としてあげられる。オンラインの活用や感染対策を徹底したフィールドワークを行っていく必要がある。また、テーマの決定に時間のかかる生徒が多かった。そのため、論文提出までの探究活動の見通しを再度確認する必要がある。

3. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月28日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図ること。生徒が設定しているテーマを明確にし、調査のためのアクションの経過を報告すること。地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。探究のまとめの段階に入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とすること。地域のアドバイザーとして下の方々にお願いいただいた。

氏名	所属	関連領域
中津 弘文	広野振興公社 代表	アグリ、スポーツ
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	全般
猪狩 僚	igoku 編集長 いわき市役所	福祉
山根 麻衣子	フリーライター	原子力、メディア
吉川 彰浩	一般社団法人AFW 代表理事	原子力、メディア
鈴木 正範	本校評議員、支援する会会長	再エネ
岩清水 銀四朗	いわきFC いわきスポーツクラブCOO	スポーツ

(1) 発表準備

課題設定やプロジェクト内容について、印象や思い込みではなく、データや根拠に基づいて設定されているか生徒に気をつけさせた。また、それを受けて、どのような調査/資源(調査源、外部協力者)があれば、探究活動をより深化させることができるか考察させた。今回は生徒の発表回数を増やし、より多くのアドバイスを受けられるようにした。

発表の項目として以下の6つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ④自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑤今度の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑥現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ10件、メディアコミュニケーションゼミ19件、再生可能エネルギーゼミ5件、スポーツと健康ゼミ10件、健康と福祉ゼミ11件。合計55件となった。

発表者は3グループ(Aグループ、Bグループ、Cグループ)に分け、同じ発表を2回ずつ行った。1回の発表につき15分の時間を取った(発表5分、ディスカッション8分 移動2分)。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。また早稲田大学の永井祐二先生に発表資料を見てもらい提供し、プロジェクトに関係する外部協力者を紹介いただけた。

3. 2. 5 コラボ・スクール 双葉みらいラボ

コラボ・スクール双葉みらいラボは、生徒たちが放課後に集うフリースペースである。学校と地域の「潮目」の場所として、大学生や社会人、地域の大人たちとのナナメの関係に溢れた、学校や家庭とも違った生徒にとっての学びの場となっている。そこは、生徒たちの安心・安全な「居場所」であり、様々なことを挑戦できる「ステージ」でもある。

2019年4月新校舎への移転と共にプレハブ校舎から学校内へ移転して2年目を迎え、様々な法人・個人のご寄付に支えられながら、認定NPO法人カタリバのスタッフが常駐、運営。学校と協働する形で、地域協働スペース、協働学習ルームを使用し、毎日平日の放課後から20時まで運営が行われている。

(1) はじめに

コラボ・スクール双葉みらいラボは、ふたば未来学園内の地域協働スペース内に設置。施設内は大きく2つのエリアに分かれている。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースである。

1日に50名程度、年間で延べ1万人以上の生徒が来館しており、スタッフや大学生、地域の方々と交流したり、勉強したりしている。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人なども含め、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。



～地域協働スペースの様子～

(2) 取り組み内容

○困難さへの対応

原発事故での避難経験や居場所不足から起こる心のケアや学習の遅れ、また思春期世代特有の複雑な悩み相談に、居場所支援や学習支援を通して対応している。

居場所支援では、カタリバの学生インターンやスタッフがユースワーカーとして常駐し、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレ

イス」を日々の関わりからつくっており、生徒が先生や親、友だちには相談できないような悩みを打ち明けられる場となっている。

学習支援では、日常において大学生インターンやボランティアが学習指導を行う自習室運営や、ICTを活用したオンライン学習支援を行っている。また定期考査前には大学生ボランティアによる学習支援や、考査後の長期休暇中には成績不振者支援（みらいゼミ）も開催している。



～コミュニケーションを通じた居場所・学習支援～

○創造的な学びの機会提供

興味関心や学びのテーマを発見するための場づくりと、未来創造探究などをきっかけに地域でのプロジェクト活動を始めた生徒への伴走支援を行っている。

興味関心を喚起するためにバーチャル留学体験や学問探究、異文化交流などをテーマとしたイベント等を開催し、年間約60回のイベントを実施している。

また生徒主催によるイベント開催も行っており、年間約10回開催されている。

プロジェクトの伴走支援では、実践するための計画や振り返りの支援、地域や専門人材・学生とのコーディネート、スキルアップ講座の実施などを行っている。



～生徒の様々な学びの機会の提供～

○地域との連携・協働

双葉みらいラボを活用し、未来創造探究において生徒主体で地域の方と打ち合わせやイベントを一緒に実施する姿が見られた。

地域協働スペースには、双葉郡8町村への理解を深めるために各地域の広報誌やイベント情報チラシがカウンターに並べられている。また、地域で活躍する方々へのインタビューや地域の特徴などを掲示した「双葉郡8町村コーナー」が設置されている。

オンラインを活用した地域連携も行われており、「探究・マイプロジェクトオンライン相談会」では、生徒の発表に対して地域の方々がアドバイスをを行い、その後の活動サポートに繋がっている。



～双葉郡8町村コーナーと地域の方々との交流の様子～

○オンライン双葉みらいラボの開設

新型コロナウイルス感染症拡大による休校期間中、休校期間でも学習の遅れが生じさせない、またオンラインでの居場所環境をつくることにより心的ストレスを軽減することを目的とし、ZOOM等を活用したオンライン双葉みらいラボを開設した。

簡単な交流や休校中の過ごし方などについて対話する「受付ルーム」、学習メンター（カタリバスタッフ）を配置し学習に関する質問に答える「学習ルーム」、特定の生徒のみを対象とし、テーマ別講座や探究相談、自立学習の伴走を行う「学習サークル」などを実施した。



～オンライン双葉みらいラボの様子～

○福島大学と連携した考查学習支援のコーディネート

2015年度よりふたば未来学園高校と福島大学人間発達文化学類が連携して実施している年4回の定期考查学習支援のコーディネートを行い、年間延べ約2,400名の生徒が学習会に参加している。

学生ボランティアには、教職課程を履修する大学生を中心に年間延べ約75名が参加し、実際に生徒に教える経験を積むことで、大学での座学と実践経験を繋ぐ機会となっている。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、ZOOMを活用したオンライン学習支援にも取り組み、例年と変わらず学習支援の機会を届けることができた。



～福島大学生ボランティアによるオンライン学習支援～

○卒業生の活躍

ふたば未来学園卒業生たちがボランティアとして後輩たちの支援を行っており、延べ33名の卒業生が考查学習支援や未来創造探究の相談、進路相談など、後輩たちの学びを支える担い手として関わった。ZOOMなどのオンラインツールを活用することにより、居住地を問わず全国各地の卒業生に参画してもらえ体制を整えることができた。

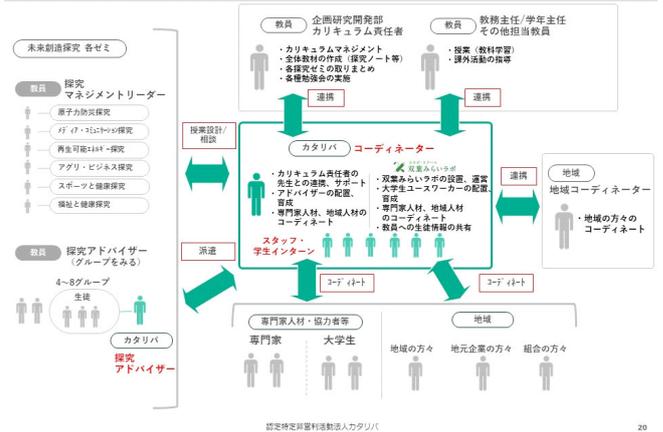


～卒業生ボランティアの様子～

○未来創造探究のサポート

2・3学年で取り組まれる「未来創造探究」のサポートを行っており、双葉みらいラボのスタッフが「未来創造探究」の授業にアドバイザーとして教員とともにゼミ運営を行っている。具体的には、地域の大人・企業の講演やフィールドワークのコーディネート、生徒同士の議論のファシリテート等を通して、生徒の学びを広げるサポートを行っている。

■コーディネーターの位置づけと役割（「未来創造探究」との協働）



また、放課後の時間もさらに探究学習に取り組みたいという生徒に対して、個別で面談を行ったり、資料作成のフォローをしたりしている。

活動に対するフィードバックを受ける場として、「社会貢献活動コンテスト」や「全国高校生マイプロジェクトアワード」などの外部機会に生徒を送り出す支援もしている。



～探究・マイプロジェクト活動の様子～

(3) 今後の展望

双葉みらいラボが学校内に移転して2年目となり、2020年4月1日から2021年1月31日までに8,657名の生徒が来館している。今後は地域の方々が双葉みらいラボを活用しながら生徒との接点を持つことにより、生徒主体の地域協働の企画・実践の後押しや、学びと地域復興の相乗効果に貢献できる場所を目指したい。

3.3 未来創造探究の概要

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は自らを見つめ、探究活動と進路実現に生かせるコンピテンシーを高める時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。

COVID-19感染拡大により、年度初めの休校措置後に大きな計画変更を余儀なくされたが、伸長させたい力とそのため活動の余地が最大限担保されるよう配慮して指導に当たった。

(1) 3年次の探究活動概要

4月〔臨時休校〕中間発表(中止)用のスライド作成
探究活動アブストラクト(要旨)作成

(5月 ルーブリック評価①)

5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動

9月26日 未来創造探究生徒研究発表会

(10月 ルーブリック評価②)

10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① アブストラクト 作成

指導の中で意識させたかった点は以下の通り。

- ・震災と自分の関係やこの学校における学びに向けた思い(セルフエッセイ)を言語化し、あるべき・こうありたいという未来の自分や地域について言語化する。
- ・自分や地域のあるべき・こうありたい未来と現状の間にあるギャップ(問題)を見つけ、問題の原因を分析し、課題を明らかにする。
- ・課題に対して先行研究やデータをもとに仮説を立て、解決策(プロジェクト)を考案する。
- ・上記で欠落した部分に気づき、今後の活動の中で補完するきっかけにする。

前年度末、「言語化をする以前の、生徒の情報処理の方法の違いへの対応」「学力差への対応」が課題として挙がっていた。そのため、構造的に理解するためのアブストラクトシートは補足資料とし、記述を終えるまでの選択肢に幅を持たせた。

臨時休校中の課題として行ったため、一人一人への十分なフィードバックをタイムリーに行うことはかなわなかった。また、小学生や高齢者とのかわりをテーマに行った活動の多くについては、先行きの見えない中で、大幅なプロジェクト変更を余儀なくされ、アブストラクトまで至らない生徒も出てしまった。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	生徒人数	教員人数
原子力防災	17	3
メディア・コミュニケーション	19	3
再生可能エネルギー	11	4

アグリ・ビジネス	8	3
スポーツと健康	38	4
健康と福祉	25	4

③ 未来創造探究発表会

探究活動の集大成の発表の場として、オンラインも活用して発表会を行った。審査員を複数招き、それ以外の方々にはオンラインで参加いただいた。3密回避のため、ゼミの垣根を越えて分科会形式のみ行い、各会場から優れた発表を表彰した。

④ 論文作成

発表会以降、探究内容を論文の形でまとめる活動を行った。分量はA4用紙10枚以上とした。10枚以上という枚数に最初は驚く生徒が多く、まだ進めたいプロジェクトを残している生徒はそれを進めながら文章化を進めた。今年度は大学入試の提出資料としてここで作成した論文の要約を送付し、プレゼンテーションなどで合格を手にした生徒もいる。

⑤ 評価・面談

今年度より、ルーブリック調査はGoogle Formで行うことにした。また、COVID-19の影響により、全ゼミで同じ時間帯に面談を設けることができなかった。プロジェクトの伴走をしながら、生徒と対話する時間を設けるのが精いっぱいであった。概して自らの評価を低く見積もる生徒が多く、3年次の伸びの停滞が懸念されたが、平均して順調に伸びが見られた。

(3) 課題と展望

言語化にひどく苦勞する生徒が多かった前年度の反省から、生徒に対する指導方法に改善を加えたが、臨時休校により、探究活動の時間は圧迫された。

探究活動を指導する上では、教員がどのような姿勢で伴走するのか、意図を持って変えていく必要がある。

COVID-19の状況を注視しながらも、最大限の学びの機会を生徒に与えようと実践を重ねてきたことで、オンライン会議システムを使用した交流や、Google Formを用いたアンケート調査、動画などの活用について、生徒教員間で意識の変革が見られるようになった。

3.3.1 原子力防災探究ゼミ

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築など、双葉郡における様々な課題を自分事として解決を目指す。一連の活動の中で、本校ループリックで謳う生徒学力概念の伸長を目指す。震災以降も厄災はたびたび地域住民を苦しめてきた。今般の COVID-19 も世界の課題を顕現化させている。新たな社会システムの創造のためには、地域に学ぶ必要がある。

今年度の本ゼミの生徒は、前年度の台風 19 号の被害や COVID-19 など多くの障壁に立ちただけからでも、多様な価値観を持った他者との協働によって教訓を生かすことのできる社会、双葉郡から日本や世界の変革を成し遂げようと活動を継続した。

(1) はじめに

異なる価値観を持つ者との対話の中で、一番身近にあるチャンスは教員やカタリバスタッフ、同級生や家族と話す時間である。そういった関係性を築くための余白すら、COVID-19 は奪ってしまった。

しかし、生徒たちはアクションの起こらない成り行き未来を歩むのではなく、自分たちの意志ある未来の実現をあきらめず、地域住民や時には海外の方々との対話を模索し、協働が生まれていった。

教員は、前年度を主に[インストラクター→ファシリテーター]、今年度を[ファシリテーター→メンター]へと接し方を変えていった。また、非常事態下にある今年度だからこそ、作り手の一員として創造とコミュニケーションを誘発する[ジェネレーター]としての教員の在り方も模索した。

(2) 生徒実践

以下、生徒の探究活動について複数例を挙げる。

1. 双葉郡の記憶を自分の言葉で伝える

① 課題

目が向けられなくなってしまった国内外の課題については、風化が始まってしまうが、双葉郡の課題についても同様のことがいえる。人々が目を向けていない部分についても、震災の伝承をして行くべきだと考えた。震災の経験を無駄にすることなく伝えなくてはならない。

② 実施内容

・ペットの防災

これまで目を向けてこられなかった、動物のための防災を考えた。

・多世代との交流とバスツアーの計画

廃炉国際フォーラムに参加し、多様な立場の人たちと議論をした。双葉郡から離れた地域に済んでいる同年代の高校生のなかにも風化を感じ取り、アクションの必要性を認識した。

富岡町で語り部活動を行う NPO 法人 富岡町 3.11 を語る会の事務所を訪れ、所属会員の思いを聞き、バスツアーを企画した。その後、COVID-19 の国内感染者が確認され、ツアーの実施はかなわなかった。

・子どもの絵本作成と読み聞かせ

COVID-19 の感染拡大と、震災の教訓を重ねて考えたときに、問題の構造には似通ったものがあることに気づいた。同時に自分たち以降の世代からは、震災を覚えていない子どもが増えていくことに気づいた。(今年度の高校 3 年生は震災発生時小学 2 年生)

当時小学 2 年生であった自分たちも、震災とその後の生活を覚えている。小学生のその時期からでも、震災を教訓として学ぶことができるよう、絵本を作成し、読み聞かせを行うことにした。

高校卒業後の 3 月に母校を訪れ、読み聞かせのボランティアをさせていただけるようになった。



③ 生徒総括

地域の中で、答えのない問題に向き合っている事は難しく感じたが、活動を通して地域や人が良い方に変わっていく事が嬉しかった。

地域で活動を続けるうちに、この問題は双葉郡という限定された地域の問題ではないと感じる様になった。双葉郡で起きている問題は他地域でも起こり、今後起こりうる問題である。

卒業後は「まちの保健室」を作りたい。コンセプトは、地域を守り育てることだ。年代を問わずに集まれる場所・地域の問題に向き合える場所・悩みを共有できる場所・挑戦を応援できる場所として「町の保健室」を運営したい。

保健室は体調が悪い人や悩みを持った人が気軽に養護教諭に話せる場所である。学校の保健室のような役割を持つ場所を地域につくる事によって、地域内での人と人の繋がりが生まれる。

町の保健室は、相談する役割以外にも問題を解決す

る手助けを行える場所にしたい。福祉・行政・教育・NPOが連携を取れば問題を解決に導きやすくなる。

2. 献血で変えられる「地域」×「高校」×「献血」

① 課題

少子高齢化が進むと将来、血液の安定供給ができなくなってしまう。血液は長期保存することができず、医療機関に安定的に血液を供給するためには、輸血用の新鮮な血液を十分に確保する必要がある。今後の安定供給のためにも、特に若い世代の献血への理解と協力が不可欠である。特に若い世代（10代から30代）の献血者を増やしていくことが課題である。

② 実施内容

・献血調査と広報活動

校内でのアンケート調査や、ネット上に蓄積されたデータから、献血を行ったことのない同年代へ訴えかけるための広報活動を模索し、ポスター等に工夫を凝らした。

・複数回の献血車両招致と地域イベントとの融合

校内で複数回献血車を招き、1度目は地域のイベントに合わせ、2度目は学園祭に合わせて献血を呼び掛けた。広野町からの補助金を活用し、本校のカフェで景品を購入し、地域密着した活動を心掛けた。

③ 生徒総括

提言

- ・全国の高校で献血バスを呼ぶ機会を作る。
- ・生徒会やJRC委員会などで運営する。
- ・全国の中高生にセミナーを開き、知る機会を作る。

多くの人が訪れるイベントに合わせて行うのは、比較的人も集まり、集客しやすい。実際に学園祭での献血例は多い。生徒会やJRC委員会などの団体が学校と協力し、行うことが大切である。

学校関係者等に対しては、日本赤十字社が実施している献血セミナー等を積極的に受け入れてもらえるよう、各都道府県あての依頼が平成30年にあった。文部科学省、都道府県、教育委員会及び献血推進協議会等の関係機関との連携協力が献血セミナーを推進する上で極めて重要である。

たくさんの人に献血していただいたことに感謝している。ボランティア活動も含め、改めて広報の難しさに気づかされた。1回目の学校での献血は、予想よりもたくさんの人に協力していただいた。学園祭で行った2回目は、COVID-19の影響により目標の受け付け人数には届かないものの、それに近い人数を集められた。

実施後のアンケートによれば、初めて献血してくれた人全員が「またやりたい」という結果になった。またその回答の理由は、『社会貢献』、『力になりたい』など、助け合いの精神からだった。助け合いの精神は、大人になってからも忘れずに持ち続けたいと思う。

(3) 成果と課題

双葉郡のコミュニティを再生することから原子力防



災を成し遂げようと考えた際、COVID-19の拡大により様々な制約が生じた。生徒には、原子力災害とCOVID-19感染拡大の間に相似点を見出し、教訓を生かしてそれを乗り越えようという意志が見られた。自分たちがこれまで十分に活用しきれていなかった技術を駆使し、学びをあきらめない姿勢と、進学先でも探究し続けようという意志は、双葉郡にゆかりのある東日本大震災を記憶している最後の世代として頼もしさを感じた。

震災から10年たつが、地域にもゼミでの活動にも課題は山積している。以下、探究活動の課題を挙げる。

① ゼミ担当教員に変更があっても、探究活動が滞ることのないように、「探究活動の指導法」を浸透させることが必要である。臨時休校とゼミ担当教員の変更によって早々に方針転換を図った生徒がいた。

② 先行研究やデータにあたることを積極的に奨励する必要がある。生徒論文を見ても、調査データが後付けになっていたり、参考にした書籍がなかったりするものが散見された。前例のないプロジェクト創発に固執し、先行する活動や研究を調べない例も見られた。

③ 受け手と発信側で定義のぶれる言葉や概念について、調査や深掘のための時間を設けることが必要である。抽象的な概念や、単なる印象からくる探究動機に始まり、自分の活動の目指すゴールが協働相手に伝わらないものが見られた。

④ あるべき・こうありたいという未来を実現するために、高校生として在学中に実践しきることのできる適切なプロジェクトを促す指導方法を磨いていかなければならない。自らが強烈に興味関心を持った内容が先行し、地域のニーズとずれのある活動を授業内に進めてしまう例がある。また、単年のみで持続しないプロジェクトには、復興のさなかにある地域住民が信頼を寄せてくれない。

⑤ グローバリゼーションとも相似し、震災後の双葉郡に見られる分断や対立に、積極的に正対するプロジェクトについて、ジェネレーター・メンターとして教員も積極的に参画していかなければならない。

3.2.3 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下MCゼミ）は双葉郡の現状を踏まえ、広範囲に向けた効果的な情報の発信方法、地域の現状を的確に伝えるコンテンツ、正しい情報を歪ませずに伝達するための手法について探究することを目的としている。総勢19名（アカデミック系列9名、スペシャリスト系列9名、トップアスリート系列1名）で構成されている。大人ではなく高校生である自分たちだからこそできることは何か、ということを考えながらそれぞれの探究テーマに基づいてアクションし、現在では12プロジェクトに取り組んでいる。

(1) はじめに

春休み明けの中間発表会に向けて課題解決のためのアクションを加速させようとした時期に、コロナ禍による休校期間が約3か月続いた。そのため、探究活動の内容の変更を余儀なくされた。5月末に学校が再開されると、休校期間に活動を見直して一気にアクションに出る生徒と「探究活動をできない理由」を探して活動が停滞した生徒で対応が分かれた。

(2) 実施内容

①「記憶を繋ぐ」

防災意識を高めたいという思いから当時の写真を集め、動画作品を作ろうとした。昨年まで別々に活動していたメンバーが集まり、演劇による表現や子ども向けの紙芝居など様々な情報伝達媒体の特性を探究した。最終的には動画を用いて震災の被害や自分たちの当時の体験を交え、高校生の視点から見たオリジナリティあふれる動画に挑んだ。

②「浜通りの魚をなめんなよ」

福島県の魚の美味しさと安全性を伝えることを目的とし、漁業の現状を把握し、漁師や魚小売店の方と協働して商品開発を行った。何度も試作とリサーチを繰り返し、最終的に福島県産のヒラメと地元相馬市の味噌をミルフィーユ状に成型したアスリート向けの『FISH PROTEIN』という商品を完成させた。探究発表会が終了し、卒業論文製作中も引き続き探究活動を続け、2月には福島県観光物産館やふたば未来学園内、地元である相馬市の「浜の駅」で販売を行った。また、3月では東京で販売会を行う予定である。



←校内販売の様子

③「廃炉を楽しくしっかりと」

福島第一原子力発電所は、廃炉にむけて着実に歩みを進めている。しかし、地元の人々でさえも、“廃炉”に対する偏見を抱えている人が多いことから、「廃炉に対する

偏見の払拭」を目標に活動を行ってきた。廃炉国際フォーラムや、未来会議事務局長菅波香織さん主宰のオンラインフォーラム『処理水を考える対話会』への参加を通じて、自身らの知識を高め、経済産業省資源エネルギー庁へパブリックコメントの提出も行った。探究活動の集



大成として、「廃炉を楽しくしっかりと」をテーマに、『Change Your Mind～いっしょに考えよう、地域のこと～』という座談会を開催した。
←座談会の様子

④「風評被害を動画を通して払拭する」

自分自身が幼少期に育った双葉郡に根付いてしまった風評を払拭したいという思いから、今日の中心的な情報媒体である「動画」を用いた活動をした。動画編集ソフトの使い方やドローンの操縦方法を学び、動画作成の技術を身に着けた。双葉郡の現状把握のためのインタビューを撮影し、データを取りながら動画の作成も行った。

⑤「未来プロジェクト」

震災後に生まれてきた子ども達の大切なもの、家族、自分の身、を予想されない自然災害から守ってゆくために自分達にできることをアートを用いてイベントをおこなった。ならば CANvas の窓ガラスに小学生と一緒に絵を描くイベントをおこなった。また、母校で中村二小の恩師佐藤みゆき先生やアーティストの蟹江杏さんと協働して、防災教育と絵のワークショップを行った。彼女自身が小学校3年生の時（10年前）に受けた絵のワークショップを受けた体験を大切にしており、彼女が受け取ったバトンを自分自身で中村二小の生徒に受け渡すことがで



きた事は意義深いことである。また、この活動を通して、アートが持つ力を再定義して自分の進路を明確にすることができた。

⑥「双葉郡震災クイズ」

東日本大震災の記憶を伝承し、防災意識の向上や福島県に関する偏見の払拭を目標として、「Kahoot」というアプリを用いて双葉郡震災クイズを作成した。震災の風化防止のため、興味がない人や震災を体験していない世代に正しい知識を楽しく伝えることができるように活動した。ネット環境があれば誰でも気軽に参加することのできる利点を生かし、文化祭でクイズ大会を実施した。

⑦「地域の人との協働を目指して」

地域の人や生徒を含めた様々な人が関わるために、学校をプラットフォーム化し、企業などと連携して活動を進めた。昨年度、2019年第4回全国SBP(ソーシャルビジネスプロジェクト)交流フェアで文部科学大臣賞を受賞し、日清製粉などの企業と協働して、校内カフェ「ふう」でイベントを行う準備を進めた。コロナ禍で外部企業との連携が難しくなったため、地元の野菜を活用したピザづくりを行い、文化祭で振る舞った。

⑧「交流会を通じた帰還の実現」

警戒区域の指定が解除されたにも関わらず、依然として人が戻らず活気がない生まれ故郷。本校生徒の家庭すべてに対して行ったアンケート調査の結果わかったことは、避難した住民は必ずしも「戻りたくない」わけではなく、様々な課題があるゆえに「戻れない」人もいるということ。これらを結び付けて住民の帰還を実現するために、すでに帰還した住民と帰還を望んでいる住民との交流会を企画した。

⑨ 偏見払拭!!「障がいと歩む福島の未来」

避難先で受けた原発事故に起因するいじめ、障がいを持つ兄への奇異視に起因したからかい、これらにより感じたつらい思いを誰にもしてほしくないという思いから、風評被害や奇異観などの「偏見」を払拭すべく活動した。障がい者施設や農家などを積極的に訪問し、スタッフの話聞くだけでなく、自分自身も様々な経験を積んだ。その経験から「偏見にある共通構造」と「場の共有による解決」という仮説を得た。これらを実証すべく、障がい者と直接交流したグループと、障がい者との望ましいかかわりについて講義したグループとの、心情や思考の変化の違いを観察し、その確



かさを導いた。この活動により進路実現にもつなげ、今後の彼女の人生を賭しての課題を設定することができた。

⑩「広野海岸「はだし」プロジェクト」

故郷である広野町の海岸をはだして歩けるくらい綺麗な海岸、人が気軽に訪れる事ができる海岸を目指している。このプロジェクトは世界的な問題の「海洋ゴミ問題」について同じ問題を抱える広野海岸で活動してきた。昨年度から海岸のごみ拾い活動を継続し、海岸に流れ着いた流木の活用法を考えたり、地元企業と連携して一緒に海岸の清掃活動を行うプロジェクトを継続した。

⑪「偏見・差別の払拭」

震災後、福島県民に対する「差別」「偏見」「いじめ」などの話題をよく耳にしたり、ニュースで見かけたりすることが増えた。また、「福島の偏見ワースト10」を目にしたことがきっかけで福島に対する偏見・差別を払拭したいという思いから、偏見・差別が起こる原因を無くすために、多くの人とディスカッションを行った。固定観念の払拭や自分から知ろうという気持ちの向上を目指し、本校生を対象に差別・偏見に関するアンケートを行い、PDCFA サイクルに基づいてディスカッションを行った。

⑫「震災を伝えるには」

震災を経験していない人へ震災を経験した人が故郷に帰れない無念さを持っていることを伝えるために、様々な活動(音楽や、すごろく等)で震災について伝えていく活動をした。最初は、作詞や作曲活動を通じて音楽の持つ可能性について探究していたが、伝えたいメッセージがうまく伝わらなかった。そのため、防災の重要性を老若男女を問わず、面白く学習するための防災すごろくを作成した。

(3) 2年間の探究学習を振り返って

～生徒一人ひとりの活動を見取る～

MCゼミでは昨年度から週一度の担当者打ち合わせでマトリクスを用いた生徒の「見取り」を行った。テーマの深まりや先週の活動を担当者で情報共有し、次週の活動方針や担当者の関わり方などを考えた。これにより、個別最適化の指導につながり、9月の探究成果発表会では12プロジェクト中4プロジェクトで探究賞を受賞することができた。プロジェクトの進捗も重要であるが、「生徒の学び」を複数の担当者の視点から見取ることで、生徒の良さを引き出していく指導法は有用な指導法ではないかと考えている。

3. 3. 1 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島第一原子力発電所事故によって、発電についての安全性を世界中で考えるようになった。また、原子力発電所が稼働できないことで、東京電力の供給区域では計画停電が行われ、電力の安定供給についても課題となっている。再生可能エネルギーは、それらの課題を解決する手段として世界で注目されており、福島県は2040年頃を目処に県内のエネルギー需要の100%相当量を再生可能エネルギーで賄うことを目標に掲げ、再エネの推進を積極的に推進している。本探究ゼミでは、再エネの更なる普及に向けて教育やまちづくり、二酸化炭素の排出との関連性、そして微生物発電や小水力発電、塩水発電等の技術的な分野について探究している。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒11名が、4つの班に分かれて探究を行った。先輩の探究を引き継いだ「塩水発電班」、学校に池を作り実験を行う「微生物発電班」、同じく池や地域の水路で実験を行う「小水力発電班」、そして教育、まちづくり、二酸化炭素の排出のそれぞれの視点から再エネの普及を目指す、「文系班」である。文系班は、例年の再エネ探究班と違い、実験を行わず対話を通して探究を行っていき、これまでとは違うアプローチで再エネについて考えていく。

(2) 実施内容

①塩水発電班

広野町は海が近いことから、海水（塩水）を使って発電はできないかと考え、探究を行った。また広野町はお年寄りが多く、買い物に行く際に大変だという理由から、当初は「塩水アシスト自転車」の製作を目指していた。

本探究テーマは、一期生から三期生が挑戦し続けた。実験を進めるにあたり、先輩の論文を参考に、材料等の調整を行った。電解液に塩水を使用し、マグネシウムとカーボンシートを電極として電力を発生させている。起電力を発生させることは実験で証明できたが、それをいかに大きくするかが課題である。塩水の濃度を変えることや、塩水の保持に用いるオアシスの大きさを変更して実験を繰り返した。

また、より安定して、高い起電力を発生されるために、古川電池株式会社を訪問し、技術的な質問をさせていただいた。訪問の結果、塩分濃度とオアシスの厚さを改善することでより高い電力を取り出すことが可能だとわかった。持ち帰った知識を実証し、今までより高い起電力を発生させることができた。しかしアシスト自転車の製作までは行えず、道半ばで探究活動は終了した。

②微生物発電班

避難区域の住宅や畑で獣害が起きているという話

を聞き、それを再エネの力で防ぎたいと考えた。双葉郡は田んぼの多い地域であるため、その水、泥で微生物発電を行いたいと考えている。微生物発電の原理は、微生物から発生する電子（もしくは電子を移動させる微生物）を利用し電流を生み出すものである。発電の確認として、「MudWatt」というキットを使用した。学校で実証実験を行うために、校内敷地に池を掘った。池は、再エネ探究班の水力班生徒の祖父、草野傳市氏にお願いし、重機を使用して作製した。池を掘ったのちに水質調査を行い、微生物が生息していることを確認した。その後の水質調査で、酸素が多すぎるのがわかり、別の田んぼの水や土を入れる等行ったが、より微生物が生息する環境とはならなかった。



[顕微鏡で微生物を確認]

③小水力発電班

双葉郡の田んぼが多いことから、田んぼの水を利用して発電できないかと考えた。昨年度の3年次が、小水力発電に取り組んでいたことを知り、テーマを決定した。校内で実験を行うために、微生物班と共同で池を作製した。池の製作に協力いただいた、草野傳市氏により、小水力発電用の装置を取り付けた。その装置を使って、実験を行っていたが、高い起電力を求め、さらに水量のある地域の農業用水路を利用した。

自然電力株式会社とのオンラインミーティングや、農業法人フロンティア広野の代表、芳賀吉幸氏にとの

ディスカッションを通し、より現実的に水路に水車を設置する方法を思考した。夏休みも使用し、ぶれることなく、平行に水車を回転させる枠組みを作製し、LED ライトを点灯させる電力は取り出すことができた。



[水路に自作の発電装置を設置している様子]

④文系班

班員3名が、それぞれのテーマを設定して活動している。テーマは別だが、それぞれが情報交換と対話を通して互いの探究を深めていった。また、インプットとして3名がそれぞれの目的をもって、広野火力発電所を見学した。

○教育×再エネ

民間の、エネルギーに関する情報不足が課題だと考え若い世代に正しい知識を与えエネルギーに関心を向けることを目的としている。アクションとして、全校生へエネルギーに関する関心を調べるアンケートを実施し、その後地域協同スペースで同学年の生徒に再エネの学習会を開催した。

コロナウイルスの影響で、外部へ出ることは叶わなかったが、本校の中学3年次へ、授業のサポートを行った。授業を受けた生徒は、受ける前よりもエネルギーに関する関心が高まった。関心を高める場として授業は有効であることが実証された。



[中学生に授業を行っている様子]

○まちづくり×再エネ

一年次に参加したドイツ研修で、環境都市であるフライブルクを視察したことがテーマ設定のきっかけ

である。

広野火力発電所の方々や、環境省の鈴木啓太氏等様々な方と対話しながらまちづくりについて考えを深めている。「福島イノベーション・コースト構想の実現に貢献する人材育成に係る成果報告会」に参加や、沖縄の生徒とのオンラインミーティング等にも参加した。まちづくりの一つの方法として、生ごみ発電の普及について興味を持ち、発電装置の輸入法等について考えた。

○環境問題解決×再エネ（きっかけ作り）

2019年10月の台風19号で被害を受けたことがきっかけで、環境問題、特に二酸化炭素の排出について問題意識を持った。再エネにより二酸化炭素の排出を抑えることを各所で呼びかけようとしている。まちづくりについて探究している生徒と同様に、成果報告会に参加し発表を行った。また、環境やエネルギーに問題意識を持っている若者同士のつながりが無いことを課題ととらえ、勉強会や発表会等、つながりを持つ機会「きっかけ作り」について探究していった。



[成果発表会に参加している様子]

(3) 課題と成果

実験を主体としている班は、思うように実験が進まず、試行錯誤を繰り返していた。成果の出なかった班もあるが、各班とも粘り強く探究していた。製作や実験を行うと確実に時間は足りなくなってくるため、放課後や長期休業中の時間をうまく使わなければ探究が進まなかった。文系班では知識の定着や、対話を通して考える時間を多くとったため、解決に向けた大きなアクションを起こせなかったことが課題である。しかし、対話を通して多様な価値観が存在していることを認識し、一つの視点からでは解決が難しい課題があることに気づくことと、その解決に向けて動き出すことができた。

3. 3. 1. アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミの研究概要は、福島県の復興につなげる今後の農業とビジネスを探究することである。選択している生徒は、スペシャリスト系列農業（3名）、商業（3名）、福祉（2名）の計8名（男子1名、女子7名）と少人数である。本ゼミでは、2年次において4つのプロジェクトが進行していたが、コロナ禍の影響で、3年次より3つに集約された。これは、アグリという言葉が“agri：農業”だけでなく、“aggregation：集約する”、“ugly：醜さ”、“agree：承諾”といった広がりを含んでいる。また、ビジネスの柱は、地元農産物の収穫・開発・販売に、マーケティングやエシカルの考えを取り入れることでグローバルな広がりをもたらした。初期に設定された概要にとらわれることなく、自らの探究に取り組んでいった生徒たちは、潜在的な自分の可能性の探究を通して、自己実現の欲求を満たしていった。

（生徒発表時のコメントより）人が戻ってくるという大きな事だけが『復興』ではなく、双葉郡を知ってもらったり、後世に伝えたり、新しいことを始めてみたりなど、大きなことじゃなく小さな事をしていくことも含めて『復興』だと考えるようになりました。地域のために何かをするという活動そのものが価値のある事であり、自分も富岡町の復興の役に立っている存在に慣れたのではないかと思います。

(1) 3年次はじめ

コロナ禍により、地域のイベント出店や食品開発といった実践が出来なくなった。このことにより、自分たちの探究活動を見つめ直すためのブラッシュアップを行ったことが、3年次の大きな収穫へとつながった。出来ないことを悩むよりも、出来ることを考えることを選んだ生徒たちは楽しそうに探究に取り組んでいた。

① agri：農業

これまでの探究で不評払拭に取り組むときは、消費者側へのアプローチがほとんどだった。今回は、震災から10年を迎えたこともあり、生産者側へのアプローチに置き換えた考えが採用された。実際に、ゼミ生は直売所での納品作業や、2期生が探究で取り組んだ“大熊の梨を双葉郡に”で協力いただいた元梨農家さんとも交流し、収穫や商品開発につなげている。

② aggregation：集約する

実践することができないまま時間だけが過ぎていく探究の時間において、自分のやりたいことをブラッシュアップするゼミ生が増えた。探究活動に必要な資金確保のために、先輩方の開発した商品の販売を始めた。その結果、これまでの先輩方と協働してきた地域の方々との交流が再開され、それを自分の探究へ集約することで、スパイラル的に探究のリサイクルが行われた。

③ ugly：醜さ

コロナ禍により、出店予定だったイベントが中止になった。資金確保のための販売も中止となり、費用負担がのしかかった。それぞれの所属する系列（農業、商業、福祉等）において、エシカルの取り組みから食品ロス削減やデポジット制などを取り入れ、グローバルな内容へと発展させることにつながった。

④ agree：承諾

探究活動が深化されると、グループの再編が始まった。それぞれの探究活動の手段が同じでも、目的が違っていることに気づき始めた。目的が異なっていることがブラッシュアップにより分かり始めると、同じテーマのグループが分裂を始めた。当然のことだが、交友関係にも影響が出た。それぞれの進路に向けた探究内容を自己承諾することで、活動の終着地点が変更された。手法での実践を目的とするゼミ生と、大学進学後も探究活動を続けるゼミ生徒では、自分のテーマに対する土台形成や自己責任の期間が異なることが証明された。

(2) 実施内容

① 「富岡さくら復興プロジェクト

～届け！さくらタピオカ～」

（2年次報告書より）「夜の森の桜」が有名な富岡町のことを、多くの同世代に知ってもらいたいと思い、若い世代に人気のタピオカと、富岡町の桜を掛け合わせて「桜タピオカ」を商品開発し、販売実践する。そして注目を浴び、多くの人達に足を運んでもらうことを目指している。商品開発後は、富岡町のカフェや本校カフェでタピオカドリンクを提供できないか計画を練ってきた。

（3年次）しかし、4月の桜まつり（富岡町）がコロナ禍で中止となった。もし、この桜まつりが実施されさくらタピオカを販売していたらどうなっていただろう。富岡町に人を戻す内容であった。もし、コロナ禍の影響もなく、計画通りに販売していたらどうなっていたらう？販売し、売れることへの喜びを知ることで、手段が目的に変わったかもしれない。

この生徒は、復興のために探究活動をしてきたのではなく、やってきたことが復興なのかも？と気づいた生徒で

ある。震災から10年を迎え、復興が重荷となってきた生徒がいるのではないかとSNSでは話題になっている。復興のための活動ではなく、活動そのものが復興となることの探究テーマである。

⑧「風評被害なんて言わせない」

(2年次報告書より)震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この現実を目に向け、高校生ができることを徹底的に考え、その中で課題を“生産者”と“消費者”の関係に分け、消費者に購買や理解を促すのではなく、“生産者”に、前向きに農業に取り組んでもらうことに着目した。実践として、私達は浜通りの農家さんから米をもらい、それを第三者に食べてもらい、応援するメッセージを書いてもらう活動を行い、農家さんの喜びに繋げることが出来た。今後は、この活動を様々な食品や農産物につなげて、多くの農家さんの心の復興を成し遂げていきたい。

(3年次)コロナ禍の影響で、食材を提供するイベントが中止になった。探究の費用を捻出するために、先輩方の商品の販売も始めた。その結果、先輩方の活動を知るきっかけとなり、2期生の「大熊の梨を双葉郡に」の継続も始まった。米だけではなく、梨、ミカン、ゆずといった震災前からの特産物の収穫や開発を通して活動の範囲が拡張された探究テーマである。

C「大熊のキウイで町を元気に」

(2年次報告書より)原発事故後、大熊町の農産物が試験的に生産されるも、その多くが廃棄されている現状を知った。本探究では、「大熊町の農産物をもっと多くの人に広めたい」という想いから、大熊町の農産物を活用した加工品の商品開発を行い、町に訪れた人に配布することで、大熊町の魅力発信を目的としている。

大熊町在住の佐藤亜紀氏の協力のもと、大熊町特産のキウイを活用した石鹸を製造することにした。余剰農産物を減らすことが、“持続可能な農業”に繋がると考えていく中で、学校給食でフードロスになってしまった牛乳を活用した「牛乳石鹸」も併せて製作できないか、現在企画中である。

(3年次)他のグループと違うところは、最初から最後まで一人で取り組んでいた点である。他のグループの活動に合わせて販売実習での資金調達や、材料を調達するために栄養教諭への依頼も行った。他のイベントに合わせて石鹸を置いてもらい検証を行った。大熊町で収穫したキウイを皆に知ってもらいたいという目的を石鹸という手段で取り組んだ探究テーマである。

(3) 活動発表・コンテスト出場 (オンラインも含む)

7月: ④ さくらタピオカ試験販売

③ キウイ石鹸手洗い場設置検証

② 原発の食堂へ食品寄贈

①② 販売店応援

8月: ④ さくらタピオカ販売

③ お米食べ比べコンテスト

①② 全国高校生SBP交流フェア

①② CUC ETHICAL DAYS 2020

④ 岡山県4校連携講座【地域創生学交流会】

①② 販売店応援活動

9月: ③ 関本さんの梨収穫

①② C未来創造探究発表会 (校内)

10月: ③ 「新しい東北」復興ビジネスコンテスト2020

③ 大熊町役場訪問 開発商品販売

①② 日曜カフェ「cha茶cha」

11月: ③ 広野町秋祭り

①② 「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」(第7回)

①② 日曜カフェ「cha茶cha」 お米食べ比べセット販売

12月: ④ YONOMORI まち灯り2020

④ マイプロジェクトアワード校内発表会

④ ふくしま高校生 社会貢献活動コンテスト本選

1月: ④ 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会

①②③ チャレンジ・アワード

3月: ④ My Project Award 2020 全国 summit

(3) 成果と課題

それぞれのプロジェクトの到達点が違うことから、雲のように形を変え、それぞれのテーマに沿って流れていた。当然ではあるが、雲が流れつく場所はない。ゼミ生も、探究活動を通して進路を大学へと変更した者もいる。多様化した問題と課題が混ざり合った探究活動では、満足できなかった生徒に、学習に対する欲が生まれてきた。コロナ禍により実践を通して学ぶことができないことから、机上で考える時間が増えた。そのことが、探究に対して貪欲な姿勢をもたらした。ただし、実践に対して今まで見えなかったものが見え始めたことで、自分の探究が求めている探究でないことに気づいてしまった。それは探究を学ぶものに対しての試練となった。2年前は、後輩へのバトン渡しが課題だった。今年度は、地域との協働により過去の探究が掘り起こされ定着された内容と発展した。渡すという発想ではなく、育てていくことが大切であると気づかされた2年であった。

最後に、本ゼミの探究活動のために、ともに走り続けた方々に敬意と感謝の意を表します。そして、育てたテーマがより大きな実をつけることを願います。

3. 3. 1 スポーツと健康ゼミ

東日本大震災から 10 年、津波被害や福島第一原子力発電所の事故により福島県民の日常生活は大きく変わること余儀なくされた。屋外での活動、運動・スポーツも制限され、子供たちが外遊びやスポーツに取り組む機会も少なくなった。結果、福島県は子供たちの体力低下が進み、肥満率も全国上位となり続けた。また、大人にも同様の傾向がみられ、今も続いている。

平成 27 年からは、子どもたちの体力向上のために「ふくしまっ子体力向上総合プロジェクトがスタートし、学校教育における体力向上に大きな視線を向けられることとなった。県内の運動・スポーツを取り巻く環境においては、平成 30 年度にひろのまちから楢葉町に跨る JFA トレーニングセンター「J-Village」が復活し、サッカー世代別代表や、なでしこジャパン、J リーグチーム、サッカー以外でもラグビーの海外チーム、またプロチームばかりでなく子どもや大学生も全国から集まり、合宿やイベントを行うようになった。いわき市では、有名スポーツブランドのアンダーアーマーを取り扱う株式会社ドームが「いわき市を東北一の都市にする」と掲げてスポーツが持つ経済的な価値を引き出しながら復興からの成長を目指そうと 2015 年に「いわき FC」を誕生させた。2020 年シーズンは JFL で戦い J リーグ昇格へあと一歩まで来ている。震災前から始まっているイベントではあるが「いわきサンシャインマラソン」も全国から多くのランナーが集まるようになってきている。少しずつではあるが、運動やスポーツに関する私たちを取り巻く環境が変化し、明るい話題が増えてきている。

本来であれば今年の東京オリンピック開催で地域の復興もスポーツを取り巻く環境もまた一段と盛り上がる場所であったが、昨年 1 月ごろからの新型コロナウイルスの感染拡大により、オリンピックをはじめ各種大会・スポーツイベントが軒並み中止・延期になり、震災後、少しずつ盛り返してきた運動やスポーツ熱が抑えられることになってしまった。今年度は人と人との交流自体も様々な制限を受ける中ではあるが、運動やスポーツは身体活動を「する」ことだけでなく「見る」「知る」「支える」の視点があり福島県や双葉郡の現状をとらえ「スポーツを通じて地域を豊かにする」ことを目指して探求を行った。

(1) はじめに

「スポーツを通じて地域を豊かにする」とはどういうことか？日本には野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球などの様々なプロリーグが存在する。また、様々な競技でプロ選手として活躍する選手もおり、各世界大会で年々成長を見せている。しかし、その一方で子どもたちの運動能力の低下や運動習慣の減少などの問題が続いている。少子化や学校部活動のあり方、活動のクラブ化など、さらには、スマートフォンの普及などによって、「時間」「空間(場所)」「仲間」といった運動やスポーツを取り巻く環境が変化してきている。延期になった東京オリンピック・パラリンピックを目前に控え運動・スポーツに対する関心が高まる中、スポーツを通じて新たな考えを提案する。

(2) 実施内容～ 2 年次 ～

①地域を知る

地域について各々が知っていることや地域住民

への聞き取りで得た内容を比較して、自分たちの知識の浅さや知っているつもりでよくわかっていなかったことを知った。



②フィールドワーク

“NPO 法人みかんクラブ 大和田幸弘 氏”
スポーツクラブやスポーツイベントなどの「スポーツ」を通じて地域の活性化を行っている広野みかんクラブを訪問し、震災前と震災後の活動について説明をいただいた。その中で、どのような課題があり、自分たちに何ができるかを考える時間となった。質問も積極的に行い、多くの情報を得ることができた。



“東日本国際大学硬式野球部監督 仁藤雅之 氏”

東日本国際大学硬式野球部を訪問し、監督の仁藤さんより、学生野球を取り巻く現状と野球以外の地域貢献活動についてお話しいただいた。学生野球の現状としては、少子化や社会の構造、子どもたちの遊びの変化などから野球をする子供たちは減っている現状があり、大学として学生を募集するにも上手にアピールして興味を持ってもらうことが必要になっているとのことであった。また、地域貢献活動としては、地元のお祭りの時などごみ拾いなどのボランティア活動に参加し、地域の人たちとの交流を図り、さらに前述の学生募集のアピールにもなるように活動しているとのことであった。



“富岡さくらスポーツクラブ”

富岡スポーツクラブでは、震災前の富岡高校国際スポーツ科の立ち上げ当時のエピソードなど町を挙げてサポートしていただいた経緯をお話いただき、今後とも交流を深めて富岡町民の健康増進に力を貸していただきたいとのことであった。



③グループ学習（調査・体験）

“いわきスポーツアスレチックアカデミー”

いわき FC は幼稚園年中から小学校 6 年生を対象に走る、跳ぶ、投げる、掴むという動作を中心として、遊びながら楽しく体力をつける運動スキルプログラムを実施している。指導する側として参加しながら子どもの運動能力の現状や指導法を学んだ。



“広野軟式野球スポーツ少年団”

永年活動してきた広野軟式野球スポーツ少年団が団員不足から活動を終了することになり、最後の活動として近隣のスポーツ少年団を招待しての野球大会をサポートする形で参加し、大会運営や小学生の野球に対して指導者や父母がどのようにかかわっているのかなど、子どもたちの野球を取り巻く現状を学んだ。



“広野町認定こども園”

広野町認定こども園の 4 歳～ 5 歳児を対象にサッカー教室を行った。小さな子どもに対してサッカーというスポーツを教えることによって、技術的な指導の他にも時間配分や活動するコートのサイズと人数の関係、ケガへの対応や子どもに何かを伝えるときの言葉の使い方など多くの課題を見つけることができた。



～ 3年次 ～

○「主体的」で「対話的」な「深い学び」へ

スポーツと健康ゼミ内で「自分達でやりたいこと」を決めて、7グループになった。それぞれのグループが主体的に対話をスタートさせていった。前年度のプログラムを継続するグループもあり、当初3つに分かれていたが1つになってそれぞれのテーマを踏まえ協同で活動するグループも出てきた。以下がそれぞれのグループの探究活動の概要です。

“スポーツで地域を元気に”

震災前、富岡高校国際スポーツ科時代に富岡町に支援していただいた縁もあってバドミントンを通してスポーツの楽しさを知ってもらい、さらにスポーツを通して若い世代からお年寄りまで交流できれば町の活気も戻るだろうと思い活動してきました。小中学生にはバドミントン教室を開いて交流を図り、高齢者には富岡町主催の健康をテーマとしたイベントに参加し実際に運動できない方でも、バドミントンなどスポーツを題材としたクイズやデモンストレーションを行い交流した。コロナの影響でイベントの開催の回数が少なくなってしまい、十分に交流できなかったところもあるが、今後もバドミントン部を中心に引き継いでいってほしいと思う。



“野球人口を増やそう”

双葉地域は元々野球が盛んな地域であり、子どもたちの体力向上や健康増進について野球を通してなにかできないかと思い、昨今の全国的な野球人口の減少傾向と双葉地域の野球の復興、そのうえで子どもたちの体力向上を図ることが出ればと考え、ティーボール教室を開くこととした。開校時より野球場を利用させていただいた楢葉町の小学校の生徒を対象に開催した。コロナの影響もあり少ない回数になってしまったが、1回目は3年生11名、2回目も10名ほどの児童の参加があり、短時間ではあったが活気のある交流が

できた。野球人口の問題は日本高野連でも今後の課題としてとらえているので本校の探究活動を含めて今後の活動に期待したいと思う。



“スポーツ×国際交流”

地元の J ヴィレッジを拠点としてスポーツを通して国際交流を図り、より多くの国々の人たちに J ヴィレッジや地元の宿泊施設などを利用してもらい、双葉郡や広野町の活性化につながればよいと考えた。こども園でのサッカー教室では、外国文化としての観点からスポーツを体験してもらうことを考え、North Salinas High School (米) で日本語を学ぶ学生や東日本国際大学で学ぶ海外からの留学生からもアンケートを通じて各々の自国のスポーツ事情や運動・スポーツに対する意識について情報を集めた。残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大によって東日本国際大学の海外からの留学生を対象としてスポーツ教室を開催することはできなかったが、集約した情報を5期生のグループで引き継いでもらえることになった。この先も継続的に発展していってほしいと思う。



“スポーツの楽しさを子どもたちに教える”

地域の子供たちの肥満傾向などの健康状態やスポーツ教室への参加状況から、多くの子供たちにスポーツに親しむ機会をつくり、健康状態も向上できるようにという思いから取り組んだ。地域のスポーツクラブ（みかんクラブ）が主催するスポーツ教室に参加して

子どもたちの現状を把握したうえで広野小学校でスポーツ教室を開催した。小学校で開催することでスポーツ教室に加入していない児童にスポーツに触れる機会をつくった。その後サッカー教室に参加している児童対象に浜通り地区のサッカーチームとの招待試合を開き、日ごろの活動から試合を通しての交流の機会をつくった。全体の児童生徒数が少ないので幅広い年齢層での活動になることが多く、それぞれの年齢層が満足のいく活動になるような工夫が必要かと思われる。



“子どもの運動能力向上”

震災の原発事故の影響で子どもたちが外での活動を制限され運動不足の状態に陥ったことによって肥満傾向が高くなっていることをはじめ、体力・運動能力の数値や運動する時間などの水準が全国平均を下回る傾向が出ている。これから先健康的な生活を送るためには、運動する機会をつくり体力・運動能力の向上を図ることが必要であると考え3期生の FCA (Future Change the Ability) を引き継いだ。広野小学校のゴールデンエイジである3年生と4年生を対象に3年生は「走る」4年生は「投げる」をテーマに様々なプログラムを提供した。コロナ禍で大変な状況であったが、広野小学校のご理解を得ることができ、8回開催することができた。「走る」「投げる」の動作能力の向上はもとより、ゲームを通して考えて動くことも身につけてきた。引き続き活動することで、広野小学校から広野町、双葉郡から浜通り地域の活気を取り戻せるように、この活動を引き継ぐ5期生に頑張ってもらいたいと思う。

“世代別運動アドバイス”

広野町の様々な世代の健康状態をより良いものに改善し、さらに保持増進できるように基礎的な運動を中心にイベントを開催して「運動」することを意識できるようなアドバイスをし、幅広い世代の人が日常的に運動する機会のある町にしたいと考えた。活動としては、特に高齢者を対象に家で気軽にできる運動プログラムを考えました。計画では、公民館などに集ってもらい活動することにしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大によってイベントの開催はできなかった。代わりに運動プログラム「ずぼら運動」を図解し回覧板で各家庭に届けた。高齢者が対象ということでインターネットではなく回覧板を利用することにしました。その後アンケートを実施し活動の様子を確認した。回答数は少なかったが家で手軽にできる運動ということで効果を感じた人もあった。



“スポーツ×子ども＝双葉郡への希望”

震災後双葉郡の子どもたちの運動不足の現状に着目し、スポーツをする機会を増やすことで健康を保持増進し、更に将来的に活気ある地域づくりへつなげていきたいと考え活動することを考えた。アウトドアスポーツやドッチビーなどのマイナースポーツを取り入れ体を動かすことの楽しさを知ってもらい、運動する習慣を身に付けてほしいと思い企画した。新型コロ

ナの影響で思うような回数を実施することは難しかったが、充実した活動ができた。



(3) 成果

スポーツと健康ゼミに所属する生徒は、バドミントン部、男子サッカー部、女子サッカー部、野球部に所属しており、日頃からスポーツや運動に親しんでいる。およそ「運動不足」とは無縁でありスポーツが好きである。しかし、常に「する」立場におり、「見る」「支える」の観点からすると知識や実践は浅いと思われる。運営に関しては、自分たちの大会で補助員などの係に携わることはあるが、ある課題を見つけ、企画から立ち上げ実践していくことはほとんど経験がない。この2年間で様々な方からスポーツや運動について多面的にお話をいただき、普段当たり前活動している自分たちの競技の裏側で多くの人がかかわり多くのことに配慮しながら運営していることや、普段気にも留めていないことが運動やスポーツの課題として存在することなど「知っているつもり」であることを学んだ生徒たちは初めてこのことに対してグループで主体的に取り組み、対話しながら進んでいた。各グループのリーダーも責任感をもってグループをまとめ動かしていた。広野小学校をはじめ、地域の高齢者や檜葉北南小学校、富岡町など双葉郡内でスポーツを通して地域にかかわりを持つことができたと思う。コロナ禍において活動が制限されることもあったが、それでも様々な活動ができたと思う。さらに継続して双葉地域の課題と向き合い復興の一翼を担っていければと思う。

(4) 課題と展望

トップアスリート系列に所属している生徒のみのゼミということで、それぞれの部活動での練習や練習試合、大会参加などもあり探究活動に費やす時間は他のゼミと比較して少なくなり、長期休業中では尚更時間をつくるのが難しかったと思う。どのゼミでもある

ことだと思いがオリジナリティを出すことの難しさは今後も課題となるだろう。今後は何のためにを「考え」、自分たちの得意とする分野を生かすためにもっと自分たちの特性を勉強し理解して外に向けて発信する方法を「考えて」、どのような結果を望むかを短期・長期で「考えて」継続的に地域に根差すような提案・活動になってほしいと思う。

3. 3. 1 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは「福祉」や「健康」に関心が高い生徒、特に将来福祉に関わる仕事に就きたいと考えている生徒が所属している。生徒25名のうちスペシャリスト系列福祉コースの生徒が10名で、その他スペシャリスト系列農業4名、商業1名、アカデミック系列6名、トップアスリート系列4名である。地域社会の課題に対し「健康」「福祉」の分野からアプローチし、地域の復興や活性化に貢献することを主な目的としている。

(1) はじめに

本年度は昨年度からの継続で11のグループに分かれて活動した。昨年度末に中間発表を行う予定であったが、コロナ禍の影響で中止となってしまう、活動自体も中止せざるを得ない状況であった。年間の活動の振り返りや本年度への計画などが中途半端なまま、新年度を迎えることになってしまった。

(2) 実施内容

1. 今年度の流れ

・セルフエッセイ

3月～4月の休校期間に課題として執筆した。震災から現在までを振り返り、どのようにして探究のテーマにたどりついたのかを各自まとめた。

・活動計画の練り直し

5月の休校期間から学校が再開した6月にかけて、今後の活動について各施設とも連絡を取りながら何ができるのかを考え、計画の練り直しを行った。

・実践(6月～9月)

練り直した計画に基づき、各自実践をすすめた。高齢者施設では直接交流する活動の受け入れ難しかったため、大幅に活動を変更することとなった。

・未来創造探究 生徒発表会(9/26)

ここまでの活動についてまとめて発表し、審査員の方々からアドバイスをいただいた。

・論文執筆(10月～1月)

発表会後の追加での実践も含めて2年間の探究活動を論文にまとめた。

2. 各グループの活動

①From Empathy to action

障がい者との共生をテーマに活動した。今年度は「ヘルプマーク」を作成して必要としている施設への贈呈を目指し、試行錯誤しながらヘルプマークを作成した。ヘルプマークの普及に向けての意識調査や問題点の洗い出しなども行うことができた。



②smile and health

高齢者の健康をテーマに活動した。高齢者の心と体の健康のために、高齢者の交流の場をつくることを目標と

して活動した。さまざまなイベントや手法を検討した結果、アロマセラピーやハンドマッサージを通して交流の場を設ける計画を立てた。高齢者施設での実践を計画したが、コロナ禍で中止となってしまった。



③おりがみで認知症の予防、改善を

地域の高齢化率の高さに着目し、高齢者の認知症予防の方策を探ってきた。2年次の活動からおりがみに特化して、高齢者施設での実践を計画した。コロナ禍により実際に施設を訪問することはできなかったが、月ごとにテーマを決めたおりがみ作品の折り方を1年分まとめ施設の方に実践をしていただいた。



④高齢者を健康に

地域の高齢化率の高さに着目し、高齢者の健康寿命をのばし、高校生と高齢者がつながる地域社会を目指して活動した。高齢者と共に畑で作物を作り、その収穫物を用いて料理をする交流会を予定していたが、コロナ禍で実施できなかった。代わりに健康パンフレットを作成して高齢者施設や社会福祉協議会で配布していただいた。



⑤あなたは食事の大切さを知っていますか？

地域や企業と協力して料理づくりのイベントを企画し、地域住民と共にどんな年齢層の人も食と健康について考えることを目標に活動した。コロナ禍により料理イベントは実施できなかった。代わりに本校文化祭で、準備していたレシピを利用して作った料理を来場者にふるまっ食と健康についての調査を実施した。



⑥美容で笑顔の連鎖

3期生の活動を引き継ぎ、高齢者施設でのネイル・メイク・ハンドマッサージを通して高齢者との交流を目指した。高齢者の健康維持のために外見を装うことが役立つと考え活動してきたが、コロナ禍で高齢者施設への訪問ができなかった。代わりに身近な家族に対する実践や爪などにより食事メニューの紹介を行った。



⑦Regional Bridge

高校生が「地域の架け橋」となることを目指してきた。世代間交流のために、町の図書館などで絵本の読み聞かせを企画した。高校生が子供たちに絵本の読み聞かせをするだけでなく、読み聞かせを高齢者にもお願いすることで子どもとその親世代、高校生、高齢者という4世代が交流する場を設けることができた。



⑧障がい者が困っていたら手を差し伸べられるような地域にしよう

ユニバーサルデザインとバリアフリーをテーマに活動してきた。2年次に校内で車いす体験を実施し、その際に見つけた不自由な点を解消できるよう実践した。本校生徒へのアンケート調査なども行い、障がいのある人もそうでない人もすべての人が生活しやすい空間とはどのようなものか検討することができた。



⑨子どもの体力向上!!!

東日本大震災後における福島県内の子どもの肥満率上昇や体力テストの結果から子どもの運動不足が問題であると考えた。地域の小学生などを対象にスポーツイベントを継続して実施することを計画したが、コロナ禍で中

止となった。代わりに体を動かすことの楽しさを訴える絵本の作成を実施した。



⑩食事を通して子ども達に健康的な生活を

福島県の肥満問題について、食事の面からアプローチし、食事と肥満の関係を調査した。寮生でもあるので、寮生の朝食に対する意識調査を実施し、その結果や健康的な食生活についてポスターにまとめて寮で掲示することで寮生の食事に対する啓発を行った。



⑪発達障害による感覚過敏を改善するために

発達障害児に興味があり、障がいの有無に関係なく遊べるおもちゃづくりを目指していた。その過程で感覚過敏に着目するようになり、感覚過敏の人々の日常生活における不便を解消することを目的とした。当事者やその家族との対話を経て誰でも簡単にできる工夫で快適になれるよう実践をした。



(3) 成果

2年間の活動を通して各メンバーはそれぞれに成長がみられた。特に学校外の方と協働して活動するために必要不可欠なコミュニケーション能力や自ら動く積極性である。また、昨年度末から計画通りにいかない状況にありつつも、各グループが代替案を考え非常に前向きに活動していた姿が印象的であった。

(4) 今後の展望

取り組みの継続と新たな取り組みの創造のバランスの取り方が難しいと感じた。福祉ゼミでは3期生から引き継いだ探究があったが、活動の発展や独自性はあまりみられなかった。また、地域社会の現状や必要性の把握なども検証が甘いように感じられた。生徒たちの興味関心に基づくやりたい活動が、本当に地域から必要とされる活動となっているのか再考したい。さらに福祉や現代社会に関する知識の差が論文の完成度に表れるため、必要な知識をどのように学ばせるかも考えていきたい。

3. 3. 2 探究活動発展のための発表会（未来創造探究生徒研究発表会）

2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知をもつ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼び出した。感染症対策として体育館での全体会は行わず、分科会のみでの発表とした。また外部の参加者にはライブ配信を行い、保護者や地域の方のみならず、全国に向けて成果を披露した。

（1）概要

- ① 目標 (1) 高校3年生が、地域復興の実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、資料作成力、プレゼンテーション力、質問対応力を育成する。
(2) 中学生、高校1、2年生は3年生の発表を聴講することにより、活動内容の理解、発表方法の学習、質問力の醸成を図る。
(3) 保護者、地域の方々、教育関係者に本校の探究活動の内容を周知し、本校の取組の波及を図る。
- ② 日時 令和2年9月21日（土）9：00～16：30
- ③ 内容 ○開会行事 9：00～ 9：15
○分科会Ⅰ 9：15～10：40（9会場）生徒発表（10分）、質疑応答（5分） 3回
外部審査員ミニレクチャー（15分）
パネルディスカッション（20分）
○分科会Ⅱ 11：05～12：45（9会場）生徒発表（10分）、質疑応答（5分） 3回
外部審査員ミニレクチャー（15分）
パネルディスカッション（20分）
○閉会行事 13：30～14：30 審査結果発表、審査員による講評
○振り返り 14：30～14：45
○懇談会 15：00～16：00 教員と審査員による振り返り
- ④ 審査員 専門知を持つ方9名、地域知を持つ方9名（審査員氏名については第2章参照）
- ⑤ 外部聴講者（Zoom） 46名

（2）詳細

① 事前準備

今年度の発表会は、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、発表会における三密回避を徹底するため、体育館での全体会を実施せず、また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、会場数を増やした。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の方についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごと、専門知を有する方1名、および地域知を有する方1名に参加していただくこととした。地域知を有する方としては、生徒の活動が面的に広がってきたことや、本校の開校の経緯などを踏まえて、双葉郡の全八町村から呼び出すよう

にした。本校の活動を理解していただいている方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

②分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。
- ・発表数と時間を勘案し、会場数は9会場、各会場で6発表を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員兼ファシリテーター（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中させるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する方のミニレクチャーおよび生徒と外部審査員によるパネルディスカッションの時間を設定した（3発表を行ったのち、それらの発表についてパネルディスカッションを設定）。パネルディスカッションについては外部審査員の方に司会を事前をお願いした。



- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが表彰対象となった（発表内容については巻末資料を参照）。
 - ・未来プロジェクト
 - ・スポーツ×子ども＝双葉郡への希望
 - ・Regional Bridge
 - ・双葉郡震災クイズ
 - ・広野海岸「はだし」プロジェクト
 - ・避難経路ウォーク×スポーツゴミ拾い
 - ・Improving the physical strength of children
 - ・浜通りの魚をなめんなよ
 - ・富岡さくら復興プロジェクト外～届け！さくら死° 枵
 - ・エネルギー×教育
- ・開会行事、閉会行事については各教室にZoomで配信した。また最後にワークシートを用いた振り返りを各教室で行った。
- ・今回初めての試みとして、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発

表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。

③結果および今後の展望

- ・今年度はコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあり、3年次にテーマを変更した生徒も少なからず存在した。厳しい状況であったものの、発表会ではこういった逆境を感じさせない発表が多かった。この発表会は1期生から始めて今回が4回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られた。

- ・発表態度、課題に対する主体的な取組、地域と強い繋がりのある実践活動という点において審査員から高く評価をいただいた。一方で調査の手法や言葉の正確さ（定義を踏まえた言葉の使い方）については不十分なところが多く見られ、今後の課題として指摘を受けた。これらは探究活動の基礎となるものであり、独りよがりの活動とならないように注意していきたい。

- ・前年度より審査員とのパネルディスカッションを行っている。今年度はこれに加えて審査員によるミニレクチャーを導入した。ミニレクチャーは研究の内容だけでなく、研究の進め方をモデルケースとして理解するという点で非常に参考になったという意見が多かった。パネルディスカッションについては司会を審査員をお願いしたが、進め方やテーマの設定について課題を感じた審査員が多く、事前にさらに丁寧な打ち合わせが必要であると思われる。

- ・外部来場者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

- ・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

3.4.1 ドイツ研修代替研修

本校では、2年次からの未来創造探究として、原子力災害からの復興や、持続可能な地域づくりについて探究を行う。この取組は、福島だけの課題ではなく、全世界が共有する「持続可能な社会づくり」にも繋がるものである。これまでの1年次におけるドイツ研修では、環境首都と呼ばれるフライブルク等の町づくりを視察するとともに、本校の海外連携校である **Ernst Mach Gymnasium** 校（ミュンヘン）と互いの探究を通して交流を図り、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としてきた。ドイツ研修は本校の学びの核の一つであり、学年全体・学校全体が思考を深め、2・3年次探究にもつながる重要な機会となる。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の鎮静化が見込めず、6期生はドイツ渡航に代えて国内でのプロジェクトとオンラインでのドイツとの交流を行い、学びを深めるとともに、学年全体へその成果を還元することとした。

(1) 代替研修内容

(1) 国内研修

- ① 国内のゴミ問題や放射性廃棄物など、この地域特有の課題について知識を得る。
- ② 「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に、地域住民と交流し意見交換を行う。
- ③ 英語による議論やプレゼンテーションの技術を身に着けるため、**British Hills** における合宿を行う。

(2) ドイツとの交流・意見交換（オンライン）

- ① 国内研修を踏まえ、ミュンヘンの **Ernst Mach Gymnasium** 校の生徒とオンラインにて交流を行う。

(2) 実施内容

募集の段階で現地渡航はできない旨を説明した。代替事業を複数設定することで、海外研修同様の学びを担保することを約束し、多くの生徒が選抜面接に臨んだ。なお、生徒の選考には以下のような課題を設定した。

- ① ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）についてのあなたの考えを明らかにすること。
- ② 持続可能な社会づくりについて全世界が共有する目標である **SDGs** の17の目標のうち、本研修を通じて考えを深めていきたい目標を明らかにすること。
- ③ 本研修での学びを今後の学校生活にどのように生かしていこうと考えているかを明らかにすること。

本研修の目的を自覚し、学校の代表としてドイツと交流し、そこでの学びを地域や学校に積極的に還元する意志を持った12名の生徒たちが選抜された。

代替事業① ブリティッシュヒルズ(以下BH)研修

期日：令和3年1月6日(水)～1月8日(金)

現地渡航ができない中で、3月に予定している **Ernst Mach Gymnasium** 校とのオンライン交流に向けて英語でプレゼンテーションや議論を行う練習が必要となった。そこで、NY研修の5期生と共に県内のBH(福島県岩瀬郡天栄村田尻尾芝草1-8)での研修を行った。

Ernst Mach Gymnasium 校とはゴミ問題を含む環境問題について意見交換を行う予定であるため、**SDGs** を用

いたレッスンを中心に、最終的には自分の理想とする社会について **SDGs** の項目からプレゼンテーションを作成し、発表するという内容である。研修内容については、



現地を想定して **Intermediate Level** をオーダーした。

1日目は **The SDGs and Me** というテーマで、それぞれの目標についての基礎知識と、お互いが取り組むことができる事項を考え、その内容をポスターにまとめて発表した。生徒達は **All English** の授業に戸惑い、内容を理解するのに精一杯で上手く反応できなかったという反省から、夜に宿舍内の **Meeting Room** に集合し、**SDGs** にまつわる語彙や表現をシェアする様子も見られた。

2日目はその成果もあって講義内容を聞き取れるようになり、反応も増え、何より英語でコミュニケーションを取ることを楽しめるようになった。授業では、**SDGs** の各目標達成に向けて社会にはどのような施設があり、どのような取り組みが行われているのかを学んだ。

最終日の発表では、**SDGs** 目標達成に向けた内容を組み込んだ街をデザインして発表を行った。生徒達は双葉郡の課題も取り入れながら、自分達が理想とする社会について様々なアイデアを取り入れながら発表を行った。



代替事業② **SDGs Action Card Game X** 研修

期日：令和3年1月16日(土) 20・27日(水)

講師：齋藤夏菜子(本校教員)

BH研修での学びを学年に還元するために、年明けに産業社会と人間の授業の中で実施予定の「**SDGs Action**

Card Game X」を使った探究接続ワークのファシリテーションを 12 名で行うこととした。事前にゲームの内容を理解するため、事前研修を行った。場所は、広野駅前のコミュニティスペース「ぷらっとあっと」をお借りした。快く場所を提供して下さった広野町わいわいプロジェクトの磯辺吉彦氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。

実際にゲームを体験しながら、SDGs の項目と双葉郡のリソースを結びつけて探究に向けて思考を深めていった。ファシリテーション当日は、各クラス 3 名でゲームのサポートを行い、上手くいったこと、行かなかったことを後にフィードバックした。リーダーとして人前に立ち、誰一人見捨てずに物事を前に進めていくことの難しさを体験した。



代替事業③ NPO 法人 ザ・ピープルでの研修

期日：令和 3 年 2 月 5 日（金）

2 月 20 日（土）

講師：吉田恵美子氏（NPO 法人ザ・ピープル 理事長）

「特定非営利活動法人ザ・ピープル」は、自分たちの住む地域、まち、更に進めれば国、そして地球を住みよいものにするためには、住民である自分たち自身が主体的に考え、行動し、声をあげることが必要だという思いで、1990 年いわき市内で設立された団体である。身近な生活環境の問題のひとつであるゴミ問題の解決に向けて、古着のリサイクル活動に 1992 年から取り組んでいる。

今回、吉田氏を講師に迎え、古着に着目したゴミ問題についての研修を行った。古着などの繊維製品のリサイクル率は全国平均で 20%にも満たない。ザ・ピープルでは古着リサイクル事業を行っており、現在 90%以上のリサイクル率を達成しているという。この活動をいわき地域内に留めることなく、他地域にも広く共有し、古着をゴミとして燃やさない社会に変えることが目標である。



実際にザ・ピープルの倉庫を訪れ、古着の仕分けのボランティアを行った。県内の古着回収 BOX から集められた衣類を、様々な用途に分類する。分類の種類は以下の通りである。

1. チャリティショップで販売するもの
2. ナイジェリアに輸出するもの（春夏秋用）
3. ラオスに輸出するもの（冬物全般）
4. 反毛用
5. リメイク用着物
6. 工業用ウエスの原料
7. 店では売れないダウン・フェザー
8. 焼却ゴミとして処分するしかないもの

倉庫内の衣類の量に衝撃を受けたが、まだ使える衣類が多く、生徒達は普段自分達が身に付けている衣類から大切に長く着ることの大切さを学んだ。ファストファッションが流行っている一方で、それらの衣類を低賃金で作っている発展途上国の人達がいること、我々にとってはゴミでも、他国の人にとってはまだまだ着ることができる貴重な衣類であることを知った。

また、吉田氏のバイタリティに刺激を受けた生徒達は、3 月 11 日に広野町で行われたメモリアルイベントにも吉田氏のお手伝いとして参加し、ランタンフェスティバルのスタッフと、ラオスへ衣類を送るための募金活動を行った。



代替事業④ 徳島県上勝町「ゼロ・ウェイストセンター」

期日：令和 3 年 3 月 12 日（金）～15 日（月）

訪問先：上勝ゼロ・ウェイストセンター「WHY」

株式会社いんどり（葉っぱビジネス）

地元住民との交流

(1) 上勝ゼロ・ウェイストセンター「WHY」

徳島県上勝町は、持続的な循環型社会を目指し、2020 年までにゼロウェイスト達成を公約に掲げている。同町はゴミを 45 分別することで既に再資源化を 8 割達成しているが、その目標に向けてはゴミを処理する側の体制だけではなく、製品の供給側の意識や、生産・販売・消費の関係、ひいては私たちの暮らし方そのものを考え直すことが必要になる。

今回訪れたゼロウェイストセンターは、町内唯一のゴミ収集所である。上勝町はゴミ収集車がなく、住民が直接ゴミを持ってきて、その場で分別することになっている。センター内は、ゴミの分別がしやすいようになっているだけでなく、それぞれのゴミや資源がどこに行き、何に生まれ変わるのか、また、1 kg あたり処理にかかるお金を明示している。捨てる側も意識をするようになる

という仕組みである。



また、我々はセンターに併設されている宿泊施設「HOTEL WHY」に宿泊しながら実際に45分別を体験した。部屋で使用する石けんやコーヒーなどは自分達で必要分だけカットしたり、豆を挽いたりしながら、ゴミを出さないための工夫を強いられる。生ゴミは翌朝ホテルの敷地内にあるコンポストに自分で捨てに行かなければならない(写真右)。3泊4日の研修の中で、私たちがどれだけ無駄なものを持ち歩き、ゴミを増やしているかに気付かされた。ゴミゼロ生活を体験することで、きちんと分別すれば気持ちが良いし、資源として新しく生まれ変わることができるということ学んだ。



また、施設は全て上勝町で生まれた廃材で作られていた。壁は、上勝町で廃材となった約600枚の窓で作られていた。過疎化が進み、廃墟となり解体された家＝かつて光が灯っていた窓から、もう一度光を灯そうというコンセプトで作られた建築物である。窓だけでなく、床面は建築タイルや陶器の廃材を埋め込んでいたり、ホテルの改装で要らなくなった家具を再利用していたり、しいたけ工場で使用していたカゴを本棚に再利用したりと、ユニークでデザイン性の高い建築には驚いた。ドイツのフライブルクにあるヴィクトリアホテルの、「環境に配慮はするが、無理を強いるのではなく快適さを忘れないことが大切である。」という言葉に似たものを感じた。



同じく施設内にある「くるくるショップ」では、リサイクルできる物を町民が持ち寄り、必要な物を自由に持ち帰ることができる。子供服やおもちゃ、大人の衣類や書籍、食器類など、1年間で10tくらい循環しているそう。こうした取り組みからもたくさんのヒントをいただいた。サーキュラーエコノミー(循環型経済)と、コ

ラボティブエコノミー(共同経済)の両側面が実現されている場所であった。捨てない経済と、捨てたものが生まれ変わる経済が成功した例だと感じた。

ゴミの分別については、「高齢者は果たしてこんなに細かく分別ができるのか」という疑問が浮かんだが、それに関しては、福祉的ケアが絶対に必要だという回答をいただいた。上勝町は高齢化が進んでおり、認知症の高齢者も多い。また、高齢者には医療系廃棄物という別の問題もある。ソーシャルワーカーなどの横の繋がりを大切にし、センターの職員と連携しながらゴミの分別のサポートをしているということだった。



(2) 株式会社いんどり

自然豊かな上勝町で、里山の葉っぱや花を収穫し、料理の「つま」として出荷する葉っぱビジネスは、町に新しい産業を築き、高齢者が生き生きと働き生きがいを取り戻している。

上勝町は、人口が約1,700人、町の面積の86%が山林である。さらに65歳以上の高齢者の割合が人口の半分を占め、県下でもっとも高齢化比率が高い町である。そこで、高齢者がこの葉っぱビジネスで生き生きと働き、年間2億円以上の売り上げを出している。町の高齢化や、自然豊かな町という点において双葉郡と共通する部分が多いと考え、どうすれば地域住民が生き生きと暮らせる町になるか、ヒントをいただいた。

まずは、iPadを使い実際に注文取りのシミュレーションを行い、その後山へ出かけ、実際に葉っぱを収穫し、出荷の基準を満たす葉っぱを仕分けし、パックに詰めるまでを体験した。



自然の資源を使ったビジネスは簡単そうに見えて実際はかなり難しく、出荷の基準(左右対称、大きさ、色、汚れがない等)に合ったものを見つけるのに大変苦労した。しかし、葉っぱビジネスで働く高齢者の方々は、この仕事を通して様々な人と交流し、社会に参画していることに誇りを持っており、仕事を生きがいに感じていた。

(3) 地元住民との交流

町民ヒアリングとして、いんどり農家の方や、元上勝町役場参事、ゼロウェイストアカデミー事務局長、上勝

晩茶農家の生産者、映像製作会社社員、現上勝町役場職員、移住コーディネーターなど、上勝町で働く様々な方々と意見交換を行った。

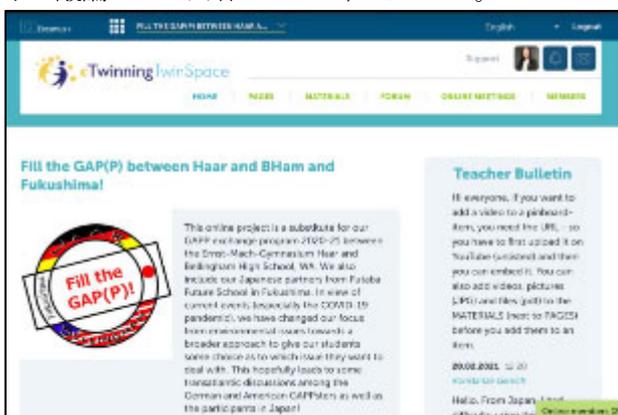
上勝町と広野町の共通点として、「不便さ」が挙がった。そもそもの物事の普遍的なもの=第一原理といい、目の前のことだけを見ていると第一原理を間違えてしまう。周りを見渡すとこれだけ自然豊かで資源にあふれている。それをどのように魅力に変えていくか考えるには環境リテラシーが大切であるということも学んだ。地域の資源を自分で分析し、理解した上で、それを使ってどのように地域を **show up** するかということが大事であるという言葉は、これから探究に進む生徒達にとって大きなヒントとなったのではないかな。



代替事業⑤ Ernst Mach Gymnasium 校との交流

期日：令和3年3月26日（金）

これまでの代替事業で学んだことを基に、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校とオンラインにて意見交換を行った。生徒達はオンラインで交流する前から、**e-Twinning** というサイトを使い、お互いに **self-introduction** や簡単な投稿を通して交流を深めていった。オンラインで意見交換したいテーマについても事前に投稿し、日本とドイツのゴミの処理方法の違いや、分類の仕方、学校としてゴミを減らすために行っている活動はあるか、など予め議論したい内容について伝えていた。



事前に何度か集まり、これまでに学んで来たことを英語でアウトプットするための準備を行った。学んだことを自分の言葉で説明するには十分に腹落ちしていなければならない、知識が弱い部分に関してはしっかり調べた上で語れるように意識して準備をした。ドイツの状況を質

問するには、まず我々の地域のゴミの分別状況や、処分の方法などを知っておかなければならず、情報収集に苦労していた。



オンライン交流当日は、我々教員の助けをほぼ借りることなく、司会も生徒達で行い、立派に交流していた。意見交換では、“What are you doing at home and in the community to reduce littering and trash?”と、“Do you have any event to reduce street garbage?”について、ブレイクアウトルームに分かれ、我々とドイツの学生5人組で議論をした。今後、このオンラインでの交流はあと数回は継続する予定である。また、今後バーチャルホームステイも計画しており、しばらくこの研修は継続し、夏頃には校内において学びの還元ができるように進めていきたい。



(4) 成果と課題

本校設立以来、6年間続いているドイツ研修である。本来であれば1月に渡航予定だったわけだが、新型コロナウイルスの影響により断念せざるを得ず、生徒達の大きな学びのチャンスを失ってしまった。しかし、同じ目的の下、国内代替研修に置き換えて実施することができたことについて、感謝申し上げたい。

渡航できないことで、生徒達のモチベーションが下がりそうになることもあったが、ザ・ピープルの吉田恵美子氏、ぷらっとあつとの磯辺吉彦氏をはじめ、身近で環境問題や地域の活性化のために活躍する方々と交流することで刺激を受け、モチベーションを保つことができた。

国際交流の第一歩は、自分の国や地域のことを積極的に情報発信することである。しかしながら、毎年、基礎知識のインプットと英語力の向上については課題がある。国際理解教育の高遠氏も述べていたが、知識不足や表面的な情報だけで何かを意見することは、新たな対立や分断を生んでしまう。今後も双葉郡の高校生として、分断や対立・差別や偏見と闘うべく情報発信を行っていくためには、正しい情報リテラシーが必要である。外に目を向ける前に、まずは自分達の身の回りの出来事について疑問を持つこと、もっと深く調べることが必要である。

一方で、プレゼンテーションの準備や事前・事後学習を通じて、自分の力をもっと伸ばすためには日々の学習を大切に、自分ができていることを増やすことで自分に自信を持って活動することだと気づいたことは大きい。この気持ちを2.3年次まで持ち続けて欲しい。

3.4.2 ニューヨーク研修代替研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、COVID-19 感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされている。SGH 指定最終年度となった前年度研修チーム(本校 4 期生)は、渡航直前に緊急事態宣言が発令され、渡航を今年度に行ったん延期、結果的に渡航を断念した。グローバル型の指定を新たに受けた今年度研修チーム(本校 5 期生)は、現地で実施しようと考えていたプログラムを複数に分割し、学習成果を最大限担保しながら国内・県内で行う道を模索した。

(1) 研修の位置づけとチームビルディング(4・5 期生共通)

① 本研修のミッション

2015 年国連サミットで、貧しい国も、豊かな国も、中所得国も、すべての国々が豊かさを追求しながら地球を守り、持続可能な社会を実現していくことを目指して、世界各国は「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択された。

未来創造探究において取り組んでいる原子力災害からの復興や、持続可能な地域づくりについての探究内容は、福島のための課題ではなく、全世界が共有する「持続可能な社会づくり」の課題である。

SGHにおける 2 学年次海外研修では米国・ニューヨークを訪問し、国際機関や世界の同世代と交流を行い、世界に福島を発信するとともに、世界とともに持続可能な社会づくりを考え、未来を創造していく一歩としてきた。今年度以降も、本研修は本校の学びの核の 1 つであり、学校全体が思考を深める重要な機会とする。

② 生徒主体のプロジェクト

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたいという意志を持った 12 名の生徒たちが選ばれる。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきから生徒たちは議論を重ねる。どのような相手議論したいのか考え、研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

③ セルフエッセイ

参加生徒は、選抜された直後からセルフエッセイの作成を始める。本校での学びに至った背景について話しながら相互理解を深める。互いの思いや探究活動についての質疑応答が進むにつれ、自然と 1 年間の探究活動について振り返りを行い、今後の学びを改善するきっかけにできている。

(2) 今年度前半(～夏季休業前・本校 4 期生チーム)実施内容

COVID-19 の感染拡大により、渡航をひとたび延期、

その後正式に中止の判断をした。渡航予定であった 12 人の海外研修の学びは、事前研修だけでもある程度の深まりを見せたが、探究活動の深化や生徒の進路活動への接続には課題が多く残された。何よりも、中止を告げられた生徒の無念さは計り知れない。

そこで、現地で行う予定であった国連関係者等との意見交換や、NY 市職員・9.11 家族会の方々との交流を行った。

実施日程：令和 2 年 7 月 23 日(木)

① NY 市職員・9.11 家族会の方々との交流

島田 智里氏(NY 市役所職員アメリカ都市計画学会ニューヨーク支部経済開発グループ長)

Meriam Lobel 氏(9.11 家族会 元 9/11 Tribute Museum 館長)

柳沢 ロバート貴裕氏(マウントサイナイ医科大学内 内分泌内科 教授 米国日本人医師会 会長)

② 国連関係者等との意見交換

国連日本政府代表部大使 星野 俊也 大使・
ご婦人 星野 千華子 氏

UNDP 上級顧問 岸守 一 氏

国連日本政府代表部 鈴木 杏奈 氏

(3) 今年度後半(本校 5 期生チーム)実施内容

募集の段階で現地渡航はできない旨を説明した。代替事業を複数設定することで、海外研修同様の学びを担保することを約束し、多くの生徒が選抜面接に臨んだ。

代替事業① プリティッシュヒルズ(以下 BH)研修

期日：令和 3 年 1 月 6 日(水)～1 月 8 日(金)

現地渡航ができない中で、海外と同様に英語しか使えない環境でプレゼンテーションや議論を行う研修と、異国の文化に触れる経験が必要とされた。NY とは異なる文化圏であるが、COVID-19 感染再拡大が懸念される時期であったため、福島県外への往来を避けて BH(福島県岩瀬郡天栄村田良尾芝草 1-8)での研修を行った。

参加生徒選抜直後の研修となったため、英語でのアイスブレイクの後に、自分たちのセルフエッセイを英語化したものを用いて簡単なプレゼンテーションと、SDGs についての最低限のインプットを行い、ドイツ研修参加生徒や BH 職員との議論を行った。BH でも

ともと準備されているアクティビティにオーダーメイドを加えて実施した。事前に提言性のあるメッセージを作成して持ち込み、プレゼンテーションを能動的に作成する参加者が珍しかったとのことで、授業担当以外のBH職員にも多く参加いただいた。

代替事業② 国連日本政府代表部・国連本部職員とのオンライン対話

期日：令和3年3月12日(金)～3月13日(土)

参加者

United Nations

Hawa Diallo (Civil Society Unit, Department of Global Communications)

Ryo Sekiguchi (NGLS, Civil Society Unit, Department of Global Communications)

Swati Dave (Civil Society Unit, Department of Global Communication)

Alpha Diallo (Environmental Development Action in the Third World (ENDA))

Aishu Narasimhadevara (Women's Medical International)

Juan Pablo Celis Garcia (Human Rights Advocate)

Ali Mustafa (GloCha)

Marlenis Rosa (Pathways to Peace)

Rosleny Ubinas (National Spiritual Assembly of the Baha'is of the United States)

Chaste Inegbedion (Padman)

Jadayah Spencer (tbc) (International Youth Leadership Institute)

UNDP

KISHIMORI JIMMY Hajime (Senior Advisor, Japan Unit, Bureau for External Relations and Advocacy (BERA), United Nations Development Programme(UNDP))

Permanent Mission of Japan to the United Nations

OSHIMA Masaru (Minister)

SUZUKI Anna

代替事業③ UNIS-UN2021 オンライン参加

期日：令和3年3月18日(木)～3月20日(土)

今年度会議のタイトル



A Global Catastrophe: The Impacts of COVID-19

世界的大災害 COVID-19 の衝撃

初日の動議 Strict lockdowns are the most effective way in which states can protect their citizens.(厳格なロックダウンは、国が国民を守るための最も効果的な手段である)

2日目の動議 It is ethical for COVID vaccine makers to make a profit from vaccine development.(COVID ワクチンの生産者にワクチン開発による利益を得させるこ

とは倫理的である)

事前研修

① 富岡町世代間交流会への参加 (主催 NPO 法人富岡町 3.11 を語る会)

期日：令和3年2月20日(土)

3期生の研修からフィールドワーク等でお世話になっている、NPO法人富岡町 3.11 を語る会が主催する世代間交流会に事前研修として参加した。

本交流会は、県中・県南・会津地区の高校生が双葉郡を訪れ、地元住民が語り部になって地域を案内し、交流会を通して世代間交流を進めるものである。

参加者は、交流会に参加した地域住民の声に真剣に声を傾ける。語り部から、他地域の人・多世代の人に対してどのように伝承を行うかについては、本校の今後の探究活動へ示唆することが大きい。

実際の震災時に双葉郡で被災をした方々の前で言うプレゼンテーションに緊張していた様子があったが、交流会を通して生徒たちの表情もほぐれた。

同じ県内にあっても、同年代の高校生が震災について知らないことが多いという事実に課題を見いだした。また、ある語り部からの「久しぶりに双葉郡に帰ってきたが、風景が変わりすぎていて道に迷ってしまった」という言葉からも、震災から10年がたつ今こそ、創造的復興の在り方について多様な人たちと対話していかなければならない。

② 東日本大震災原子力災害伝承館の訪問

期日：令和3年3月4日(木)



双葉郡について自分たちの知らないことが多くあることに気づき、生徒自身でスケジュールを決め、高校入試で生徒休業日である週を使い、訪問した。①における住民の声と比べながら見学した。

③ JAMsj Tohoku 10th Year Anniversary (JETRO)出演

日本貿易振興機構 サンフランシスコ事務所長 山下隆也氏のご紹介で、アメリカ・サンノゼにある日系アメリカン人のコミュニティにあるミュージアムで館長を務める Michael Sera 氏の開催する、3.11 のオンラインメモリアルイベントに出演した。

出演する当日は国連との対話をスケジュールしており、生徒発表と質疑応答を事前収録し、当日は引率教

員が代理で出演した。

自分たちが BH 研修で作成してきたプレゼンテーションを部分的に使用して発表を行ったが、初めて聞く



人たちに伝えるには多少乱暴な所や、発表後の議論に繋がらない箇所が複数あったことを課題として持ち帰った。



また、オンラインでの発表と質疑応答を行う上では、出演者の時間をひと時でも無駄にはならず、入念にチェックを行う Sera 氏の姿を見て、自分たちが国連関係者を行う発表や議論の在り方を再考するきっかけとなった。



ネイティブスピーカーのナチュラルな速度で話される英語にも食らいつこうという姿勢も見られるようになった。



④ 校内研修

a. セルフエッセイを用いた議論

今年度は、参加生徒選抜の日程が大幅に遅れ、冬季休業期間に各自、接続可能なデバイスで作成し、オンラインで共有した。Google Drive 上に保存したデータを BH 研修の英語プレゼンテーション作成時に参照し、プレゼンテーションの土台作成に繋げた。

b. プレゼンテーション作成に向けた議論

BH でのプレゼンテーションを土台に、日本語版を作成し、内容に深まりを持たせるために議論を行った。世代間交流会で発表し、地域住民や他地域の同年代の高校生と対話する為にはチャンネルを変更しなければならない。

多様な相手との対話を目指してチーム内で議論をし

ていくうちに、自分たちの中で定義がぶれている言葉に気づき、「復興」「情報発信」「震災から 10 年」ということばの使われ方には、地域住民や国内外でもどのように議論をしていけばよいのか難しさを感じていたようだ。

c. オンライン環境を活用した情報共有

COVID-19 の感染拡大による休校期間には、あらゆる方法を駆使して授業を続けた。生徒たちも、情報共有の仕方には慣れており、以下の方法を用いて情報共有を図った。

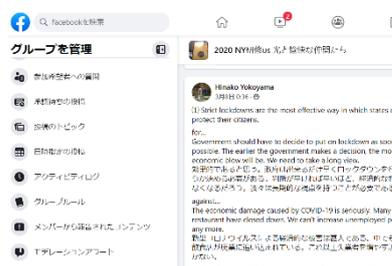
・ Google Drive

基本的に、自分たちのレポートなどを投げ込むのは Google Drive にした。



構内の教員とも共有がしやすく、教室の電子黒板などに投影するには一番簡易に使用できた。

・ Facebook



自分の投稿にコメントなどを求める場合や、ミーティングの記録をレポートとして共有する

場合、Facebook を使用した。写真と共に投稿が出来、ファイルがいくつか所に集まり、様々な投稿のシェアが出来ることも利点である。

・ Zoom

オンラインミーティングが出来る点以外にも、画面共有したプレゼンテーションを録画すれば、動画を共有し、簡単に様々な人からフィードバックを得られる。この方法を使って、AMsj Tohoku 10th Year Anniversary に出演した。次年度以降の NY 研修では、事前・事後研修として活用したり、学校や地域における成果の還元にも活用したりすることが期待される。



d. UNIS-UN working paper の summary 作成 (<https://www.unis.org/unis-un/2021-working-paper>)

ホームページにアップロードされたのが本番4日前であったため、参加生徒で訳や要約の分担をした。自分の担当した箇所は Facebook で共有し、本番直前まで議論に使用した。本番では、議論が脱線しないよう According to the working paper, などのフレーズを意識的に用いらせた。自分の意見をデータで裏付ける習慣に繋がることが期待される。

(4) 成果と課題

本事業も今年度で5年目の実施となった。うち2回はCOVID-19の感染拡大により渡航を断念することになったが、5年継続できたことについて感謝申し上げたい。

1期生から対話を重ねてくださっている国連関係者の皆様には震災直後よりこれまで10年の間ご支援を賜り、複数回お話しできた皆様には、福島県で起きたことは十分に伝わってきていると言える。

今年度はプレゼンテーションがその後の議論により繋がりやすいように工夫を凝らし、参会いただいた皆様からは賛辞が寄せられた。

しかしながら、毎年、参加生徒の主張することが似通ってきている事には課題がある。細部に差異は見られるも、高校生が情報発信や対話を積極的に行い、分断や対立・差別や偏見と闘っていかねなければならないという点は共通している。国連開発計画(UNDP)上級顧問 岸守一氏からの宿題としても投げかけられた事であるが、今後はNY研修としてのレベルアップだけでなく、本校全体として一段上のレベルを目指していかねなければならない。いかにその実現を図るのか、学校全体での更なる議論と実践深化が必要である。本NY研修のいくつかの場面からヒントを得られないかと考えた時、次の2つが浮かんだ。

まず、富岡町で住民たちを前に行ったプレゼンテーションである。東日本大震災から10年がたった2021年。「震災から10年」という言葉と共に、「節目」「区切り」ということばが散見される。本研修参加生が指摘した言葉を借りれば、「復興には、節目も区切れもない。」地域住民は特に、「区切れ」という言葉を聞くと悲しくてどうしようもない気持ちになるのだと教えてくれた。自分達が「復興」という言葉をつかうとき、どのような姿をイメージしているか。震災から10年が過ぎた双葉郡で、これまで以上に地域に根を張った実践が求められる。

また、令和2年度東日本大震災追悼復興祈念式で誓いの言葉を述べた、本研修参加メンバーの1人は、スピーチを以下のように締めくくる。

福島には未だ多くの課題が残っています。大人たちには果たすべき責任が、私たちには未来を担っていく責任があります。失ってしまったものはすぐには取り戻せません。それらを取り戻すために、私たちはずっと進んでいかなければなりません。被災した人や復興に向けて頑張っている人が偏見で苦しむことのない未来、他者の痛み寄り添える未来社会を築いていきたいと思ひます。
その責任を果たせるよう、これからを真摯に歩んでいくことを誓ひます。

本校の津波などの自然災害からいかに身を守るか、原子力災害からの復興はどのようにあるべきかについて、地域社会・国際社会に「発信」は出来るようになってきた。また、地域での前向きな取り組みについても、海外の方々が共有させてほしい・一緒に取り組もうと思ってもらえるようなアクションも増えてきている。これまで行ってきた前向きな取り組みは継続しながら、各年代の責任を自覚し、発信の仕方に工夫をこらしていく必要がある。

これまでお世話になってきた国連関係者の皆様は、本校の取り組みを様々な場で世界中の人と共有する、第三者的メッセンジャーの立場を引き受けてくださるとおっしゃった。本校はこのような支援を受け続けるだけではなく、対話にご参加いただいた国連関係者にとっての Takeaway(話し合いなどから得るもの)が無ければならない。

国連関係者でさえも、日常生活の中で micro aggression を受けたように感じることもあるのだという。原子力災害の影響が今もなお色濃く残り、更なる議論が必要な問題の山積する福島県・双葉郡には、micro aggression が向けられ続けるのかもしれない。どのような文脈で起こった状況なのか、エビデンスに基づいたものなのか、といった視点から相手の発言を冷静に受け止め、難解な議論の中にあっても声を発し続けていくことのできる人材育成の要となる研修としていきたい。

3. 4. 3 広島研修

初日は資料館と被爆者講話で被害者としての目線でヒロシマを見たのち、二日目の韓国領事館のお話からは加害者としての目線、三日目にはアメリカの視点も見ることができて、複眼的だった。被爆三世という使命感を覚えて活動している同世代の高校生と交流できたのも印象的だった。事後研修では、広島と同様「語り継ぐ主題を負ってしまった」福島の私たちは、事故からどんな学びがくみ取れるか、考察を行った。

(1) 日程・参加生徒

感染症対策のため、例年と異なる3月の研修旅行となった。12月に募集を行い、事前研修を経て3月15～17日の2泊3日で研修を行った。生徒は2年次16名参加(男子10、女子6)。

(2) 実施内容

初日は平和記念資料館を訪れ、被爆者の講話をうかがった。生徒の感想…

- ・後世に伝えていこう、という強い気持ちを感じた。ケロイドのあとや写真が、脳裏に刻まれている。
- ・人が死ぬ前の言葉は普通でない特有のものがあり心が痛んだ。
- ・爆死した子供たちの服や、最後の言葉などがつらい気持ちにさせられた。

二日目は朝に平和公園の慰霊碑を見学し、原爆ドームと爆心地も見回った。その後市内のNPO法人ANT-Hiroshimaを訪ね、午前中は駐広島韓国総領事館先任研究員・崔恩碩(チェ・ウンソク)さまより『「ヒロシマ」は韓国にいかにか伝わっているか』の講演。広島では推定3万人の韓国人が被爆し、生き残って半島に帰還された方も朝鮮戦争で苦しんだ。本土が戦禍に遭ったという点で、韓国人は広島よりも沖縄の方に関心を持っているという話に蒙が啓かれた。午後は国連ユニタールの平和大使を務めた高校3年生と交流した。



生徒感想…

- ・広島に被爆者の中にも、東日本大震災のように、積極的に語りたくない方がいると知れた。
- ・同年代の人たちが積極的な活動をし、自分の意見をはっきり提示している姿を凄いと感じた。
- ・同世代の高校生が自分の祖父母の話などで活動を始めたことが印象的だった。
- ・広島原発を作ろうという提案があったことに驚いた。

夕方は宮島を見学した。

三日目は平和公園の韓国人慰霊碑や折り鶴の塔を見学したのち、NPO法人PCVによる講話と研修の振り返り、および3班に分かれ「慰霊碑にある「過ちは繰り返しません」を達成するために何が出来るか、自分が出来るアクションとその理由」を考えるワークショップを行った。生徒は伝承の必要性、放射能差別について正しい知識を身につける、他国との友好関係などを挙げた。

事後研修では東電原発事故調査委員会の石橋哲先生をお招きした。3.11以前の非当事者意識についてはなお議論されていないという指摘を受け「ワークショップ<進撃の巨人>で考えてみる」を通じ、疑問を持つ人が例証される社会は「普通の人びと」、すなわち「私たち」が作ったことに気づかされた。

評価軸を自分の中に持つ「餓狼の自由」を選ぶか、自分の判断を他人に預ける「家畜の安寧」を選ぶかを突き付け、次の「3.11」を起こさないため、自分を変え、日本を変える＝変革者たれと訴えた。



3.5 発表 交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

3.5.1 ふくしま学（楽）会

ふくしま学（楽）会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度、オンラインで2回実施された。

第6回ふくしま学（楽）会（8月1日（土）～2日（日））

1日目は学びの場として、2日目は対話の場として、アート、廃炉、教訓をテーマとして専門家と共に本校生が発表、パネルディスカッションを行った。本校から3年生が「絵本から始まる一歩」「地域の伝統文化に関する取り組み」「廃炉を楽しくしっかりと」「私たちが伝えたいこと」について発表した。廃炉のテーマでは、難解で関心の低い廃炉について関心を持ってもらうにはどうすべきか、自身の体験を踏まえて行った実践について報告し、専門家からのアドバイスをいただいた。2日間でのべ24名の生徒が参加した。

第7回ふくしま学（楽）会（1月24日（日））

「1F 廃炉の先と地域社会」と「災害の記録と記憶の継承とエコミュージアム」を主要テーマとして発表、パネルディスカッションを行った。2年生12名が参加し「マイクラでつくる双葉郡」「エネルギーからエコロジーへ」「未来を担う人材を」「正しい情報を私の言葉で」について発表した。外部での発表や議論は初めてという生徒も多かったが、専門家に交じって意欲的に議論する様子が見られた。なお、この様子は2021年3月NHKスペシャルで放送され、全国からも注目を集めた。



ふくしま学（楽）会は本気で地域課題に取り組む大人たちと共に議論する貴重な機会である。また、生徒のテーマについて継続的にアドバイスをいただく人脈を築く場としても機能し始めている。今後も活用したい。

3.5.2 ふるさと創造学サミット

福島県双葉郡8町村の全ての小中高校では、震災の経

験を踏まえて、地域を題材にした活動を「ふるさと創造学」として取り組んでいる。具体的な内容は各学校に委ねられており、それぞれが独自に展開している。「ふるさと創造学サミット」はこの成果をお互いに発表して切磋琢磨を促し、実践活動をさらに充実させる場として毎年行われている。例年是一个の会場に全ての学校の児童生徒が集まり、盛大に行われるが、今年はコロナ感染症防止のため、全てオンラインでの実施となった。

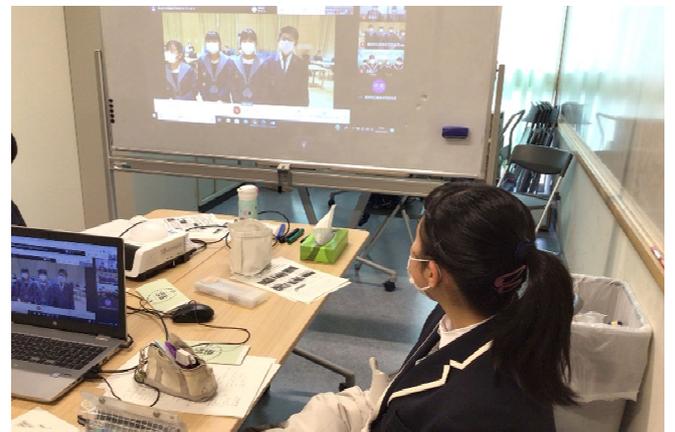
本校からは以下のテーマで中高生からの発表を行った。

○「ふしぎに感じるひと・もの・ことを調べてみました」
川内村、富岡町、楢葉町、そして本校の所在する広野町の4町村について、その地域にどっぷり浸かることを意識して探究活動に取り組み、各町村の特産物、歴史、自然等についてまとめて発表（中学生）。

○未来プロジェクト ～守りたい大切なもの～

震災時の自身の経験や反省を踏まえ、小学生と一緒にアート（絵）を通して「大切なものを守るにはどうしたらいいか」考える活動を行った様子を発表（高校生）。発表後には質疑応答が行われ、オンライン環境のなかでも積極的に質問する様子が見られ、参加した子供たちの意欲の高さが伺えた。また事後アンケートでは高校生の発表について外部聴講者から高く評価していただいた。

昼食時には、各学校の生徒会メンバーからなる生徒会連合による企画「ミライ・ふたば ～20年後の町・村・学校・自分を想像してみよう！～」が行われた。参加校で20年後の地域を題材とした記事を作成し、それを披露し合った。各学校で独自の視点が盛り込まれ、こちらも非常に盛り上がり、福島民報社でこの記事が連載されることとなった。



本サミットは小中学生と高校生とが交流できる貴重な場となっており、今後も交流の場として活用していきたい。

3.5.3 地方創生☆政策アイデアコンテスト



(1) はじめに

地方創生アイデアコンテストは、経済産業省と内閣官房が提供している地域経済分析システム (RESAS) を使い、人口動態、産業構造などを地域の分析、効果的な施策の立案・実行・検証しながら、地方創生のアイデアを出し合う場である。1期生の高橋涼花さんや佐藤勇樹さんが最終選考に選考されたことがありました。

このコンテストに出場することで、探究の調査アクションのための客観的なデータ利用を生徒に促すことができる。

(2) 実施内容

今年度は、2年次原子力防災班から、木田莞奈さんと草野真綸さんが応募しました。彼らの探究テーマは、「エネルギーからエコロジーへ〜シビックプライドを形成する環境事業の提案」です。SDGsをはじめとした環境に配慮した事業への世界的な動きに対して、今後の世界の中で、経済と環境対策の両立を目指す探究テーマであった。

残念ながら、最終審査まで行くことはできなかったが、自分たちの探究に対して客観性のある調査研究にすることができた。

双葉郡8町村とは

・広野町 ・楡葉町 ・富岡町 ・双葉町 ・大熊町 ・川内村 ・葛尾村 ・浪江町

2011.3.11の福島第一原子力発電所（以下1Fとする）の爆発により、避難を余儀なくされた地域。今もなお、帰宅が困難な地域も存在する

双葉郡に対するイメージ

食べ物安全なの？
放射線はもう大丈夫？

親に福島に行くと言われたことある
1F恨んでる？

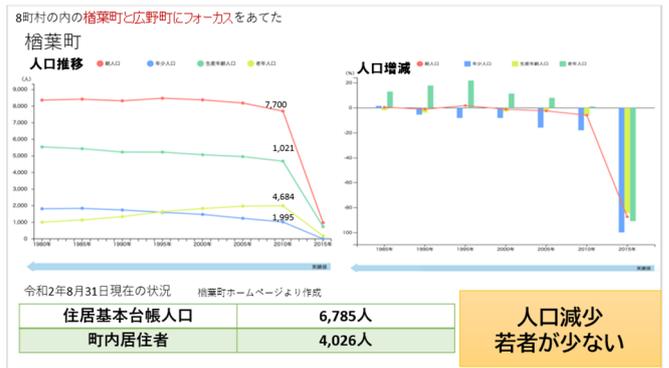
ドイツの友人

県外の高校生

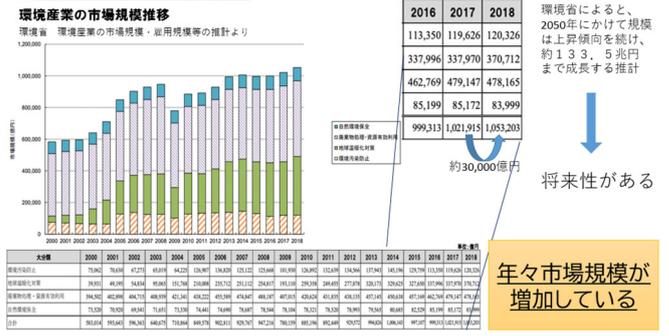
私たちの思い

- ・地元が震災前のように、子供の笑顔に溢れ、町民同士の繋がりが感じられる活気ある町にしたい
- ・1Fの爆発によってついた負のイメージを払拭したい

双葉郡をたくさんの方に知ってほしい



②環境ビジネス市場の拡大



- 商業で町おこし：増えた人口を賄うための様々な商業施設が充実
→商業従事者で人口増加
 - 交通で町おこし：増えた人口の利便性のために私鉄誘致
→福島で唯一の私鉄でより発展
 - 娯楽と観光で町おこし：工場の排熱を利用して大磯ロングビーチのような施設やホテル・旅館などの宿が可能
→県外来町者で発展
 - 農業・漁業で町おこし：プラ人口島で守られた内海で様々な養殖が可能。
増えた人口を賄うための農産は必要不可欠。
 - まだまだ町おこしになる出来事がたくさん。
シビックプライドを持つ住民参加による地方創生がカギとなる！
- 町そのものが世界に売れる

(3) 成果と課題

探究の中身そのもののクオリティも向上したが、それ以上に生徒の探究に向き合う際の考え方が向上した。印象ではなく事実を元に考察する姿勢である。さらに、新聞テレビなどのメディアに対するリテラシーの能力も著しく向上した。

今後も、RESASなどを積極的に利用しより説得力のある主張ができるようにしていく。

3. 5. 4 ふくしま浜通りHIGH SCHOOL ACADEMY (水俣研修)

広野町のNPO法人ハッピーロードネットが主宰する熊本県水俣市での研修に本校から4名の生徒が参加し、運営に本校教員も関わった。事前研修までは行えたが、コロナ禍によって訪問は叶わず、本校生徒2名が現地とのオンラインインタビューおよび冊子作成に取り組んだ。

(1) 事前研修

11月7～8日に水俣研修の事前研修が行われた。浜通りの高校生が参加し、本校の5名参加は最多であった。7日、廃炉資料館に集合し、福島第一原発の見学に入る。爆発した1号機の前で、生身でバスを降り見学できた。空間線量が100マイクロシーベルト/時を越えており、ギョッとしたが積算値は歯のレントゲン程度であった。東電による記念撮影があったが「写しちゃいけないものがあるので、後ろの方ももう少し内側をお願いします」など指示が出る。「笑ってください」とも言われたが、「事故のことを思うと笑えません」と生徒。午後は被災地のがれきや焼却灰の埋め立ての情報館、リプルンなどを見て広野のホテルへ。会議室で今回のコーディネーター開沼博氏の講義&ワークショップがあり、夕食後は「水俣で調べたいこと」のプレゼン準備を深夜2時ごろまでかかった。8日はプレゼンと副読本作成ワークショップを行った。

(2) オンライン研修

その後もYoutubeによる予習などの課題をこなしていたが、年末にコロナの感染者数の増加を受けて、12月25～26日オンラインでのワークショップとなった。残念ながら参加者が激減し、本校生2名のみの参加となった。



(ハッピーロード事務局でのオンライン研修)

(3) 成果

石牟礼道子氏の著作にも出ていた杉本英子さんのご子息・杉本肇さん(シラス漁師)や、お茶農家さんとオンラインで話を聞くことが出来た。杉本さんと生徒とのやり取りの一部を掲載する。



(お茶農家さん松本さんへのインタビュー)

Q. 活動について

水俣は被害者と加害者が同居する町。そのことで市民が誰も「水俣病」という言葉を口にしなかった。先生さえも言葉にせず、それを取り上げた活動は95年まで全くなかった。チツソからの恩恵にもあずかっていて「水俣病は水俣市民に語れない」。そのことで市民間の内なる差別が生じ、心を痛めた。94年に水俣病資料館が出来て濱元二徳さんが自主的に語り部になり、小学生・先生が聞きに来た。教育現場が「あったことをちゃんと学ぶ」重要性に気づいてきた。過去の失敗は未来につながる。「水俣はどうしたらいい？」と考えた結果、環境を破壊された水俣だからこそ環境に配慮する町になろうと考え、今に至っている。あったことをちゃんと伝える、それ学ぶことは力になる。中学生が胸を張って水俣を誇れるように。

(4) 研修を終えて

杉本さんは水俣と福島の「地方が汚された」という共通点を挙げ、おかしいと思ったら発言しなくてはいけないと指摘した。水俣が直面し、乗り越えていったさまを学ぶことで福島復興の参考としなくてはいけぬ。

3.5.5 ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では昨年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も希望のあった以下の3件を応募した。

- Make your life in a shelter better～これからの災害に備えて～（2年健康と福祉探究ゼミ）
- 富岡さくら復興プロジェクト～届け！さくらタピオカ～（3年 アグリ・ビジネス探究ゼミ）
- 風評被害なんて言わせない（3年 アグリ・ビジネス探究ゼミ）

このうち、書類選考により3年生の応募した2件が最終選考に選ばれた。最終選考会は12月19日（日）、コラッセ福島（福島市）で行われ、県内の11件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。



審査の結果、「富岡さくら復興プロジェクト～届け！さくらタピオカ～」が最優秀賞、「風評被害なんて言わせない」が最優秀賞に次ぐ入選、および福島大学アドミッションセンター長賞を受賞した。なお、最優秀賞をはじめとするこれらの受賞は、本校としては昨年に続き、連続受賞となった。

発表会后、受賞した2つのテーマを実践した生徒が県知事を訪問する機会をいただき、知事へ探究活動について報告した。また地元の富岡町も訪問し、町長にも今回の成果を報告することができた。これらを通じて本校の



活動を周知し地域の復興へ微力ながら貢献することができた」と捉えている。

3.5.6 ふたばアワード

本校では生徒研究発表会をはじめとして学年ごとに複数の発表会を行っているが、学年縦断の取組は限定的である。そこで学年間の垣根を取り払い、交流の少ない生徒同士の学びの場を提供するため、校内の発表会を「ふたばアワード」と命名して開催することとした。

ふたばアワードを行うにあたっては、カタリバが実施している「マイプロジェクトアワード福島 summit」の校内予選という位置づけで実施した。これにより、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定することとした。

本アワードには高校1年生～3年生まで17件の応募があった。自発的に探究活動を行っている1年生から4件の応募があり、早期に探究に取り組む生徒が増加している傾向がみられる。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、故クリエーション、ラーニングの観点で行った。

実施日：令和2年11月23日（月祝）終日

内容：予選（4会場の分科会での口頭発表）、決勝（各分科会の最優秀者による口頭発表）、振り返り、審査
審査員：平山勉氏（双葉郡未来会議代表）、菅波香織氏（未来会議事務局長）、本校教員4名、カタリバ4名
結果的に決勝に進んだのはいずれも3年生の発表となった。決勝の審査についてはかなり紛糾し、いずれも甲乙つけがたい発表であったが、最終的に「富岡さくら復興プロジェクト～届け！さくらタピオカ～（3年 アグリ・ビジネス探究ゼミ）」が最優秀に選定され、福島 summit への優先出場権が与えられた。また後日、この発表も含めて7件が福島県 summit に出場することとなった。

今回は選考会という観点だけでなく、生徒同士の学びを重視した。会の前後では学年を超えて対話する時間を設定した。ここでの発表後、お互いの活動に協力し合う様子も見られ、交流の契機となったことが伺えた。



3.5.7 マイプロアワード福島 summit

マイプロアワード福島 summit は全国 summit に向けた福島県予選として、今年度初めて開催される「学びの場」である。本校から校内予選である「ふたばアワード」によって選出された7件について応募し、全員が書類選考を経てそのまま参加した。

実施日：令和3年1月31日（日）終日

実施形態：オンライン（本校生は全員学校から参加）

発表数：40件

本校からの発表テーマ

○障害や難病と共に 学校や社会でみんなが笑顔で過ごす為には（1年）

○Let's cheer up ふたば！！ ～双葉郡から芽生える未来～（1年）

○炒り豆に花が咲く～人と地域に花咲プロジェクト～（2年）

○正しい情報を、私の言葉で（2年）

○未来プロジェクト（3年）

○富岡さくら復興プロジェクト～届け！さくらタピオカ～（3年）

○献血で変えられる～地域×高校×献血～（3年）



Summitは「審査の場」と「学びの場」に分けて実施された。審査については事前に提出した動画により行われ、審査結果は、当日は発表されなかった。summit当日は「学びの場」としての取組が行われた。発表生徒は分科会に分かれて自分のテーマを発表し、ファシリテーターの司会のもと、お互いの発表をベースに質問やコメントを切り口として深堀を行った。分科会終了後、振り返りもファシリテーターの誘導のもと、丁寧に行った。また閉会後のアフタートークセッションについてもほぼ全員が参加し、summit全体を振り返った。

後日審査結果が発表され、本校の「富岡さくら復興プロジェクト」が福島県代表の一つとして選出され、全国 summitへ参加することとなった。

3.5.8 Glocal High School Meetings 2021

地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型指定校として、全国高等学校グローバル探究オンライン発表会に参加した。

昨年度までのSGH全国高校生フォーラム(@東京国際フォーラム)にも、WWL指定校やグローバル指定校が参加していたが、今年度からは本校もグローバル型指定校として参加することとなった。

今年度はCOVID-19の感染再拡大に配慮し、Zoomを活用したオンライン発表会の形をとった。日本語発表と英語発表の2部門に分かれ、本校からはそれぞれに1プロジェクトずつがエントリーした。

(1) 実施内容と成果

参加校は事前に発表の様子をZoomで収録した動画の送付と、発表の要旨の提出を求められた。提出された全参加校のデータは、幹事校の名古屋石田学園 星城中学校・高等学校のご尽力により

<https://www.seijoh.ed.jp/glocalhsm/> に日本語英語とも分科会毎にアップロードされた。参加校の教員と生徒は分科会の動画を審査し、投票を行った。各分科会から、金・銀・銅賞が選出され、金賞の中でも優れたものには、文部科学省初等中等教育局長賞をはじめとする特別賞が付与される。

本校の結果は以下の通り。

日本語発表部門 金賞

文部科学省初等中等教育局長賞

富岡さくら復興プロジェクト～届け！さくらタピオカ

英語発表部門 銀賞

One step toward sustainable communities starting from a picture book





(2) 今後の展望と課題

金賞受賞者の発表概要は以下の通り。

地元である福島県双葉郡富岡町は桜が有名である。しかし東日本大震災、福島第一原子力発電所事故以降、帰還困難区域などに指定されたため人が住めなくなり、2017年に大部分が解除された後も戻る住民が少ない状況が続いている。私は未来のまちづくりのために若者の力が必要であると感じ、富岡の桜をイメージした『さくらタピオカ』の商品開発を行った。コロナ禍により地域の様々な取組が中止になる中、諦めずに地域の方や同級生と協働して実践を進め、委託販売や合同イベントの開催を実現した。またエシカル消費や、福島版のデポジット制の検証も行った。さらにオンラインの場を活用して自分の活動や復興の姿を伝え、若い世代や他県の人にも富岡町への興味関心を高めることができた。現在では地元のカフェにて『さくらタピオカ』の定番メニュー化に成功し、今後の復興を担う存在として地域貢献したいと考えている。

日本語発表に対する審査コメントには、賞賛の声が多く見られた一方で、今後いかにグローバルな広まりを見せられるかが課題であると指摘する声もあった。

また英語発表に対しては、地域における積極的な活動に好感を持った審査コメントが多い。一方、子どもたちに震災の絵本を作り、読み聞かせる探究活動の中で、実際の読み聞かせと子どもの変容をとらえきれなかったことには課題が残った。

次年度以降は実際の発表会場において、参加者間の発表後の議論の深まりが期待される。グローバルという言葉の語源の通り、日本語と英語の発表が入り混じり、多様な文化背景を持った人々を巻き込んだ議論の中で積極的に提言していくことができるよう、指導をしていくことが求められる。

3.6.9 第20回福島県総合学科研究発表会

(1) はじめに

福島県総合学科研究発表会は、総合学科での学びの集大成の場である。本校を始めとして、県内で総合学科を設置している福島北高等学校や、会津学鳳高等学校など計8校が参加した。

今年度は、令和3年1月15日に福島県立相馬東高等学校で開催予定であったが、COVID-19の感染再拡大に配慮し、事前に撮影をしたVTRによる審査が行われた。本校からは、口頭発表部門に1発表、展示発表部門に2発表がエントリーした。

(2) 実施内容

【本校からの発表テーマ】

○口頭発表部門

浜通りの魚をなめんなよ（3年生）

○展示発表部門

バナナ×脱プラスチック（2年生）

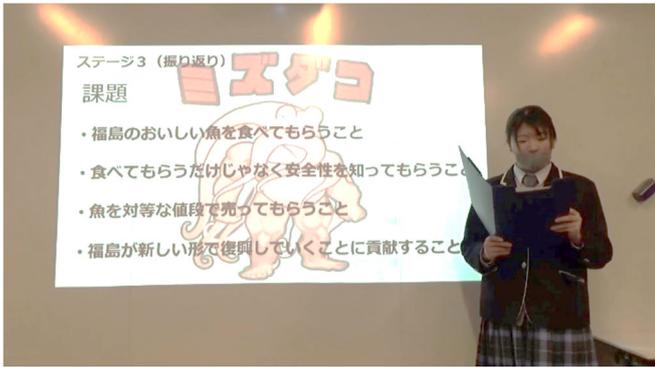
Local Wedding（2年生）

パワーポイントを用いる口頭発表部門では、福島県産のヒラメと相馬産の塩こうじ・味噌を使った「FISH PROTEIN（フィッシュプロテイン）」という商品開発を行ったTNさんが本校の代表として発表を行った。

目的 ・海について知ってもらう ・開発商品（FISH PROTEIN）の試食		ターゲット ・学生 ・アスリート ・ダイエットしている人など
FISH PROTEIN ・原料はヒラメ ・運動後に食べることを想定 ・タンパク質多め	特徴 ・サラダチキンのような食感	商品開発 ・「SEVEN SEAS」というグループを結成し、そこで商品を開発。

（「FISH PROTEIN」試食会の様子）





展示発表部門では、高校2年生3名が本校の代表生徒として発表を行った。広野町の新たな特産品として注目されるバナナの葉を用いた脱プラスチック包装プロジェクト、地元ならではの結婚式をプランニングする「Local Wedding」、といった地域の特色を生かした取り組みを発表した。

(3) 成果と課題

本校からエントリーした3件の探究活動は、優良賞を頂いた。残念ながら優秀賞・最優秀賞には届かなかったが、生徒にとって総合学科研究発表会は、これまでの活動を客観的に振り返ることができる良い機会となった。特に高校3年生にとっては2年間にわたる探究活動の集大成を発表できる貴重な場となった。

しかしその一方で、今年度はCOVID-19の感染再拡大を防止する観点から対面での実施が不可能であったことで、他校生の取り組みを学んだり、他者との交流を通して新たな視点から探究活動を考えたりする機会を確保することができなかった。中通り、浜通り、会津三地域の高校生が交流することのできる数少ない機会を、今後も活用していきたい。

3.5.10 長崎県立長崎南高等学校との交流

(1) はじめに

コロナ禍の中、当初予定したシンガポールへの修学旅行を国内に変更することになった。その様な中で、長崎県立長崎南高校が、令和3年3月に双葉地区を修学旅行先として計画しており、学校間交流の申し出があった。

本校としても、福島第一原子力発電所の事故による被害からの復興を大きなテーマとしているが、原子爆弾の被害から復興を果たし、平和のシンボルとして世界に存在を知られる長崎を知ることが本校生にとっても大きな学びになると考えた。

(2) 長崎修学旅行について

【1日目】

○無窮洞見学／針尾送信所見学

第二次世界大戦時に子供たちによって掘られた地下教室や、旧日本軍により4年の歳月をかけて作られた針尾無線塔に訪問し、平和学習を行った。

○ハウステンボス

ハウステンボスでSGDsに関する取り組みと講義を受けた。

【2日目】

○長崎原爆資料館／平和公園

昭和20年8月9日午前11時2分。広島原



爆投下から3日後、長崎市内の浦上地域上空で原子爆弾が炸裂し、約15万人の人々が命を落としました。ここでは、被爆の惨状をはじめ原爆が投下されるに至った経過、被爆から現在までの長崎の復興の様子等が展示されています。戦争の遺品を見る生徒たちの眼差しは真剣そのもの。戦争と平和について考えるよいきっかけになったようでした。

核の平和利用と兵器としての原子爆弾という両面を考えることが出来、核兵器被爆国であり、原子力災害の被曝国として、よりよい社会の実現と平和の尊さを伝えていきたいと思いました。



○長崎市内班別研修

長崎駅前から班別自主研修がスタートしました。昼食時間ぐらいの解散でしたので、中華街で食事を摂り、路面電車を乗り継ぎ、それぞれの見学場所へ向かう生徒が多かったようです。グラバー園、大浦天主堂、オランダ坂、出島、眼鏡橋等を回り、様々な表情を持つ長崎の街を景観を楽しみながら散策しました。



【3日目】

長崎南高校訪問／交流

本校生が吹奏楽部の演奏に合わせて入場し、各学校の紹介をした。その後、長崎南高校の放送部・新聞部の皆さんが、「戦争を語り継ぐ」をテーマに、作家の林京子さんの「空き缶」という作品の朗読をしてくださいました。

そして最後にグループに分かれてのアクティビティを行い、お互いの親睦を深めました。

長崎南高校の生徒の皆さんの交流企画の準備から運営まで非常に素晴らしく、非常に充実した交流会を行うことができました。

(3) 成果と課題

長崎の高校生は、一人一人が原子爆弾による被害について自分の言葉で語ることが出来、しっかりと平和に対して伝え続けていく意志を持っており、本校生は非常に刺激を受けることができた。双葉郡が抱える多くの課題を、自分の言葉として伝えていけるようにしたい。

3. 5. 11 社会起業部の活動

社会起業部 学校交流 概要

他の地域の方々に双葉郡の現状や課題を理解してもらう活動は、風評被害の払拭等につながるため重要である。今年度はコロナ禍で著しく活動が制限されたが、様々な校内での販売活動やオンラインでの交流会など、これまでにない活動に取り組むことができた。また、対面での交流会や外部イベントが中止となったため、生徒自身が震災及び地域での現状などを改めて学ぶ機会を作ることができた。そのせいか、その後に行われたオンラインでの交流会では、以前より多面的な視点で対話をすることができるようになった。

オンラインの交流会では震災当時の状況や本校の開校の経緯、地域課題への取組等について生徒自身が説明し、地域を理解してもらう一助になった。

この活動を行うにあたり、公益法人協会「東日本大震災 草の根支援組織応援基金」を活用した。

(1) はじめに

本校社会起業部では、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故により、少子高齢化の加速化、顕在した双葉郡の地域活性化に取り組んでいる。コロナ禍で大幅に縮小したが、それでも開催された地域のイベントに参加している。また、福島県内外の高校生を招き、復興への取り組み状況等を発信する予定であったが、コロナ禍で、中止を余儀なくされた。しかし、例年と比べると少ない回数ではあるが、高校生同士の交流会をオンラインで実施した。双葉郡からの発信により、風評被害の払拭に努める努力は維持することが出来た。また、東京の慶応大学の生徒と協力し、福島県の現在を伝える写真を募集し、その写真を集めてモザイクアートを作るなどの活動を主にオンラインでのやり取りで行った。



(2) 実施内容

震災当時の状況や本校の開校の経緯、地域課題への取組等について説明を行い、他校生との意見・情報交換を行った。オンラインでの交流会に参加した学校は以下の通りである。

- 9月18日(金) 福島県立白河高校
- 11月14日(日) 白河高校 白河旭高校
(含む東京在住の大学生)
- 12月27日(水) 神奈川県立横浜緑ヶ丘高校



(3) 成果

社会起業部は「地域を知る、伝える、盛り上げる」をテーマに活動しており、オンラインでの活動を余儀なくされた一年であった。その分今年度は地域を知る活動に重点を置いた。背景には新しく部員となった生徒の中には震災時の年齢が低く震災の追体験が必要であるということがあった。他校との交流会の数は例年と比べ激減したが、その分地域内での自主研修活動を充実させたり、少ない回数の交流会に十分な時間をとって準備することが出来た。それにより、生徒たちは自分たちが学んだものを発信したいという気持ちが強くなると同時に、それを伝えるためのスキルも確実に蓄積した。



(4) 課題と展望

次年度以降は、震災時幼少だった生徒たちへの教育プログラムをより発展させることと、現在生徒たちに胸の内に膨れ上がる、伝えたいという思いを発露させる体験を充実させることにより、さらなる発信力を身につけてさせることである。それにより、福島の風評被害払しょくに少しでも貢献していきたい。

3.5.12 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、子供たち向けのイベント開催など、生徒主体で活動している。

(2) 実施内容

今年度の社会起業部カフェチームは、コロナウイルス感染症の影響により様々な影響を受けながら活動をおこなった。生徒が自宅待機のため部活動の組織作りの時間を設けることができなかつたが、ZOOMによるMTGを重ね生徒間のコミュニケーションが取れるようにした。また今後の活動内容について情報共有を図った。

(3) 成果と課題

社会起業部の活動目標である地域のイベントに参加し、盛り上げるとともに、福島県内外の高校や研修先へ赴き、復興への取り組み状況等を発信し、風評被害の払拭に努めたかったが、地域のイベントがコロナウイルス感染症予防のため相次いで中止となり、校内での限定的な活動となった。

校内での活動では、外部の来訪者はなかつたが、地域コミュニティのあり方について学び、コーヒーを淹れるスキルや接客マナーを学んだ。また、新商品の開発を試み、広野町のバナナ「綺麗」を使用したバナナマドレーヌをスペシャリスト農業が製造しカフェで販売した。現在は定番商品となり地域の魅力発信に役立っている。コミュニティカフェについて深く学ぶため、久之浜町、富岡町で研修をした。特に富岡町「コミュニティカフェ茶 cha」では、プレオープンから携わせていただき、毎週日曜日に生徒が接客の学びをさせていただいている。

コロナウイルス感染症対策をしながら、10月ハロウィンイベント、12月クリスマスイベントを開催することができた。生徒は企画・実施・振り返りを学ぶことができた。

10月東京大丸百貨店「発見！ふくしま」キャンペーンに、スペシャリスト農業が製造した焼き菓子詰め合わせと木戸川の鮭フレークを委託販売した。焼き菓子詰め合わせには、本校中学生が広野町の特産品のみかん、楡葉町の特産品ゆずを材料にして、牛乳パックを原料にしたハガキを同封してメッセージの発信を行った。

今後の課題としては、次年度の地域イベントへの参加

は不透明である。今年度と同様の活動範囲となることが予想されるが、地域情報発信のためネット販売を予定している。カフェオリジナルブレンド「ふうブレンド」のドリップオンとバナナマドレーヌの詰め合わせ企画している。

生徒の学びが継続できるように、様々な工夫をしながら、来年も「3密を避ける」等、感染予防策を徹底しながらの活動をしなければならない。

カフェ以外では、今後復活するであろう地域の活動に積極的に参加したり、他校との交流会を積極的に実施していきたい。他校との交流会では、双葉郡をこちら側が深く知ることによりこちらからは積極的に発信する力を蓄えているところである。また、現在は広野町の散歩用のマップを作成したり、写真で現在の様子を発表したり、など様々な形での発信を考えている。



第4章

カリキュラム・マネジメント

4. 1 未来創造探究プロセスの開発と教員の関わり方

【探究プロセスと生徒の態度変容】

探究学習は、現代的な諸課題に対して求められる資質・能力の育成の場となり、主体的・対話的で深い学びができるようにする必要がある。それを達成するために、探究を担当する教員すべてが把握しやすい本校独自の指標としての「未来創造探究プロセス」とそれをより効果的に進めることができる「教員マニュアル」が必要だと考え平成31年度より進めている。

作成の大きなポイントとしては、視点を「学習者（生徒）中心におき、生徒は自発的に進む探究者」とし、教員は、生徒の探究のステージに応じて、インストラクター、ファシリテーター、*ジェネレーター、メンターと役割を変えて生徒の学びを加速させるものにするのであった。

探究のカリキュラム開発の際に、生徒の探究学習が効率的に加速するようにアクセラメンツを導入した。アクセラメンツは、Peter Klein 博士とアメリカの Paul R. Scheele 博士が開発した学習カリキュラム作成のための方法論である。学習者は①受容的に物事を吸収するステージ、②生成的に仮説を立てるステージ、③持続的に検証を行うステージという3つのステージを経験する。その要素を基に以下のような「未来創造探究プロセス」を作成した。

未来創造探究プロセス							
	Stage1	Stage2(1)	Stage2(2)	Stage3			Stage4
	問題発見 課題設定	現状分析	解決仮説	解決アクション① 考察 新たな課題	解決アクション② 考察 新たな課題	解決アクション③ 考察 新たな課題	考察 論文作成 進路実現
探究内容	問立て 目標設定 研究動機 哲学対話	調査 調査のためのアクション 整理・分析	解決のためのアクション仮説 構造化し他の問題・課題との関係 性を知ること	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	考察 論文作成 提言 進路実現
協働／個別	協働で行うと良い段階			プロジェクトごとに個別で行うべき段階			
探究段階	調査研究			解決のためのアクションと考察			考察と論文
			プレ発表会		中間発表会		未来創造探究発表会
カリキュラム 段階	産社／2年次生前期		2年次生後期		3年次生前期		3年次生後期
具体的行動	【調査のためのアクション】 文献調査／インターネット等を使った調査 アンケート調査／フィールドワーク 諸団体との共同調査			【解決のためのアクション】 実験／プロジェクト実施／大学との共同研究 企業との共同研究／行政との共同プロジェクト ／プロジェクト実施のための資金準備等			論文作成 セルフエッセイ完成 進路実現
	【考察】 輪読・読書会 生徒同士でのディスカッション／教員とのディスカッション			【考察】 報告・発表を通じたフィードバック／教員とのディスカッション 仮説と実施結果の比較／学会等によるフィードバック			
生徒の態度 の変容	受容的態度 (Be Receptive)		生成的態度	持続的態度			
	生成的態度 (Be Generative)		受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度
	持続的態度 (Be Persistent)		持続的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度
総合的な学習 の時間							
総合的な探究 の時間							

ここで大きく改善したことがもう一つある。これまでの探究の中で、生徒に対して、実社会に出てアクションを起こすことを促していたが、現状を把握するためのアンケート調査などと地域行政への提言というようなアクションでは質的に違うため、前者を「調査アクション」、後者を「解決のためのアクション」と区別しプロセスの中に入れたことだ。設定した課題に対して、しっかりした調査を行うことで、課題に対する仮説を生み出し始める。そのアイデアをしっかりと形にし、今度は実社会でそれを検証する。そこから得られたフィードバックを生かし、さらなる仮説検証を行う。この探究プロセスは、教員だけでなく生徒自身が見ても、自分自身が今どのステージにいるのかが明確に分かる。

生徒の態度変容に着目すると、それぞれのステージでの適切な関わり方がわかる。教員はそれを適切にモニタリングできるように、生徒それぞれの知性、生徒の探究の進み方、生徒の探究を止めてしまう事象などを意識し、適切に関わる必要がある。それを構造化したものが次の表である。

生徒の探究取り組みステージと態度変容						
生徒の探究に対するあるべき態度の変容	Be Receptive (受容的に正確に物事を吸収するステージ)		Be Generative (生成的に仮説を立てるステージ)		Be Persistent (持続的に検証を行うステージ)	
	生徒思考・行動	担当者のかかわり方	生徒思考・行動	担当者のかかわり方	生徒思考・行動	担当者のかかわり方
生徒の各変容フェーズにおける望ましい具体的態度や行動	①Think Flexibly ①柔軟に考える	意見が自由に出るような雰囲気づくり	①Seek Complexity ①自分の探究以外のこととの関係を探す	構造的に物事を見れるようなアドバイス	①Take Risks with Courage ①勇気をもってリスクをとる	アクションすることに対する背中押し
	②Inquire ②詳細に探究し、様々なところから情報を引き出す	正確な情報収集・分析への厳しい指導	②Think Fluently ②アイデアが溢れてきたら、流れ続けるだけ考え、記録する	意見が自由に出るような雰囲気づくり	②Imagine ②より良い未来を想像し続ける	未来ビジョンを常に意識させる言葉かけ
	③Access Expanded Brain ③直感を無視しないで積極的に活かす	確でも受け入れられる雰囲気づくり	③Oribitate ③人と違うことを楽しむ	他の人との違いを理解し楽しめる雰囲気づくり	/	/
			④Elabrate ④アイデアを細部にまでこだわり洗練させる	緻密にアイデアを熟成させるような指導		
探究フェーズ(簡易版)	探究フェーズ1 (仮テーマ設定)		探究フェーズ2 (本テーマ設定)		探究フェーズ3~4 (プロジェクト実践と考察)	探究フェーズ5 (まとめと論文)
	問題と課題設定 現状を正確にする		現状を他のこととつなげる 課題解決の仮説を立てる		プロジェクトを実施する フィードバックをかける (繰り返す)	
教員の役割	インストラクター		ファシリテーター ジェネレーター		メンター	

生徒は、探究者として課題に対して“受容的に正確に物事を吸収するステージ”では、印象ではなく正確に事実をとらえ客観的に考える必要があるため、教員はインストラクターとして厳しく接しないといけない。“生成的に仮説を建てるステージ”では、アイデアをどんどん出したり、似たような事例を参考にしたりと発想力が重要になるため、教員はファシリテーターとして生徒のアイデアを引き出し、ジェネレーターとして生徒の中に入り一緒にアイデアを出していく役割になる必要がある。そして、実社会で“持続的に検証するステージ”では、生徒の背中を押してあげられるメンターになることも必要である。この態度変容については、明確にステージごとに変化するわけではなく、もっと小さいサイクルでも起こる。教員はそれをしっかりとモニタリングし、適切に関わり続けるといけない。

【今後の課題】

今後の課題であるが、教員すべてが生徒をしっかり支援するための知識と見取りの力を伸ばす必要がある。ガードナーの多重知性（論理・数学的知能／言語・語学的知能／視覚・空間的知能／身体・運動的知能／聴覚・音楽的知能／対人的知能／内省的知能／博物学的知能）でも述べられているように生徒一人一人知性が異なる。探究活動は生徒により進められるからこそ、その生徒に合った切り口が見いだせると大きな一歩となり得る。また、学習に対する感覚も Visual (視覚優位) Auditory (聴覚優位) Kinesthetic (体感覚優位) と異なる。生徒に対するアドバイス、理解を促す説明、フィールドワークが効果的なのか文献調査が効果的なのか等、生徒に応じた対応ができることがより効果的な探究指導ができる。

教員の見取りに関してだが、生徒が探究を進めていく中で様々な障害によって停滞してしまうことがある。アクセラメンツの中で学習（探究）をブロックしてしまう要因についても Paul R. Scheele 博士はつぎの3つを述べている。①物理的な限界、②情報やリソースの欠如、③選択肢が多すぎることによる混乱である。生徒の探究の進み具合についても見取り、停滞している場合は何が障壁になっているのかを知り、教員で共有し、適切などころから適切なアドバイスができるようになることでより組織的な探究指導ができるよう改善が必要である。

*ジェネレーター：慶應義塾大学の井庭崇先生が作った概念。自ら面白がりながら創造・探究を進め、周囲も巻き込んで刺激・誘発しながら、みんなで成し遂げてしまう人。

4.1.1 探究学習の指導方法

4期生の探究学習（平成30～令和2年度）の3年間の指導を振り返るために報告書をまとめた。今回の報告書は認定NPO法人カタリバ主催の「マイプロジェクトアワード2020 全国伴走者フォーラム」で報告した内容（テーマ：探究の「やる気スイッチ」はどこにある？）を一部改変させていただいた。

【キーワード】「出会い」、「複数の視点で」、「ブランド・ハップンスタンス」

1. はじめに

先述の全国伴走者フォーラムで話をするきっかけを双葉みらいラボ拠点長の長谷川勇紀さんからいただいた。今回のフォーラムで発表をする方々の多くは全国のマイプロ常連校で探究活動を主導する先生方である。そのため、今回の発表では私の立ち位置は①3年間学級担任として生徒たちの学びを伴走した教員としての立場、②企画研究開発部員としての立場、③校内の6つの探究ゼミのうち、メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下MCゼミ）のゼミリーダーとしての立場の3つである。

2. テーマ設定と仮説

(1) テーマ設定の理由

今回のテーマ設定の理由はクラスの生徒の成長である。日常生活を享乐的に楽しむ普通の高校生が未来創造探究の学習に没頭して急成長を遂げ、専門学校から大学へと進路を変え、ふくしま高校生社会貢献活動コンテストで最優秀賞を受賞するまで成長した。この生徒の身に何が起きたのか、彼女を変えたのは何なのか、その原因を探りたいと思ったのが直接的なきっかけである。そこから、探究学習がうまくいった生徒と探究学習がうまくいかなかった生徒の差はどこにあるのかなど探究学習の指導方法について、つなげていきたいと考えた。

(2) 仮説

生徒が探究学習をすすめる上で効果的な伴走（教員側からの働きかけ）の仕方について、2つの仮説を立てた。

仮説1：生徒のモチベーションを上げるために、教員側からの働きかけが必要。

仮説2：生徒の働きかけには適切なタイミングが大事。

以上、2つの仮説を明らかにするために、2つの手法を用いて、この仮説を検証することとした。

① 生徒インタビュー

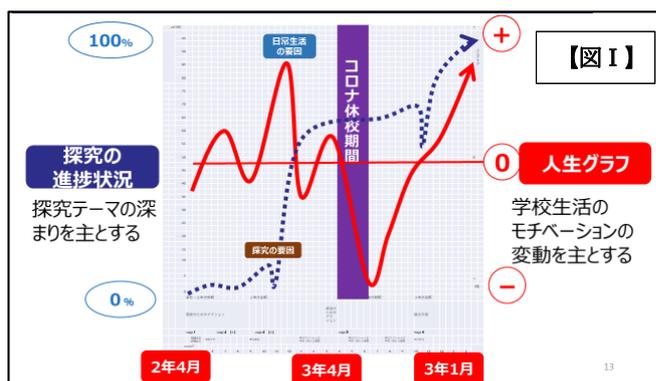
探究学習を終えた生徒からインタビューを実施し、探究学習がうまくいった要因を分析する。

② 3年間の伴走を終えた教員から聞き取り（MCゼミ）

生徒の伴走を振り返り、生徒インタビューの内容をMCゼミの教員で解析する。

(3) 生徒インタビューの分析方法

探究がうまくいった生徒を5名抽出し、インタビューする前に2つのグラフを書いてもらった。【図I】



① 探究学習の進捗状況と時期（フェーズ）の関係（左側の軸）についてグラフ化してもらった。点線の曲線が探究の深まりの変動を表す。探究学習が一気に進んだときは曲線が上昇し、停滞もしくは迷走（テーマ設定の変更）は曲線が下降する。

② 学校生活のモチベーションと探究活動の進捗状況の相関関係（右側の軸）について分析するために、人生グラフを書いてもらった。真ん中の0がニュートラル（中立）で実線の曲線が上に行くほど快、下に行くほどストレスを感じていた時期を示す。

②の項目を今回の分析にあえて入れた理由は、担任（学年）として3年間生徒を継続して指導してきたので、生徒の学校生活のモチベーションと探究活動の因果関係について分析を試みたいと考えたからである。

未来創造探究の授業はふたば未来学園高校の教育活動の根幹に位置づけられているが、実際の高校生活ではそれだけに時間をかけるわけにいかない。部活動に取り組む生徒もいれば、高学年になるほど自分の進路を模索する時期であるし、自分の進路を実現するための受験勉強など様々な時間を使うことになる。そのため、限られた3年間をどのように使ってきたかを総合的に見取ることができるのが担任としての関わり方である。この2つのグラフを見ながら、グラフの原因となった出来事について、探究学習の当事者である生徒からインタビューをするという方法をとった。

3. 仮説の検証

(1) 生徒アンケート分析

事例1) K・M (アグリ・ビジネス、ゼミ以下ABゼミ)

4-1-1 事例1

キーワード
コーディネーション

生徒情報

Kさん(アグリ・ビジネスゼミ)

→私立大学に推薦入学(総合型選抜)【ロコモデザイン系】
→2021年地域の協働による高等学校教育改善推進事業(グローバル型)
オンライン発表会日本語発表部門 金賞・文部科学省初等中等教育局長賞
→ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト最優秀賞(2020年12月)

2担

3担

福祉系

インタビュー解析

探究+ : 協力者の存在
(地域の方、大学教授、ゼミの先生)
農工商福祉連携

探究- : コロナの活動停滞

モチベ+ : 友人関係+広島研修

モチベ- : 友人関係

- ＜探究学習のプラス要因＞
- ① 2年7月の「ヒューマンライブラリー」
 - ② 2年3月の千葉商科大学の教授・学生さんとの接続
 - ③ スペシャリスト系列の連携
 - ④ 2年次後半からの高野先生の関わり

①では、大熊町復興支援コミュニティ支援担当の佐藤亜紀さんから話を聞いている。探究学習が2年4月より始まり、7月は探究ゼミが決定して仮テーマを決めている時期である。自分なりに仮テーマや問いを言語化することを模索するタイミングに地域で活躍する「カッコいい」大人に出会う事が重要である。この生徒は、この時の出会いから「私も地域のために何かしたい」というモチベーションが高まったと回答している。

②では、高野先生の授業で商業系列の授業のために、千葉商科大学の教授・学生を外部講師として招聘し、Aゼミ担当の小松先生が「偶然に」生徒と接続させた。ここで、カフェ経営の視点を付与されている。

③では、ABゼミのメンバー編成である。この生徒は福祉系列の生徒だが、ABゼミには農業・商業・福祉系列の生徒が混在している。普段は別々の専門授業を動いているが、系列の多様性から思わぬアイデアが生まれることがある。

④では、③と関連して、商業科の高野先生が彼女の探究にビジネスの視点を付与してくれた。ただ、高野先生と生徒の関わり方は知識を与えるインストラクターとしての関わりではなく、生徒に問題点や今後の展望などに関する問いを引き出すファシリテーターとしての関わりをしていた。他の生徒とも共通する事として、生徒自身に「自分の口で語らせる」ことを徹底して指導していた。

事例2) N・A (MCゼミ)

4-1-2 事例2

キーワード
「それ、やれるよ!」

生徒情報

Nさん(MCゼミ)

→国立大学に推薦入学【理工学部】

1担

M

アカデミック

インタビュー解析

探究+ : 協力者の存在(地域の方)
校外研修(ベラルーシ、広島)

探究- : コロナの活動停滞

モチベ+ : リモート授業

モチベ- : 苦手教科・部活

- ＜探究学習のプラス要因＞
- ① 協力者の存在：カタリバ三苦さん
 - ② 2年7月の「ヒューマンライブラリー」
 - ③ 2年12月の不動岡高校の「福島学宿」での交流
 - ④ 福大の総合型選抜入試

①では、カタリバの三苦さんとの関わりが重要である。積極的に話を聞いてもらっただけではなく、本人が「次に何が必要かを自分で考えさせてくれた」「何が大事か書き出してみよう」と指示を出してくれた」と述べている。事例1④同様に、自分のやりたいことを「明確に言語化できるように引き出す技能」は探究学習がある程度進展してきた局面にこそ必要になると思われる。

②と③については、地域の人材である小松理度さんとの出会いが大きい。2年7月のヒューマンライブラリーで小松さんの話を聞いた。彼女の探究テーマは風評被害と障がい者差別の共通点を探ることであったが、当初MCゼミの教員たちは「両立は不可能だから、どちらか片方にした方がよいのではないかとアドバイスしていた。そのことを小松さんに相談したところ、「両者には共通の構造があると思うから、そのテーマはいけるよ」と言っていただいた。本人はそこから、本格的にテーマを深めていった。また、③では再び小松さんがプロデュースするイベントに自分から参加した。なお、冬季課外の時期であったが、「その時の出会いを逃してはいけない」との思いで参加したことが探究を大きく進めることとなった。

④福大の総合型選抜直前の段階では、探究発表会のプレゼンが未完成的な状態だった。受験に必要なプレゼンをまとめるために、数多くの先生からのアドバイスをいただき、データの使い方や仮説と結論とのつながりなどがより明確になった。探究をすすめる上で、アウトプットの機会は内容の精度を上げる重要な活動と言える。

事例3) I・R (MCゼミ)

4-1-3 事例3

キーワード
「奇跡」の「再会」

生徒情報 **Iさん(MCゼミ)** M 福祉系

→私立大学に推薦入学(総合型選抜)【アート系】 将来は小学校の先生になりたい

インタビュー解析

探究+：校外研修(TP※、広島、NY)
協力者の存在
(小学校の恩師、学外の方、ゼミの先生)

探究-：コロナの活動停滞

モチベ+：校外研修、

モチベ-：夏休み楽しすぎて…

※TOMODACHIプロジェクト

事例4) H・M (ABゼミ)

4-1-4 事例4

キーワード
「仲間が増える」

生徒情報 **Hさん(アグリビジネスゼミ)** 2担 3担 商業系

→専門学校に推薦入学【美容系】

インタビュー解析

探究+：校外研修(ドイツ、広島)
農工商福祉連携

探究-：特になし

モチベ+：一緒に探究する仲間

モチベ-：コロナ

- ＜探究学習のプラス要因＞
- ① 2年夏休みの TOMODACHI プログラム
 - ② 広島研修と NY 研修
 - ③ 蟹江杏さんと小学校の恩師との再会

①～③の前提として、小学校3年生(2011年)の原体験が大きい。東日本大震災発生直後に、アーティストの蟹江杏氏のワークショップを小学校で行い、アートは楽しいものという記憶をずっと持ち続けていた。

①2年次に夏休みの TOMODACHI プログラムに参加し、カリフォルニア大学バークレー校で、壁画アートについて学習した。そこからアートでコミュニティの再生を図るプロジェクトについて学習した。

②では2年次11月の広島研修で広島平和記念資料館を見学し、展示の絵をみて、「アートの持つ力」に気づいた。この経験からアートを本格的に学習したいと考え、四年制大学への進学をめざすようになった。彼女は外部の研修による刺激が探究を進める原動力となっている。また、昨年先輩から探究活動の話を知り、「私も探究やりたい!」と思ったと語っている。探究活動のモチベーションを高める上で、ロールモデルを見つけることが重要である。

③については、探究が本格化していく中で、彼女が小学校3年生の頃に震災復興の行事で蟹江杏さんというアーティストと絵を描くイベントを思い出して、蟹江さんに連絡をとったことから探究のサイクルが再び回り始めた。また、小学校3年生当時の担任である佐藤みゆきさんが、母校に戻ってきたことも重なり、担任の先生や相馬市の教育委員会の方から助言をいただきながら探究を進めることができた。自分の原体験とやりたいこと、自分の進路が連動したため、「自分ごと」として探究を進めることができたことが大きな要因と考えることができる。

- ＜探究学習のプラス要因＞
- ① 1年次のドイツ研修
 - ② マイプロ参加(1年全国見学+2年東北出場)
 - ③ スペシャリスト系列の連携
 - ④ 高野先生の関わり+カタリバ佐々木さんの関わり

①について、彼の原体験で大きいことは中学校時代に経験をした不登校が大きい。この学校を選ぶ理由として、「自分を変えたい」と「ドイツ研修に絶対に行きたい」という2つの願望があった。1年次の冬に実際にドイツ研修で再生エネルギーや環境問題について学習してきた。

③との関連で、事例1の生徒のデポジット制のヒントとなったのは、彼がドイツで学んだことを生かしたとされている。ABゼミでの様々な専門性を生かせることは強みと考えることができる。

②は彼のキーワード:「仲間が増える」と大きく関わる。1年次にマイプロ全国見学ツアーに参加するが、自分から積極的に参加するわけではなく、友人に誘われて参加している。本人自身は積極的に物事に参加するタイプではないが、④との関連で高野先生は彼の性格を見抜き、積極的に取り組む生徒を使って彼を巻きこむようにプロジェクトを進めている。チームでプロジェクトを進める時には、メンバーの性格や特徴をうまく活用することも重要な事である。

また、④ではカタリバの佐々木さんに支援していただいた。生徒は「高野先生と佐々木さんは口裏を合わせたかのようにあまり手助けをしてくれない」とコメントしていた。このような働きかけは知識を教えるのではなく、自分の頭にあることを整理して言語化し、外に引き出すが目的である。事例2の①の例と同様に、問いを投げかけられることで、自分の思考を整理する働きがあったと考えられる。

事例5) Y・M (原子力防災ゼミ)

4-1-5 事例5

キーワード
「情熱」と「青春」

生徒情報

Yさん(原子力防災ゼミ)

→私立大学に推薦入学(総合型選抜)【観光系】

アカデミック

インタビュー解析

探究+ : 協力者の存在
(学外の方、カタリバ、ゼミの先生)
マイプロ全国観戦(1年次)

探究- : 特になし
(いってあげればフォローして感え尽き)

モチベ+ : 校外研修(ベラルーシ、広島)

モチベ- : 受験勉強

- ＜探究学習のプラス要因＞
- ①1年次夏休みのベラルーシ研修
 - ②1年次3月のマイプロ全国サミット見学ツアー
 - ③地域の方々の協力と応援
 - ④専門家との協力(赤十字の方々)

前提条件として、彼女がふたば未来学園に来た理由について、3期生の先輩の話を中学校時代に聞き、今までは人の顔色を窺って目立たぬように生きてきたが海外研修などの行事が自分を変えるチャンスだと思ったと語る。

①について、1年次のベラルーシの子どもたちと出会ったことが探究学習を頑張ろうと思ったきっかけだった。本人はこの出来事で「自分でスイッチを押した」と述べている。

②について、1年生の全国マイプロ見学では「全国の高校生の発表を聞いて、感銘を受けた」「堂々と話をして、カッコよい」と話している。同世代の人の活躍を目の当たりにし、私にも何かできないかなという「起動スイッチが立ち上がった」と考えた。

③について、2年次にすぐに「献血」をテーマに探究をスタートさせた。次々と具体的なアクションを起こして、自信がついた。特に自信がついた。同学年の生徒と比べて2年次前半から探究の具体的なアクションが先行したため、地域の人に声を掛けられることが多く(彼女がSNSを活用していることもあり、活動が理解されやすい状況にあった)、周りの人から「頑張ってるね」や「なんで献血なの?」「すごいね」と声をかけられることが多かった。「なんでそんなことやってるの?」とけなす人は誰もいなかったのだから周りの人が「スイッチを押し続けてくれた」と本人は語っている。

④は赤十字の職員と連携することで常に専門家からのフィードバックを得ながら活動することができた。

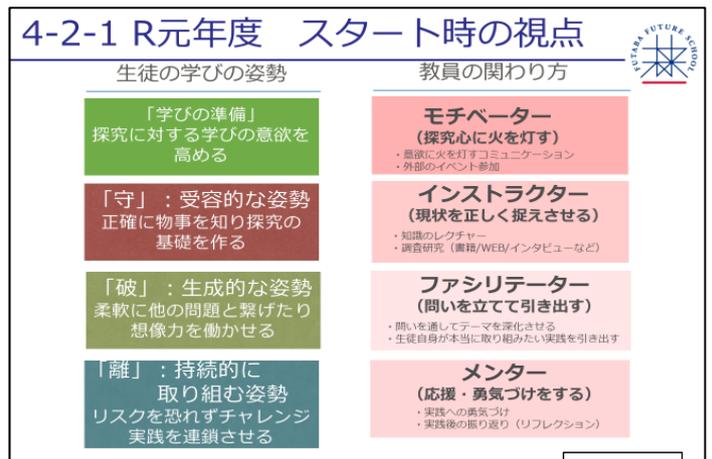
(2)指導する教員側からのアンケート解析
(主にMCゼミ内の生徒に対して)

① 「探究マトリクス」の活用

2年次のMCゼミは林、鈴木謙太郎先生、遠藤明緒先生、カタリバの横山和毅さんの4人で編成していた。ゼミ組織直後の4月から週に一度のゼミミーティング(以下:MTG)を行った。当初のスタートアップMTGの時から、探究学習の難しさは「どのように教員が生徒の探究学習に介入するか」という点にあると確認していた。

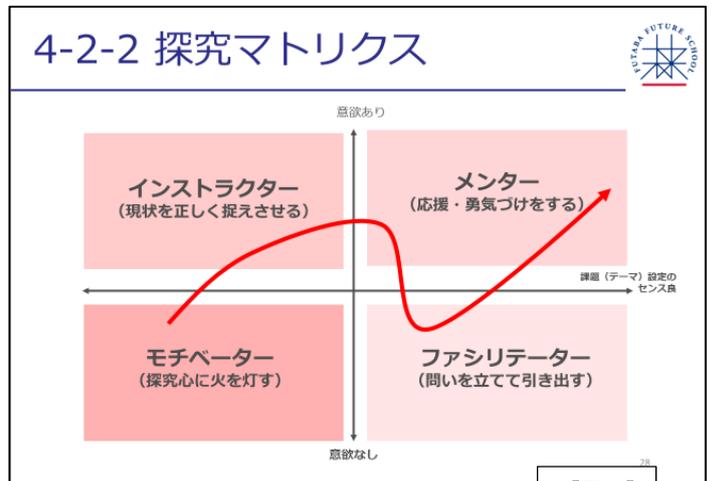
また、企画研究開発部でも時を同じくして、生徒の学びの姿勢を「守:受容的な姿勢」「破:生成的な姿勢」「離:持続的に取り組む姿勢」の3段階に再定義し、段階に応じた教員の働きかけが必要であると共有していた。

8月の月次会(2年次探究担当者MTG)で、教員の役割は「モチベーター」「インストラクター」「ファシリテーター」「メンター」に柔軟に使い分けの必要性があるという事を2年次担当者間で共有した。【図Ⅱ】



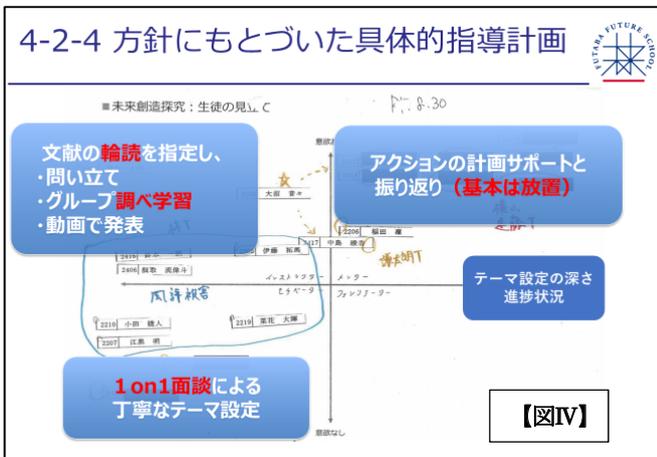
【図Ⅱ】

この2つを組み合わせるとマトリクスに落とし込んで、生徒の現状を「見取り」、次週の支援の方向性をゼミ内担当者間で考える指導システムを考案した。【図Ⅲ】



【図Ⅲ】

横軸は探究テーマの進展の状況、縦軸は探究学習に取り組む意欲を表している。基本的には生徒は左下の【進展なし・意欲なし】の状態から右上の【進展あり・意欲あり】の段階まで引き上げるために、それぞれの生徒の現状に対して4つのアプローチを行った。しかし、生徒の探究活動の進捗状況は単線的な発展ではなく、探究の失敗やモチベーションの低下などの複合的な要因により、イレギュラーな動きを見せる。そのため、モチベーターの領域（左下）では個別面談や問出しなどの個別対応を重視し、インストラクターの領域（左上）では探究を行う上での基礎知識の確認（インプット）を中心に行った。また、メンターの領域（右上）の領域ではできるだけ教員の介入を避け、探究を自走させるように心がけた。なお、ファシリテーターの領域（右下）は実際上あまりこの領域にいる生徒は少なかった。【図IV】



② 探究マトリクスの継続使用（1年半）の成果

週1回のゼミ打ち合わせでは、探究マトリクスを約1年半ほど継続して活用した。生徒の探究活動の進捗状況やモチベーションに応じてその都度、次週に関わる教員やアプローチ方法を変えた。その結果、探究が走り始めた生徒を中心に徐々に右上のメンターの領域に入った生徒が増え始めた。1年半の間探究マトリクスを活用し、生徒一人ひとりがどのように探究活動を行ったかを時系列で追うことができるようになった。特に事例2、事例3の生徒はMCゼミであるため、生徒インタビューの時に生徒自身に書いてもらった二つのグラフと教員が見立てた教員の探究マトリクスを比較した。その結果、生徒と教員双方が考えている探究学習の進捗状況で進展が急上昇している時期と探究が進まずに活動が停滞する時期はほぼ一致している。探究マトリクスの活用は、担当する先生たちによる生徒の「見立て」はほぼ正確に実態を把握できるという事が言えるだろう。

(3) MCゼミの指導体制のプラス要因の分析

MCゼミでは3年9月の未来創造探究発表会で12会場中4つのプロジェクトで探究賞を受賞し、数多くの生徒が聴衆からの共感賞を受賞することができた。また、卒業時の未来創造探究大賞を受賞することができた。2年間のMCゼミの指導体制のプラス要因について分析した。

① 生徒との関わり方の柔軟さ

先述の探究マトリクスの活用によって、毎週ゼミの打ち合わせで生徒の現状の見取りと次週の活動方針の確認を行った。19名のゼミ生に対し、2年次は4名、3年次は3名の教員およびカタリバスタッフでゼミを運営してきた。担当者割り当てを固定せず、ゼミ担当教員がそのつど役割（モチベーター・インストラクター・ファシリテーター・メンター）を変えながら関わった。あえて、担当の役割を明確化せず、複数の目で生徒を見取ることが生徒のよさを伸ばすことにつながると考える。この「複数の視点で」生徒を見取るとは探究の進捗状況が停滞した時にも局面を変える意味で極めて重要である。

② 教員も探究学習を楽しみながら学ぶ

（ケーススタディ：鈴木謙太郎先生）

①のことにも関連するが、探究に関わる教員の個々のスキルや経験にも差がある。特に、初めて探究学習の指導にあたる教員にとって、どのように関わるかという問題はとても不安に思う事である。ましてや、転勤してすぐに未来創造探究の授業の担当者になった場合はなおさらである。転入者に対しては、企画研究開発部による「キックオフミーティング」が年度初めにあるが、最初から探究学習の全貌をつかむことは難しく、ほとんどの場合は教員自身も指導をしながら学ぶことになる。

今回は鈴木謙太郎先生の取り組みをケーススタディとしたい。謙太郎先生の関わり方はMCゼミにとってとても重要な働きになるのだが、謙太郎先生自体は探究開始当初は指導について不安を覚えていたようだった。謙太郎先生のメンタリティに救われた部分がとても大きいのだが、謙太郎先生は指導にあたり「(探究について) 知らないことは強みだから、生徒と同じ目線に立って、自分も一から探究してみようと割り切った」と考えていた。このような関わり方は、当初MCゼミで想定した4つの関わり方とはまた異なった関わり方であった。井庭崇『クリエイティブ・ラーニング』によると、井庭は教員自身も生徒とともに何かを「つくるなかで学びを深める学び方」を「クリエイティブ・ラーニング」と定義し、この学びにおける教員の役割は一緒に「作る」場に参加する

「ジェネレーター（生成者）」であるとしている。謙太郎先生が生徒に対する関わり方は、知識や技能を「指導する」ことではなく、徹底して「問う」ことであった。謙太郎先生は「俺は（あなたの探究の内容について）よくわからないから、どこまで調べたか教えてくれるか？」という言葉を多用した。生徒の方が詳しく知っているという自尊心を保ちながら、生徒が問いに答える過程で自分の思考を整理して謙太郎先生に伝える事を繰り返すことで、生徒自身が理解を深め、何がわからないかを明確にする学習活動が繰り返された。また、生徒自身が探究する部分と外部で活動する際に必要な手続きの役割分担を明確にし、生徒一人で難しいことは教員自ら介入するなど関わりにメリハリをつけた。このような教員の関わりこそが「ジェネレーター」としての関わり方であり、生徒の探究学習がただの調べ学習からより深い探究へと導くカギとなるだろう。

③ 進路学習との接続

未来創造探究大賞を取った事例2の生徒は国公立大学の推薦入試で合格した。総合型選抜の際には、10分のプレゼンテーション発表があり、探究学習で学んだことをプレゼンした。夏休み明けごろから総合型選抜のプレゼンの準備が始まったが、その時点では探究の課題解決のアクションはほとんど終えていたが、卒業論文にまとめる作業は始まっていなかった。プレゼンの準備を進める中で、ゼミの教員だけではなく、3年次の担任など複数の先生の前でプレゼン練習を何度も行い、発表の内容をブラッシュアップしていった。探究学習で十分な探究が行えた生徒は、探究学習を通じて自分のやりたいことを明確化し、進路決定をした生徒は多い。このことは、「自分ごとだからこそ諦めず」に粘り強く探究学習ができることを示していると考えられる。

④カッコいい大人と出会い方

事例2の生徒で見たように、生徒も探究を指導している教員も生徒のテーマの方向性がみえなくなることがある。具体的には、その探究テーマの先に何かがあるのか、実現可能性はどのくらいあるのかをある程度見通しをたてながら探究を進めていく必要がある。事例2の生徒では、地域の大人との出会いが方向性を決める大きな転機となり、専門的な知見を持つ外部の協力者には見通しが見えており、「いけると思う」と一声が大きな前進につながった。しかし、事例2の生徒と同じ小松理度さんを紹介したMCゼミの別の生徒の場合には、あまり探究が進まず、小松さんとのつながりも一度きりとなってしまった。二人の生徒の違いは何だったのであろうか。

事例2の生徒は自分のテーマ設定に自信が持てず、自分なりに考えた結果を小松さんにぶつけた。一方、別の生徒は課題解決のためのアクションを終えた後に、活動の発展性がなくなってきたときに、小松さんをゼミ教員に紹介されてお話を聞いた。二人の大きな差は「地域のひととの出会い方」である。事例2の生徒は2年7月のヒューマンライブラリーで偶然小松さんの話を聞き、12月に彼女から直接小松さんに会いに行っている。一方別の生徒は、コロナ禍の2年3月に担当教員が小松さんとアポを取り、生徒につないだ。地域の方との出会いは生徒の探究学習に大きな変化を与えるが、その効果が最大化するタイミングで出会うように教員が介入する必要があると思う。2年次の7月に行われたヒューマンライブラリーは自分の探究テーマを仮決定する時期であり、探究熱が高まってきた序盤にこそ熱い志を持った地域の大人（ロールモデル）に出会う事は時期的にもとても良いタイミングだった。そのタイミングを見極めるための教員の役割として、生徒のテーマと進捗状況を把握し、「どの人に頼れば探究が進みそうか？」という見立てを行い、生徒につなぐことが求められる。本校の職員は既に地域の内外を問わず、多くの方々とのつながりを持っている。しかし、教員個人のマンパワーには限界があるので、これを組織化することが今後の未来創造探究が組織的かつ持続可能なものとなり、本校がめざす「コンソーシアム」の理念とも通じるものとなる。市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う本校が地域とのハブになる可能性を秘めている。

（4）MCゼミの指導体制のマイナス要因の分析

探究マトリクスによる生徒の見立てが有効に活用できた一方で、すべてのゼミの生徒が主体的に探究活動を進めることができたわけではない。ここで、探究学習がうまくいかなかった生徒の原因について振り返った。

- | |
|---|
| <p>①序盤から探究テーマを決めてすぐに動き出した生徒ほど3年次のコロナ休校明け以降探究が失速している</p> <p>②モチベーションは高いが、生徒の探究活動が深まらない生徒に対するアプローチがうまくいかなかった。</p> |
|---|

① 失速の原因

ここではテーマ設定が自分の納得のいくものになっていたかどうか鍵となる。やりたいことを安易にテーマにすると、一度目の課題解決のアクションが終わった段階でその後の方向性が見つけづらい。同様にコロナ禍

で活動ができなかった時に、コロナを理由にアクションを止めてしまった生徒が多かった。テーマを変更しても、自分がめざすものや理念がしっかりしていたものはコロナ休校のときにもうまく方向転換ができていた。テーマ設定には時間がかかったとしても、しっかり自分の頭で考え、自分で納得したテーマを設定させる必要がある。

また、序盤で探究の調査のためのアクションや課題解決のアクションがうまくいっている生徒（探究マトリクスで右上のメンターの領域）は探究のサイクルが回っているの、教員側からの介入はせずに自走させていた。一度探究のサイクルが回った生徒はあとは放任でも大丈夫という感覚で他の生徒への支援に回っていたため、生徒のつまづきに気づくのが遅れてしまったことが、最大の失敗だった。一度探究のサイクルに回っても、生徒の進捗状況は常に確認をしておく必要があることを再認識した。

② モチベーションをどのように維持するか？

探究に対するモチベーションに高い生徒でなかなか探究が進まない生徒に対する指導が一番苦慮したところである。探究テーマは自分がやりたいことを生かして、震災の経験がない若者に伝える活動をしたいという生徒がMCゼミには何名もいた。「自分のやりたいこと」と「自分のできること」を区別することが必要であるのは言うまでもないが、自分の力を過信して無理なアクションを続けていった結果、どんどんモチベーションが低下していくケースがあった。その生徒に対するMCゼミの教員の働きかけは、ダメ出しと方向修正であり、そのことがその生徒モチベーションの低下につながった。

(5) 論文作成の指導の重要性

ここまで探究学習についての指導方法について振り返ってきた。最後に論文作成の指導について触れたい。9月末の発表会を終え、10月から論文作成に入った。3か月の作成期間があったにも拘わらず、各ゼミともに期日に間に合わない生徒が大半で担当者や企画研究開発部に大変なご迷惑をおかけした。通常の指導から期日を守ることを指導してきたが、純粋に論文指導のあり方にも工夫が必要である。

4期生は3年4月の中間発表会がなくなったため、2年次の探究活動をまとめる作業を行っていない。定期的な発表の機会はいくまでの探究学習を振り返り、言語化できないことを明確にする意味で重要な機会である。また、探究の授業ごとに反省をまとめたり、ループリックに記録するように指導してきたが、徹底していたわけではない。論文作成の段階で一から文章作成をしていた生

徒が多く見られたが、2年生の段階から定期的に探究の内容を言語化する指導が必要である。さらに、探究学習で課題解決のアクションをしっかり行い発表すべき内容がたくさんあるにも拘わらず、卒業論文にうまく反映できなかった生徒も見られた。一気に10ページを超える論文を書くためには、スモールステップでの指導があるべきだったように思う。岡山県立瀬戸高校では取り組んだ内容やその時感じた事、成果などを付箋に短文でまとめ、一つのアクションが終わった段階で、付箋をもとにA4用紙に7行でまとめるというメソッドがある。このような他校の取組等も参考にできる。

論文作成の段階で、生徒の探究学習に対するモチベーションが低下することも問題といえる。卒業論文の査読は基本的にはゼミの担当教官が行うが、論文作成の指導の内容が教員からのダメ出しとなってしまう、生徒から論文作成の意欲が湧かないという意見もあった。そのため、生徒同士で普段から書いた文章を読み合い、フィードバックをもらうなどの仕組みがあるとよい。

4. 成果と課題

～生徒の「やる気スイッチ」はどこにある？

生徒の「やる気スイッチ」という表現は比喩的な表現であり、具体的な課題としては生徒が探究学習をすすめる上での効果的な伴走の仕方を模索することになるだろう。ここまでの分析から、あらためて「やる気スイッチ」について考察したい。ツイッター上で映像作家の大鳥さんが描いた「やる気スイッチ」が一番腑に落ちた。



【図V】

私たちふたば未来学園の探究学習の伴走から、一度生徒の「やる気スイッチ」を押したからと言って、探究のサイクルが回り続けるような単純なものではなかった。私は当初、ON/OFFのようなスイッチを想定していた。これらの分析を通じて、生徒の「やる気スイッチ」とは図Vの右のようなアナログ式のスイッチをイメージするようになった。教員による様々な働きかけで生徒は探究

学習のモチベーションを高めることができる。生徒が探究に取り組む意欲が高まると、生徒自身だけではなく教員や地域の方々によっても、「やる気スイッチ」のチューニングが可能となる。

いよいよ、仮説のまとめに入る。このテーマ設定では二つの仮説を準備した。

仮説1：生徒のモチベーションを上げるために、教員側からの働きかけが必要。

まとめ1：複数の教員が生徒の探究の進捗状況を多面的に「見取る」ことで、生徒にあった働きかけをすることができる。

仮説2：生徒の働きかけには適切なタイミングが大事。

まとめ2：適切なタイミングを見極めるためにも生徒を「見取る」ことが必要。

ここまで、探究学習の「指導」と「伴走」という言葉を明確に使い分けてこなかった。

教員が探究学習を「指導」という言葉には、教員の側が生徒の探究の答えを既に知っており、生徒が探究の答えにたどり着けるように教え導いていく語感がある。一方、探究学習を「伴走」という言葉には、生徒と同じペースで寄り添っていくために、生徒の現在の状況をよく「見取る」、そのペースを合わせて「ともに走る」という語感がある。また、生徒のペースを若干上げて、より高見へと誘うペースメーカーとしての役割がある。2019年4月に本格的に探究学習を始める際に、「探究学習の難しさは教員が生徒にどのように介入するか、その度合いを適切に調節する」事が必要であることは、4月の2年次月例会で確認した内容だった。2年間の探究学習の伴走を終えた今、この適切な介入度合いがいかに難しいかを実感することができた。しかし、この報告でブラックボックスであった「教員の適切な介入」のタイミングややり方について少しは可視化できたように思う。

最後に、探究学習を実際に進める生徒や探究学習を伴走する教員や地域の方々など全ての人が持つべきメンタリティについて言及したい。それは、プランド・ハップンスタンス (Planned Happenstance) という言葉である。この言葉は、日本語で「意図された偶然」や「計画された偶発性理論」と訳され、20世紀末にスタンフォード大学のジョン・D・クランボルツ教授が提唱した理論で、比較的新しいキャリア論である。これまでになかった偶発性とキャリア形成の関係を示すものとして注目を集めた。めまぐるしく変化する時代において、当初計画していたキャリアステップとは異なる方向に進んだというケースは珍しくない。これを意図的にキャリア形成に活か

していこうとするのが、プランド・ハップンスタンス理論の考え方である。探究学習は先を見通しながら進めていく必要があるが、どのような結果になるかは生徒も教員もわからない。だからこそ、プランド・ハップンスタンスの考え方を援用し、人との出会いや偶然を面白がれると、幸運が舞い込むことになるし、常に興味・関心をもつことを「アンテナを高くする」という比喻を用いるが、この言葉の真意は「常にそのことを考えていると、必要なものに出会える(ように行動できるようになる)」という事ではないだろう。事実、先述の事例1と事例3の生徒は探究学習のためにノートを一冊準備して、探究の授業に役に立ちそうな授業の内容は全てそのノートに書き残して何度も見返していた。このノートは、カタリバのスタッフからいただいたノートだが、このノートを肌身離さず持つことで、常に自分の探究活動を意識し、何かに偶然出会ったときに忘れずにメモをすることができた。主体的に探究活動に取り組む生徒とはこのような姿勢を身につけた生徒のことをさすのだと思う。



4期生を3年間見てきて、至らないことはたくさんあった。十分な学力を身につけさせることはできなかつたかもしれないし、進学実績で言えば振るわない結果かもしれない。しかし、探究活動を教育活動の主軸においている本校のカリキュラムで、探究活動を通じて自分の進路を明確にし、進学の意識を高めて学校生活に取り組んできた4期生の生徒は多かった。事例5の生徒が3年間の探究学習を終えた後に、このような言葉を残している。

「私にとって探究は、野球部が甲子園出場に命を懸けているならば、それと同様に探究(マイプロジェクト)に私の青春全部って言っているほど懸けている。

いわゆる普通の学校での学校生活では勉強や部活動の成績によって、その生徒に対する評価が決まることが多い。本校では勉強や部活動以外の活動で、生徒が主体性を発揮して全力で高校生活に打ち込める活動が探究学習なのであり、生徒の力を多面的にみるための「もう一つの物差し」なのだと思う。

<参考文献>

井庭崇編『クリエイティブ・ラーニング』(慶應義塾大学出版会), 2019年

小松理度『地方を生きる』(ちくまプリマー新書), 2020年

4. 1. 2 探究学習の指導方法

本校に着任して4年を終える。探究という授業に取り組むのは2回目である。赴任したその年に探究という授業を知り、アグリビジネス探究班のリーダーとして担当した。右も左もわからずNPOカタリバさんのフォローを受けながら授業を取り組んだ。2年次の中間報告会では、生徒の発表はうまくいかず、参観者からのコメントは無記入の状態で行われていた。3年次になると、自分以外の担当は入れ替わり活動を知っているメンバーがいなくなった。探究に自分の担当教科である「商業」を実践内容に取り入れて対応せざるを得なかった。その時に別な探究班にいた「商業」を履修していた生徒が、後輩たちの活動に対して法人の必要性を訴えてきたので、一緒に一般社団法人を設立した。今回は、この法人を通して「ソーシャルビジネス」の考え方も取り入れた探究としている。

前回までは、実践活動の成果は、成績と知識の量に比例するケースが多いと考えていた。しかし、今年度の成果から、考える実践は失敗と挑戦を繰り返すことから学習意欲へつながるケースが多いことに気づかされた。生徒たちは、自分たちができていることに気づいた実践を行い、考えながら必要な学びの取捨選択を繰り返しながら成長していった。

活動と校訓を関連付けると、以下のとおりである。

自立 何も一人で全部できる必要はない。一人でも始める人がいれば、私もやると思う人が増えていく。

協働 出来ないときは助けてくれる人がいる。あなたが頑張る姿を見て、応援したくなる人が生まれる。

創造 それぞれの行動が創造へとつながる。自分にしかないストーリーを生み出せる。

(1) 前回の探究 (H29-30) より学んだこと

テーマ①「関本さんの梨を双葉郡に」

活動期間が長引き、授業最終日に関本さんたちから梨の苗木を譲り受けた。このテーマの目的にたどり着くことは出来た。しかし、問題はその後である。その梨を育てるのは誰？という問題が発生した。新校舎に植えるという要望はあったが、実践する生徒は卒業してしまい、後輩たちに継承する時間もなかった。そのため、商業の課題研究で引き継ぐこととなった。このことから、生徒たちが探究をするうえで、過去、現在、未来に対しての責任を持たせることが必要と痛感した。

テーマ②「不評被害払しょくのために商品開発」

材料となる地元の果実は、風評被害払しょくに繋がればと農家さんから無償で提供いただいた。お菓子に加工するレシピや予算もないため、業者に開発を委託し、地元イベントで販売する計画を立てた。しかし、自分たちで食べたいという欲望にとらわれ、自費購入にて自己消費を行った形で終了した。

このことから、商品開発する際の目的や予算確保、開発後の販売行動についても実践内容として組み込んでおく必要性を痛感した。

(2) 商業からの知識補給

・ビジネス基礎 (商業科目) による実践活動

<隔たりの解消> 探究の導入で、現状とあるべき姿について考える時間がある。ビジネスとしてとらえるならば、生産と消費の間には、『人的隔たり』『場所的隔た

り』『時間的隔たり』という三つの隔たりがある。アグリビジネス探究ゼミでは、隔たりを“考えるソフト面 (机上の空論)”ではなく、“現実のハード面 (実際にお金と時間をかける)”としてとらえている。

人的隔たり 生産者≠消費者

場所的隔たり 生産地≠消費地

時間的隔たり 生産時期≠消費時期

情報の隔たり お互いを知らない

・マズローの (探究) 法則による生徒の成長把握

<生理的欲求> 授業中に寝る生徒がいるとすれば、必要な生理的三大欲求 (食欲、睡眠欲、性欲) 等が満たされていない。基本的な生活習慣は学習に対して大きな影響をもたらす。また、「開発した商品を試食したい」と思うのは、生理的欲求が働いているためとする。

<安全の欲求> 次のステップとして、「販売実習する商品を試食しないと、お客さんに答えられない」「計算ができないとお釣りを間違えてしまう」と思い始める。

<社会的欲求> そして、「地域に出て実践活動をする」といった活動に移行する。周りでも「やるなら一人ではヤダ」「みんながやるなら私もやる」という思いが連鎖していく。

<承認欲求> 「凄いとされたい」「褒められたい」「自分の活動を評価してほしい」という思いが該当する。各種コンテストに応募している生徒はこの位置です。

<自己実現の欲求> 人間は欲求が満たされたとしてもさらに理想を追求し続けます。「もっと探究したい」「も

っと多くの人の前で発表したい」「もっと自分のプロジェクトを伝えたい」と思うのは、自己実現の欲求が生じているからです。大学への進学等はこの位置に該当します。「自己超越の欲求」マズローは後に以上の5つの段階に、もうひとつ上の高次元の段階を付け加えています。人間はすべての欲求が満たされると、自分自身の欲求を満たすだけでなく、「世の中を良くしたい」「世界を変えたい」といった、社会全体の欲求を満たしたいと考えようになります。これはSDGsの考えに結び付くといえます。ローカルからグローバルに考えられる生徒はこの位置に該当します。

(3) 今年度の初めに

今回から探究班から探究ゼミと名称が変わった。2回目のゼミリーダーであるが、探究の指導を理解することとは自らが中心にいた方が理解しやすい。そのため、2年次途中から別な先生にゼミリーダーをお願いをした。本校では、全教員で探究の授業を取り組んでいることから、担当リーダーを通して探究のスペシャリストの育成を目指したい気持ちがあった。(理由：前回取り組んだ際に、担当メンバーが新しい先生方に入れ替わったため。前任校の専門高校では、課題研究にて専門教科担当教員のみで行っていたため。)

生徒から見れば、担当の先生が変わった。今度のメインの先生はやる気に満ちていると感じたようだ。現に、「高野先生は2年次に何も教えてくれなかった。」と生徒の振り返りが物語っている。これは、1回目の担当時に学んだことで、通常の授業では教えることが前提であり、教員も教えることが当然であるという認識から起きる探究の弊害を抑えるためでもある。ただし、教えない代わりに、実践のフォローを行っている。生徒が「このイベントに参加したいけど、電車ではいけないから。」といえば、引率した。「資金がないから探究が進まない。」といえば、販売実習に連れて行った。先輩の法人を通じて販売活動を行うことで、利益の繰り越しが可能となり、飲食を伴う実践も可能となった。言ったことを実現(実践)することで、自分たちの活動の範囲が広がり、「出来ないから」という言い訳が出来ない環境を創造した。

(4) 法人としてのサポート

マズローの欲求を満たすために、必要な経費(予算)と時間が必要となる。試作⇒試食だけを繰り返せば、自分たちの欲望のみを満足させて終了してしまう。特に次年度も使える消耗品等の購入や自分たちで飲食するものの購入は難しく、先輩が設立した法人の補助が必要となる。

2年前の探究を終えたときに、「アグリビジネス探究ゼミはやめましょう。」という提案を職員会議で発言した。理由としては、双葉郡の農産物の収穫時期が、秋であるため2年次途中にテーマを決め、3年次の9月に発表では実践の検証が取れないからである。特に就職をメインとする系列であるため、就職活動と探究活動では進路実現に大きな影響をもたらす。それに、飲食という欲望を満たすための安易な商品開発に走る生徒が増えたためだ。商業という科目では、商品は開発することがゴールではなく、生産加工販売が継続される終わりのないサイクルであるためことを知ってもらいたいからだ。そして、それぞれを生きがいとしている農家さんとのつながりを継続する必要もある。

※この点は令和3年度よりテーマ設定が早まり、時期的な問題は解決されている。また、資金的な問題も学校の社会起業部で法人を設立したことで探究の活動を支援する環境は改善されている。

(5) 成果 コンテストの参加を通じて

今回、担当した生徒が出場したコンテストで賞を頂いた。そのことから、今回の報告書を作成することとなったが、コンテスト結果だけから見れば、6試合中2勝4敗である。たまたま、テーマがコンテストの趣旨と一致したため入賞することが出来たと言える。コンテストに入賞することが目的になると、その趣旨に合った実践をすることが目的となってしまう。

探究ゼミで、コンテストに出場する理由は以下のとおりである。

- ・自分の意見をまとめる。
- ・他人の意見を取り入れる。
- ・他人はどんな質問をしてくるのかを知る。

本校に赴任した際に、商業の教科指導員を行っていた。その際の研究内容に、中間の成績を考査の素点で行うことで、生徒は考査の点数を重視してしまう。期末では総合成績で評価されるが、最初の評価を考査で行うことは、まずはテストという意識づけに繋がっているのではないかと仮定して検証を行った。そのことから、考査の問題は知識を問う問題よりも考える問題を中心として出題するようにしている。

探究も同様である。同じゼミ内で、実践やコンテストに応募することで、協働からの創造につながるように願った。以下は、今年度の実践内容の詳細である。

令和2年度 活動詳細

- 8月：①② 全国高校生SBP交流フェア 応募
①②合同チーム 輝・Adobe 賞受賞
①② CUC ETHICAL DAYS 2020発表
NPO法人フェアトレード・ラベル・ジャパン
事務局長の中島佳織氏
サスティナブルキッチン ROSY
代表取締役の森敏氏
① 岡山県4校連携講座【地域創生学交流会】発表
津山市内県立四高校
(津山・津山東・津山商業・津山工業)
高知県立佐川高等学校
宮崎県立飯野高等学校
①② 販売店応援活動 実践
菓匠庵(先輩の開発商品の販売店) 8/31 閉店
- 9月：② 関本さんの梨収穫 実践
①②③ 未来創造探究発表会(校内) 発表
- 10月：② 「新しい東北」復興ビジネスコンテスト2020 応募
一次：書類審査、2次：オンラインプレゼン 落選
② 大熊町役場訪問 開発商品販売 実践
①② 日曜カフェ「cha茶cha」 商品提供 実践
- 11月：② 広野町秋祭り 農家さんと販売 実践
①② 「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」 応募
1次：書類審査 落選
①② 日曜カフェ「cha茶cha」お米食べ比べセット 実践
- 12月：① YONOMORI まち灯り2020 振舞
① マイプロジェクトアワード校内発表会 応募
学校代表として県大会出場権獲得
①② ふくしま高校生 社会貢献活動コンテスト 応募
最優秀賞・社会貢献賞、センター賞 受賞
- 1月：① 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会
日本語部門 金賞 受賞
(文部科学省初等中等教育局長賞)
①③ チャレンジ・アワード
書類審査 落選
① My Project Award 2020 福島県 Summit 出場
オンライン 県代表に内定
- 3月：① My Project Award 2020 全国 summit 出場

これらの活動を通して、それぞれの探究テーマが深化されていった。テーマを協働してきたことで、より深みのある味わいが創造されていった。それぞれの活動に無駄がなく、活動ロスがないエシカルな探究といえる。

しかし、すべての生徒が満足したわけではない。詳しくはルーブリック分析をご覧ください。

(6) 課題と展望

高校生の離職率の増加とテーマの変更の影響について、ゆとり世代はなぜ転職を繰り返すのか?というのがネットで話題になった。会社は、新卒採用にかかる費用を減額。就職希望者も、会社で働きスキルを得て、転職をしながらレベルアップするキャリア観を持った若者が増えてきているとのこと。今後、生徒にとって探究テーマと進路選択が同じ価値観となった場合に、進学率が上がるが、離職率は下がらないといった現象が生まれるかもしれない。

地域連携をしていく中で、地元の方からは、「一緒に活動すると楽しいけど、卒業すると来てくれなくなるから寂しい。現に、今年は誰もいない。」地域の方は、高齢者が多いことから、一度連携して去られると寂しさから連携を断られるケースがある。探究だけでなく、教科と連動しながら活動することで、地域が安心する取り組みになるかもしれない。

休校になった学校の一つに総合学科の学校があった。特に系列はなく、学びたいと思った科目を履修することが出来た。もし、その学校でこのような未来創造探究がおこなわれていたらどうだったろうか。系列に沿ったテーマではなく、その探究に必要な科目が選択され、自分にとって必要な学習が何なのかと考えることができる生徒が育っているのではないかと推測される。今回入賞した生徒は、商業を選択していない生徒であった。探究の授業を通して、放課後や休日の実践活動を通して、商業(ビジネス)を学習する機会を設けた。このことにより、興味ある科目への学習は食欲であるが、興味が薄らいだ科目への意欲が激減している。

探究活動を通じて生徒は変わるのか?変わるのは活動であって、生徒自身は変わらない存在であると思っている。自分がやりたいことを通じて、学習することの大切さを見つけられた生徒は、“幸せ”だと思う。一緒に活動してきた生徒が卒業してさびしいと思うのは、地域の方だけではない。教員もしかりである。

4.2 未来研究会

概要

コロナ禍で、本格的に研究会を開催できたのは後期からであった。そのため、4月当初に創案した計画書を何度も書き換えた。また、例年4月～5月に行われていた教育活動を後ろ倒ししたり、これまでと同じ形式で会の運営が出来なかつたりもした。加えて、中高一貫6年生の完成年度に向けて年々多様性を増す教育内容とそれに伴い増えていくすべての職員に必要な研修を設定することを難しいと感じた。そうした中であって、これまでの教員間で学び合う本校の文化の象徴である未来研究会を今年度も企画・立案・実施した。

(1)はじめに

本校は、6年前東日本大震災とそれに伴う原発事故という、人類が経験したことのないような災害からの教育による復興と新たな人材育成を期して開校された。そして、この地だからできる未来を創造し、「変革者たれ」という「建学の精神」のもと、「自立」「協働」「創造」を校訓として、いわゆる“SGH”、“探究”に代表される「未来創造型教育」を力強く展開してきた。さらに、今年で震災から10年を迎えた。高校1年生は震災時学齢以前である。加えて、双葉郡出身者の割合も減少している。こうした震災経験が土台にはないかもしれない生徒だからこそキャラクターやマインドセットを育てていくことがこれまで以上に大切である。

翻って、教員目線でこの6年間を顧みると開校当初から勤務する職員は7名にまで減少した。多くの先生の転入を歓迎し、転勤されていった先生が他校で本校の学びをさらに発展し展開されたりしている姿を見ると心強い。しかし、学校の規模が年々大きくなり、職員数も増えると、開校の意義を語れる先生も、それを話し合う機会も減った。一方で、多面的な教育活動がカリキュラムオーバーロードと言えるほどに展開されている。加えて、全世界を未曾有の危機に落とし込む新型コロナウイルス感染症は、双葉郡だけを「課題先進地域」ではなくした。従って、これまで培ってきた学びを、更に深化させ、他の地域、世界と共に多くのことに“挑戦”していかなければならない。反面、“挑戦”だけではなく、これまでの挑戦を“評価・検討”し、その上で、新しいイノベーションに向け

多くの他者と協働し実践していかなければならない。そのために、求められる資質と能力を学校全体で明確にし、数多くの教育活動で育てるという目標に向かって本年度の研究会は行われた。

(2)実施内容

日時	回	Title
4/3(金)	1	双葉郡バスツアー
講師：藤田大氏 (株式会社鳥藤本店専務取締役)		
9/10(木)	2	クロスカリキュラム
昨年度の実践例をもとに、グループごとに授業の企画。		
9/30(水)	3	哲学対話研修 ～体験編～
講師：神戸和佳子氏 (本校哲学対話特任講師)		
11/12(木)	4	対話型ワークショップ
哲学対話を教員間で実施。普段から、対話できる環境をつくる。		
12/7(月)	5	演劇教育研修 地方創生～少子化対策～ 教育支援の連動
講師：平田オリザ氏 (劇作家・演出家・青年団主宰。国際観光芸術専門職大学学長候補)		
豊岡市の教育文化政策について対面で講義。文化政策と教育政策を結びつけて、人口減少対策に取り組み豊岡市の事例を紹介。		
12/24(木)	6	演劇教育研修
講師：わたなべなおこ氏 (演出家、ワークショップファシリテーターあ		

なごーわーくす主宰)		
今年度より主立って本校の演劇教育を牽引していくわたなべ氏によるワークショップ型研修を開催		
1/7(木)	7	演劇教育研修 ~なぜ、今、文化なのか 「HOUSEがあってもHOMEがない」~
講師：平田オリザ氏		
緊急事態宣言に伴いオンラインで実施。コロナ禍を通じて見えてきた日本社会の課題を分析し、提言。		
3/9(火)	8	哲学対話研修 ~応用編~
講師：神戸和佳子氏		
これまで授業で実践してきた哲学対話について振り返り、深め、次年度以降の実践について対話した。		

(3) 成果

○ 理念共有

“理念を共有”することには、以下のような効果が期待できる。

- ・ 各教科相互のつながりが意識できる。
⇒体系的な学力(知識)の獲得
- ・ 教員間の連携を強固にできる。
⇒各教育活動(授業、部活動、探究活動など)を系統化

それぞれの教員が大切にしたい学びを焦点化でき、学校目標の達成のための効果も高まる。反面、理念を共有できないままであると折角の学習活動における効果も分散してしまう。しかし、ラポールが不完全な状態で当初から理念共有だけを目標にしてしまうと、儀式的になってしまうことを実感した。第4回「対話型未来研究会」で実践したように、普段から大切なことを話し合える教員集団の下地作りを行うことも職員研修の目的であると思った。

○ 特徴的な教育実践のためのインプット型研修

今年度も多くの外部講師の先生から講演をいた

だくことで、広い見識を持つとともに、教員間でも特徴的な教育実践を体験し、自らが学んでほしいと思った。しかし、今年度はコロナ禍による移動制限や自粛が断続的かつ長期間にわたったので実施できないかもしれないと危惧した。しかし、生徒に向けた遠隔授業で利用した Zoom を用いて講演を行うことができた。講師が目の前にいることで、その所作や立ち居振る舞いから学ぶことも多いが、遠隔で研修を行う良さもあった。例えば、事前事後の講師との打ち合わせも Zoom で行えたので、これまでの文書だけでの事前打ち合わせに比べ、圧倒的にこちらから伝える情報量も先方からいただくタスクも明確化された。そのため、例年以上に内容を本校にそくした研修に高められた。

(4) 課題と展望

再来年度の教育課程策定に向けた議論が進められている。恐らく、これまで以上に放課後の時間は失われ、勤務時間内に行える授業外の教育的な活動は制限される。つまり、これまで考査期間中の放課後や長期休業中を利用して行ってきた本研究会を、立案すること自体が難しくなるかもしれない。

また、コンピテンシーの伸長を重視した新しい学びを取り入れることが、これまでの学びとの二項対立になってはいないだろうか。本校では、これまで演劇教育や哲学対話、未来創造探究など新しい学びを実践してきた。そのことについて研修し、対話を重ねていくことで年々その経験知は蓄えられてきた。

これまで以上に教員同士で指導書にはない教材を作り上げたり、その実践の振り返りやシェアを行ったりすることで、今に即した新しい学びを実践していくための職員研修は大切になっていくと思う。企画部だけではなく、中高両方の教務部も含めてロジックから組み立てていければ、よりよい未来研究会が継続できる。

4. 3 外部連携

本事業を行うにあたり、地域から海外まで、様々なグループとの連携を意識的に推進してきた。今年度、コロナ禍により現地に赴くことができなかつたり、直接会って話ができなかつたりする等、活動に大きな支障が生じた。一方ではオンラインの活用によって移動の制約がなくなり、時間さえ合えば校内で様々な方と容易に話し合うことができるようになった。オンラインツールは慣れてしまえば大変便利であり、これを活かして逆境をチャンスに変えることにより連携が進み、生徒の様々な取組が面的、質的、量的に大きく展開してきた。ここでは外部連携の経緯や状況等をまとめて記す。

4.3.1 コンソーシアム

(1) はじめに

本校ではこれまでも地域の様々な個人、団体との連携を進め、授業や地域探究活動を行ってきた。今年度より地域との連携による高校教育改革推進事業（グローバル型）を進めるにあたり、これまで以上に外部連携を強化することとした。またこれまでの連携は教員個人の繋がりを活用しているケースが多く、長期的に連携を進めるには組織同士で連携する必要があった。そこで組織的な繋がりを創るべく、コンソーシアムを結成した。本校が福島県双葉郡にある休校5校の伝統を引き継ぐ形で開校されたという経緯を踏まえて、双葉郡8町村の広域連携を図ることとし、各種団体へコンソーシアムへの参加、協力を要請した。

(2) コンソーシアム

以下の団体によるコンソーシアムを結成した。

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	笠井 淳一 氏
福島大学 人間発達文化学類	中田スウラ 氏
福島相双復興推進機構	新居 泰人 氏
福島イノベーション・コースト構想推進機構	山内 正之 氏
NPO 法人カタリバ	長谷川 勇紀 氏
福島県教育庁	丹野 純一 氏
本校校長	柳沼 英樹

今年度、コロナの影響により、コンソーシアム全体の会合がずれ込み、令和3年1月に実施した（コンソーシアムの記録については巻末に記載）。

コンソーシアム会合では、まず本事業の目的や目指す人材育成像を共有し、意見交換を行った。目指す方向性については、実際に実現できれば理想的な地域の実現できるレベルであると高く評価いただいた。一方でその実現に向けてどのようなアプローチが必要であるのか貴重なアドバイスをいただくことができた。また本校で行ってきた地域の方との連携の状況を説明し、具体的な連携方策について検討いただいた。コンソーシアムメンバーからは、地域探究テーマの設定方法、真に地域に入って

いくことの重要性和困難さやといった検討すべき課題を指摘いただいた。また地域に高校生が入っていくことにより、学校側が想定している以上に地域への波及効果がある可能性についてコメントをいただき、目的としている「学校と地域の相乗効果」の実現に向けて後押しをいただくことができた。

コンソーシアム実施後、本校1年生向けの「ヒューマンライブラリー」という取組において、地域のこれまで繋がりがなかった方をコンソーシアムメンバーから紹介いただくことができた。

(3) 今後の展望

今年度はコンソーシアムを立ち上げたこと自体が大きな一歩だったといえる。会合での内容については運営指導委員会の視点とは異なり、双葉郡地域の現場の視点が含まれており、本校の企画運営の具体的な進め方についても参考にしたい。また本校はこれまで社会学的なテーマが多かったが、今後理工系のテーマについても取り組む生徒が増える可能性があり、こちらもコンソーシアムを活用して連携を進めたい。

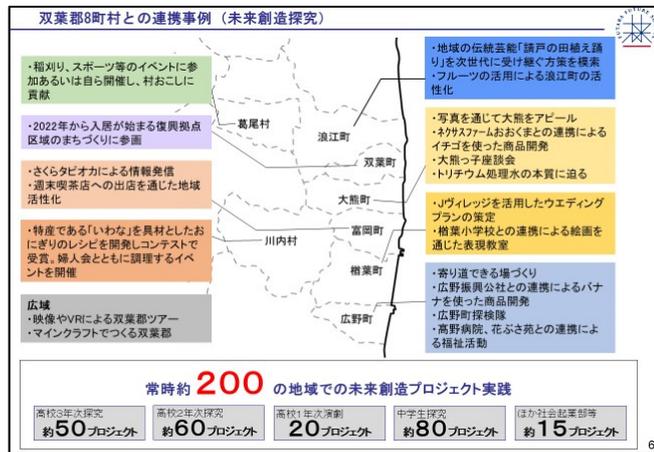
4.3.2 地域知連携

(1) はじめに

本校では開校当初から地域の課題探究活動を学校の教育活動の中心に据えてきた。本校が所在する福島県浜通りは震災原発事故が起きた地域であることから、社会課題が顕在化しており、その課題の解決のために頑張る大人が他地域に比べると多い。このような方々を本校では「地域知を持つ方」あるいは単に「地域知」と呼んでおり、開校から6年目となる現在、「地域知」は増えてきている。一方、ターゲットとする地域が本校の所在する近隣に限定されてきことが課題の一つとなっていた。そこで今年度は双葉郡8町村全域での活動となるように意識的に取り組むようにした。

(2) 地域知連携

この取組にあたっては、本校の地域協働学習支援員である平山勉氏（双葉郡未来会議代表）の人脈を大いに活用させていただいた。結果的に1年次の地域を知る活動、2, 3年次の未来創造探究（課題研究）においてこれまで接点のなかった地域まで活動領域を広げることができた。下図に主な地域連携のケースをまとめる。



また、今年度開拓できた代表的な地域知連携の事例を以下に述べる。

- ・双葉町との連携：双葉町は震災原発事故の影響でまだ一人も帰還がなされていない唯一の自治体であるが、2022年4月に帰還を目指しており、そのためのまちづくりの準備を進めている。そのための住民座談会が定期的に行われており、ここに本校生が参加している。住民、建築士、町の職員といった地域知とともに双葉町の在り方を探っている。
- ・葛尾村との連携：1年次に毎年行ってきたバスツアーを今年度からは1日の行程とし、これまで行くことが難しかった双葉郡内最遠方の葛尾村の訪問を実現させた。これを契機に葛尾村で活動している下枝浩紀氏（葛力創造舎）との繋がりが深くなり、葛尾村でのイベント実施等の探究活動が始まった。
- ・川内村との連携：葛尾村のケースと同様、1年次のバスツアーで川内村を訪問するようになった。演劇のテーマ設定の場として川内村役場にお願ひし、村長である遠藤雄幸氏にもインタビュー等に関わっていただくことができた。

(3) 今後の展望

年度当初に目標とした双葉郡8町村への活動展開をほぼ達成することができ、多くの「地域知」と繋がることのできた。教育と地域復興の相乗効果を目指し、この方向性を引き続き継続していく。

4.3.3 専門知連携

(1) はじめに

前述した「地域知」に対して、生徒の考えた探究テーマに関連した学術的な見識を持った方を「専門知を持つ方」あるいは単に「専門知」と呼んでいる。本校がある地域には大学や研究機関はほとんどなく、結果的に専門知を持つ方との接点は限定的であった。今年度、オンラインの利用が日常的になったことで、今まで地理的な制約で接触できなかった方と容易につながることができるようになり、専門知へのアクセスが容易になった。

一方、生徒のテーマと関連のある、適切な専門知につながることも容易ではない。これまでは教員が仲介役を担っていたが、教員の人脈にも限界がある。今年度は、これまでの担当教員の仲介に加え、ふくしま学(楽)会でお世話になっている松岡俊二先生（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）、永井祐二先生（早稲田大学環境総合研究センター准教授）が仲介役を申し出てください、これまで以上に複数の専門知とつながることができた。

(2) 専門知連携

以下に今年度の事例を示す。「」は探究テーマである。

- 山本麻紀子氏（京都市立芸術大学 非常勤講師）
「絵本から始まる1歩」（3年）
「未来プロジェクト」（3年）
- 菅波香織氏（未来会議議長、弁護士）
「廃炉を楽しくしっかりと!」（3年）
「トリチウムは汚染物質なのか」（3年）
「世界の子どもの偏見差別貧困問題を伝える」（2年）
- 永井祐二氏（早稲田大学環境総合研究センター准教授）
「エネルギーからエコロジーへ」
- 五味 馨氏（国立環境研究所福島支部主任研究員）
「エネルギーからエコロジーへ」
- 李洸昊（早稲田大学ふくしま広野RC事務局）
「韓国と日本が仲良くなるには?」（2年）
- 江川 賢一氏（東京家政学院大学教授）
健康と福祉探究ゼミ
- 阪本真由美氏（兵庫県立大学教授）
原子力防災探究ゼミ
メディア・コミュニケーション探究ゼミ
- 門脇秀典氏（福島県文化財センター白河館専門学芸員）
「鉄たまごという地域の可能性」

(3) 今後の展望

専門知との連携により、新たな見方、考え方が加わり、探究活動そのものの進展、深化がみられた。今後も引き続きこの環境を活用していきたい

第5章

オンライン授業の展開

5 オンライン授業の展開

概要

卒業式を目前にした2月27日、全国すべての小学校・中学校・高校・特別支援学校に、3月2日から春休みまでの期間、臨時休業とすることが表明された。無論本校も例外ではなかった。突然の知らせに各家庭はもちろん、職員室も混乱した。後日、全員がマスクを着用し、来賓も絞っての卒業式を終え、新1年生を選抜する入試が行われた。前回の入試はI期選抜の廃止と特色選抜の導入など県全体としても大きな変化を伴う入試だっただけに対応には苦慮したことを記憶している。

そういった普段の校務と並行して、本校の多くの授業を遠隔で実施することができた。本校には、生徒全員にタブレットが配布され、共通のGoogleアカウントの発行や割り振りといった“生徒側の環境”も、各教室にWi-Fi環境が整備され、全教室に電子黒板を設置しているといった“学校側の環境”も整っていた。このことに加え、常駐するNPOカタリバスタッフの協力や先生方のチャレンジを楽しむ精神があったからこそ可能な試みだった。

5.1 経緯

本校は休校となった双葉郡5校の流れを汲んでいる。そのため、原子力災害による避難の経験から学校があれば本来届けられたはずの学びを届けることができなくなったことを悔やむ先生も多数いた。だからこそ「一人も見捨てない。学びを止めない」をスローガンに学校が一丸となって遠隔授業の実施に向け取り組むことが出来たのは周知のとおりだ。

その後、緊急事態宣言の全国への拡大に伴い4月21日から5月下旬まで再びの休校期間が続いた。授業によっては、生徒と対面で一度も授業を行わないまま遠隔授業が始まり、生徒との初対面がZoomのアイコンといった科目も多かった。

文部科学省からの通知¹やGIGAスクール構想²、各県・各市町村教育委員会が提供するオンライン支援を受け、主にハード面の問題については予算や時間が掛かるが、いずれある程度は克服されていくのではないかと推察する。より深く考えたいことは、コロナ禍の学習を経て、私たち教員や生徒それぞれの中で漠然と生じた“新しい学び”への期待と再度の休校とそれに伴う再度の遠隔授業実施への不安にいかに対処していくかではないだろうか。

5.2 内容

2020年2月中旬、新型コロナウイルス感染症対策が長期的な対応となる可能性があり、今後も地域の感染状況を踏まえた臨時休業など、教育活動上の様々な制約が生じてくる可能性を考え始めた。如何なる状況においても

生徒達の学びを保障し、進路実現等に不利益が生じないよう準備を整えておくために、校内の部署を貫いた組織として「家庭学習ICT活用支援WG」が立ち上げられた。キャップに橋爪（企画・開発研究部主任）を据え、情報科教員、進路指導部、教務部など家庭での学習を支援するためにソフト・ハードの両面で支援するためのグループだ。また、教職員だけではなく、このWGには常駐するカタリバスタッフにも参加いただいた。これにより、春休み中の実践を踏まえたICT活用、共通した対応策等について共有し、組織的な実践を行う組織が創り上げられた。

その後、上述した緊急事態宣言を受け、2度目の休校が決まった2020年4月17日(金)の翌授業日に当たる20日(月)、早速全教員を対象にしたオンライン授業のための講習会を実施した。こうした未知の出来事への対応力の高さは、今校の特長と言ってよいだろう。

端的に、まとめてみると、

- ・ 実効的な組織とその運営のための指揮系統
- ・ それぞれの教員が持つデバック思考
- ・ 豊富な施設とICT機器

と、言ったところだろうか。

この講演会では、90分にわたって以下の内容について行われた。

全体説明	「遠隔授業について」	校長、副校長、林、鈴木貴
具体的活用①	「同時双方向型ツールによるHR活動」	新田、大槻

¹ 「新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受けた家庭での学習や校務継続のためのICTの積極的活用について」(令和2年5月15日付)

² 「GIGAスクール構想」(令和元年12月付、令和2年6月26日更新)

具体的活用法②	「ClassRoom の活用」	塩田
具体的活用法③	「zoom を中心とした遠隔授業」	荒、長谷川
ミニ科会	「活用法や疑問点について」	
全体共有		

また、この講習会自体も密を回避するため、教科ごとに教室を割り当て、Zoom を利用して行った。こうした運営スタイルを取り入れたのは密を回避することだけが目的であったのではなく、当時多くの先生が未経験であった Zoom に触れる機会を作りたいと思ったからだ。そして、こうした工夫の一つひとつが WG の先生方との対話の中で生まれた。だからこそ、休校期間中であっても先生方は高い教員 Agency を維持して校務に励み、生徒にもワクワクする授業を届けられたのではないだろうか。また、こうした講習会は 1 度だけ開催しただけではない。直後には、塩田を講師に Google Classroom の使用法に的を絞った講習会が開催された。同時双方向型の授業だけではなく、テキスト配布形式の授業、そのいずれであっても評価や日々のフィードバックが発達段階も様々な生徒には不可欠だ。こうしたきめ細かなフィードバックを欠いてしまうと生活習慣が乱れてしまったり、学習の目的が見失われてしまったりする。簡便に他人数との質の高いフィードバックを可能とするアプリが Google Classroom だ。この際に塩田が作成し使用したテキストと、前述の講習会で使用したテキストは本校だけの財産とするのではなく、HP で全国に公開したり、県教委を通して各校に届けていただいたりした。いずれも沢山の児童・生徒の学びを止めたくないという願いだったり、校内で孤軍奮闘している先生がいれば、その手助けになったりすれば良いと思ったからだ。

【実際の授業例①】生徒配布タブレット内蔵カメラで配信

生徒配布用タブレットの教員指導用在庫機材を使用して配信した。画像が粗く、生徒のスマートフォンで視聴した際は板書の読み取りは難しかった。そのため、学活・HR 等板書不要な場面以外では、この形態での授業配信は行っていない。

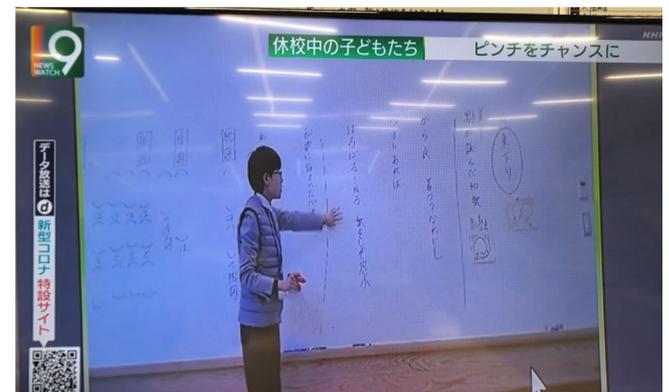


【実際の授業例②】Webカメラで配信

教師用パソコンやタブレットに、Web カメラを接続して配信した。画像が鮮明で、生徒のスマートフォンで視聴した際も板書の読み取りが可能であった。そのため、授業配信では形態が活用された。因みに、こうした授業がどの先生でもできるように、中学から高校すべての HR



教室を配信用のスタジオへと設定した。予め、WG の先生でスマホやタブレットでの見え方を検討したり、黒板のどこまでが見えるのかを確認し、使用可能なところに印をしたりした。



【実際の授業例③】 書画カメラで配信

パソコンやタブレットに、既存の書画カメラを接続して配信した。画像が鮮明で、生徒のスマートフォンで視聴した際も板書の読み取りが可能な上に、パワポの資料ではなく、手書きの資料も鮮明に見せることができたので重宝した。また、ズームアップも可能であったので、メリハリの着いた資料の提示が出来た。



5.3 考察

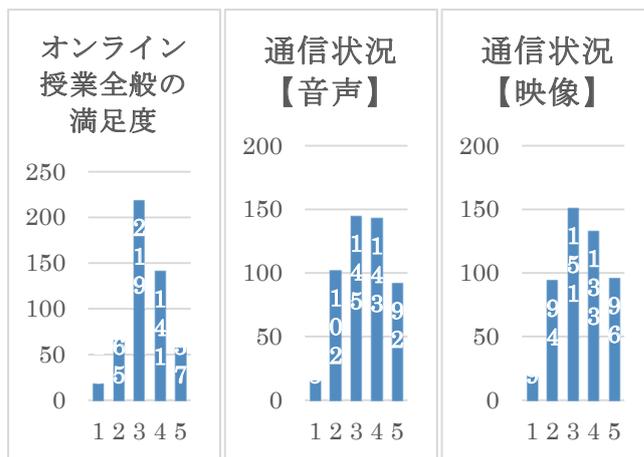
生徒・教員からのアンケートに基づきこれからの学びについての課題と対応策、そして今後の授業への活用についてまとめる。

休校期間における学習状況アンケート 概要
 オンライン授業実施期間：2020年3月4日（水）～3月19日（木）、4月21日（火）～5月22日（金）
 アンケート取得期間： 5/29～6/18
 対象学年： 中学1年生～高校3年次
 (N=529)

(1) 通信環境の改善と基本的なリテラシー

休校中でも「すべての先生が、すべての科目でどうすれば学びを届けられることができるだろうか?」、「どうすれば安全・安心して子どもたちは学びを継続できるだろうか?」と、3月の休校措置の決定とともに検討を始めた。新・高校1年次以外は生徒一人ひとりにタブレットが用意されていたが、ICTを活用した一斉の課題配信や授業配信はこれまで行われたことがなかった。結果としては、以下のグラフから分かるように、多くの生徒に満足度の高い授業を提供し続けることができた。

しかし、一見すると満足度が1~2と低位にある生徒も目立つ。ただ、下記の表1、2で示したように通信状況が良い生徒に関していえば、授業の理解度も高かった。つま



平均 3.31 3.39 3.38 【とても悪い1⇔とても良い5】(母数:509)

り、通信環境が整えば理解度は担保できる。ただし、満足度を担保することこそ生徒が自ら学びに向かう土台になるであろう。こちらについては、各教員の授業力の向上に資するところが大きいのではないだろうか。

[表1]

理解度	通信状況【音声】					
	0	1	2	3	4	5
1	8%	13%	38%	21%	13%	8%
2	0%	2%	30%	33%	28%	7%
3	0%	3%	25%	37%	21%	14%
4	0%	1%	12%	24%	41%	23%
5	0%	0%	4%	21%	21%	54%

(N=358)

[表2]

理解度	通信状況【映像】					
	0	1	2	3	4	5
1	4%	13%	38%	13%	4%	17%
2	0%	3%	35%	28%	22%	12%
3	0%	3%	21%	45%	19%	13%
4	0%	2%	4%	25%	40%	28%
5	0%	0%	4%	12%	24%	60%

(N=359)

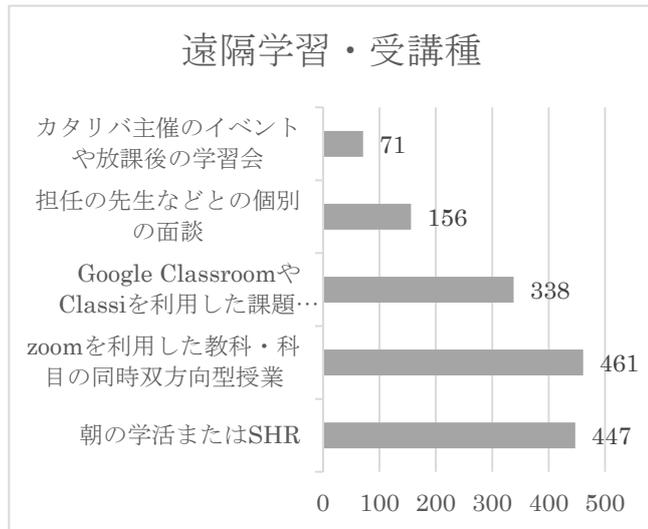
また、休校期間中の授業配信と環境の悪い生徒たちを支えたiPadについてはソフトバンクからの貸与期間が終了してしまったので、返却している。通信面の生徒・教員それぞれの側へのサポートもより一層個別化していくことが求められる。そのためには、以下の点が生徒・教

員両面で重要である。

- ・ 迅速な担任の先生を中心としての生徒個別の不具合の集約とその具体的対策
- ・ 急な不具合に対応できる情報機器活用能力
- ・ パスワードの管理や適切なオンラインでのやり取りといった情報リテラシー

(2) 新しい学習スタイルへの変換を考える

本校に限っては、グラフが示すように、授業のスタイルが多彩であった。そのため、課題配布型のプリントを渡しフィードバックも十分に行わない授業は皆無であった



【複数回答】(母数:509)

し、遠隔型授業でも、一方的に講義を進め、生徒が席についているかをただ監視するような形態の授業もほとんどなかったため、前述したような、おおむね高い満足度を全学年から得られたのではないかと。つまり、休校のための対応として行ったはずの遠隔授業の中には、これからも活用できる“新しい学び”が存在した。こうした各教員の中でぼんやりとだが確かに存在した“新しい学び”を個々の教員が集約したり、先生同士で対話する中で練り上げていったりすることが望まれる。

反面、課題についても遠隔授業を通して、新しい何かが発生したというのではなく、これまでぼんやりとしていた課題が顕在化したのではないだろうか。中でも、“主体性”だ。自ら学びに向かえないなど主体性やマネジメント力といった生徒個々のコンピテンシーの差により学習の成果が大きく異なることを明確に感じた。これまでの学びの中には、もしかすると形だけのアクティブ・ラーニングもあったのではないだろうか。本当にどの生徒も主体的・対話的に深く考える授業が行われていたのだろうか。“新しい学び”を追求するとともに、これまでの学びを再検証していく必要性を感じる。

(3) 学びの個別最適化

首都圏の学校では7月に入ってやっと分散登校が開始されたが、本県では学校活動の再開から1年近くが経過した。しかし、早10カ月で、休校期間中の出来事や、遠隔授業などもなかったことのように、コロナ以前に戻ろうとする動きも見られる。ここで備えを怠り、次の感染拡大で同じように学校の身動きが取れない状況に陥ってはならない。恐らく、次の休校では多くの学校で遠隔授業が実施されるだろう。つまり、遠隔授業を行っていることが“当然”になる。今後はより一層、遠隔授業の“質”が問われる。

また、一昨年夏の熊本県を中心に被災した集中豪雨、昨年度の台風19号など日本は災害が多い国だ。そのため、私たちも生徒も、様々な場面でICTを活用しておく機会を意識的に設けておくことが重要である。例えば、探究活動の中では、遠く離れた卒業生や講師をオンラインでつなぎ、講演会を行った。こうして自由にICT機器を使いこなして、新しい取り組みを進めたのは教員だけに限らない。県内や全国には、学習環境が整わず十分に学べなかった生徒がいる一方、自ら学べる生徒は、以前よりさらに学習が進んだ。実際、各年次の探究活動では、身の回りの制限された環境の中でも、興味あることを探究し、地域と繋がる生徒が出てきた。

まずは・・・ノートを用意。プレストしてみよう。



(6期生・1年次産業社会と人間「プチ探究」より)

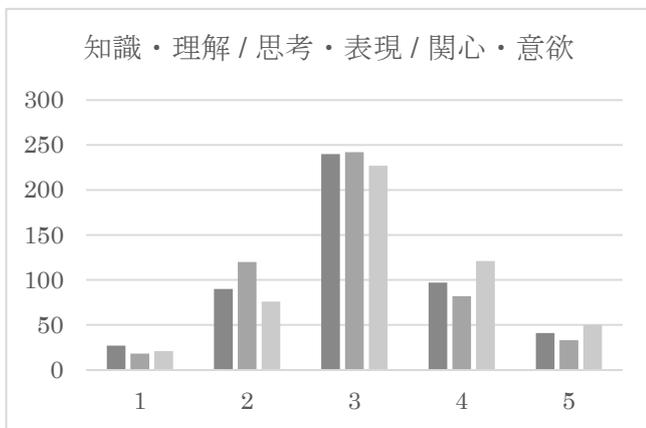
新入生は3つの輪の重なり合う課題を設定して、各自がオンラインでの探究学習に取り組んだ。また、自由記述の中には、「休校中は自分のペースで勉強できてよかった」という生徒が少なからずいた。前例のない体験の中で、生徒も色々な気づきを得たようだ。一方、教員アンケートで最も多かった意見は「生徒の学びの実際が見えない」ということだ。「できているつもり」「わかっているつもり」であって、必要な知識は獲得できたのであろうか。または、オンラインでは生徒の手元が確認できない。生徒は画面に向き合っていたが、果たしてどれほど真性の学びに向き合っていたのであろう

か。

つまり、私たち教員は、テストに代表される“総括的評価”だけではなく、生徒のノートを見取ったり、机間巡視の際に生徒の主体性の有無を感じ取って指導に反映させたりするといった“形成的な評価”を大切にしてきたことを改めて知ることになった。しかし、これまでルーブリック評価等で大切にしてきた“形成的な評価”が遠隔授業では難しかった。そのため、対面の授業においては生徒個々の家庭での学習や学びの過程をつなぎ、生徒の学びを“ファシリテート”する役目がより一層私たち教員には求められているのではないだろうか。

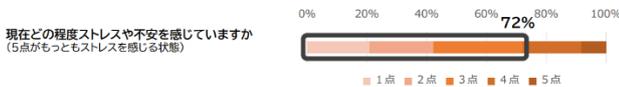
再度の休校下でも、学びを止めない。

グラフを参考にされたい。

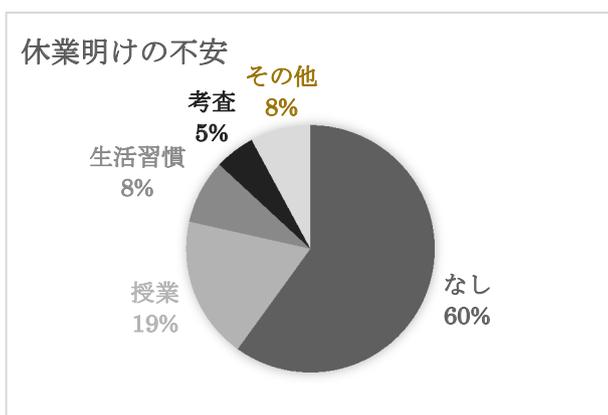


【とても悪い1⇔5とても良い】(母数:509)

果たして、3項目の観点別自己評価が示す通り、生徒の学力は保障されたのだろうか。再開後に行われた考査や模試での結果が良ければ、それで学びを保障できたとみなして良いのだろうか。本当にそうした学力だけがコロナ禍での学習を支える力になっていたのだろうか。または、Zoomを用いて双方向に近い形で授業を提供できたことだけをステータスにして良いのだろうか。



「教育テスト研究センター」(248件)



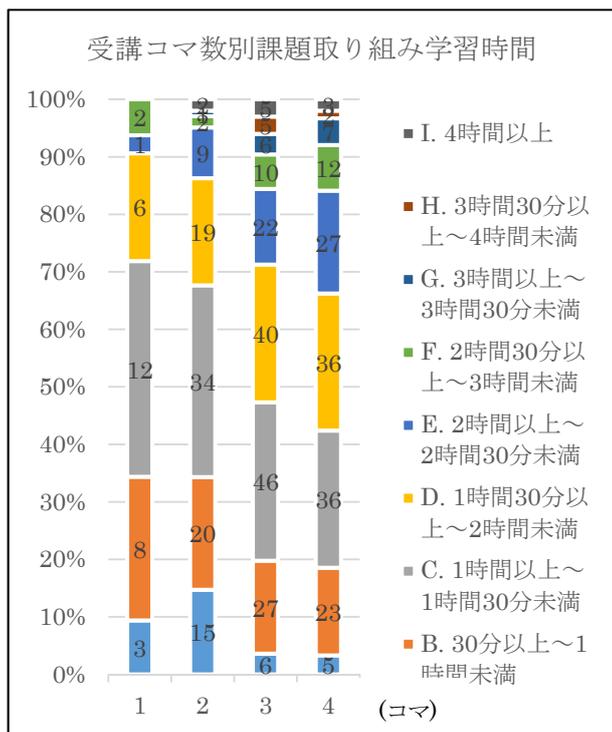
校内(509件)

次に、上記のデータを参考にされたい。全く同一の基準で得られたデータではないが、全国の生徒の72%が何らかのストレスや不安を感じているのに比べ、本校生の60%は休校明けの生活に不安を感じていなかった。これは、全国的には休校中に生活が乱れたり、ケアされない状況が深刻化したりしてしまった生徒がいた一方、本校では生活リズムを乱さないために、毎朝SHRや学活を通して生徒たちとの関わりを保った成果だ。

また、休校中に生徒と面談を実施した学年があったり、学習の個別添削を行ったりした科目もあった。その合間には勉強の相談に加えて、沢山の余談も行ったであろう。私自身も、ちょっとした声かけが生徒のやる気につながることを実感した。つまり、学校が単純な「教育機関」ではなく、より大きな「コミュニティ」であるという学校や教員の存在意義が明確になった。教育だけではない“学校”という「コミュニティ」の中で、知的で文化的なICT活用を保障していく視点も必要である。

(4) 適切な授業時数と家庭学習時間のバランス

多くの進学校に追随し、週5日50分×7校時のカリキュラムを設定すれば、果たして生徒の学びを保障し、生徒の期待する進路を実現することにつながるのだろうか。下記のグラフを参考にすると、遠隔授業のコマ数と家庭学習時間には正の相関が見られる。つまり、休校期間中の余白が有り、主体的に学習を進めることができるコマ数や授業外の時間を利用した適切なICT支援がなされた場合、家庭での主体的な学習時間も確保できるということだ。



家庭や校外での主体的な学びと学校だからできる学びを整理し、こういった学びに取り組むための体力も含めた土台を学校教育の中で育てていかなければならないのではないだろうか。

開校以来、私たちの学校では、探究学習を土台に、知識だけではないコンピテンシーをベースにした未来創造型教育を実践してきた。今こそ、これまでの教育活動の延長線上に、コロナ禍での遠隔授業で培った内容を取り込みながら、学校を中心とした「学び」を、人間としての成長につなげながら、一人ひとりの中にどんな環境でも「学び続けることの出来る力」をつけていくことが求められている。

(5) 課題に向き合える教員集団

学校によっては、校内の閉鎖的な意見と向き合いながら両者の意見の狭間に立ち、当該校に応じたオンライン学習を提供しようとすることに注力する先生も多かった。しかし、本校では早い時期から校内一丸となってリスクや失敗を恐れず挑戦する自由が担保されていた。こうした、本校ならではの文化はつくづくありがたい。

コロナ禍にあった5月21日、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(通称: グローカル型)の運営指導委員である田熊 美保 氏(OECD 教育局シニアアナリスト)とのオンライン対話会が行われた。その中で、教員のエージェンシーⁱを高める組織づくりをする上では、生徒の well-beingⁱⁱと、私たちの well-being は、同値であることを参加した先生方は実感した。これまで「生徒のため」にと行ってきたものを“精選”し、生み出され

た“余白”の中で主体的に成長し、楽しんでいけることが、結果として、生徒の主体的な成長を促していくのではないだろうか。

ただし、こういった思考をまとめ、組織で取り組むことができる理念や教育活動に落とし込むためには“対話”が必要である。対話を通して、それぞれの教員が持つ概念的な思いをきちんと共有したい。さらに、「学校」とは、生徒や地域とともに考えていべきところなのかもしれない。どのような実践を具体化すれば実現できるのだろうか。これについては引き続き探究していきたいと思う。

5.4 今後の展望

政府は急激な感染拡大を受け、2度目の緊急事態宣言を行った。その中で、昨春のような一斉休校は要請しないとした。つまり、学校で感染者が発生しても、校内で広がっていなければ休校はせずに教育活動を継続する方針だ。ただし、部活動や一部の教育活動など身体接触があり感染リスクが高い活動は制限する。そのため、再度の休校に備えた ICT の活用だけを準備していくのではなく、生徒がより主体的・対話的で深い学びを実現するために有効な観点について、主な教育活動を2つの場面に分け、以下にまとめた。

・ 授業を中心とした教科指導の観点

(1) 個に応じた指導の充実

同時双方向型オンライン指導では、生徒の理解度の把握はリアルタイムではなく、毎回の授業後の課題提出で行われた。そのため、対面指導時の机間巡視より詳細に生徒の理解度を把握することが可能となった。また、課題提出に Google Form を活用することで、ペーパーテストより採点・添削業務を効率化でき、添削の頻度を上げられた。ただし、教員の添削・フィードバックの業務負担は増えた。そのため、同様の授業を通常の6~7校時/日の時間割での実施は難しい。本校の休業期間中の4校時/日の時間割であったから可能であった。また、対面指導時より Google Classroom での連絡手段が日常的に活用されたことで、授業内では質問をしなかった生徒が、授業後に質問をしてくるケースが実際に多かった。

(2) 授業進度の向上による授業時数圧縮

生徒の集中力への配慮(目の疲れも含む)や確保可能な授業時間数の制約などから、指導内容の精選が求められた。そのため、授業中に指導する事項と課題として考えさせる事項の選別などにより、授業進度は向上した。また、板書事項を Power Point 用ハンドアウトや PDF などの電子データで事前に生徒へ送付したり、作成した

You Tube 動画を予め視聴したりする反転学習を行うことによっても授業時間は圧縮され、さらに生徒たちは話を聞くことに集中できるという効果も生まれた。本校においては、臨時休業中（4/21～5/24、5週）にオンラインで実施できた各教科授業時数はおおむね年間計画の50～60%に限られたのに対して、年間計画に対する各単元の遅れ時数は全教科平均で1.6週に留めることが出来た。最小は地歴公民の全科目や数学・英語の一部科目で遅れ時数は0週となった。（5/29時点調査）

教員の指導力向上

上記(1)(2)への対処を通じて、教員は毎回授業前に「授業内で教えること」と「授業後に考えさせること」を精選し指導計画を検討した。これは、教員の指導力向上に繋がった。

・ 特別活動等の学級活動の観点

(1) 情報集約の効率性

健康状況に関する毎日の調査と情報集約を、Zoomを活用した朝のSHRとして行ったこと等と並行してGoogle Formで整理・分析できるなど、効率化された。再来年度からの新しい学習指導要領の改訂を受け、多くの学校では新しく魅力あるカリキュラムの作成に奔走されていると思う。しかし、これまでのように朝夕SHRを実施し、50分7校時の授業を実施して、果たして生徒は教育目標に掲げられた生徒像へと育まるのだろうか。例えば、SHRを1つにまとめながら、対面ならではの温かみも残

ⁱ コンピテンシー（資質・能力）を再定義し、新たな学習枠組みとして示した「ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」の中で、コンピテンシーが不可分一体のものとして絡み合い、さらに「より良い未来の創造にむけた変革を起こす力」（①新たな価値を創造する力 ②対立やジレンマに折り合いをつける力 ③責任ある行動をとる力）を備えるため、見通し(anticipation)・行動(action)・振り返り(reflection)から成るAARサイクルを回しながら、ウェルビーイング（健やかさ・健康度）を目指して学んでいく道を照らして歩んでいく原動力。

した効率化とタイムマネジメントを工夫することで、余白と部活動に代表されるこれまでの学校教育が担ってきた大切な学習を展開できるのではないかと。

(2) 効率的な面談の実施

場所や時間に縛られず効率的に面談を実施することが出来た。また、部屋の様子などから家庭の状況がうかがえ、家庭環境の把握や保護者との意思疎通に繋がった面もある。

更に、高校3年次では、進路希望に関する三者面談を授業の合間の時間で実施することが出来た。その際、保護者も交えた三者面談については来校いただく必要がないため手軽に実施できた。ただし、本校の休業期間中の時間割を4校時/日として合間の時間を確保していたことによって実施出来た面もあり、通常の6～7校時/日の時間割での実施は難しいだろう。

(3) 登校できない生徒の参加を促進できる

病欠や、不登校傾向の生徒についても、オンラインで参加可能な時間帯のみ授業に参加するなど、学校との関係を継続することができた。ただし、対面授業と同時双方向のオンライン授業は、教材準備や授業展開が大きく異なるため、同時ハイブリッド型授業で対面参加・オンライン参加双方の生徒にも内容の定着をはかろうとした際は、何れかに限定した授業以上に困難で課題があった。

ⁱⁱOECDの国際報告書では、“well-being”を「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き(functioning)と潜在能力(capabilities)である」と定義している。“well-being”は、心身の「良好な状態」や「健やかさ」「幸福度」という言葉で翻訳されることが多いが、それらの言葉が意味するところ(定義)や解釈は人や立場、文脈によって異なる。“well-being”の日本語訳については、慎重に検討する必要がある。本報告書のタイトルでは、“well-being”を「健やかさ・幸福度」として仮訳をあてている。

第 6 章

実施の効果とその評価

第6章 実施の効果とその評価

6. 1 ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) はじめに

平成27年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後4月、教員全員による教員研修会(本校では「未来研究会」と称する)を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの8割は原発事故で避難となった地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子供たちが卒業する3年後に、どのような姿になって欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した(巻末関係資料参照)。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人との間の気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をする上でも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と

言うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせ、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

開校から6年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着してきた。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。

(2) 1期生（平成27年度入学生）から6期生（令和2年度入学生）のルーブリック評価（表1～6，図1～7）

表1 1期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	



表2 2期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	

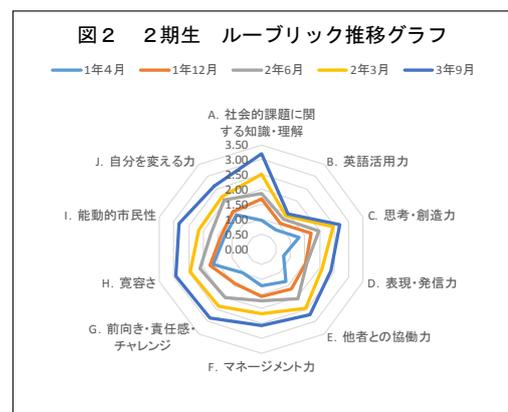


表3 3期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	

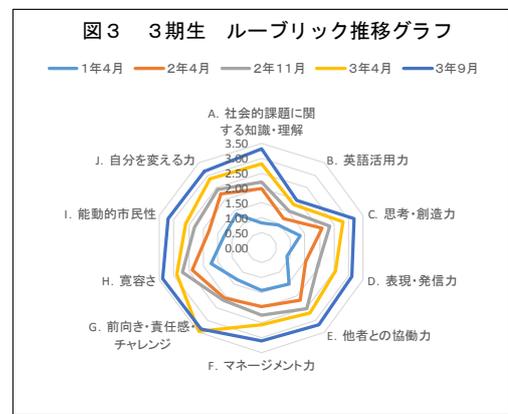
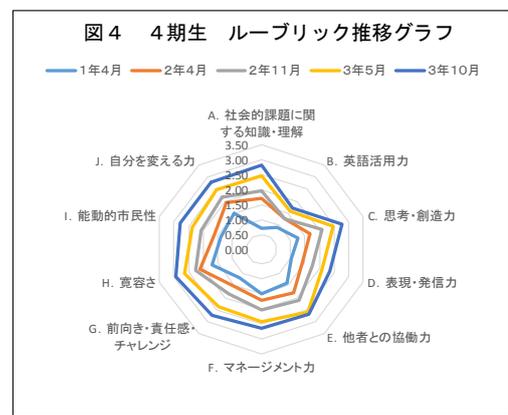
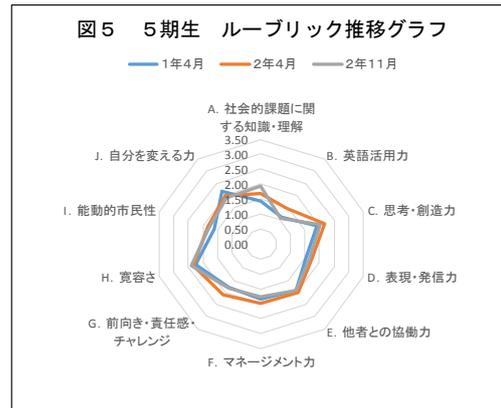


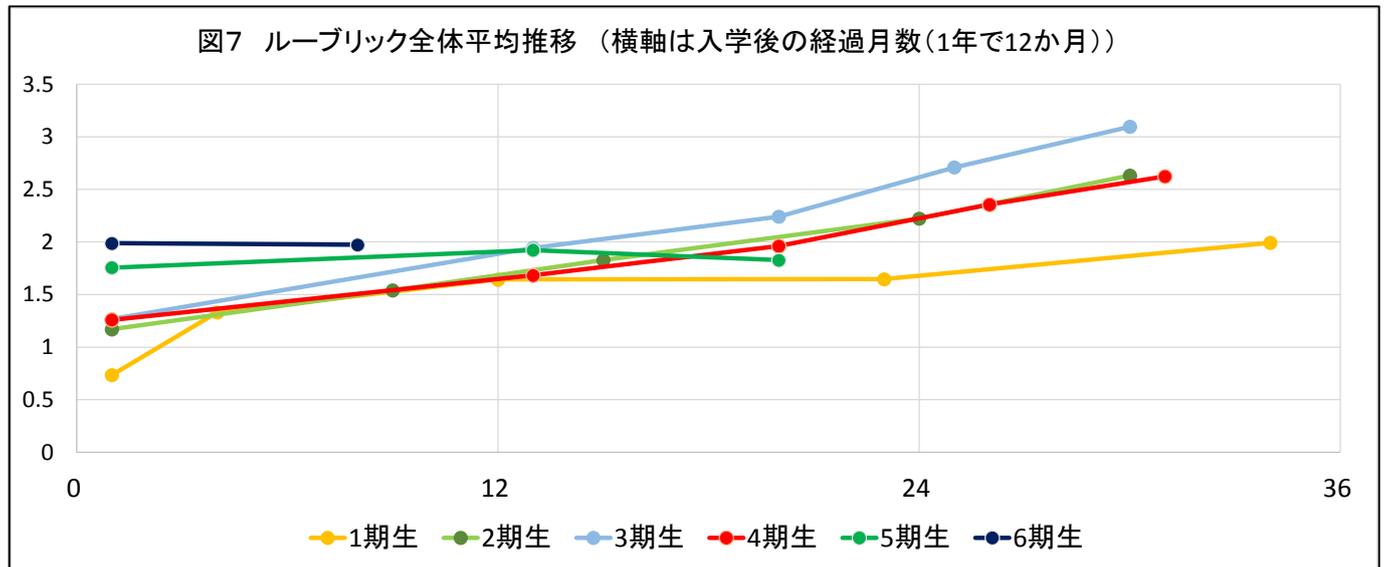
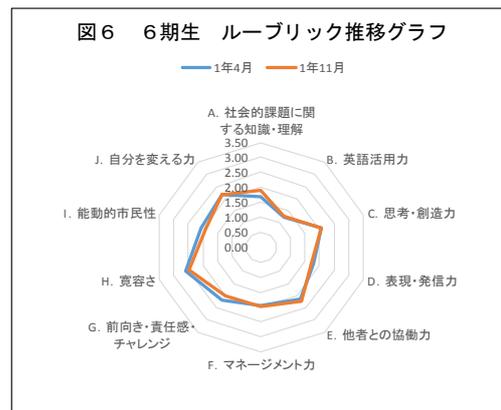
表4 4期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	



	1年4月	2年4月	2年11月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	1.43	1.70	1.94	
B. 英語活用力	1.11	1.44	1.06	
C. 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	
D. 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	
E. 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	
F. マネージメント力	1.83	1.97	1.77	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	
H. 寛容さ	2.25	2.31	2.38	
I. 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	
J. 自分を変える力	2.16	1.98	1.91	
平均	1.76	1.92	1.83	



	1年4月	1年11月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	1.69	1.91	
B. 英語活用力	1.23	1.27	
C. 思考・創造力	2.05	2.07	
D. 表現・発信力	1.78	1.73	
E. 他者との協働力	2.15	2.21	
F. マネージメント力	1.96	1.99	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	2.00	
H. 寛容さ	2.58	2.46	
I. 能動的市民性	2.07	1.91	
J. 自分を変える力	2.16	2.18	
平均	1.99	1.97	



(3) 4期生(令和2年度3年生)の評価

4期生(3年次)に対しては、本校入学から卒業までに計5回のルーブリック調査を実施した。なお、本校のルーブリックについては本報告書の関係資料に掲載した。

調査では、生徒自身が評価の観点10項目それぞれに対して自己評価を行った。各項目について最低は0、最高は5である。最高レベルは本校の開学の精神である「変革者たれ」を実現できるレベルとして設定している。自

己評価後、生徒同士のピアレビューや教員と生徒による1対1の面談(ルーブリック面談)による修正を経て、自身が現在どのレベルにいるかを評価した。結果的にピアレビューや面談の前後で値はあまり変わらなかった。また1期生からの評価条件を統一するため、ここでまとめたものは自己評価後、ピアレビュー、面談前のデータを用いている。

4期生のデータを(2)表4、図4に示す(表1~3、

図1～3は1～3期生のデータである)。推移について概観すると、まずほぼ全ての項目について1年次には低かった値が、年次を経るに従って高くなっており、生徒の成長が伺える。年次が上がるにつれて値が下がったところは1か所のみであり、学校生活全般、産業社会と人間、未来創造探究の活動により、生徒の資質・能力・意欲が順調に培われてきたと言える。

1年次4月当初はいずれの項目も値が低い、H寛容さ、Fマネージメント力、E他者との協働力が他と比較して高い値となった。これらは1期生から3期生も当初高い値となっており、地域性や中学校での活動の結果による可能性もある。またA社会的課題に対する知識・理解、D表現・発信力、B英語活用力については評価が低かった。この傾向も1～3期生とほぼ同じであった。

1年次には、各授業や部活動等の諸活動とともに、「産業社会と人間」での地域の課題を知るバスツアー、演劇創作等が実施された。この活動を経た2年4月に実施した際の値では、H寛容さ、J自分を変える力、E他者との協働力が高くなった。Hについては入学当初から高い値でそのまま資質能力が高まったためと思われる。Jについては1年次の取組を実施後に振り返りを重視して行ったことや、2年生になって探究活動に入るタイミングでのルーブリック調査であり、目標設定への意気込みが現れたのかもしれない。また1年当初と比較して伸長が著しいのはA社会的課題に関する知識・理解である。1年間の授業や「産業社会と人間」において社会や地域を知る多くの取組を経て知識を習得したという実感があったものと思われる。

2年次には、本校の取組の柱となる未来創造探究(総合的な学習の時間)がスタートした。2年前半には探究活動を進めるためのゼミ配属やテーマ探索を行い、10月には決定したテーマを発表する「プレ発表会」を行った。プレ発表会直後の11月にルーブリック評価を実施している。各項目についてみると、ほぼ同じ順序でH寛容さ、J自分を変える力、E他者との協働力、C思考・創造力が高くなった。また2年4月期と比較して、C思考・創造力、I能動的市民性が0.4以上と大きく伸びている。2年生ではゼミに所属し、特定のメンバーでの活動が増え、また校外に出て地域の方とやりとりする活動をする生徒も増えてきた時期である。実践を進めるについて、CやIが培われていることが伺える。

3年次では、2年次に引き続き未来創造探究(総合的な学習の時間)での探究活動を行った。2年の終了直前にコロナ禍による休校が入り、3年がスタートした直後も

再度の休校となった。

3年最初の評価は、トータル約1月半の休校が終了した5月に行った。休校の影響があったことは否めないが、この期間の値の変化は+0.40と、非常に大きかった。値として高かった項目はH寛容さ、E他者との協働力、C思考・創造力、J自分を変える力と2年秋の時点と項目は変わらなかった。伸びとしてみると、G前向き・責任感・チャレンジ、A社会的課題に関する知識・理解であった。コロナ禍の状況は震災・原発事故当時と通じるところがあり、実際に自分たちの生活にも大きな影響があるものだったため、Aの必要性を感じたのかもしれない。また緊急時だからこそ、その状況に飲まれずに前向きさを持ちたいと感じた可能性がある。

3年6月以降、休校とはならなかったものの、コロナ禍は地域の方々との連携にも大きな支障を及ぼした。特に幼稚園、小学校、老人ホームといった施設からは生徒の訪問ができなくなる状況が夏休み明けあたりまで続いた。一方でオンラインの活用が徐々に浸透し始め、直接会えない代わりに、オンラインによる対話や議論の機会が急激に増加した。この利用により、距離が遠くて会うことが難しかった方々と気軽に接触することができるようになった。

最後のルーブリック評価は9月に実施した未来創造探究発表会の後に実施した。ルーブリック10項目の平均値は2.62と、1年生からの3年間で最も高い値となった。一方、半年間での伸び0.26となっており、2年後半から3年前半にかけての伸びほどは大きくなかった。また例年、この時期の伸びが非常に大きい傾向にあるものの、今年度はこの傾向から外れていた。この要因としてはやはりコロナ禍による地域での活動の制限が影響していると思われる。この時期になって実践ができなくなり、テーマを変更した生徒も少なからずおり、テーマ設定から仕切り直しになってしまった生徒にとっては明らかに時間がなかったと言える。

項目別にはH寛容さ、A社会的課題に関する知識・理解、I能動的市民性が高くなった。また、前回から伸びが大きかったのは、I能動的市民性、A社会的課題に関する知識・理解であった。I、Aについて生徒のコメントを見ると、いずれも探究活動を通じてそれらの項目が高まったという回答が多く、探究活動が3年前半の活動で深まったことが伺えた。

最後にB英語活用力について述べておきたい。Bは3年間を通して着実に伸びてきているものの、入学当初から3年の最後まで他の項目と比較して低い値で推移した。

英語の活用については探究活動で日常的に意識する機会が少ないのが現状である。発表会の際に要約を英語で書くことも推奨しているが、指導の難しさからなかなか浸透していない。結果的に英語の教科学習での育成に頼らざるを得ない状態となっている。一方で英語の授業ではアクティブラーニングを導入したり海外の同世代との交流企画を行ったりする等、工夫を重ねている。今後、英語の授業と探究の授業を往還する等して改善を図りたい。

(4) 5期生(令和2年度2年生)の評価

5期生はこれまで3回ルーブリック評価を行っている。値を表5、グラフを図5に示した。5期生は1～4期生とは推移の様相が異なっている。まず、1年4月の時点での値の平均が1.76と比較的高く、4期生の2年4月の時点の値(1.68)とほぼ同様な値を示した。その後、平均が2年4月には1.92と上がったものの、2年11月には1.83と下がった。推移を概観するとほぼ横ばいと言えるであろう。項目別にみると、H寛容さについては値が高く、そのまま順調な伸びが見られる。またA社会的課題に関する知識・理解についても値は下がることなく順調に高まっている。一方で自分を変える力については1年4月の値が最も高く、時間を経るごとに下がってきている。Jは自分を俯瞰して見つめる、所謂メタ認知に関わる項目である。自分ではその力があると思いついていたものの、探究活動を進めるうちにメタ認知力の意味を的確に捉えるようになってきた可能性がある。値は下がっているものの、適正に見る目を養っているという意味ではこの傾向でも問題はないのかもしれない。

現2年生の探究活動の様子をみると、今まで以上に意欲的に活動している生徒が多い一方で、消極的にゼミを選択したり、教員の指示がないと取り組めないような生徒もおり、活動の格差が広がっている様子が伺える。これを支持するようにルーブリックの値の分散も大きい。意欲的な生徒に対しては教員がメンターとして、消極的な生徒には教員がモチベーター、インストラクターとして、生徒の状況に応じた指導が必要と思われる。

(5) 6期生(令和2年度1年生)の評価

6期生はこれまで2回ルーブリック評価を行っている。値を表6、グラフを図6に示した。6期生の推移は5期生の推移と非常によく似ている。最初の値は以前の1～4期生と異なり、高い値から始まっている。全体の平均値は1.99と、4期生の2年11月とほぼ同じ値であり、1～6期のなかでは最も高い値となっている。特に高い

のはH寛容さであり、これは1～6期生で共通している。次に高い値はG前向き、責任感・チャレンジであり、6期生の学校生活に対する意欲や期待が非常に高かったことが伺える。Gが2番目に高かったことはこれまでの1～5期生とは少し異なる。

1年11月の全体の平均は1.97となっており、4月からほぼ横ばいである。この間、特に値が高まったのはA社会課題に関する知識・理解である。双葉郡外から来ている生徒も多く、この地域のバスツアーを行うことで地域理解が深まり、またコロナ禍の影響により社会に目を向ける機会が増えたためと考えられる。一方で大きく下がったのはG前向き、責任感・チャレンジである。高い意欲をもって入学したものの、学校生活や探究活動が予想していたものとは違うという印象を持った生徒も多いようである。とは言え、1～5期生に比較して値そのものは非常に高いため、それほど心配することはないと思われる。また、6期生は1年生の後半から地域課題探究に取り組み始めており、その効果が今後現れてくることを期待したい。

(6) 1期生から6期生の平均値の推移

1～6期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを(2)図7に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。

これまでのところ、3期生が3年最後の値としては最も高くなっている。今年度、4期生(今年度卒業生)は2期生とほぼ同じような推移を示した。3期生は特に3年次の最後の半年で大きな伸びを見せており、4期生でも同様な状況になることを期待したが、今年度はコロナ禍の影響もありそれほど高まらなかった。

また、6年間のデータより、当初、最終的に高くなるのはA社会課題に関する知識・理解、H寛容さ、G前向き・責任感・チャレンジあたりであったものが、最近ではH寛容さ、J自分を変える力、C思考・創造力あたりに変化しつつある。H寛容さが高いのは本校の1期生からの特徴である。寛容性は本校の設立経緯を踏まえて本校で独自に設定した項目であるが、この力が探究活動をはじめとする学校教育全体で育成されていることは注目したい。またJやCはこれからの教育で必要とされる要素であり、これらが高いことも、本校の教育が好ましい方向に進んでいることを示していると思われる。

6. 2 ルーブリック評価の定量的分析（アクセンチュア株式会社）

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、現3年生の入学以降、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

(1) はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4カテゴリ（「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」）、10指標を定義し、それぞれ5段階のレベル（1-5）を絶対評価になるよう設定した。

■知識：A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力

■技能（スキル・コンピテンシー）：C 思考・創造力、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力

■人格（キャラクター・センス）：G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性

■自らを振り返り変えていく力：J 自分を変える力

4期生である現3年生が測定したのは全5回、入学した平成30年4月（①1年4月：ベースライン）から平成31年4月（②2年4月）、令和1年11月（③2年11月）、令和2年5月（④3年5月）、令和2年10月（⑤3年10月）までである。5期生である現2年生が測定したのは全3回、入学した令和1年5月（⑥1年5月：ベースライン）から令和2年4月（⑦2年4月）、令和2年11月（⑧2年11月）までである。6期生である現1年生が測定したのは全2回、入学した令和2年4月（⑨1年4月：ベースライン）から令和2年11月（⑩1年11月）までである。

測定においては、自己評価に加え、生徒間ピアレビューを実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降のデータ分析、示唆出しを行った。（OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール 2030 東北クラスターにおいても福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。）

(2) データ分析の概要

今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした（4期生：計93名。アカデミック30名、スペシャリスト38名、トップアスリート25名。5期生：計120名。アカデミック48名、スペシャリスト39名、トップアスリート33名。6期生：計118名）。入学時から卒業までの推移を見るとともに、4期生と5期生、6期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

4期生は、入学時の①1年4月から⑤3年10月まで、全体的に成長が確認できた（図1）。最初に期待した生徒の成長項目に対して、順調に成果が出て行ったものと考えられる。5期生、6期生は、4期生と比較をすると、それぞれ⑥1年5月、⑨1年4月のスタート時点の段階で、4期生よりも点数が高いことがわかる。5期生はスタート時点で4期生の②2年4月の成績を上回っており、6期生は4期生の③2年11月と同等のレベルに達していた。しかしその後は大きな変化を見せず、5期生では⑦2年4月の後⑧2年11月に、6期生では⑨1年4月の後⑩1年11月に、レベルは下降した。

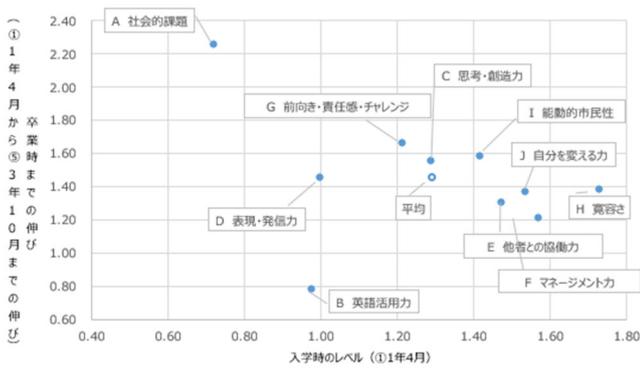
図1



次に、4期生の指標ごとの成長の傾向を見るため、生徒の成長度合いを「入学時（①1年4月）のレベル」と「卒業までの伸び（①1年4月から⑤3年10月までの差

分)」に分解した(図2)。図の右に行くほど1年4月時点でのレベルが高かった指標であり、上に行くほど3年10月までの変化が大きいことを示す。相対的に伸びが大きかった項目が、A. 社会的課題に関する知識・理解、C. 思考・創造力、G. 前向き・責任感・チャレンジ、I. 能動的市民性であり、各カテゴリの核となる部分における成長が5期生でも確認できた。特にA. 社会的課題に関する知識・理解やG・前向き・責任感・チャレンジが大きく伸びていたことから、未来創造探求をはじめとする活動を得て、社会的課題を正しく理解し、責任をもって前向きに新しいアイデアや取り組みにチャレンジをするといった力が育てられると理解できる。一方で、右下に位置する、E. 他者との協働力、F. マネージメント力、H. 寛容さ、J. 自分を変える力については伸びが小さかったと言える。

図2



4期生の最終的な指標別の到達レベル、及びそれまでの変化について確認した(図3)。最終的な⑤3年10月時点での到達レベルにおいて、上位3つの指標と下位3つの指標をハイライトし、①1年4月からの推移を視覚的に表示した。上述のように、A. 社会的課題に関する知識・理解は当初低かったが、②2年4月には平均値より上がり、⑤3年10月にはトップ3に入り、更に高いレベルに到達したことがわかる。A. 社会的課題に関する知識・理解は5期生でも伸びが大きかったことから、当プログラムの強みと理解することができる。一方で、B. 英語活用力、D. 表現・発信力は低いレベルのまま推移しており、次年度以降のカリキュラム検討において改善検討すべき項目であるといえる。また、F. マネージメント力は、②2年4月までは上位項目であったものの、最終的に下位3番目になっている。仮説として、未来創造探究等の活動が進むにつれて、チームメンバーや外部関係者が増え、

複雑になり、チームをマネジメントすることの難しさを実感したことが原因の一つであったのではないかと考える。

図3

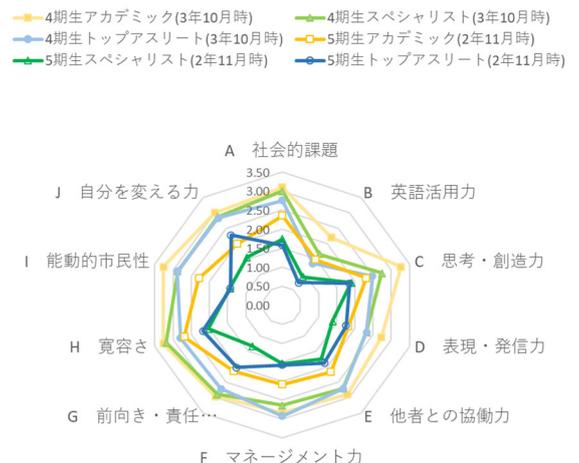
全生徒 (n=93)									
①1年4月		②2年4月		③2年11月		④3年5月		⑤3年10月	
H 寛容さ	1.73	H 寛容さ	2.18	H 寛容さ	2.22	H 寛容さ	2.65	H 寛容さ	3.11
F マネージメント力	1.57	J 自分を変える力	1.95	I 能動的市民性	2.16	E 他者との協働力	2.63	I 能動的市民性	3.00
J 自分を変える力	1.54	E 他者との協働力	1.89	J 自分を変える力	2.12	C 思考・創造力	2.57	A 社会的課題	2.97
E 他者との協働力	1.47	A 社会的課題	1.83	C 思考・創造力	2.11	A 社会的課題	2.49	J 自分を変える力	2.90
I 能動的市民性	1.42	F マネージメント力	1.83	E 他者との協働力	2.03	J 自分を変える力	2.45	G 前向き・責任感	2.87
(平均)	1.29	I 能動的市民性	1.77	F マネージメント力	2.02	G 前向き・責任感	2.43	C 思考・創造力	2.84
C 思考・創造力	1.29	C 思考・創造力	1.75	A 社会的課題	1.97	F マネージメント力	2.42	E 他者との協働力	2.77
G 前向き・責任感	1.22	(平均)	1.75 (平均)	(平均)	1.95 (平均)	(平均)	2.38	F マネージメント力	2.77
D 表現・発信力	1.00	G 前向き・責任感	1.52	G 前向き・責任感	1.82	I 能動的市民性	2.38	(平均)	2.74
B 英語活用力	0.98	D 表現・発信力	1.41	D 表現・発信力	1.73	D 表現・発信力	2.13	D 表現・発信力	2.45
A 社会的課題	0.72	B 英語活用力	1.32	B 英語活用力	1.32	B 英語活用力	1.68	B 英語活用力	1.75

(3) 生徒の系列ごとの比較

4期生の3つの系列(アカデミック、スペシャリスト、トップアスリート)ごとの生徒の成長度合いの傾向を確認した。⑤3年10月の到達レベルと5期生の③2年11月時を比較すると、4期生においては、系列ごとの差が小さくなっていることが確認できる(図4)。アカデミックとスペシャリストはいずれの項目でも5期生を上回っており、トップアスリートもB. 英語活用力を除く全ての項目で5期生を上回った。

仮説として、4期生の全ての層の成長が高く見られたことから、系列に関わらず、生徒が未来創造探究の活動を進めていったと理解できる。

図4



次に、4期生の各項目における成長の推移を可視化した(図5)。棒の高さは⑤3年10月の到達レベルを示す。

これを①1年4月のレベル、③2年11月までの伸び、⑤3年10月までの伸びと段階を追って分解した。5期生と比較すると、4期生は①1年4月から③2年11月までの伸びが大きかった。特に、共通してA. 社会的課題に関する知識・理解の伸びが大きく、全ての系列でトップであった。また、アカデミック、トップアスリートにおいては、C. 思考・創造力の部分における成長が確認できたといえる。

今回は属性情報として系列情報までしか分析していないが、今後は、より詳細な切り口（例えば、未来創造探究のチーム別等）で成長度合いの分析を行うことにより、個別の活動と成長度合いの比較をすることも可能になりうる。次のカリキュラム検討へのインプットとしてより効果的になると考える。

図 5

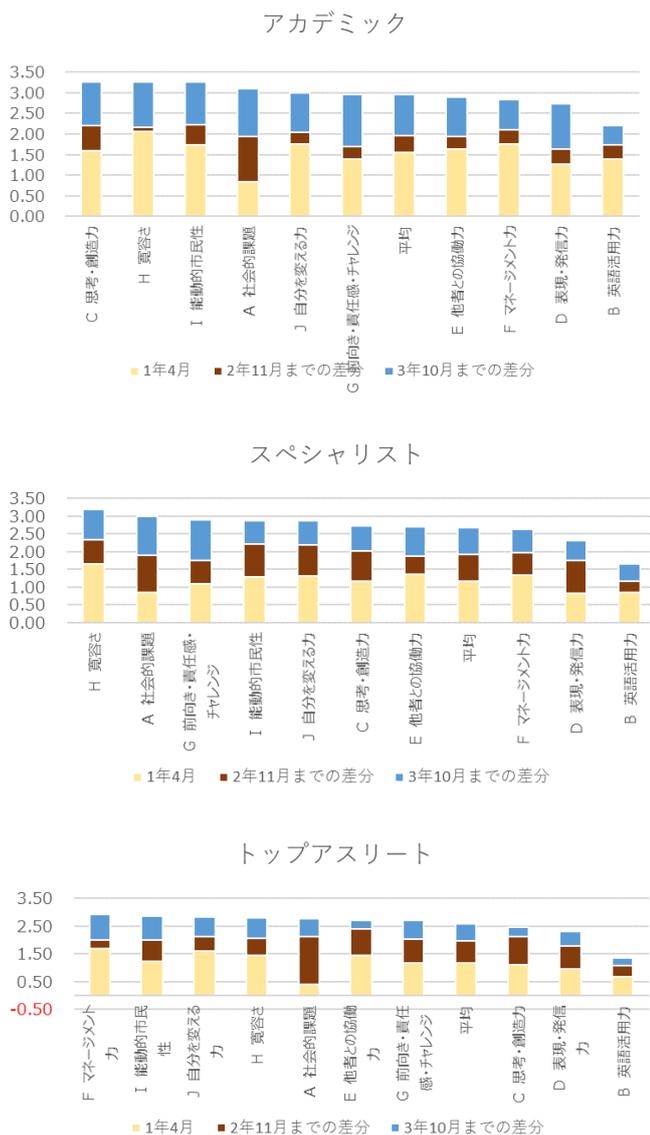
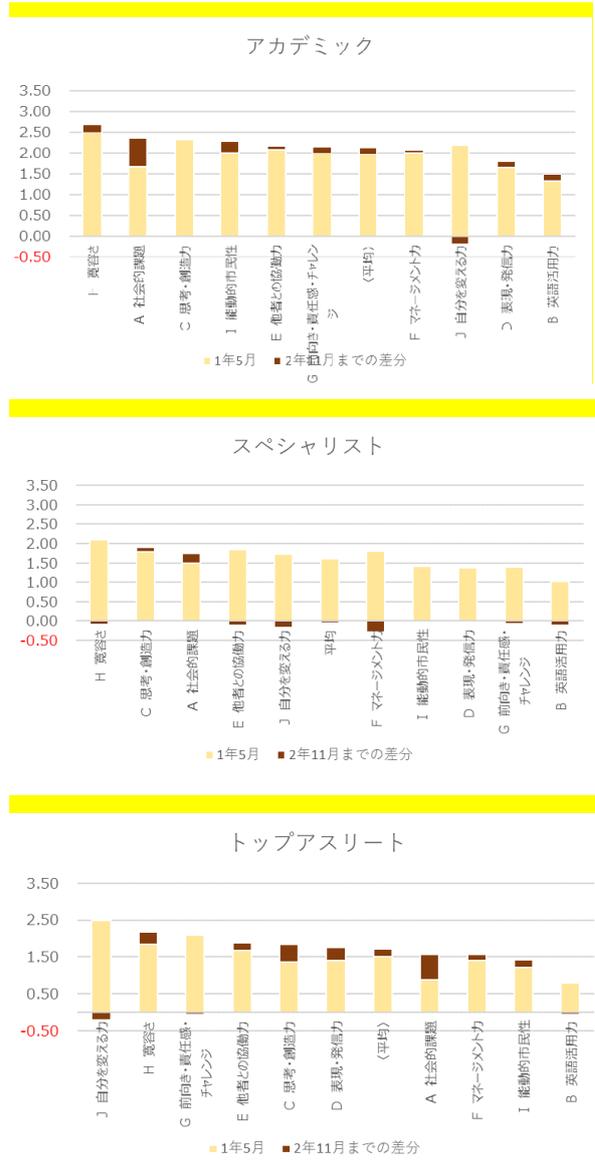


図 5-1 (5期生)



(4) 海外研修参加有無の比較

学校における授業に加えて重要視される活動の一つに海外研修がある。参考までに、4期生で海外研修に参加した生徒と参加していない生徒の比較を行った。(ただし、海外研修への参加はランダムに決まったものではないため、研修参加と成長度合いの因果関係は必ずしもあると言えるわけではないことは注意が必要である。)

対象とする海外研修は、ドイツ(1年次)、ベラルーシ(2年次夏)、アメリカ(2年次冬)であり、どれか一つでも参加した生徒は21名であった。

4期生の⑤3年11月時点の到達レベルと5期生の⑧2年11月時点の到達レベルの比較を図6にまとめた。4

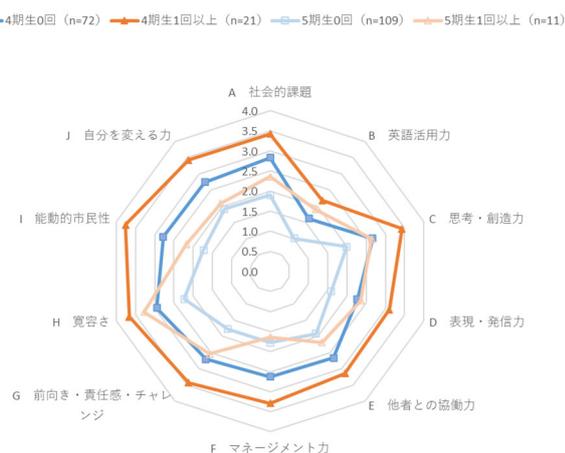
期生、5期生ともに、全体的に海外研修に参加した生徒が高いレベルを示していた。4期生では差が大きかった順に、I. 能動的市民性 (同0.98)、D. 表現・発信力 (同0.83)、C. 思考・創造力 (同0.76) であった。

これらの指標の成長は、海外研修前の発表準備、海外でのプレゼンテーション、交流中に得られた課題認識やアイデアに対する客観的なフィードバック等の影響が見られたのでは、という仮説が考えられる。また、海外研修に参加していない層の到達点の形は4期生も5期生も大きく異ならなかったが、海外研修に参加した層では、4期生の生徒たちはF. マネージメント力、I. 能動的市民性の項目において1.5ポイント以上、5期生よりも高い点数に達した。

一方、海外研修有無の間で差が小さかった指標は、E. 他者との協業力であった。この項目については国内での活動を通じた成長の度合いが大きかったのではないかと考えられる。

を用いて面談を進めることにより、生徒のメタ認知を伸ばすことにもつながる。加えて、分析の元データの客観性、信頼性の担保という課題に対しても、教員による確認が入り、本人との面談を通じてレベルの修正が行われることにより、改善され、更に分析の精度が向上するものと考えられる。

図6



(5) 今後の展望

今回の分析では、ルーブリックの定点観測のデータから、全体の成長の傾向、及び系列や海外研修の有無といった活動内容ごとの比較検討を行った。今後、他学年のルーブリックの観測時期が揃えられ、さらに活動内容がより細かく記録されることで、成長の傾向を比較分析することができるようになれば、より効果的にカリキュラム検討への示唆が得られるようになると考えられる。

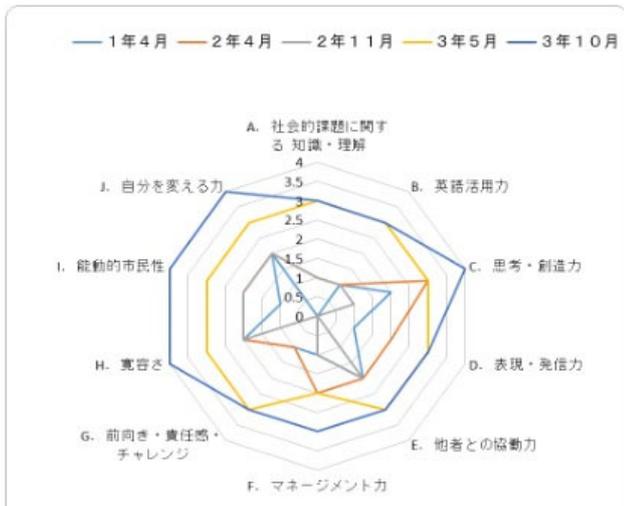
また、ルーブリック評価のデータを個人別に整理すること (例、生徒カルテの作成) により、生徒と教員の面談や、アクティブラーニングを実施する際の目標設定に活用することができる。到達レベルを可視化し、データ

6. 3 4期生の個別評価

4期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～2人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 M.Y (原子力防災探究ゼミ)

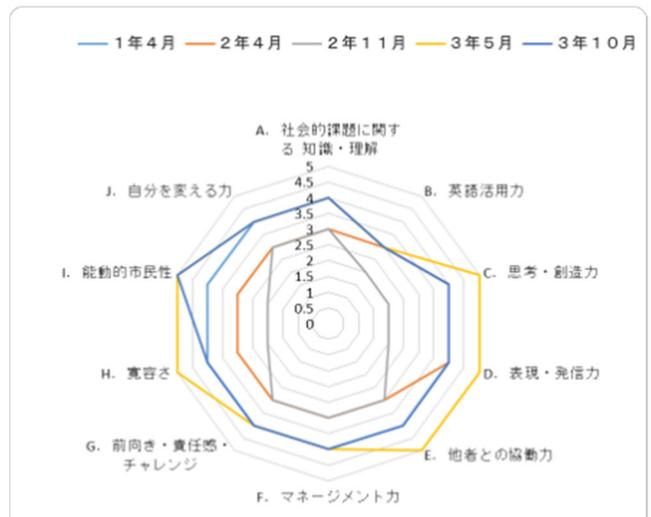
【平均値】 1.30 (1年4月) → 3.40 (3年10月)



双葉郡外から本校に通う、アカデミック系列の生徒である。1年次から日々の学習にコツコツ取り組み、心優しい生徒である。ルーブリック調査に記述された内容から、2年次未来創造探究で学んだ内容のほぼすべてが今でも印象深く残っており、一つ一ついいいに言語化して探究活動に臨んできたことがうかがえる。海外研修の参加者選抜面接を受けるまでに、葛藤している様子が見られ、自分の探究活動の進捗にも不安を覚えた時期に数値の低下がみられる。このことは2年11月まではルーブリックの数値が伸び悩んでいることに顕著に現れている。SGHの全国フォーラムなどに参加し、同年代の高校生が自信を持って英語で自分の活動を発表する様子を見たり、海外研修の事前研修などに参加したりして自信をつけていった。COVID-19の感染拡大下にあっても、学びを止めることなく、自分の探究してきたことが生かせないか思考し、地域の中で、住民と共に創る学びを実践したことで、大きな数値の伸長を見せた。

○生徒 T.Y (原子力防災探究ゼミ)

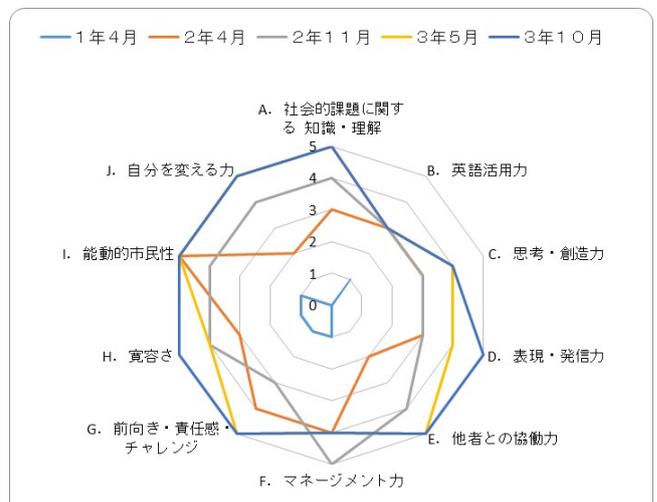
【平均値】 3.90 (1年4月) → 4.00 (3年10月)



双葉郡内から本校に通う、アカデミック系列の生徒である。基礎学力は比較的高く、探究活動を通して、将来は自分の故郷に貢献したいという思いがさらに強くなった。探究活動をアピールして国立大学への進路実現を果たした。発信力・行動力に優れ、ルーブリック中の自己評価が概して高い。しかし、2年次11月頃には数値が一時下がっている。2年次前半に中学校の頃から続けてきた地域貢献活動があり、探究活動の中で取り入れようと手当たり次第参加したため、方向性が定まらず、課題を十分捉えられないまま迷走した時期である。海外研修のメンバーに選抜されると、国連で議論をするためにもう一度富岡町にインタビューに行った。地域住民の声に耳を傾け、自分なりに地域課題を整理出来た頃に落ち着きを見せ始めた。COVID-19感染拡大後も、自分の捉えた地域の課題を解決するために、最善の方法を模索し、校内外様々な人との協働を通して、順調にルーブリックの値を伸ばすことができた。

○生徒 R.I (メディア・コミュニケーション探究ゼミ)

【平均値】 0.50 (1年4月) → 4.60 (3年10月)

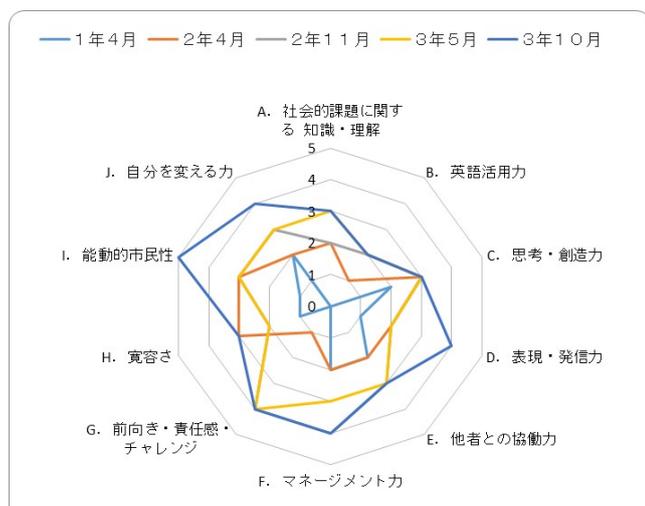


1年4月（平均0.50）から2年4月（平均3.20）にかけてルーブリックの全範囲での能力の伸長が見られた。しかし、実際には2年4月のルーブリックの伸びほど実際の力は伸びておらず、2年4月の自己評価が甘いのではないかと推測できる。R.Iは1年次のドイツ研修や2年次夏休みのTOMODACHIプログラム、2年次後半の広島研修とNY研修など校外研修による事前研修で項目E、他者との協働力や項目Gの前向き・責任感・チャレンジの能力を伸ばしていった。

また、3年次前半で外部とのアーティストの蟹江杏さんや中村二小の佐藤みゆき教諭との協働をするなかで、アートを軸とした探究活動に社会的意義を見出していった。探究学習開始当時は、アートは自分が好きなものという自分のやりたいこととしてとらえていくが、海外研修を通じてアートの持つ力や社会的意義に気づき、それを広げる活動に変化することで探究学習の質が大きく変容していった。

○生徒A.N（メディア・コミュニケーション探究ゼミ）

【平均値】1.10（1年4月）→3.50（3年10月）

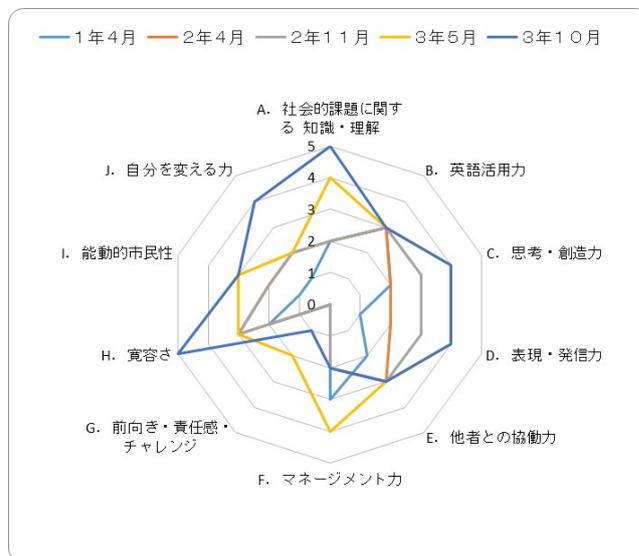


1年次4月（平均1.10）から3年10月（平均3.50）まで順調にルーブリックの全範囲での能力の伸長が見られた。項目Bの英語活用力はあまり能力の伸長は見られなかったが、それ以外の能力のうち、項目Iの能動的市民性は最大5まで上昇した。彼女の探究内容である「風評被害の払拭と障がい者差別への払拭」というテーマは、二つの差別に対する構造を分析し、偏見を払拭するためには対象に対する理解が必要であると結論付けた。その過程で施設に通ってボランティア活動をしたり、施設の職員さんとの学習会を行うなど、自分ごととして探究活動に取り組む中で、能動的市民性を獲得したと自覚しているようだった。また、これらの探究に取り組む中で、

項目Gの前向き・責任感・チャレンジについて能力を伸長させた。

○生徒M.O（再生可能エネルギー探究ゼミ）

【平均値】1.70（1年4月）→3.40（3年10月）

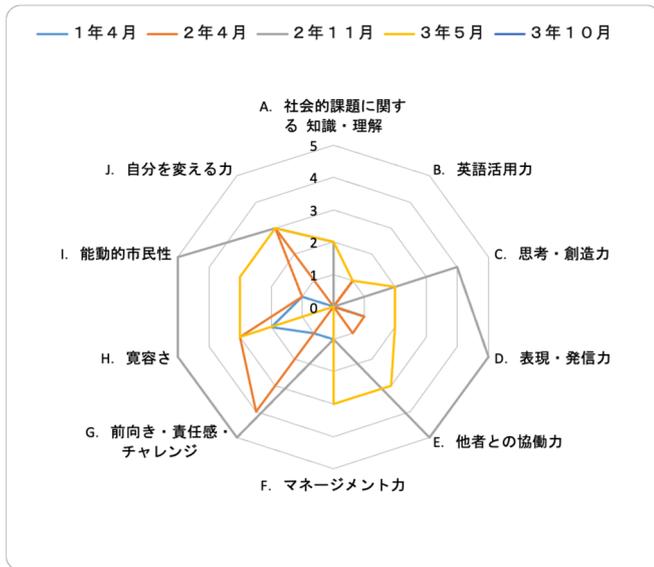


生徒M.Oはアカデミック系列・双葉郡出身の生徒であり、生徒会役員も務めた。1年次にドイツ研修に参加し、再生可能エネルギーに興味を持った生徒である。自己肯定感の低い生徒であり、自分の行動や発言に自信を持っていない。探究活動を行う中でも、探究テーマについて悩み、なかなか活動を行わずにいた。また、活動したことについても常に自身で疑問を抱き続けていた。2年次終わりごろに本校中学3年次に対し、再エネについての授業を行ったことで、大きく自信をつけたことがルーブリックから読み取れる。さらに探究発表会では共感賞と探究賞を受賞した。周りから認められた経験もあり、3年次最後の自己評価も高いものになっている。

表現・発信力が入学時の「1」から三年次には「4」に上昇している。「中学時には文章を書く際に大人の書いたような文章になってしまい、表現をあえて幼稚なものにしていた」と生徒M.Oが話していた。生徒会や探究で発信を行っていく際に、自分の表現を他者に認められて行くことで、自信をもったと考えらえる。

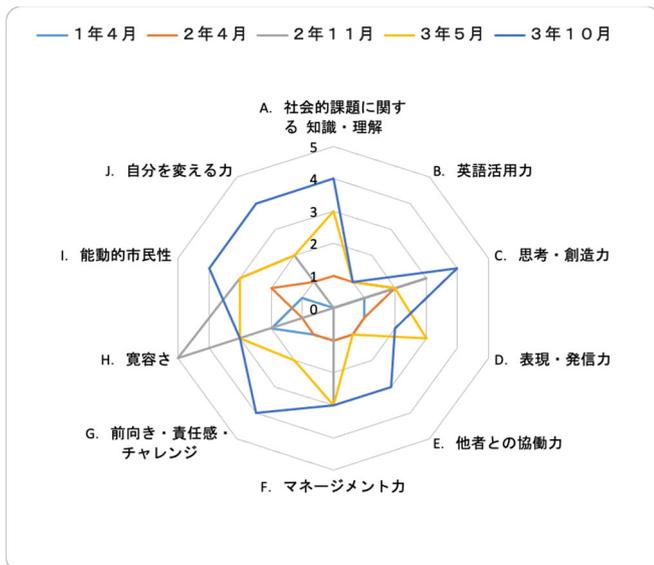
○生徒 Y.E (アグリ・ビジネス探究ゼミ)

【平均値】 0.60 (1年4月) →未回答 (3年10月)



○生徒 M.K (アグリ・ビジネス探究ゼミ)

【平均値】 0.80 (1年4月) →3.20 (3年10月)



生徒 Y.E は双葉郡外の生徒であり、生徒 M.K は元々は双葉郡内ない生徒であった。この2名は、3年次の最初までは双方とも探究テーマが同様であったため一緒に活動をしていた。しかし、途中より互いの到達点の違いから別々に活動を始めている。生徒 M.K については探究活動を通して4年制大学への進学を考えるようになったことで、さらに深化した内容を求め始めた。それに対して、生徒 Y.E は就職を考えており、探究活動を終え次第就職活動に専念したい思いがあった。9月には就職試験と校内探究発表会があることで、就職を希望する生徒にとってはどちらかをトレードオフするか重要なターニングポイントになっている。

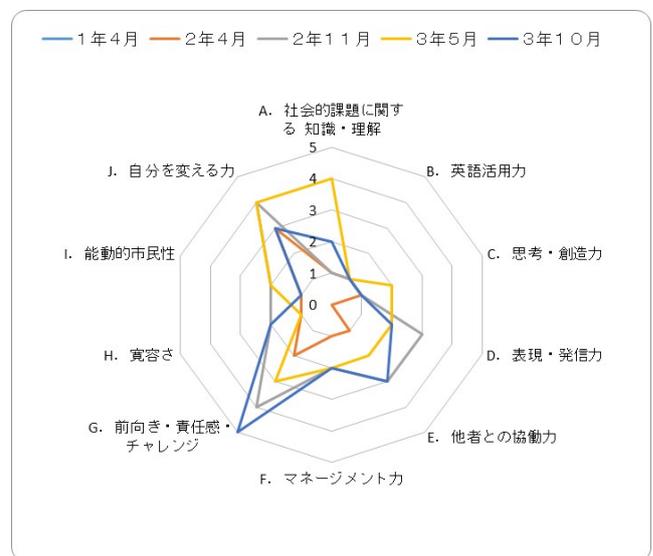
評価の終着地点として、生徒 Y.E については3年10

月の評価は未回答であった。3年5月にG:前向き・責任感・チャレンジが“0”となっていることから、コロナ禍における実践活動ができない現状と早めに就職を決めたい思いが探究活動のリセットに繋がり、同じ探究テーマをしてきた生徒 M.K が実践活動をより深化させたことへのいら立ちが感じられる。また、マネジメント力の低評価も、項目の中にチーム・メンバーといった言葉が含まれていることから判断できる。一方、生徒 M.K は、探究力を高めるために各種コンテストに出場を繰り返した。その際にコンテストの趣旨に合わせて同ゼミメンバーとのテーマのカスタマイズを図っている。他の探究ゼミ生との協働イベント等の実践を通して、10月の評価以降のコンテストに出場した。その結果、2021年地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)オンライン発表会日本語発表部門で金賞・文部科学省初等中等教育局長賞を受賞し、ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト最優秀賞(2020年12月)を受賞した。

もし生徒 M.K が3年10月以降に評価を行ったらどのような評価につながったのか、非常に興味深いところである。

○生徒 S.I (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 未実施 (1年4月) →2.20 (3年10月)



生徒 S.I は、地域の活性化に着目し、地域のスポーツクラブと連携し幅広い世代との交流を考えた。定期的に地域のスポーツクラブに出向き、イベントの内容を考え、小中学生から高齢者まで年代に応じた楽しみ方ができるように考えた。グループ内ではリーダー的な存在ではないが、プログラムを展開する際には仲間と協力してより良いイベントになるように積極的に活動していた。

ルーブリック評価は、2年次当初は各項目ともあまり

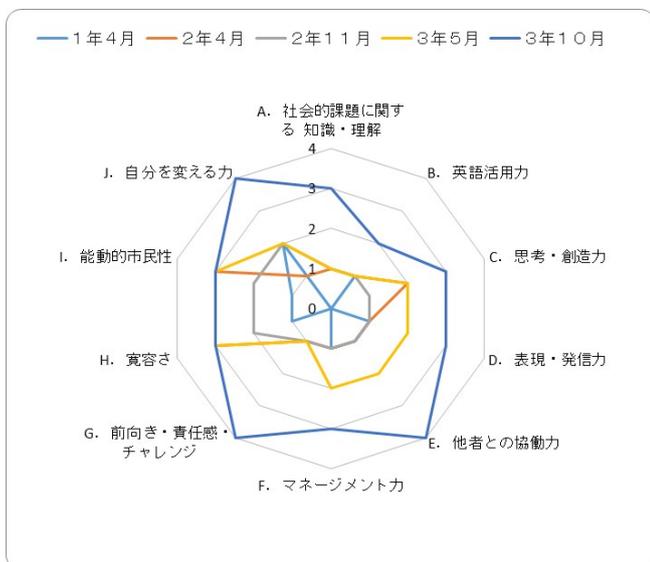
高くはなく、仲間についていく形でのかわり方であったが、J「自分を変える力」G「前向き・責任感・チャレンジ」の項目については、自身が感じるところはあったようで、2年次後半から活動が具体的になってくるとG「前向き・責任感・チャレンジ」の項目が目に見えて向上してきた。それに伴いJ「自分を変える力」、E「他者との協働力」も向上してきた。逆にB「英語活用力」については活動内で使う場面がなく向上させることが難しかったと思われる。

がった。

この生徒が探究活動を通して自身で向上を実感し評価できた部分は今後の競技生活にも生きるものと思われる。

○生徒 S.K (健康と福祉探究ゼミ)

【平均値】 0.80 (1年4月) → 3.20 (3年10月)



本生徒は高齢者の心と体の健康のために交流の場を広げること为目标として活動してきた。入学当初から高齢者福祉に興味があり、高齢者福祉に関わる仕事に就きたいと考えていたようである。探究活動においては活動を開始した2年次は漠然と高齢者と関わりたいという思いしかなく、自分が何をしたいのか具体的にイメージできていなかった。そのため仲の良い友人とグループを組み、その友人の提案に沿って活動するばかりであった。このことは自分でも自覚していたようで、1・2年次のルーブリック評価は低評価が目立っていた。しかし2年次から3年次にかけてコロナ禍で予定していた活動ができなくなってしまった辺りから、自分も意見を出していかなければ活動が進まないという自覚が芽生えてきたようである。その結果が3年次11月のルーブリック評価によく表れていると思われる。特に項目G「前向き・責任感・チャレンジ」、項目J「自分を変える力」の高評価につながった。

6. 4 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、4期生に対してアンケートを行った。

意識調査

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った（実施時期：令和2年10月、回答生徒数：114人）。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う
2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

調査項目		4	3	2	1
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	50.9	41.2	7.9	0.0
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	37.7	51.8	10.5	0.0
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	37.7	50.9	10.5	0.9
Q4	探究授業を通じて学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じることもある。	28.9	46.5	24.6	0.0
Q5	探究授業に、教科学習で学んだことを活かしている。	28.1	43.9	27.2	0.9
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じる。	28.9	48.2	22.8	0.0
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	35.1	56.1	8.8	0.0
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	30.7	53.5	15.8	0.0
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	39.5	57.0	3.5	0.0
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	8.8	42.1	35.1	14.0
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	21.9	47.4	24.6	6.1

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答している。昨年も同様な調査を行っているが昨年より肯定的に捉えている生徒が多いことも特徴であり、探究の授業が生徒にとって学びの土壌になっていることがわかる。地域との関わりについては、今年度コロナ禍により接触が制限される環境であったものの、9割の生徒が肯定しており、本校の探究活動が地域と密接に関連していることがわかる。探究と教科の関わりに

についても肯定的意見は7割以上、強い肯定が3割弱となっており、教員が意識して取り組んでいる教科学習との往還についても有効に活用されていることが伺える。また社会と関わりについても肯定的意見の割合は高く、Q9「探究授業を通じて自分の意見が深まった」については97%の生徒が肯定的に捉えている。Q10「探究授業を通じて自分のことが好きになった」という項目については他と比較して肯定的意見が少ないが、それでもほぼ半数の生徒が肯定的に捉えており、自分のことを見つめる良い機会になっていると思われる。

取組別評価

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。結果を下表に示す（実施時期：令和2年10月、回答生徒数：115人）。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は割合）

取組	印象に残っている取組	力がついた取組
2年次探究オリエンテーション	31.3	20.0
2年次 マインドマップ講座	20.0	15.7
2年次 ゼミごとに分かれての活動	27.0	20.9
2年次 情報収集講座	3.5	4.3
2年次 国語×論理思考	5.2	3.5
2年次 ヒューマンライブラリー	14.8	11.3
2年次 輪読	5.2	3.5
2年次 理科×福島学	12.2	7.8
2年次 社会×福島学	7.8	8.7
2年次 ゼミ内発表会	26.1	16.5
2年次 プレ発表会	23.5	27.8
2年次 3期生の未来創造探究発表会	38.3	28.7
3年次 未来創造探究発表会	57.4	46.1

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり2.5個程度回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。最も印象に残り、また力が付いた取組は「発表会」であり、自分が発表する経験により生徒が成長している様子が伺える。また2年初期に行っているオリエンテーションやスキル学習についてもある程度の生徒が取り上げている。また数値としてはそれほど高くないものの、2年次に行ったヒューマンライブラリーで強く刺激を受けたという生徒がいることを生徒本人や担当教員から聞いており、ロールモデルを見ることの重要性を示唆している。一方、輪読については複数時間とって行ったものの、値が低い。書籍の重要性を認識させるためにこのような取組は必要であるが、やり方に更なる工夫が必要と思われる。

6.5 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは一昨年度から始めており、今年度が3回目である。

実施日：令和3年2月

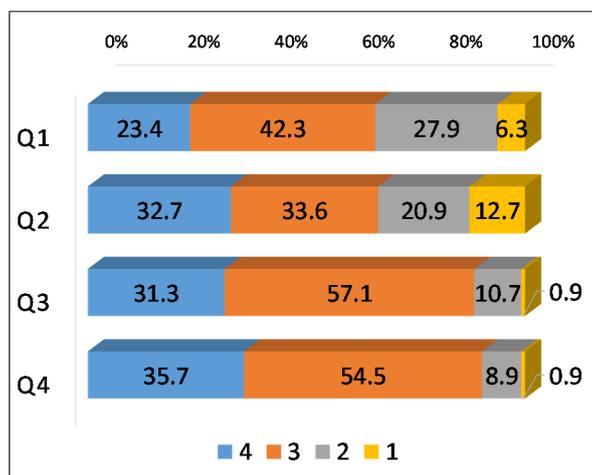
対象生徒：4期生3年次生徒 113人

内容：以下のアンケート項目に対して、1～4の四観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：

質問項目		4	3	2	1
Q1 未来創造探究は、あなたの卒業後の具体的な進路選択に影響を及ぼしましたか？	4期生	23.4	42.3	27.9	6.3
	3期生	18.6	31.9	34.5	15.0
	2期生	17.2	40.4	32.3	10.1
Q2 未来創造探究での活動を、入社試験や入学試験に活用しましたか？	4期生	32.7	33.6	20.9	12.7
	3期生	24.8	34.5	22.1	18.6
	2期生	23.2	38.4	27.3	11.1
Q3 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？	4期生	31.3	57.1	10.7	0.9
	3期生	25.7	54.9	16.8	2.7
	2期生	20.2	59.6	16.2	4.0
Q4 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？	4期生	35.7	54.5	8.9	0.9
	3期生	38.9	47.8	10.6	2.7
	2期生	30.6	56.1	9.2	4.1

- 4 大きく影響した（繋がった・活用した）
 3 ある程度影響した（繋がった・活用した）
 2 あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
 1 全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
 表中の値は割合（%）である。



Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では66%の生徒が進路選択に影響があったと回答している。またQ2においても7割近くの生徒が試験に探究活動を活用したと回答している。2期生、3期生と比較して、Q1、Q2共に3、4を回答している生徒が増加しており、自分の進路を決めていく際に探究活動をアピールポイントとして活用できる生徒が増えていることが示唆される。「探究から自分ももっと地域を変えていける人になりたいと思ひ地域創生学部を選択した。」「探究活動を通して、大学で地域創生やコミュニティについて学びたいと思ひ、進学するきっかけになった。」といった記述が見られ、探究が目標設定や進路選択に大きく寄与しているケースが増えている。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず8～9割の生徒が肯定的に捉える結果となった。Q3では「将来のことは何も考えていなかったが、社会に貢献していける人になりたいと思った。」「目の前の地域との関わりを深めることで、社会などの大きな見方ができるようになった。」といった記述が見られた。Q4は価値観についての問いだが、これに対する肯定的意見が最も高く90%を超えていた。「探究を通して、人と人とのつながりの大切さ、自分で問いを見つけ出し、どうすれば解決するか、アクションをおこしながら学びを深めていく大切さや復興とは小さなことから活動をしていくことなど、考えや価値観が一年次から大きく変わった。」といった記述が見られた。また、2期生、3期生と比較して、こちらの項目も3、4を回答する生徒が増えており、探究活動を行う効果が年々高まっていると言える。

高校生と社会の関わりを問う『17歳意識調査「第20回-社会や国に対する意識調査-」』（日本財団、2019年11月）（https://www.nippon-foundation.or.jp/who/new_s/pr/2019/20191130-37555.html 2020年3月時点）と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

6.6 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者202名、生徒484人、教員74人

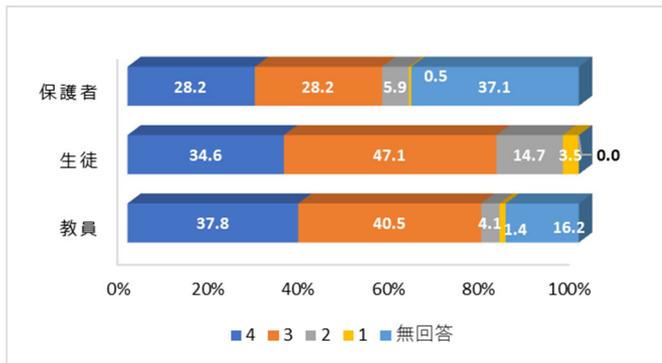
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

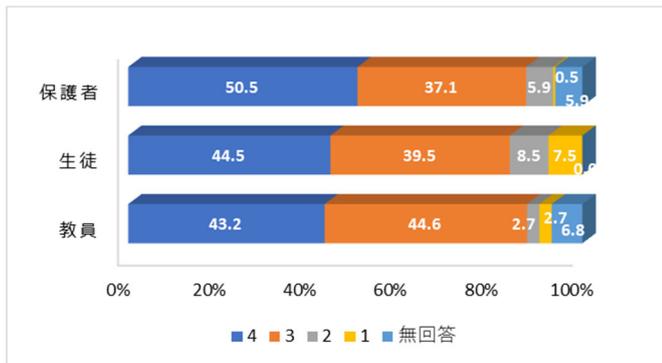
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

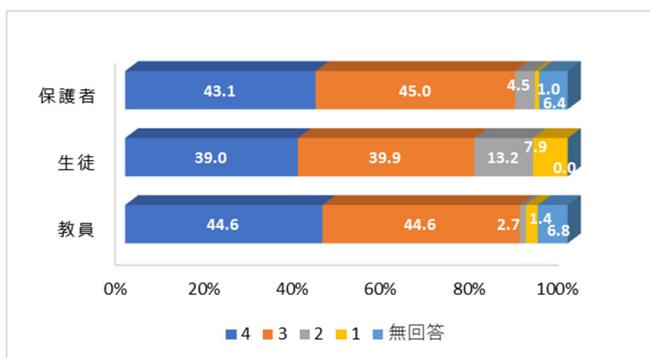
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



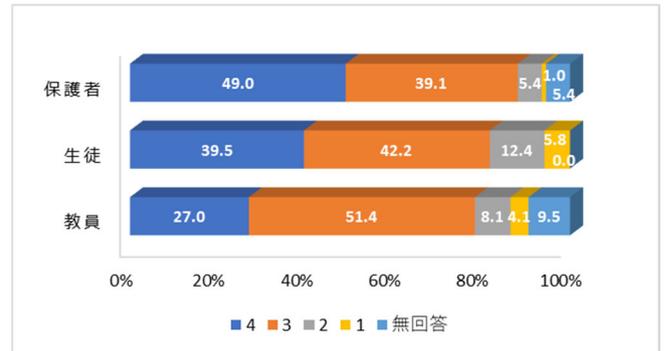
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



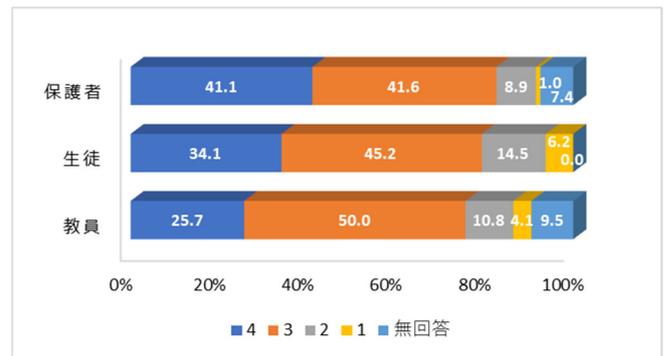
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点(SDGsなど)を持てるような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれにおいても肯定的意見が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。

Q1をみると、保護者の4割近くが無回答となっている。生徒、教員本校では無回答は少なく、また評価も高いことから、学校で行っているアクティブラーニング等による授業の様子が伝わっていない可能性がある。公開授業やホームページで知っていただく必要があると思われる。

Q2については学校として地域課題に取り組んでいるかどうかについてのアンケートである。4、3が9割程度となっており、探究授業は認知されていると言える。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。この項目についても肯定的意見が8～9割ほどになっており、本校と地域の連携は理解していると言っていいたいだろう。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が8～9割ほどであるが、教員の肯定的意見が3者のなかで一番低くなっていることは残念である。生徒が実践している内容は地域の復興にも寄与することを再認識する必要がある。

Q5はグローバルな展開についてである。これも全体としては肯定的意見が多いものの、教員の肯定的意見が低い。自分たちの取組を過小評価しているところもあると思われる。自身をもって取り組めるようにしたい。

6.7 設定した目標の達成度

本事業で設定した目標と今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめる。

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）							
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)	
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						単位： なし
	本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値						
	本事業対象生徒：			3.10	2.62	3.5	
	本事業対象生徒以外：	—	—	—	—	—	
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。							
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						単位： %
	卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上						
	本事業対象生徒：			84	89	70	
	本事業対象生徒以外：	—	—	—	—	—	
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。割合は回答生徒のうちの肯定的意見の平均値とする。							
c	(その他本構想における取組の達成目標)						単位： %
	本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合						
	本事業対象生徒：			調査なし	67	70	
	本事業対象生徒以外：	—	—	—	—	—	
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。この割合は回答者のうち、未回答、肯定的意見、否定的意見全体を100%としたときの肯定的意見の割合とする。							

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）							
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(令和4年度)	
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位： 件
	地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数						
		22	31	40	52	50	
目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする。							
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位： 人
	視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数						
		調査なし	調査なし	調査なし	178	250	
目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。							
c	(その他本構想における取組の具体的指標)						単位： 件
	生徒の外部発表、コンテスト応募件数						
		調査なし	30	35	42	45	
目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。							

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）							
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)	
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位： 件
	本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数						
		133	150	165	301	200	
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。							

1a 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値

本校の開校以来、ルーブリックの最終調査における平均値は以下の表のように推移してきた（詳細は6.1参照）。

1期生 H29年度卒	2期生 H30年度卒	3期生 H31年度卒	4期生 R2年度卒
1.99	2.63	3.10	2.65

1～3期生まで値が順調に伸びていたが、今年度卒業生である4期生は3期生よりも低下した。本事業の最終年度となる令和4年度において「3.5」以上を目指しており、これを達成できるように引き続き取り組みたい。多くの生徒は年次が上がるにつれ評価が高くなり、探究活動も自走できるようになっていくが、一部、レベル0や1の評価のままの生徒もおり、そのような生徒について指導を手厚くする等、丁寧な伴走、指導を教員側で心掛けたい。その意味において、ルーブリックを「形成的評価」として活用したり、生徒と定期的に面談等を行ったりすることがより重要となる。

1b 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合

この項目については2期生からアンケートを行っており、今年度の調査で3回目となる（詳細は6.5参照）。ここでは以下の2つのアンケートの平均を指標としている。
Q①未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？
Q②未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？
今年度、肯定的意見の割合は、Q①では88.4%、Q②では90.2%であり、目標である70%を大きく上回る結果となった。この値は3回実施しているなかで最高の値となっている。このことから本校の探究活動は自分たちの生き方なり方を深く考える非常に良い機会となっていることがわかる。

1c 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合

例年実施している学校評価アンケートのなかに、今年度より本事業に関連する項目を追加した（詳細は6.6参照）。5つのアンケート項目のうち、肯定的意見（3および4の回答）について各アンケートの平均をとり、この値で評価することとした。結果としては67%となり、目標としている70%には達しなかった。5項目のアンケー

トのうち、授業についての項目で保護者の未回答が多く、肯定的意見の割合が低い要因となっていると思われる。未回答を減らすよう授業内容を保護者の方にさらに理解していただく方策を検討する必要がある。

2a 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数

本校の課題探究は、地域に関わるテーマとすることを基本としている。ここではそのうち地域の方と連携、協働しながら進めるテーマ数を取り上げることとした。今年度、2,3年次の課題探究のプロジェクトのうち、これに該当するものは52件あり、目標としている50件以上を達成することができた。探究プロジェクトの数そのものも年を経るごとに増えており、引き続きこの状態を維持していきたい。

2b 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数

本校への来校者数は昨年度まで調査しておらず、今年度よりカウントを開始した。今年度はコロナ禍により来校者がいない時期もあったが、最終的に178名の方に来校いただいた。なお、ここにはオンラインで発表会に参加いただいた方も含んでいる。今年度の目標値（200人）には及ばなかったが、今後も積極的に外部の視察を受け入れ、本校の教育活動の他への普及に寄与したい。

2c 生徒の外部発表、コンテスト応募件数

今年度の具体的な取組を以下に示す。件数は42件となり、今年度の目標である35件を達成した。また、いくつかの発表会では、最優秀賞を受賞した。

- ・第6回ふくしま学（楽）会（8月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から3件発表。またパネリストとして生徒6名が登壇。）
- ・地方創生アイデアコンテスト（9月、1件応募）
- ・ふたばアワード（11月、1～3年による学年横断型の地域課題探究発表会、18発表）
- ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト（12月、福島県内高校生対象の発表会、本校から3件応募、最優秀賞賞、入選、福島大AC賞受賞）
- ・第7回ふくしま学（楽）会（1月、本校から4発表、パネリストとして生徒8名が登壇。この様子はNHKスペシャル「廃炉への道2021」に取り上げられた。）
- ・Glocal High School Meetings 2021（1月、本事業（グローバル型）に指定された高校による探究活動コンテス

ト、本校から日本語部門1件、英語部門1件発表、日本語部門で金賞、文部科学省初等中等教育局長賞（最高賞）を受賞）

- ・第20回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会(1月、本校から3件発表)
- ・マイプロジェクトアワード福島 summit (1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から7件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summit へ進出)
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit (3月、福島県代表として1発表)

3a 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数

第2章に詳細を示したが、今年度、本校の探究活動関連でお世話になった方は301件(3月15日現在)となっており、今年度の目標(165名)を大きく上回った。探究活動の特定のゼミの連携数が突出しているという面もあるが、概ねどのゼミにおいても地域や外部の方との連携は進んでいる。今年度はコンソーシアムが立ち上がり、加えてふくしま学(楽)会のつながりから外部の専門家ともつながることができ、外部連携を推進する環境が整ってきた。引き続き、外部の方の協力も得ながら活動の活性化を図りたい。

第7章

課題と今後の方向性

第7章 研究開発の成果と課題

平成27年から令和元年までのスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定に引き続き、今年度より指定されている本事業について、ここでは成果と課題を総括する。今年度は事業の立上げとともに、コンソーシアムを新たに立ち上げ、組織的に外部との連携を開始した。また本校の設立経緯に立ち返り、双葉郡8町村という広域エリア全域での活動を意識して展開した。次年度は新たな学校設定科目が始まるため、この運営を進めていく必要がある。また課題の本質に迫れるような探究活動になるよう、指導法についても引き続き検討していく。

7.1 研究開発の成果

(1) 探究活動を支える外部との組織連携の進展

本事業を実施するにあたり、双葉郡8町村をカバーする広域コンソーシアムを結成し、本校の教育活動や本事業の取組について共有することができた。本校の探究活動について、広域で組織的に支援していただく初めての組織が立ち上がり、これまで個人での繋がりに頼っていた仕組みから変化したことは今年度の大きな成果である。コンソーシアムの中にはこれまで本校では接点が少なかった理工系の領域のメンバーも含まれており、この活用により生徒の探究テーマの領域が広がる可能性があり、今後の展開が期待される。

また、連携していた個人、グループを「地域知」「専門知」として整理し、これまで手薄だった「専門知」の方々との連携を強化することができた。この連携の糸口となったのは、ふくしま学（楽）会である。ふくしま学（楽）会はこれまで主に発表の場として活用していたが、関わり方が変わり、探究活動の強力なサポーターとしての役割を担っていただけるようになった。結果的にこのことが探究活動の進展に大きく寄与することとなった。

(2) 探究活動の面的な拡がり、量的、質的な進展

震災、原発事故により休校になった双葉郡5校の伝統を引き継ぐ形で開校したという本校の設立経緯に立ち返り、今年度は双葉郡全8町村をフィールドにすることを意識して探究活動を推進した。この結果、実際に目指していた領域に活動を拡げることができた。生徒の活動についてはその地域の方々に高く評価していただき、本事業の目的としている「教育と地域復興の相乗効果」の発現に多少なりとも寄与したと言える。

探究のプロジェクト数、外部発表件数は年を経るごとに増えてきた。さらに今年度はこれまでほとんどいなかった1年生の自発的な探究活動が始まったこともあり、生徒の探究に対する意欲の高まりが感じられた。

外部発表では、本事業に取り組んでいる全国の高校生

の発表会である'Glocal High School Meetings 2021'において、日本語部門の最高賞である 金賞・文部科学省初等中等教育局長賞を受賞したことをはじめ、これまで以上に賞を受賞することができた。このことは本校の探究の質が高まっていることの現れと言える。

(3) 探究活動への導入プログラムの進展

次年度から学校設定科目「地域創造と人間生活」が始まる。この科目では「困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発」することを目指し、3年間を貫いた探究活動の実践を意識した内容を行う。この準備段階として、今年度、「産業社会と人間」のカリキュラム改善を行った。具体的には地域バスツアーの重点化、プチ探究やヒューマンライブラリーの導入、演劇プログラムの再編等を行い、探究活動を早期に導入する可能性について探ってきた。今年度の状況を踏まえて、次年度の学校設定科目の実施に向けて準備を進めていく。

(4) オンラインの活用

今年度はコロナ禍により、休校、行事の中止、授業や外部連携の制約等、学校活動に多くの支障が生じた。一方、このような中でも「学びを止めない」手段として活用したのはオンラインである。オンライン授業を行うにあたり、校内ではICTワーキンググループが結成され、環境整備、授業実践、教員のリテラシー獲得のための研修等がただちに行われた。これによりオンラインを日常的に活用することができるようになり、全国や県内でも先進的な事例として紹介された。探究活動では、これまで距離的な制約により連携が難しいと考えていた方々と簡単につながるようになり、質を高めることができた。また校内発表会についてもオンラインを活用し、遠方の方に気軽に参加していただけるようになった。

(5) コロナ禍における柔軟な対応

「オンラインの普及」という意味においては、コロナ

禍は良い影響をもたらしたと言えるが、海外研修をはじめとする様々な取組の実施に向けては、大きな試練となった。このような状況でも生徒と教員で様々なアイデアを出し、試練を乗り越える柔軟な対応ができた。この点も成果として取り上げたい。

海外研修について現地での研修ができない状況ではあったが、中止とするのではなく代替研修を実施することとした。代替研修でも海外研修に参加するのと同程度の学びが得られるように複数のプログラムを組み、参加する生徒を募った。参加希望者は海外研修の時と同程度集まり、生徒も海外に行けなくても獲得できる学びの意味をしっかりと捉えてくれた。代替研修のプログラム作成には生徒が主体的に動き、またオンラインも活用して現地との交流も行う等、現在の環境下、できる限りの実践を行った。緊急時でも臨機応変に対応することで「学びを止めない」ことができることを生徒、教員ともに学ぶことができた。

(6) 教員の指導力向上に向けた取組

昨年に引き続き、今年度も教員の指導力向上に向けた取組を組織的に実践することができた。具体的には以下のような取組が行われた。

- ・未来研究会（全体で行う教員研修）（年間 11 回）
- ・企画・研究開発部（15 名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。探究関連の取組についての議論、情報共有の場）
- ・各学年の探究担当者（各学年 20 名程度）による月次会（月に一度実施。生徒の指導の在り方等についての議論、情報共有の場）
- ・2、3 年の各ゼミ担当者（各 3 名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。ゼミ内の探究テーマの指導、進捗確認の場）
- ・生徒の資質能力の状況については、年に 2 回ルーブリック評価を行い、その動向について企画・研究開発部が集約、分析を行い、探究担当者との共有、対策検討等を行った。
- ・生徒一人ひとりに対しては、ルーブリック評価をもとに、2 年生以降は各ゼミ内での生徒同士によるピアレビューや担当教員との面談（ルーブリック面談）を行い、生徒自身の活動の振り返りや目標設定の機会とした。これらの取組が校内でほぼ定着してきたことは大きな成果である。

7.2 課題と今後の方向性

(1) 学校設定科目「地域創造と人間生活」の運用および次期学習指導要領への対応

次年度（令和 3 年度）より、学校設定科目「地域創造と人間生活」を開設する。これまでの準備を踏まえて、探究的な要素を重視して 3 年間の切れ目のない探究活動を推進し、さらに予測困難な社会においても柔軟に対応できるような在り方生き方を見出すカリキュラムを開発していく。

令和 4 年度は新学習指導要領が始まり、また本校では、ふたば未来学園中学校からの 1 期生が高校に入学する最初の年となる。新学習指導要領では「総合的な探究の時間」をはじめとして探究的な取組が本格的に他校でも導入されることになる。教育課程も大きく変わることが検討されており、目的を踏まえて対応を進めていく必要がある。

(2) 外部連携の活用促進

今年度構築したコンソーシアムや、ふくしま学（楽）会との連携は立ち上がったばかりで連携の在り方については次年度以降、本格的に検討していく必要がある。これまでの取組の様子から、組織的連携を加速させれば生徒の探究活動にはプラスになることは間違いない。本校の生徒の特質や探究活動の特徴を理解していただいたり、配慮が必要な点を共有したり、お互いに情報共有をしながら進めていきたい。

またコンソーシアムのメンバーには理工系の関係者が多い一方で、本校ではその分野に興味関心を抱く生徒はそれほど多くはない。双葉郡地域は原子力発電所の廃炉やイノベーションコースト構想、復興庁が進めている学術教育拠点構想等があり、今後理工系人材の活躍できる場が増えることが想定される。このような地域性も見通して文理バランスよく人材育成を図っていきたい。

(3) 課題の本質に迫る探究活動の指導法

探究活動の深まりが見られる一方で、以下のようなケースも毎年見受けられる。

- ・風評、風化といった一般的な言葉で物事を捉えたり、巷にあふれる情報を鵜呑みにしたりする等、課題を表層的にしか捉えられない。
- ・課題をイメージだけで捉えて、データに基づいた調査を行っていない。
- ・教員から教えてもらった専門家や地域の方にはアクセ

スできるが、自ら開拓しようとしな。地域の有名な方にはアクセスするが、市井の方々にはアクセスしようとしな。

- ・調査研究のみで実践研究が伴わな。調査研究と実践研究の区別がつかな。
- ・調査研究、実践研究そのものが目的化してしま、本来目指すべき目的がはっきりしな。
- ・実践研究まで進んだとしても言語化ができず、自分がどんな課題に対峙し、どんな解決をしてきたのか文章でまとめられな。

まずはこういった生徒の状態を把握する必要があるが、生徒も指導側の教員も感覚の隔たりがあり、目線合わせが必要である。そのための探究ルーブリックや論文作成ルーブリックの準備を検討している。今後、これらのルーブリック作成と運用を検討していく。

また探究活動の指導法については企画研究開発部での定例ミーティングや2年生の探究活動の担当教員による月次会等を中心に議論を進めているが、理論的な指導法に偏りがちであった。こういう場で生徒の活動のケーススタディー等、実践事例を共有して指導法を検討する方向性も検討したい。

(4) 目標管理

目的を達成する指標として掲げている目標について、今年度はいくつか未達成の項目があった。特に本校の人材育成要件であるルーブリックの値については、次年度以降、確実に目標達成できるように取り組みたい。とはいえ、この数値はあくまで生徒の資質能力を伸長させるガイドに過ぎないため、数値に囚われすぎず、生徒の実践内容や活動の様子を丁寧に見ながら指導を進めたい。そのためには教員と生徒との関わり方について教員側が知見を深めていく必要がある。本校では教員のチームによる指導体制がある程度確立されており、この体制を活かして生徒の指導力を向上させたい。

關係資料

令和2年度教育課程単位計画表

福島県立ふたば未来学園高等学校（本校舎）

〈普通教科・科目〉

全日制の課程 総合学科

教科	科目	入学年度		令和2年度			令和元年度			平成30年度			備 考
		年次		1	2	3	1	2	3	1	2	3	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	
国 語	国 語 総 合	4				4				4			現代文B、古典Bは、2・3年次継続履修
	国 語 表 現				3							3	
	現 代 文 A			2				2				2	
	現 代 文 B			2	2			2	2			2	
	古 典 B			2・3	2・3			2・3	2・3			2・3	
地 理 史	世 界 史 A		2	2			2	2			2	2	世界史Aまたは世界史Bと日本史Aまたは日本史Bまたは地理Bの計2科目を履修 地理Bは、2・3年次継続履修
	世 界 史 B		3				3				3		
	日 本 史 A		2	2			2	2			2	2	
	日 本 史 B		3				3				3		
	地 理 B		2	2			2	2			2	2	
公 民	現 代 社 会	2			2	2			2			2	現代社会は、いずれかの開講年次で履修
	倫 理				2				2			2	
	政 治 ・ 経 済				2				2			2	
数 学	数 学 I	3				3				3			数学Aは、いずれかの開講年次で履修 数学Bは、2・3年次のいずれかで履修
	数 学 II			4				4				4	
	数 学 III				6				6			6	
	数 学 A	2	2			2	2			2	2	2	
	数 学 B			2・3	2			2・3	2			2・3	
	数 学 活 用			2				2				2	
理 科	科 学 と 人 間 生 活	2				2				2			1年次に科学と人間生活か、化学基礎および生物基礎のいずれかき、2年次に基礎の付する科目1科目を履修（ただし、生物基礎は1・2年次続けての履修は不可） 物理、化学、生物は、基礎を付した科目を履修した者が選択可 化学は、2・3年次継続履修
	物 理 基 礎		2					2			2		
	物 理				5				5			5	
	化 学 基 礎	2				2			2			2	
	化 学			3	2			3	2			3	
	生 物 基 礎	2	2			2	2			2	2		
	生 物				5				5			5	
保 健 体 育	体 育	2	3	2		2	3	2		2	3	2	
	保 健	1	1			1	1			1	1		
芸 術	音 楽 I	2				2				2			音楽I、美術I、書道Iから1科目を選択 芸術IIは、1年次に「I」を付す科目を履修した者が2・3年次いずれかで選択可
	音 楽 II			2	2			2	2			2	
	美 術 I	2				2				2			
	美 術 II			2	2			2	2			2	
	書 道 I	2				2				2			
	書 道 II			2	2			2	2			2	
外 国 語	コミュニケーション英語I	3				3				3			英語表現Iは、1・3年次のいずれかで履修 英語表現IIは、2・3年次継続履修
	コミュニケーション英語II			4				4				4	
	コミュニケーション英語III				4				4			4	
	英 語 表 現 I	2			2	2			2			2	
	英 語 表 現 II			2	2			2	2			2	
	英 語 会 話				2				2			2	
家 庭	家 庭 基 礎	2				2				2	2	30年度入学生は、いずれかの開講年次で履修	
情 報	社 会 と 情 報									2	2	社会と情報は、30年度入学生はいずれかの開講年次で履修 情報の科学は、元・2年度入学生はいずれかの開講年次で履修	
	情 報 の 科 学	2	2			2	2						

(専門教科・科目及び学校設定教科・科目)

教科	科目	入学年度		令和2年度			令和元年度			平成30年度			備 考	
		1	2	1	2	3	1	2	3	1	2	3		
		必修	選択	必修	選択	必修	必修	選択	必修	必修	選択	必修		選択
農 業	農 業 と 環 境		2			2			2			2		課題研究は、2・3年次継続履修 総合実習は、2・3年次継続履修 食品製造は、原則2・3年次継続履修
	課 題 研 究		3	3		3	3		3	3		3	3	
	総 合 実 習		3	3		3	3		3	3		3	3	
	農 業 情 報 処 理			2			2					2		
	野 菜			2			2					2		
	草 花		2			2			2			2		
	食 品 製 造		2	2		2	2			2	2		2	
	食 品 化 学												2	
	微 生 物 利 用			2			2					2		
	植 物 ハ イ オ テ ク ノ ロ ジ ー												2	
工 業	工 業 技 術 基 礎		3			3						3		課題研究は、2・3年次継続履修
	課 題 研 究			3			3					3	3	
	実 習			3			3					3	3	
	製 図		2			2					2		2	
	生 産 シ ス テ ム 技 術			2			2					2	2	
	環 境 工 学 基 礎			2			2					2	2	
	電 気 基 礎		3			3						3		
	電 力 技 術			2			2					2	2	
	衛 生 ・ 防 災 設 備													
	社 会 基 盤 工 学			2			2					2	2	
商 業	ビ ジ ネ ス 基 礎		2			2					2	2	30年度入学生のビジネス基礎は、いずれかの開講年次で履修 課題研究は、2・3年次継続履修 原価計算は、2・3年次継続履修	
	課 題 研 究		3	3		3	3		3	3		3		3
	マ ー ケ テ ィ ン グ		2			2			2			2		
	商 品 開 発			2			2					2		2
	広 告 と 販 売 促 進			2			2					2		2
	簿 記		3			3					3			3
	財 務 会 計 I			3			3					3		3
	原 価 計 算		2	2		2	2		2	2		2		2
家 庭	こ だ む の 発 達 と 保 育		2	2		2	2		2	2		2	2	
	子 ど も 文 化												2	
	生 活 と 福 祉		2・3			2・3					4			
	フ ァ ッ シ ョ ン 造 形 基 礎													
	服 飾 手 芸										2			
	フ ー ド デ ザ イ ン			4			4					4	4	
情 報	情 報 テ ク ノ ロ ジ ー												2	
	情 報 メ デ ィ ア			2			2					2	2	
	ア ル ゴ リ ズ ム と プ ロ グ ラ ム			2			2					2	2	
福 祉	社 会 福 祉 基 礎		2			2					2		2	
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 技 術		3			3					2		2	
	生 活 支 援 技 術			4			4					4	4	
	介 護 総 合 演 習			4			4					4	4	
	こ こ ろ と か ら だ の 理 解		2			2					2		2	
体 育	ス ポ ー ツ II	10	10	2・10	10	10	2・10	10	10	10	10	10	10	アスリート系列のスポーツII、スポーツIIIは、1～3年次継続履修 元、2年度入学生の3年次は、アスリート系列以外の生徒が2単位履修可
	ス ポ ー ツ III	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
	ス ポ ー ツ IV													
音 楽	ソ ル フ ェ ー ジ ュ			2			2					2	2	
	鑑 賞 研 究			2			2					2	2	
美 術	素 描			2			2					2	2	
	鑑 賞 研 究			2			2					2	2	
英 語	英 語 演 習			3			3					3	3	
	総 合 英 語 演 習			4			4					4	4	
人 文	国 語 演 習			2			2					2	2	
	世 界 史 演 習			5			5					5	5	
	日 本 史 演 習			5			5					5	5	
理 数	数 学 演 習			4			4					4	4	
	総 合 数 学 演 習			6			6					6	6	
	物 理 演 習											2	2	
	化 学 演 習			2			2					2	2	
	生 物 演 習			2			2					2	2	
	地 学 演 習			2			2					2	2	
	応 用 数 学			2			2					2	2	
工 業 地 域 工 ネ ル ギ ー			2			2					2	2		
総 合 産 業 社 会 と 人 間	2			2			2				3	3		
総 合 的 な 学 習 の 時 間			3	3		3	3							
小 計			74			74					74			
ホ ー ム ル ー ム 活 動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
合 計			77			77					77			
組 編 成			4			4					4			

福島県立ふたば未来学園高等学校 人材育成要件・ルーブリック(7 May 2018 Ver.)

学力概念	No	資質・能力・態度(ままとると)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know" 技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力を上げながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会的課題について、習得した知識を深掘し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会的課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。
	B	英語活用力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとるための関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR A2レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR B2レベル)
	C	思考・創造力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理でき、掘り下げて考えることができ、突然指名されたときでも臆せず、集団の中で、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えることができ、ICTを活用して情報を集め、情報分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	メディアを活用して情報を集め、情報分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考えることができ、多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることがができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれずに創造的に考え、新たなアイデアを生み出せる。
	D	表現・発信力 どのような場面でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることがができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたことに一人で取り組むことができる。	集団や他者の中で、他者の役割を身につけ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、互いの良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる。	集団や他者の中で、互いに良い部分を引き出しながらいかにwin-winの関係を作ることができ、ICTを活用して協働を促進することができ、全体の必要作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができ、指示を待たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	文化や国境を越えて、社会を変革する行動にうつし、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	マネージメント力 自分や組織での取り組みを持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	指示を待たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	作業の繋がりが、全体スケジューラを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担できる。	今後のスケジューラやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
	G	前向き・責任感・チャレンジ 自分を意味ある存在として課題解決のために自分の役割を見つけ、全力で取り組み、決してあきらめず遂行できる。	自分を意味ある存在として考え、物事をボジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけて、困り難く克服するために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても自分の責任を果たす努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさをもち、協調して共に高めようとする。	集団や他者の中で、他者を気づかえる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えられる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をよりにしていくための重要なものと考えて受け入れられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をよりにしていくための重要なものと考えて受け入れられる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語るができる。
	J	自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができる。	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができ、	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づく方策を考え自ら行動することができ、	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中で自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標と関連づけて大局的に行動できる。

協働

自立

令和2年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
 第1回コンソーシアム協議会 記録

日時 令和3年1月13日（水） 14:30～16:00
 会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	代表	笠井 淳一	
2	福島大学人間発達文化学類	教授	中田 スウラ	オンライン参加
3	福島相双復興推進機構	専務理事	新居 泰人	
4	福島イノベーション・コースト構想推進機構	教育・人材育成部長	山内 正之	
5	NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	拠点長	長谷川勇紀	
6	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	柳沼 英樹	
7	高校教育課	課長	丹野 純一	教育次長代理、 オンライン参加
8	NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	副拠点長	横山 和毅	
9	NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	スタッフ	青砥 和希	カフェふう担当
10	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
11	ふたば未来学園高等学校	教頭	山本 健弘	
12	ふたば未来学園高等学校	教頭	中島 正義	
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	橋爪 清成	企画・研究開発部主任
14	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤夏菜子	企画・研究開発部副主任
	高校教育課	指導主事	佐藤 章	
	高校教育課	指導主事	鈴木 敦	

- 1 開会（14:40）
- 2 主催者あいさつ（高校教育課 丹野 純一 課長）※別紙のとおり
- 3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 柳沼 英樹 校長）
 - これまで本校ではグローバルリーダーの育成に努めてきた。
 - 本日はコンソーシアム委員の皆様の忌憚のないご意見をいただき、探究をさらに充実させていく。

4 コンソーシアム委員及び関係者紹介（丹野課長）

※ 出席者自己紹介を含む。高校教育課からの出席者が変更となった。

5 説明及び協議

(1) 研究開発実施計画 ※ポンチ絵、別紙様式4、別紙様式4 添付資料参照

【報告 橋爪教諭】

- ・ Aカリキュラムの開発 B人材の育成 C教育と復興の相乗効果の創出

→ コンソーシアム委員（以下「委員」）に、この部分を共に考えてほしい。

定量的目標 (P3)

→ 最終年度で「プロジェクト50件以上」「協働する地域の方200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」

定性的目標 (P3)

→ 「カリキュラム開発」「教育と復興の相乗効果の創出」「地域住民主体のウェルビーイング実現の後押し」

- ・ 添付資料 (P9) 「年間計画」について

【協議】

(課長) 産社に変わる新しい科目「地域創造と人間生活」への対応について

(橋爪) 今までの課題・・・産社と探究の間に断絶があった。新科目では探究的な要素を取り入れ、探究の導入を含めて1年生で実施し、3年間で切れ目のない探究学習を作りたい。

(課長) 目的「ウェルビーイングの後押し」が非常に重要であり、課題であると考えている。新科目でどのように「ウェルビーイング」を学ぶのか、その視点を考えてほしい。

(2) 育成する人材像について

【報告 南郷副校長】

- ・ 「変革者たれ」の目標のもと、どのような人材育成をするのかについて、ルーブリック（添付資料P3）を策定している。

(例) G「前向き・責任感・チャレンジ」レベル5・・・この文言も教員がこだわって設定している。

- ・ 学びは社会をよくしていくという志を持たせ、カリキュラムを展開してきた。

重視したいポイント＝5年間で本校で成し遂げられなかった課題＝求める地域人材像

⇒ 生徒に育みたい力＝「変革者」※様式4 (P2)

- ・ 「当事者として行動する市民性」
- ・ 「協働的ネットワーク構築力」（子どもだけでなく、大人もできていないこと、大人も答えを持ち合わせていないもの）
→ メッセージにとどまることなく、そこからどのように進めていくのか。
- ・ 「地域に新たな価値を創造する力」（イマジネーション、クリエイティビティ）（今までの大人の発想の延長線ではなく、次なる世代、若者の特権として、どのような社会を構築していきたいのか、自由な創造性）

【協議】

(課長) ① 改めてふたば未来の独自性を感じている。「当事者」が非常に重視されているが、「自己の将来の夢と重ね合わせ」という部分があまり着目されない。「地域や世界の課題」と「自己の将来の夢」の関係性、この部分を丁寧にやるのが独自性と考える。

② 「深刻な分断や対立を止揚する」＝政治、未だ生徒はこの立場に立っていない。政治的な考えに向き合わせる事が重要と考える。

③ 「新たな価値を創造する力」＝演劇、哲学等文化の力による育みが重要である。

(中田) 「変革者たれ」を実現するためにこのような目標が必要であることが理解できた。例えばP2の課題も含めて、これまでこれに立ち入れなかった理由と、これからどのように入っていくのか、この検証が大切。「深刻な分断や対立を止揚する」、それを乗り越えるため、協働的ネットワークの質を高めていくための工夫や具体的な方法を引き続き検討することが必要であると考え。

(新居) ① 「求める地域人材像」や「ルーブリック」の内容は、これができれば理想的な世界ができると感じる。

② 「地域に新たな価値を創造する力」大震災より10年を迎える本年、極めて重要と考える。当事者にとっては「まだ10年」、世の中は「もう10年」の狭間、道半ば。復興を超えた将来に向けた「価値」を浜通りから世界に発信しないと、風評だけが残る。一緒に追求していきたい。

③ 「協働的ネットワーク構築力」どのようにしたら生徒にこの力を育めるのか、一緒になって考えていきたい。

(3) コンソーシアムにおける地域協働について ※P P資料

【報告 橋爪教諭】

・ 1年生「産社」から「地域創造と人間生活」へ
小グループに分かれた演劇創作。地域課題を演劇にまとめる。できれば分断や対立の構図に触れて、表現してほしい。

→ 「未来の変革者」の入り口に立つ＝課題の把握

・ 双葉郡8町村にフィールドワーク

・ 「未来創造探究」での地域課題解決の探究、実践（6つのゼミ）

(例) 廃炉座談会（2期生）、地域交換留学（3期生）

→ 地域の方々と双方向で協働できた事例

・ 学校全体で、約200の地域プロジェクトを進めている。教員だけでは難しい面もあり、「委員」に御指導いただきたい。

【報告 南郷副校長】

・ 未来創造プロジェクト実践...1期生20、4期生50、5期生60と、プロジェクト数が増えてきている。グループ～個人レベル。

・ 演劇取材について、双葉郡8町村すべてをカバーしている。学校の地元は8町村全体であるという視点を生徒に仕掛けている。

・ 課題について、解決に向けて取り組んでいきたい。

① 双葉郡8町村との連携について...教員個人の繋がりへの依存、近隣に偏りがち、学校としては努力しているが、地域との繋がり等、住民への発信及び連携状況の可視化

② より多様な団体・人材との連携について...特定の方への偏りを払拭する様々な人材との出会い、特に中学生の医学・理工系のテーマへの関心の増加により、イノベとの関わり、教員のネットワーク不足

③ 人材育成と地域復興の相乗効果、連携...生徒の創造的な発想、発言、探究学習がこれからの地域復興を考える場になるように...内発的なイノベーションを起こせる生徒育成。地域住民主体のウェルビーイングの実現

【協議】

(笠井) ① 生徒が作るプロジェクトの課題について、これが難しい。そのためには現状分析が必要、問題を発見し、切り口としての課題を見つける。そのために、どれだけそれぞれの地区の現状、実感を捉えて課題に結びつけているのか、その過程が難しい。

② 表層的なところだけではなく、その地区に没入できるような機会は作れないか。どのように学校は考えているか。

- (橋爪) 課題設定はあらゆる面で苦労している。地域の実態の捉えは、1年次のフィールドワーク及び演劇が入口としては有効かと考えている。生徒にとってはある種衝撃的な影響。全ての生徒にというわけではないところが課題。
- (南郷) 葛尾村焚き火イベント参加については？
- (齋藤) 演劇部生徒を引率して参加。あらゆる背景を持った地域住民との対話の中で、生徒は探究学習の意欲が湧いた。そこから稲刈り、体育イベント、葛尾村の魅力のプレゼンテーション等が生まれた。地域とのつながりを作ることが最初のきっかけであると考え。
- (柳沼) 3年生は探究学習発表がある。1、2年生は先輩の探究の様子を見て、探究活動の見方等の継承ができつつあると感じている。生徒同士の刺激を大切に、地域の現状を見つつ、生徒の主体性を育てている。
- (笠井) 「ふたば未来学園」との相乗効果。例えば子どもがいなくなった浪江地区の学校文化の継承は非常に難しい。そのようなところでふたば未来学園との連携は、色々な学習の場を通して、相乗効果を発揮できる活動を計画できないか。連携は子供達の学ぶ力につながるの、一緒に頑張っていきたい。

人材バンクについて

【説明 カタリバ 長谷川】

- ・ 情報の一つにまとめ、支援・伴走する人材バンクへの情報収集を行っている。「8町村ボード」を作成しており、活動している人材情報を掲載している。
 - ・ 今後、各町村と協働して情報を集め、作っていききたい。
 - ・ オンラインの場として、インターネット上に探究学習、地域との協働学習を支援してくれる方々を集めたデータベースを試行している。
 - ・ 課題は、顔を知らない大人とどのように繋いでいくか。コンシェルジュのような、具体的にテーマが定まっていな生徒が相談し、支援できる大人、人材を広げていくこと。
- (山内) ① 課題は「課題を設定すること」その手助けが大切である。
- ② 医学・理工系のテーマ設定について、イノベの教育人材育成部は、高校、大学それぞれの担当がある。生徒の設定によっては、特に工学系であれば、イノベ機構に相談があれば、大学教授等の紹介ができる
- ③ 「求める地域人材像」について、「課題」と「夢」を重ね合わせることはなかなか難しいのではないかと。無理矢理結びつけることが果たして良いことか。表現を考えても良いと考える。
- ④ 伝承館スタッフに、ふたば未来、小高産業卒業生を採用した。一流の高校生であった。素晴らしい教育であり、子どもたちが育っているので、これからも自信を持って取り組んでほしい。
- (課長) ① 「可視化」と「ウェルビーイング」は繋がっている。普通の住民の暮らしに向き合わせ、フィールドワークできちんと課題に出会わせることに集中してほしい。
- ② 国際教育拠点との連携は、イノベとの協働で取り組んでほしい。
- (新居) ① 復興機構は外から入ってきた方を応援する仕事である。8町村のキーマンでもし必要なら、事業者、農業等紹介できる。生徒と協働することにより、地域住民も元気が出る。
- ② 「地域交換留学」等も行っているようだが、人材交流の観点で、官民合同交流を行なっている。地域に根を張りながら、外との高校生とのつながり等を紹介していきたい。
- ③ 「グローバル」として、OECD等で培った人材等の紹介もできる。

6 閉会 (16:05)

令和2年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
 第1回運営指導委員会 記録

日時 令和3年1月26日（火） 15:00～16:10
 会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	OECD 教育局	シニア政策アナリスト	田熊 美保	
2	慶應義塾大学	教授	飯盛 義徳	
3	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	柳沼 英樹	
4	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
5	ふたば未来学園高等学校	教頭	山本 健弘	
6	ふたば未来学園高等学校	教頭	中島 正義	
7	ふたば未来学園中学校	教頭	緑川 敏之	
8	ふたば未来学園高等学校	教諭	橋爪 清成	企画・研究開発部主任
9	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤 夏菜子	企画・研究開発部副主任
10	ふたば未来学園高等学校	教諭	鈴木 貴人	企画・研究開発部
11	ふたば未来学園高等学校	教諭	塩田 陸	企画・研究開発部
12	ふたば未来学園高等学校	教諭	小磯 匡大	企画・研究開発部
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	荒 康義	2学年主任、企画・研究開発部
14	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	3学年担任企画・研究開発部
15	ふたば未来学園中学校	教諭	檉村 弘一郎	1学年主任、企画・研究開発部
16	認定NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	拠点長	長谷川勇紀	
17	認定NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	副拠点長	横山和毅	
18	認定NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	スタッフ	内海博介	
19	認定NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	スタッフ	米田若菜	
20	認定NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ	スタッフ	青砥和希	カフェふう担当
21	高校教育課	課長	丹野 純一	
22	高校教育課	主任指導主事	鈴木 哲	
23	高校教育課	指導主事	伊藤恵美子	

1 開会（15：00）

2 主催者あいさつ（高校教育課 丹野 純一 課長）

3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 柳沼 英樹 校長）

- 5年間のスーパーグローバルハイスクールでの取組をベースに、グローバル事業を充実させる。
- コンソーシアム協議会も開催した。運営指導委員の皆様の忌憚のないご意見をいただき、本校の取組をさらに充実させていく。

4 運営指導委員及び関係者紹介（丹野課長）

※ 出席者自己紹介を含む。

5 運営指導委員長及び委員長代理選出

委員長・・・田熊氏、委員長代理・・・飯盛氏

6 委員長あいさつ

- 会を質の高い時間とするために、以下共有したい。
 - ① 関わる先生方自身が「変革者（チェンジメーカー）」であるので、運営「指導」委員会ではあるが、指導というより、チェンジメーカーに対してきっかけを提供できる役割でありたい。
 - ② 形式的な会議ではなく、リラックスした雰囲気、本音を話せる対話的な会議としたい。
 - ③ エコシステムの中に運営指導委員も入り、プロセスに継続して一緒に取り組んでいきたい。

7 説明及び協議

【田熊委員長より】

- 先生方からは、課題というより、成果や達成感についてお話いただきたい。

(1) 事業説明 ※別紙資料

【目的 橋爪教諭】

- 3年間を通して探究に取り組ませる。
 - ① カリキュラム開発・・・地域の課題と世界の課題を結びつける取組
 - ② 人材育成
 - ③ 校外への波及効果を目指した、課題先進地域として、全国に通じる課題に挑戦する取組

【人材像 南郷副校長】

- 育成したい人材像、課題は以下のとおりである。
 - ① 夢：地域課題を見つめる一方で、自己の「夢」に思いを強く持てる人材
 - ② アウフヘーベン：例えば、原発処理水の海洋放出に関わる問題はかなりシビアな問題であるが、様々な立場もあることもあり、地域で議論が行われることは無い。意志無き意志決定になってしまっており、その結果、人任せの政治が生み出されている。沈黙も×、分断も×。対立でなくアウフヘーベンして新しいものを生み出す力、止揚する力、立場や考えが異なっても協働してネットワークを作り上げる力を備えた人材
 - ③ クリエイティビティ：これまでの延長線上ではないものを生み出す創造性を備えた人材

【今年度の特徴 橋爪教諭】

- コンソーシアムを構築し、育成したい人材像を共有した。
- 現実に自分が考えた課題を解決するためのアクションを重視している。
- ドイツ研修、NY研修の代替としての国内研修や、オンライン研修をすすめている。
- 双葉郡全体での活動が広がった。8町村全てで、フィールドワーク等でお世話になり、連携をとることができた。

- 2、3年生の探究活動では、葛尾村とのイベント開催や、8町村で未だ帰還ができていない双葉町のまちづくり計画へ、生徒が参画している等の事例がある。
- 今後の課題
 - ① 8町村との連携は、教員個人の繋がりによることが多かった。今後は組織的に繋がっていききたい。
 - ② 探究テーマが社会学等文系の課題に偏りが見られた。イノベ構想関係者とも繋げて、理系関係にも広げていきたい。
 - ③ 本校のみのメリットだけでなく、本校の学びと地域復興の相乗効果を模索していきたい。

(2) 運営指導委員による指導

【飯盛委員長代理より】

- 自己紹介

全国で、地元の企業と協働して地域探究学習をする取組を20年ほど行っており、サステイナブルな事業モデルとして成立している。以下の力を子どもたちに身につけるための学びである。

 - ① 自分で考えて行動できる力を育む。
 - ② 人と繋がって問題を解決していく力を育む。
- どうしても「限界」や「課題」から入ってしまうことが多い中、ふたば未来学園高校での取組は、本当に素晴らしい先進的な活動である。生徒への意味づけは相当時間をかけて、苦勞して作り上げたのだらうと感じている。
- グローバルリーダーを育成するうえで、「クリエイティビティを育む」ということは非常に大切である。慶應義塾大学では、誰がどの所属かを気にしていない。「人と違うことを尊重する社会」が寛容性につながる。「人と違う」ということ尊重することを規範とすることが大切である。
- 私のゼミでは、地域づくりに拘らず、「知行合一」「恕」を徹底して守ることを言い続けている。
- 「知行合一」とは、「知っていて行わないことは、知っていることにはならない」。これはまさにふたば未来学園高校が標榜している「イノベーター」には必要不可欠な力であると考え。「学んだことは現場で生かしていく」。
- 「恕」は「相手の立場をしっかりと理解した上での議論、深い思いやり」。ふたば未来学園高校の「寛容さ」に結びつくのではないかと。
- 私のキャンパスには「SA」（ステューデント・アテンダント）制度がある。学部生が教員の立場になってものを視る。これを担当すると非常に能力が伸びる。「生徒が生徒の面倒をみる」環境づくりが重要であると考え。
- 意思決定の場を事例教材として学習する。大学では「ケースリーダー」も学生にやらせている。「SA」と同様、生徒が「自分事」として捉えるようになる。教材も生徒に作ってもらう、授業のリードも生徒に関わってもらうのもよいのではないかと。
- ヨーロッパでは、「過疎地域」の課題解決に取り組んでいる事例が大きな広がりを見せている。海外研修については、このようなものを視察することもよいのではないかと。
- これから、ふたば未来学園高校が「地域におけるプラットフォーム」となって、イノヴェイティブな活動が生まれてくることを期待している。

【田熊委員長より】

- 「プラットフォーム」の土台として、うまくいく事例となってほしい。
- 課題を共有することも大事だが、大切なことは「成果を感じている」ことが、成功に秘訣である。
- 大人も「夢」「ウェル・ビーイング」があると、「持続可能なプラットフォーム」となると考える。
- ぜひ皆さんから、個人レベルとしての「成果」「達成感」について教えてほしい。リラックスし、気負わずにお答えいただきたい。

【出席者より】

- 今年度のコロナ禍における休校当初から、かなり早い段階で教員が結びついてオンライン授業が

できたことが成果だと感じている。

- トルコ、マレーシア等とオンラインによって協働できている。オンラインで地理的なバリアをクリアできた。
- 双葉町のまちづくりに、生徒と共に参加できたのがよかった。ようやく帰還できる方々と語れる機会を持てたのがよかった。
- 今年度は双葉郡8町村の様々な方々に加わっていただいたことで、「双葉郡に支えられる学校」として一歩踏み出せた。本校にとっては大きな一歩であった。
- 双葉郡8町村は非常に複雑な事情を抱えている。葛尾村長からは、「村づくりに役立っている気がしない」という意見を頂いたこともあった。今は村の様々なプロジェクトに参画しており、最高だなと感じた。
- コロナ禍によって、まずは自分の地域を学ぶために、生徒たちはいったん立ち止まることで、様々な気づきがあった。バスツアーを8町村に足をのぼし、地域の方々と生徒たちが関わることによって、地域の活性化につながったのがよかった。

【田熊委員長より】

- 立ち止まって振り返る、立ち止まって課題の発見等、コロナを機に「引き算」を覚えた学校や、「カリキュラム・オーバーロード」ならぬ「宿題オーバーロード」だったりする学校が見られた。「時間がない」や「引き算を覚えた」知見を、解決策を含めて、提示願いたい。

【参加者より】

- コロナ禍で授業時数が少なかったにも関わらず、結果的に授業進度の遅れを出すことがなかった事例から、全てを教えることをやめ、生徒に預けた結果、余計なことをしなくなった。「教える」ということを疑って、内容を吟味しなおすということが近道なのではないかと感じた。
- 仕事と仕事を組み合わせるとうまくいくことを思いついた。例えば、この会議内容を「10年研」のレポートにしようと考えている。また、取り組んでいる震災差別の問題とコロナでの差別とを重ねて考えることで、新たな課題を見つけることができたりした。
- 「産業社会と人間」の進め方で、無理をしてでも教員間で共有する時間を作った。そのことで、他の教員から自分でも思いもよらないアイデアや示唆を頂いた。「共有する大切さ」を改めて感じた。

【田熊委員長よりまとめ】

- 「何のためにこれをするのか」・・・手段が目的とならないように。いったん立ち止まって考える。(例) 評価のための課題提示に納得がいかない 等
- 数学は、そのような「引き算」が一番難しい教科。教科の体系によって丁寧にしていかないと、全体のカリキュラムが崩れる。カリキュラム開発部会の教員の腕の見せ所である。
- 課題として感じること
 - ① 教員間での経験の共有(シェア)の不足
 - ② 教員間の指導力の意識の差
 - ③ 探究と教科学習の連携、連動
 - ④ リアルな課題、当事者意識
 - ⑤ 個別のニーズに合ったカリキュラム・・・「公平な個別最適化」
 - ⑥ 学びに向かう力、身につけてほしい力、その結果の意味づけを模索
 - ⑦ 地域との協働の形、体制
- 「きっかけメーカー」として、今後も継続して対話を続けていくことを希望している。

【飯盛氏より】

- 引き続き色々な活動の中から、これからも試行錯誤していかねばならない。
- 夢を語ることは極めて重要なことである。生徒が羽ばたいていく上で必要不可欠である。
- キャリアの考え方で「プランド・ハッペン・スタンス」がある。色々な偶然が重なって今がある。経験や出会いの一つ一つを大切に、現在がある。学びの機会は何歳になっても提供できる仕組

みとなっている。社会の中で「学び続ける」姿勢は、これから社会を切り開いていく人たちにとって、必要な資質である。

【柳沼校長よりまとめ】

- 次回に取組を報告できるようにしたい。今後も忌憚のない御指導をいただき、良い点も含めて振り返っていきたい。

8 閉会

4期生・未来創造探究生徒研究発表会

◆ 期日：令和2年9月26日(土)

◇ 原子力防災探究ゼミ

<p>あにまるzoo 課題：災害時には被災した人たちの家族ともいえるペットたちがともに避難できるための場所が十分でない。ペットを連れて避難できるようにするための場所をつくり、生命の大切さを実感して皆で動物の命も大切にしていけるための機会を作ることが必要だと考えた。</p>	<p>ゲーム交流会 (Game Exchange Meetings) The purpose of this study is to vitalize our community in more enjoyable way! Our study tema joined game events in the community and game exchange meetings during the school festival.As a result, children aged from 5-10 enjoyed this event. But other people didn't join this event.So we want to be able to exchange meetings with all generations.私たちはボードゲームやカードゲームを通して多くの年代の人に交流してもらおう事を目的として探究を行っています。遊戯交流会に参加し、小学生や会社員の方、高齢者の方等様々な年代の方が交流していたのをきっかけに私たちもこのような様々な年代の人が交流できる場を作る活動をしたいと考えました。</p>	<p>震災を風化させない 最近の自然災害や感染症に対する人々の行動から、震災の経験が風化しているのではないかと不安を感じました。自分達が体験したことを後世に伝えていく教訓として誰でも簡単に閲覧できるものによしと考えました。</p>
<p>(キーワード) <u>動物</u> <u>避難</u> <u>保護</u> 東日本大震災の時に保護された動物はすでに施設にはおらず、活動を行った方に話を聞く、地域の問題を聞く、アンケート等を行った。 生命の大切さを伝える絵本作りをし、将来的には動物保護団体設立(保護動物ブランド化)を目指す。</p>	<p>(キーワード) <u>ゲーム交流</u> <u>多世代交流</u> 遊戯交流会への参加して、イベントの運営の手伝いをしたり、実際に交流会に参加して、高齢者や子供など、自分たちとは違った世代の方たちと交流したりしました。その中で、教えていただいたイベントの運営の方法や参加して初めて経験したことなどを活かして、文化祭でゲーム交流会を開催しました。また、私たちが開催したゲーム交流会についてのアンケートも実施しました。</p>	<p>(キーワード) <u>震災</u> <u>アーカイブ</u> <u>オーラルヒストリー</u> オーラルヒストリーとは実際に自分が実際に聞いたことを資料としてまとめたものです。自分の経験したことをまとめたり双葉郡の方にインタビューをして、手軽に読めるパンフレット形式にして作成しています。地域協働スペース等様々な方に見つけてもらえるような場所に設置させて頂くことも検討しています。</p>
<p>献血で変えられる ～「地域」×「高校」×「献血」 私は、10代から30代の献血を増やしていくことを、探究のテーマとして2年間実践と研究を行いました。「献血が身近ではない」ことが原因で献血に対する怖いというイメージが作られると考え、その「怖い」という概念を壊すための解決のアクションを行いました。献血を入れたことによる地域への影響についてお話しします。是非聞いて下さい!</p>	<p>心の居場所づくりを目指して 私は、「辛いけど誰にも言えず笑顔で過ごしている人がいる」のではないかと感じています。心の底から安心して居る場所を提供すべく、ぶらっとあつとで活動しています。私の活動を通して地域の人や県外の方のサポートレースになって、地域がより活性化することを願っています。</p>	<p>～避難経路ウォーク×スポーツゴミ拾い～ 自分たちが見つけた問題は、災害時に避難する人が少ない、正しい避難経路がわからない、浜辺にゴミが多くて景観があまり良くない、海の生き物が心配等です。この問題を楽しく解決するためにゲーム形式のイベントを開き、若者世代に参加しやすくします。このイベントにより災害時に避難する人を増加、恒常性バイアスによる逃げ遅れてしまう人を減らす、ゴミの落ちていないきれいな浜辺にしてより地域のひとがリラックスできるような場所にならごみ問題の影響を受けている野生動物を救いたい。</p>
<p>(キーワード) <u>献血促進</u> <u>地域イベント</u> 献血に対する宣伝活動を行いました。ポスターを作成し貼る、冊子を配る、SNSで宣伝することなどを行いました。しかし、献血に興味を持ってくれる人は私の投稿にも強い反応を示してくれるのですが、興味のない人はスルーしてしまいます。私は、献血をコラボできるような企画を実施しました。そのために、地域の団体に協力してもらい、その団体のイベントと献血のコラボとして、学校でイベントを行い、献血バスを呼ぶ企画をしました。</p>	<p>(キーワード) <u>コミュニティ</u> <u>ぶらっとあつと</u> <u>心の居場所</u> 主な活動として、地域の方と協力してコミュニティスペースの作成にあたっています。12月24日オープンを目指し、内装の設計やDIYをオンラインや対面でのミーティングで進めてきました。完成まではまだかかりますが、並行してプチイベントを開いたり、広報活動を進めたりしました。</p>	<p>(キーワード) <u>環境</u> <u>ごみ</u> <u>避難</u> 私たちは上記の問題を解決するために、役場へ行って今年でできた新しいハザードマップをもらったり、実地調査を行ったりなどの準備を経て、自分たちで正しい避難経路を考えて、危険箇所を避けながら目的地を目指す避難経路ウォーク。ゴミ袋をいっぱいにする速さを競いながらゲーム形式で行うスポーツゴミ拾い。これらを組み合わせた第一回「避難経路ウォーク×スポーツゴミ拾い」を8月16日に実施しました。</p>
<p>祭りの復興 私たちのこの地域は若者不足と震災によってコミュニティが崩壊したことが地域の問題だと考えた。この問題を解決することで、双葉郡の伝統を誰もが忘れることなく、活気がある街を目指す。</p>	<p>ハザードマップで防災意識UP 私達は、楡葉住民の方々の減災・防災への意識を高めることを目標にし活動してきました。そのために手段として目を向けたのは「ハザードマップの活用」です。どのように活用して意識を高めるのか、是非注目し、聞いて欲しいです。</p>	<p>絵本から始まる1歩 The purpose of this study is to tell those who the earthquake, about disaster prevention. Our study team made a picture book to have children understand the disaster. Another message in the booklet is that they should get over the peer pressure from other. 震災を経験していない世代の子供たちに震災やその後の生活から学んだ教訓について伝え、教訓を生かせる社会の実現を目指す。絵本を通して、震災当時の様子を知った子供たちがさらに「同調圧力」と「偏見の境界線」を考えられるように活動しています。</p>
<p>(キーワード) <u>伝統文化</u> <u>システム</u> <u>SNS</u> 若者不足を解決し、コミュニティを再建するために3つのアクションを行った。初めに広野町で行われたタンタンペロペロ祭りの運営に参加した。次に祭りを復興させ、持続的に進んでいくためのシステムを考えた。最後に広野町を紹介する動画を作り、双葉郡の広報の仕方について考えた。</p>	<p>(キーワード) <u>ハザードマップ</u> <u>防災意識</u> ハザードマップの認知度、実際に使用したことはあるか、今あるハザードマップに対してどのように感じているのかを、楡葉町のスーパーでアンケート調査を行いました。さらに、マップをつくるために楡葉町役場に行き、アドバイスをいただきました。</p>	<p>(キーワード) <u>絵本</u> <u>同調圧力</u> <u>偏見の境界線</u> ・外和さんとのZoomミーティング → 絵本の概要を考える ・第1回プロット作成 ・外和さん、増田さん、豊嶋さんとのZoomミーティング → 第1回プロットの感想・改善点の話し合い ・第2回プロット作成 → ミーティングの改善点を活かしての作成・絵本作成 ・絵本の読み聞かせ動画をYoutubeにアップ ・山本さんから絵本のフィードバックをもらう</p>
<p>#フタグラマー 探究内容は『福島の今』を伝えることです。福島の抱える問題は『福島の今』を知る機会が少ないことです。福島の人たちが福島の魅力を伝える取り組みはそれほど多くはありません。そのため、私たちが他県の人たちに知る機会を作っていくことで風評被害や偏見がなくなっていくと思います。</p>	<div style="border: 2px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>探究テーマ</p> <p>内容</p> <p>プロジェクト(課題解決のためのアクション)とこれまでの取り組み</p> </div>	
<p>(キーワード) <u>SNS</u> <u>写真</u> SNSなどを使って福島の今を伝えていく活動を行っています。さらに、地域との関わりも増やしていきたいとも考え、写真展を開いたりしています。これまでに3回行ってきました。写真展では来てくださった地域の人たちと私達も交流してきました。また、ポスターを作り駅や店の中に貼らせていただくことで写真展に来なかった人にも無意識のうちに目にしてもらえると思います。</p>		

◇ メディアコミュニケーション探究ゼミ

<p>記憶を繋ぐ</p> <p>私たちは以前、一人一人で活動していたのですが、二人の共通点を見つけそこから探究をスタートさせました。探究テーマは震災を経験していない子供たちや高齢者などの幅広い年代対象に今の時代、SNSの利用者が多いのでそれを利用して当時の写真と照らし合わせ自分たちの体験したことを話し、震災の記憶を無くさないために繋げていくことが目的です。</p>	<p>浜通りの魚をなめんなよ</p> <p>私は福島県の魚の美味しさと安全性を伝えることを目的に活動しています。活動内容としては実際に漁業を見に行ったり現状を知ったり、魚関係の活動を行っている人に相談や企画を提案したりしました。今、行っている活動は福島県の魚を使った商品開発です。この活動を行って来て学んだことは、自分が出来ない分野があっても諦めないで他の人と協力してもらおう事で大きな結果が出せるようになるということです。</p>	<p>廃炉を楽しくしかりと！</p> <p>私達は、廃炉を楽しくしかりと学べる勉強会を開催することを目標に、活動を行っています。しかし、私達自身、廃炉とは何か聞かれても答えられる自信がありません。しかし、「知らないからこそ出来ることがあるのではないか」と思い、最後まで諦めず活動しています。</p>
<p>(キーワード) 震災、記憶、SNS</p> <p>私たちは写真集めから始め、自分たちの体験談を整理したりそれをノートにまとめた上で外に出なくてもできることから積極的に取り組みました。</p>	<p>(キーワード)</p> <p>・相馬漁業の高橋勝侯さんに取材 ・久ノ浜漁業に足を運ぶ ・榊裕美さんに取材 ・organi cottonのイベントのお手伝い ・海や魚について高校生と大人でMG ・おさかな隊結成 ・久ノ浜のはま水のオープニングイベントのお手伝い ・マイプロジェクトに参加(東北大会出場) ・相馬市の漁業関係のお店に商品開発の企画を提案 ・海外研修ベラルーシに参加 ・高橋あゆみさんと牛出拓馬さんに商品開発の企画を提案 ・五十嵐楓那さんにイラストを依頼 ・SEVEN SEAS結成 ・商品開発(FISH PROTEIN) ・商品開発のイベントを8月に23日に開いた</p>	<p>(キーワード) 廃炉、勉強会、自分事へ！</p> <p>第6回ふくしま学会プレゼン 未来会議事務局局長菅波香織さん主催のオンラインフォーラムへの参加 一般社団法人AFW吉川彰浩さんにジオラマを見せていただいたなど。</p>
<p>未来プロジェクト</p> <p>震災を経験していない子ども達が増え今後大人になり社会の中心になった時に震災時の教訓を生かせず10年前と同様、助かったはずの命を助けられなくなってしまいます。自分が経験したことを伝え、子ども達と今後自分達に出来ることを一緒に考えるために、楽しいと感じるような芸術を用いて生活経験や想像したことをのびのびと表現できる場を作るためにプロジェクトを企画しました。</p>	<p>風評被害を払拭したい</p> <p>私たちは風評被害に着目して活動してきました。最初はメンバーとの連携が取れず、全然進みませんでした。が、最終的にいい形で動画を完成させることができました。</p>	<p>双葉郡震災クイズ</p> <p>私たちの班は、震災で起きた出来事を風化させないようにするため、興味がない人や体験していない次世代に正しい知識を楽しく伝えられるようにクイズを作成しました。このクイズは「Kahoot!」を活用しているので、誰でも気軽にオンラインで問題に参加できます。また、双葉祭ではクイズ大会を行いました。クイズ終了後はアンケートを記入していただきました。</p>
<p>(キーワード) 震災、芸術、子ども</p> <p>カリフォルニアの短期留学では地域の問題を解決の仕方を学び実際に自分達に出来ることを考えアクションを実行した。5月に第3回・第4回国際芸術・学術拠点構想研究会に参加しました。8/7に榊葉キャンパスで「僕らの好きな榊葉町」をテーマに榊葉小学校の子ども達と大きな窓に榊葉町の好きなところや自分のお気に入りの絵を描きました。9/24に母校である中村第二小学校の3学年の子ども達と未来プロジェクトを行いました。</p>	<p>(キーワード) 風評被害、どうやって伝えるか</p> <p>インタビューや、アンケート収集</p> <p>私達は双葉郡に残っている風評被害を払拭するために町へ出てインタビューをしました。協力してくださった方の中には県外から来た方もいました。</p>	<p>(キーワード) Kahoot! 震災 風化</p> <p>双葉祭でクイズ大会を行いました。</p>
<p>地域の人との協働を目指して</p> <p>学校をプラットフォーム化するということを目標に活動してきました。はじめは地域の人だけとの活動だったのですが、地域外の人に対して、地域の現状はしっかりと目で見えて欲しいと思い、地域外の企業と連携しています。地域の人たちや企業の方々に協力していただき、文化祭でビザを配りました。人々の関わりがきっかけになったと思います。</p>	<p>交流会による帰還の実現</p> <p>私達は、まず双葉郡外に避難してまだ戻ってきていない人、戻れない人が3割近くいるということに目を付けました。そこで、「双葉郡に戻ってくるに当たって生じる課題や悩みは、実際に住んでいる人に聞くのが1番！」と考え、双葉郡に住んでいる人と戻りたいと思っている人のミニ交流会を開くことを目標にして活動してきました。</p>	<p>偏見払拭！「障がいと歩む福島未来」</p> <p>私は障がい者への偏見に幼い頃から直面した事や福島への風評の実態を知る機会があり、障がい者への偏見と福島への風評の払拭に向け活動してきました。様々な調査から障がいと福島の風評には共通構造がある事に気が付きました。この構造解決のため障がい児童施設での交流やイベントの企画なども行っています。これらの活動を通し社会全体の偏見の払拭や誰もが共生可能な偏見の無い社会にしていきたいと考えています。</p>
<p>(キーワード) 地域の人、生徒、地域外の人</p> <p>学校が物事を中心となれるように地域の人々を集め、地域内と、地域外の企業それぞれと連携した。</p>	<p>(キーワード) ミニ交流会、課題解決、</p>	<p>(キーワード) 偏見の共通構造、偏見払拭、経験プロジェクト(課題解決のためのアクション)とこれまでの取り組み ベラルーシでアンケート調査 福島市でアンケート調査 広野町の農家訪問 仙台青葉短期大学訪問 偏見の共通構造の考察 障がい者施設での交流カルタ交流会の企画</p>
<p>広野海岸「はだし」プロジェクト</p> <p>目標は、広野海岸を「はだし」で歩けるくらいきれいな海岸・人が集まれる海岸になってほしいと思っています。そのために、実際に海岸へ足を運んでみたり、ゴミ拾いを行ったりなどの活動をしていました。ですが、これは自分一人で達成できるものではないです。なので皆さんにこの海岸についてや、ここで起こっている問題について知ってほしいと思います。</p>	<p>すぐろくで震災を学ぼう</p> <p>震災後生まれてきた子ども達を対象とした活動。すぐろくで楽しみながら遊んでもらい、震災が起きた事を知ってもらえきっかけづくり。この探求の前までは音楽で震災を伝える活動をしてきた。共通部分として、'震災を伝える'ことを前提としていた。どのように人に届けるか、これまでの活動を通して色々気付ける機会がたくさんあった。</p>	<p>偏見・差別の払拭</p> <p>探究で見た福島の偏見ワースト10をきっかけに、なくせろ偏見・差別をなくしたいと思った。そのため、みんなでディスカッションを行い、固定概念の払拭や自分から知ろうという気持ちの向上を目標に活動している。まだ、テーマを変えただけで活動ができていないが卒業までにたくさんディスカッションを行いたい。</p>
<p>(キーワード) 広野海岸 海洋ごみ 海</p> <p>広野海岸の活気を取り戻すために学校の人や地域の方々を中心に活動してきた</p>	<p>(キーワード) 震災後、震災を伝える、知ってもらう</p> <p>音楽で震災を伝えるために、震災に関連したキーワードを入れた作詞づくり。震災後、生まれてきた子どもたちを対象としたすぐろく作り(試作品)。実際に遊んでもらうアクションを行った。</p>	<p>(キーワード) 偏見・差別・ディスカッション</p> <p>PDCFAサークルをもとに活動している。その第一歩としてディスカッションを行った。</p>

◇ アグリビジネス探究ゼミ

双葉郡の風評被害をなくす	地域の特産品を使って風評被害を払拭する	富岡町に桜クッキーを
震災から約8年が経過した今でも、福島県や双葉郡に対する風評被害があるのが事実です。そこで、その風評被害を払拭するため、双葉郡の特産品や名物を使用したり、育てたりすることで、食材や植物の安全性を伝えたいと考えました。	東日本大震災後、双葉郡の特産品が風評被害や災害によって収穫量が減少したために失われていった。この課題を解決すべく、私たちは新しい特産品を使用し、少しでも町に活気を戻すためのスイーツ作りを行った。	富岡町にある夜ノ森の桜をイメージしたクッキーを作り、少しでも復興に貢献したいと考えた
(キーワード)広野、やまゆり、バナナ ・ヤマユリプロジェクト(育てたヤマユリを広野町内の各所に提供、広野町の花であるヤマユリをもっとたくさんの人に知ってもらう)・お米の料理コンテスト(広野町のお米で作ったレシピを考え、風評被害の払拭を図る)・ロールケーキの製作(大熊町のクワイと広野町のみかんを使用したロールケーキを提供し、食材の安全性を伝える)・バナナプロジェクト(広野町のバナナを使用したお菓子を作り、町民の方々に配ることで食材の安全性を伝える)	(キーワード)檜葉町、新しい特産物、さつまいも ・檜葉町の新しい特産品を使用したスイーツの製作・特産品を地域から全国に広めるために、製作したスイーツをカフェに提供したり、イベントでの配布を実施した	(キーワード)富岡町、夜ノ森、桜クッキー ・富岡町の小中学校に給食を提供・富岡町の夜ノ森の桜をイメージした桜クッキーの製作・桜クッキーを復興カフェに提供

◇ 再生可能エネルギー探究ゼミ

海水発電	波力発電	プラスエネルギーハウス 太陽光発電
双葉郡は海に面しているため、その豊富な海水を利用した発電について研究したいと考えた。取り組み内容は下記のふたつである。 1空気マグネシウム発電 酸素とマグネシウムの反応を利用し、電解液として海水を利用した発電方法。 2浸透圧発電 海水と淡水の浸透圧の差を利用して液体の流れを発生させ、タービンを回す。タービンが十分回転すれば発電が可能である。	福島県が目標としている、電力の100%を再生可能エネルギーで賄うための方法の一つとして、波力発電を考えた。日本では岩手県久慈市が国内初の本格的な実用施設とされている。波力発電は日本ではまだ実績がなく、設備や費用の面で不利な部分が多いが、単位面積あたりのエネルギーは非常に大きいので、波力発電の有用性を証明したいと考え研究を行った。	自宅で簡単に発電できる装置の代表は太陽光発電である。そこでまず校舎に設置されている太陽光発電について調べた。 また、小型の太陽光パネルを用い、光の強さと発電量の関係や、パネルの設置角度による発電量の変化についても調べた。
(キーワード)海水、マグネシウム、浸透圧を使った発電 海水発電:発電量を安定させることが目標だったが、ある程度時間が経過するとマグネシウム板に水酸化物が付着し反応が進まなくなった。酸化物を取り除く方法を考えながら実験を行った。 浸透圧発電:海水と淡水との浸透圧の違いにより水の流れを発生させる実験を行った。この発電方法では風力や太陽光のような変動が少なく、安定性のある発電方法だと考えられる。実験では塩分濃度差が少ないとほとんど水の流れが起きないことがわかった。	(キーワード)波力発電装置製作 波力発電の有用性を証明するために、波力発電装置の模型製作に取り組んだ。仕組みは浮体に波の力で上下するおもりをつけ、アームを介して浮体中央に取り付けた軸を回転させる機構を作った。さらにその回転軸に自転車用の発電機を取り付け発電できるようにした。作業には思った以上に時間がかかってしまい、実際に発電できるような実験を行っていない。今後動作する波力発電装置を製作し、発電量の実験を行いたい。	(キーワード)太陽光発電 ・照度計を使用し、光の強さと太陽光パネルの発電量の関係を計測した。 ・パネルの設置角度を変えて発電量を測定した。 ・校舎に設置されている太陽光パネルの発電量を観察した。
バイオマス	プラスエネルギーハウス 風力発電、差熱発電と燃料電池の活用	
現在双葉郡には、福島第一原子力発電所事故の影響で耕作放棄された農地や立ち入り制限された地域が多く存在する。また、福島県内には豊富な森林資源があることから、バイオマスエネルギーについて研究したいと考えた。 また、土壌に生息する発電菌などから電気をとり出す「微生物発電」や、ミカンの皮からリモネンを抽出する実験なども行った。	エネルギー自給自足の家「プラスエネルギーハウス」を自分たちの力で実現したいと考え研究に取り組んだ。 風力発電:自宅に設置出来る風力発電装置の研究を行った。誰もがエネルギーについて興味を持てるよう、すぐに手に入る素材で発電できるよう工夫した。 差熱発電、燃料電池:目には見えないが身の回りに存在するエネルギーを使って発電したいと考えた。	
(キーワード)バイオエタノール、微生物発電、リモネン 1バイオエタノール:乾燥したセイタカアワダチソウ50gを用い、4%の糖液をつくり、さらにその液を発酵させ9%濃度のアルコール液を得ることに成功した。糖化の方法を工夫することで、さらに高い濃度の糖液を作りたい。 2微生物発電:湿地深部から採取した土を使って実験したところ、2mAの電流を2ヶ月にわたり発電し続ける事が確認できた。今後土の導電性向上のため鉄イオンを増やすなどの実験を行いたい。 3リモネン抽出:ミカンの皮374.2gから7.56gのリモネンを抽出することが成功した。リモネンは燃料として使用するのではなくアロマオイルとして使用するのが好ましい。	(キーワード)風力、差熱、燃料電池 風力発電:風力発電用の羽根の形状を考え、3Dプリンターで羽根の支持部を製作した。また、ペットボトルを使用して風力発電装置を製作した。 差熱発電:ベルチエ素子を使用し、温度差によって発電量がどのように変化するか実験を行った。 燃料電池:燃料電池モジュールを使用した、水の電気分解と発電の実験を行った。また、得られた水素を用い、水素の燃焼実験も行った。	

◇ スポーツと健康探究ゼミ

スポーツで交流	ふたば未来ヘルスプロジェクト	スポーツによる地域コミュニティの活性化
<p>地域の課題として子どもと高齢者のふれあいが少ないことと運動不足が挙げられる。その解決方法として高齢者と子どもたちが気軽にできるスポーツであるグラウンドゴルフでふれあおうと考えた。また、高校生である私たちが、高齢者と子どもたちのパイプ役となり、コミュニケーションが取れる環境作りを目指していく。</p>	<p>私たちは広野町の課題である肥満率に着目した。その課題を解決するために体力テストを実施して考察し、劣っている部分を補う運動を繰り返し実施する。イベントを繰り返し行うことによって広野町の課題である肥満率を下げるという目標を立てている。</p>	<p>現在の福島県は少子高齢化が進んでいる。それに伴い、地域コミュニティが衰退するという事態に陥っている。コミュニティ衰退の背景には、地域の経済活動の不振がある。経済基盤が脆弱になると、地域コミュニティがさらに衰退し、経済活動がますます立ち行かなくなるという悪循環が生じる。それを打破するために、スポーツがどのように関わっていくことができるかを調査し、実際に活用できる方法を考え、まとめたことを発表する。</p>
<p>(キーワード)ふれあい,地域の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グラウンドゴルフ大会(MIKANカップ)への参加。 ・富岡サマースクールのボランティアに参加。 ・広野町みかんクラブの大和田さんへインタビューを行った。 	<p>(キーワード)肥満率,比較</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健所へ足を運んで広野町の年齢別肥満率を学んだ。比較対象が必要だったため、広野町とほぼ同じ面積の只見町と広野町の肥満率を比べた。その結果、只見町の方が肥満率が低いことがわかった。 	<p>(キーワード)スポーツ,コミュニティ,経済</p> <p>地域コミュニティが衰退すると、災害時の対応の遅れや、社会からの孤立、犯罪や詐欺の深刻化、経済基盤が脆弱化する等の問題が起こることが調査でわかった。衰退したコミュニティを、スポーツの力によって活性化させる方法はないか、事例調査するとともに、実際に活用する方法を考えた。</p>
スポーツで双葉郡に活気を！！	幅広い世代の身体を動かす機会を増やす	福島県の高齢化に対してスポーツが果たせる役割
<p>地域の課題である「活気がない」「子どもの運動不足」というものを解決するために、私たちは「スポーツで双葉郡に活気を」というテーマのもと、身体能力を高く伸ばすことのできる3歳～5歳の子どもを対象にイベントを企画した。イベントは、子どもたちをふたば未来学園に招き、自分たちが考えた身体能力を高く伸ばす運動を遊びの中で実施していく。</p>	<p>広野町ではスポーツ人口の減少、外で身体を動かす人や機会も少ないという課題が出た。そこで、幅広い世代の人にスポーツをしてもらい、スポーツの楽しさを知って欲しいと考えた。課題解決の方法としてファミリーゴルフ(Fゴルフ)というスポーツでイベントを開催し、スポーツに関心を持ってもらい運動を継続してもらいたいと考えた。そして、あまり有名ではないファミリーゴルフの普及もしたいと考えた。</p>	<p>福島県では、現在高齢化が問題となっている。その原因として、福島県の若者が県外に出てしまい、若者の人口が減少していること等が挙げられる。高齢化問題自体をすぐに解決することは難しいし、私たちの力だけで何とかできるような問題ではない。そこで私たちは、高齢者を元気づけようと考えた。私たちが知っているスポーツの素晴らしさを高齢化問題と結びつけ、福島県の高齢者を生き生きとさせるための方法を提示したい。</p>
<p>(キーワード)子ども,イベント,ふたば未来学園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・双葉郡の現状調査 →課題発見 →課題解決のためのイベント企画 広野子ども園訪問(スタッフインタビュー) 広野子ども園訪問(子どもたちとのふれあい) 	<p>(キーワード)Fゴルフ,高齢者,若者,高齢者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタートはドッチビーで課題解決しようと考え、みかんクラブへ協力を提案した。話し合いの結果ファミリーゴルフへ変更を行った。いわきでファミリーゴルフを行っている速藤さんと出会い、体験会にもグループ全員で参加した。その後、広野町の課題をどうやって解決できるかを話し合い、イベント開催を考えた。夏休み中に学校で開催したが自分たちの思うような結果ではなかった。 	<p>(キーワード)スポーツ,高齢者,生き生き</p> <p>福島県では近年、高齢化が進んでいるということが、調べた結果わかった。そこで、スポーツの力を使い、高齢者を元気づけ、生き生きとさせる方法はないかと考えた。</p>
広野町の旧跡・名所をウォーキングで知ろう	FutureChangeTheAbility(FCA)	<p>震災以降低下している運動能力、そして増加している肥満傾向児。それらの課題を解決するために、まず広野小学校を対象としたFCAを開催する。FCAとは、私たちが小学生に遊ぶ時間、空間、仲間を与えてあげるプロジェクトである。遊びを通して2つの課題解決を目指す。また、体を動かす楽しさも伝えていく。</p>
<p>広野町の旧跡、名所をウォーキングでめぐって地元の人にふるさとの良さを再確認してもらい、心の健康を豊かにする。そして、ウォーキングを行って身体も健康も豊にする。その体験や経験を活かして広野町の歴史や自然の豊かさを世界に発信していく。</p>	<p>(キーワード)いわきFC,3つの間,神経生理学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちは子どもの遊びのためにサッカー場を解放しているいわきFCのいわきアスレチックアカデミーを訪問した。そこでは、子どもの対応の仕方や特徴について肌で感じる事ができた。2回訪問する中で神経生理学や運動神経などの身体についての勉強もさせていただき、私たちの学んだことをふまえて自分たちでイベントを開催することを決めた。プロジェクトの内容を決めていく中でいわきFCで学んだ神経の勉強はとても有効で、遊びの中でも何を目的とした動きなのかを考えて組み込んだ。広野小学校と話を進め、第一回の開催が9月4日(水)に決定した。私たちのプロジェクトはここから本番。 	

◇ 健康と福祉探究ゼミ

美容と健康～心と体を美容で元気に～	障がいとつながるプロジェクト	NoMore寝たきり
<p>ハンドマッサージを通して心と体のリラクゼーションをはかり、地域の高齢者に元気になってほしい。心が元気になることで生活に楽しみやハリが出て、それが体の健康へとつながっていく。私たちは、健康寿命を少しでも伸ばしたいと考えてこのプロジェクトを行っている。</p>	<p>「障がいの有る無しに関わらず、住民と一緒に生活を送れるような地域づくり」を目指して取り組んでいる。地域で一緒に生活していくためには、何を理解すべきなのか、どのようなコミュニケーション方法が良いのかなどを探究している。</p>	<p>高齢期の寝たきりを防止するために、高齢になってからではなく、20代のうちから運動を続けてほしい。だが、運動が苦手だったり、仕事で時間がなかったりするのが現状だ。そこで、目に見える結果を示すことが、健康維持への意欲につながるのではないかと考え、働く世代に向けて体力テストの実践を計画した。</p>
<p>(キーワード)セラピー活動,リラクゼーション,健康寿命</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンドマッサージの効果について調べた。 ・リラクゼーションサロン「BodyLabo」でマッサージ方法を学んだ。 ・広野町の歴史(行事など)についてインタビューした。 ・介護施設の高齢者さんに向けて実践した。(広桜荘、特別養護老人ホーム花ぶさ苑) 	<p>(キーワード)障がい,偏見,震災</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「障がい」とは何かを調べた ・人々の「障がい」に対する考え方を知るためにアンケート調査を実施した。 ・当事者の気持ちを知るためにプチ交流会を実施した。(ワークセンターさくら) 	<p>(キーワード)健康寿命,体力テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体のしくみや老化しやすい筋肉と予防について学んだ。(さくま接骨院、Jワイルド) ・ふたば未来学園高校の先生方に向けて体力テストを試した。 <p>※地域での実践に向けて計画中</p>
<p>健康寿命と骨 食事で変える美と健康</p> <p>双葉郡の人々の健康寿命をのぼすため、高齢者がなりやすい骨粗鬆症の予防について探究した。特に、運動面からの予防策について調べ、高齢者ができるもの考えた。</p> <p>この町で栄養バランスを意識している人は、全住民の半数に満たない。それは、福島県のメタボ率ワースト3の原因のひとつなのではないかと考えた。そこで、栄養バランスの意識を高めることで、美と健康を保つための活動をする。</p>	<p>健康寿命と骨 食事で変える美と健康</p> <p>双葉郡の人々の健康寿命をのぼすため、高齢者がなりやすい骨粗鬆症の予防について探究した。特に、運動面からの予防策について調べ、高齢者ができるもの考えた。</p> <p>この町で栄養バランスを意識している人は、全住民の半数に満たない。それは、福島県のメタボ率ワースト3の原因のひとつなのではないかと考えた。そこで、栄養バランスの意識を高めることで、美と健康を保つための活動をする。</p>	<p>運動の力で広野町を元気に！</p> <p>広野町で町民運動会を開催し、運動を身近に感じてもらい、運動を通して地域のコミュニティを築きたいと考えた。震災によって疎遠になってしまった人同士も、この運動会を通して再びつながりをもってほしい。また、日頃から運動に触れてもらうことで、広野町の健康寿命を日本一にする。</p>
<p>(キーワード)骨粗鬆症,運動,予防</p> <ul style="list-style-type: none"> ・接骨院、ふたば復興診療所、保健センターへのフィールドワークを実施した。 ・広野町の高齢者がウォーキングしやすい場所を調べた。 ・ポスターを作成した。 	<p>(キーワード)食事,メタボ,栄養バランス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の現状を調べる。(広野町保健センター) ・メタボ解消のための食習慣を調べる。 ・ポスターで広報する。 	<p>(キーワード)コミュニティ,運動会,健康寿命</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト実践に向けて協力者を見つけた。(みかんクラブ、ふたば未来学園を支援する会長) ・地域の介護施設(広桜荘)へのフィールドワーク ・町民運動会の開催に向けた計画
<p>五感で音楽を楽しむ～高齢者の心のケア～</p> <p>聴覚・視覚・触覚を使った音楽療法について探究している。高齢者の心のケアと認知症予防を目的にしている。また、介護する側も一緒に楽しむ時間にすることで、少しでもホッと休息できるような活動を行う。</p>	<p>ひろのニコニコ大作戦～先生はおじいちゃんとおばあちゃん～</p> <p>高齢者の自己有用感に働きかけることで、まだまだ必要とされていることを実感してもらい、明日への楽しみを感じて生活してほしいという思いでプロジェクトを始めた。そこで、高齢者の方々に先生になってもらい、若者が「料理を教わる場」をつくった。</p>	<p>美容でいきいきプロジェクト</p> <p>ネイルやメイクを通して、高齢であっても美しくなる喜びを感じ、自信を取り戻してもらいたいという思いで活動している。また、美しくなることで外出したくなる気持ちが高まり、体力の向上や健康にもつながると予想して実践している。</p>
<p>(キーワード)音楽療法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽療法について調べた。(本、インターネット、インタビュー) ・聴覚、視覚、触覚を使って楽しめる音楽を検討した。 ・特別養護老人ホーム花ぶさ苑を訪問し、実践した。 	<p>(キーワード)料理,高齢者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他地域の取り組みを見学した。(いわき市北二区集会所) ・プロジェクト実践に向けて協力者を見つけた。(広野町保健センター、浜田集会所) ・学校にて「料理教室」を開催した。 →そこから、地域住民主催の「お料理会」へと進展 	<p>(キーワード)ネイル,メイク,外出への意欲</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「メイクセラピー」について調べた。 ・ネイルやメイクの効果について調べた。 ・介護施設を利用している高齢者さんを対象として実践した。(広桜荘、特別養護老人ホーム花ぶさ苑)

5期生・発表会

◆期日：令和2年10月28日（水）

1日目…	探究テーマ
2日目…	内容

原子力防災探究ゼミ		
マイクラでつくる双葉郡	村おこし in 葛尾村 !!	震災を考える
<p>ゲームを使って話題性が生まれ双葉郡に興味を持ってもらおうと思いこのテーマにした。若者がよくやるゲームで、自由に表現ができるマイクラを使用する。双葉町、吉川さん、原子力視察を行い、当時の地震の被害の様子や復興に向けて進んでいる現状について知ることができた。また、原子力や放射線などの基礎知識についても学び、メリット、デメリットについて改めて理解することができた。現在作ろうとしているところの構造が把握できていないことが悩みなため、まずはふたば未来学園を作って生徒や外部の方からの反応が見たい。</p>	<p>メンバーである市川が福刈りで葛尾村に訪問した際に村の方々と話す機会があり、そこで、「スポーツはしたいけれど人数が足りない」と言われた。そこで私は葛尾村のことを知りたいと思い、この現状は今の広野と似ているのでこのプロジェクトを考えたい。葛尾村の地域はイベントはしているが中々人数が揃わないということがあり、その現状を私で変えるために葛尾村で色々なイベントを開き地域を活性化させ、今後このようなイベントを地域に定着させたいと思っている。私達の今の問題は人集めた。人が集まらないとこのイベントはできないので色々な方々が「来たい」と思えるようにするにはどうしたらよいか知りたい。</p>	<p>他県や他校の中高生を中心に双葉郡ツアーを行った後、グループワークを行い、双葉郡のことや自分の地域について考えてもらう。</p>
エネルギーからエコロジーへ シビックプライドを形成する環境事業	鉄たまごという地域の可能性	10年越しの双葉郡～未来への築き～
<p>探究テーマ設定の理由は、ドイツ研修に参加したことで、環境に対する意識が変わったことと地域の発展が進むことで自然が破壊されてしまうことに危機感を持ったからである。また、地域経済循環が悪くなっていることから、新事業の必要性を感じたからである。</p> <p>プラスチックについて徹底的に調べ、プラスチックを出来るだけ使わない生活を行った。日常生活の中で使い捨てプラスチック製品を他の資源を利用し製造できるのではないかと考えた。今後は役場や地域企業に提案していく予定である。</p>	<p>メンバーである宮迫は初め「化学が人体に及ぼす影響」について探求しようと考えていたが、どうしたらよいか思い付かず悩んでいた。そんなある日、宮迫は運命的な出会いをする。そう、これが南部鉄器職人を目指す木田との探究活動の始まりであった。地域で砂鉄が採れると知り、2人は砂鉄を実際に採りに行き、まほろんで話を聞いた。これは続々と現れる課題と闘いながら成長していく物語の序章である。</p>	<p>きっかけは、暇つぶしでイベントに参加することから始まり、町の風景や人々の思いに心を打たれ、幼い頃育った町に恩返ししようと思ったことである。双葉郡バスツアー、放射線ワークショップ、魔炉フォーラム、石巻市大川小学校見学、双葉町づくりプロジェクトなどに参加してきて、今双葉郡の地にいる人や震災を経験した人達の思いや考え、3月11日のまま変わっていない双葉郡の風景に心打たれました。今後は、双葉郡で交流、伝える、知ってもらう、町づくりの第一歩を練り混ぜたイベントをしていきたいと思っています。</p>
絵本で記憶の受け渡し	ふたばツアーデジタル計画	双葉郡8町村フルーツアイス計画
<p>3.11の記憶を持たない世代へと移り行く今、大切なのは3.11を記録ではなく記憶として次世代に受け渡すことであると私は考えた。その為の方法として考えたものが絵本である。始めのアクションとして、私は3.11の記憶を持つ方々に取材を行った。得られる経験談は人それぞれ違った。それらをうまく活用さえすればより多くの人により多く共感と理解が得られるのではないかと拙考したのである。試作品ができたら学校内に配布することを考えている。</p>	<p>多くの先輩方もチャレンジしてきた双葉郡ツアー！私も渡邊美友先輩のツアーに参加し実際に自分で見ることも感じる大切さを知りました。私も、双葉郡を多くの人に自分の目で見て、聞いて、感じてもらいたい。多くの人が、お互いの地域の課題を自分事として感じられる社会を夢見てこの探究テーマにしました。映像やVRでふたばに来てもらえたらどうでしょう？？と言うのが最初のプロジェクトです。</p>	<p>浪江町の道の駅に行った際、なみえ焼そば味のアイスクリームを食べた。その味は少し残念な味だった。兄からの提案で、ふるさと浪江町に何かしら形で貢献したい気持ちがありこのテーマにした。アクションとして行ったのは浪江町に行き双葉郡名産のフルーツを調べた。そこで気づいたことは、浪江町の道の駅にはたくさんの方が集まっていたが、特産品のフルーツがあまり知られていなかったことである。今後は役場の方にお話を聞き企画書を作りたいと考えている。また、代理生産について詳しく考えていきたい。</p>
双葉郡の思い出の街を復活せよ！！		
<p>2011年東日本大震災から9年が経ち、2020年3月にJR常磐線が全線開通した、開通に向けて双葉駅の駅舎が新しくなり、双葉郡周辺の再開発をさせようと思った。フィールドワークでは、旧駅舎の時計が止まったままであったり、家屋の倒壊など数多くの被害を見ることができた。また、駅北口に住宅地ができる予定であることなども知ることができた。今後は双葉郡駅周辺の街づくりや商店街の復活に向けて活動していきたい。</p>		

メディアコミュニケーション探究ゼミ		
震災10年、大熊はちゃんとある。	子どもたちは震災を知らない—演劇×震災—	ふたば未来大熊企画部
現在の大熊が暖かい町に戻るためにできることを考え、現状を写真で残すことを考えた。訪問した大熊はバリエードが多く、駅周辺から移動できなかつたし、人もいなかた。今後は写真をInstagramに乗せたり、フォトイベントへの参加、撮影の継続を行う。	震災が忘れられるなか、「自分事」としてもらうにはどうすればいいか考えた。檜葉中とならばCANvasに行き生徒の協力と発表の場をお願いした。やりたいと思ってくれる生徒が少なかつた場合どうしようかと考えている。現在はその対策とアンケート作成を行っている。	地元である大熊を昔のような活気ある町にしたいと思ったのがきっかけである。第一回大熊っ子座談会を本校で行った。焼くべへのインタビューを考えている。加えて、大野駅周辺の地図の作成を考えている。
復活!! 伝統芸能	いのちがもったいない	考えるto言語化
自分が元々「請戸の田植え踊り」の踊り子で、今の状況を知りたくなつた。震災後、請戸にゆかりのある子どもが減っている中、次の世代に伝統を受け継ぐためのアクションを行う。そもそも人では足りているのか、どのように踊り子を増やしているのかを保存会の人に聞く。最終的には子どもたちを集めて、実際に踊りを教えてあげる場を作りた。	テレビやSNSを通じて、犬や猫の殺処分、多頭飼前嫌などを知ったことがきっかけである。目的は捨てられたり、家族と離れる動物を減らすこと。これまでに行ったことはSNSによる情報収集、保護シェルターさんへの電話である。今後は、保護シェルター・ペットショップへの訪問やアンケート実施を考えている。	現代の若者は安易な言葉に頼りすぎるのが問題だと感じた。相手の求める答えを話そうとするのではなく、自分の頭で考えることが重要だと感じた。まさに答えのない問を考える探究の時間を通して、生徒が考える環境をプロデュースしていきたい。方法としては焚き火を使って本音で語る。本当に言いたいこと、「考えること」への抵抗を減らす。求められた答えを意図しないで、話せるようになりたい、なってほしい。対話の楽しさを知ってほしい。
LGBTQと福島	正しい情報を私の言葉で	震災の影の小さな命
福島は震災の偏見、たくさんの外国人が住み、多様性を最も身近に感じられる県だと考える。実際、県の議案に国内初のLGBTQ議案があり、それをきっかけに県内のLGBTQを知ってほしいを考えている。今後はアンケート、イベント、LGBTQファッションショーを予定している。	研修などで大手メディアが事実とは異なる情報も発信したり、伝えきれない情報があると知つたのがきっかけである。私の日常をYoutubeで配信することで、福島の現状や課題をリアルに伝え、少しでも多くの人が福島の復興に関心を持ち、一緒に活動してくれるようになることが目標だ。本校の紹介動画を作成した。しかし対象が明確でなかつた不満が残つた。反省を生かし、ターゲットを高校生に絞り、流行のVlog風に学校紹介動画を撮りなおしている。	震災の時、飼っていた犬を手放してしまったのがきっかけである。翻弄された動物たちのことを伝えるため、飼い主とペットのことを漫画にして伝えたい。調査では、福島県で2500頭のペットが震災で死亡していたこと、命は助かつたが負傷したり、飼い主と離れた放浪状態になったペットが多数いたことを知つた。今後は『プロメテウスの翼5』『いのちの記録』を参考に下書きを作成していく。
震災について語ろう	バナナの可能性は無敵大	世界の子どもの偏見・差別・貧困問題を伝える
きっかけは「絵でできることはないか」で、絵を使ったクイズや絵を描くことで震災について語るきっかけを作りたい。ただ絵を描くだけではなく、イベントで大人の方と交流を図る。来年3月のならはCANvasで行われる震災10年のイベントに参加するつもりであるが、どのようなイベントを開き、町の人たちにどのように参加してもらうかが悩みである。	広野のバナナに興味があり、バナナ園の方の思いに共感したことがきっかけである。プラスチックごみが世界的な問題になっている。バナナ×脱プラスチックのプロジェクトを図る。具体的な数値をどう出せばいいかが悩んだ。まずバナナの葉がどれくらい使えるかと、実際本PJに協力可能かうかがう。	日頃から流れるCMやニュースがきっかけで、国内外で起きている子どもへの差別偏見・貧困問題に興味を持ち、それを若い世代に広げるため、SNSやフリーペーパーを作成し、情報発信を行う。現在は差別偏見についてどれだけ関心があるかのアンケート調査を行っている最中であり、今後、国内外で起きている差別偏見・金銭面での貧困と心の貧困の違いについて調べ、自分たちの知識として取り入れていく。
いなか So What!!	Local Wedding	韓国と日本が仲良くなるには?
広野に何も無いと感じ、東京のお店を期間限定で連れてきたいと考えている。しかし意外に広野でほしいものを買っている人が多いことがアンケートで分かつた。これからはアンケートからどのような店舗に協力を依頼するか考える。	私の地元である広野町で結婚式を挙げたという新聞記事を読み、自分たちも地元ならではの式をプランニングして、良さを伝えたいと思つたのがきっかけである。Jヴィレッジの挙式の担当をされた方の話を聞き、写真を見せてもらった。今後は式の内容や場所をプランニングし、Jヴィレッジに提案するつもりである。これからプランナー資格を持っている方に指導を頂きながら、自分たちならではのプランを作りたい。	日韓が相互に持っている悪いイメージや偏見をなくしたい。韓国在住の方に、広野町のいいところや現状を整理して発信していきたいと思つている。アンケートをもとにオンラインで対談をしたいと考えている。そのために韓国語スキルを高めたい。アクションを迅速に回転させ、今後広野のよいところを見つめる。
寄り道コミュニケーション	未来を担う人材を	make a plat form
高校生と地域の方が交流できる場所や、生徒が寄り道できる場所がない事を課題に感じたのがきっかけである。高校生がふらっと立ち寄れる場所を作ること×地域の人のコミュニケーションの場を作ることをテーマに、広野駅前ができる予定の交流スペース「ぶらっとあつと」さんに協力をお願いして、地域と高校生の交流を促せるイベントを行う。現在企画中。	私達が震災を語る最後の世代である。子どもたちにも震災について考えを持ち、深め合ってもらいたいと思つた。双葉郡についての情報を発信しながら、震災について理解を深めることができるイベントを開催したいと考え、中学生に対する地域への関心についてのアンケートを行い、震災についての意見はあるが、それをどう発展し、行動に繋げたらいいか分からないという実態に気づいた。	地域でアクションを起こしている人や、本校のこれまでの探究度保存し発信する。そのためにWebサイトを製作し、外部とコンタクトを取れるようにする。県内のニュースでは伝えられていないことが多いと感じている。特に若者の意見が欲しい。自分たちが地域の方・先輩が行っているPJや活動にスポットライトを当てて発信していく
来世まで残るものに		
図書館で見つけた『ふくしまからきた子』という絵本を読み、私のように震災を知らない人に震災のことを伝えたいと思つた。その手段として絵本を作りたい。今後の見通しは、震災の体験をした人に話を聞き、絵本のモデルになってもらう。絵本を書く人も探す。		

スポーツと健康探究ゼミ		
子どもたちと公園をキレイにして手軽に使えるようにしよう	カメラでバシャリ広野町	熱中症予防
<p>私たちは広野町の公園をより活発に使うため「子どもたちと公園をきれいにしてお手軽に使えるようにしよう」というテーマで活動します。子どもたちが活発に使用してくれることで、体力向上につながり、健康増進、ストレスの発散へ効果があると考えました。ポスターやインターネットで公園をPRし、より多くの方々へ知っていただき、公園を活用してもらえようと思っています。</p>	<p>スポーツを通して地域を活性化させたい、という思いがあり、カメラで写真を撮影し、地域の様子を発信することにより、地域の活性化につながると考えこのテーマを設定した。これまで私たちは、インターネットで情報を集めたり、アポイントを取ったり、広野町の課題について調査してきた。その中で肥満度が高い、子どもの体力が低下していることなどに気づいた。現在はスポーツへの関心を持ってもらうために具体的にどんな工夫が必要となるか、という悩みがある。今後はほかの班のイベントなどと同じし、撮影した写真を地域や県、全国に発信していきたいと考えている。</p>	<p>このテーマを設定したきっかけは、熱中症は屋内でも起こりうるというニュースを見たときに、熱中症へ興味を持ったからである。これまでのアクションとしては、熱中症はどのような環境でなりやすいか、熱中症予防となる飲み物をネットで調べた。現在、はなぶさ苑さんへ連絡を取っている。このアクションからの気づきや学びは熱中症への対策や起こりやすい環境について自分たちが知っていることばわすかであり、それについて知った気になっていることだと感じた。今後の予定としてははなぶさ苑さんと連携を取って、活動できればと考えている。</p>
町の活性化のために何ができるのか	スポーツの力で世界と繋がる	TikTok ～いきいきプロジェクト～
<p>双葉郡の現状は、人や店や会社がありません、このままでは人口が増えないのではないかと、どうにか活気づけるためにスポーツチームを作ってはどうかと考えた。スポーツチームを立ち上げ、そのチームに人が集まれば自然と町に人や店や会社が増え、町の活性化に結び付くと考えた。このテーマの実現は簡単ではなく、もっと知識が必要である。人脈やチームを作る工程を知りたいと考えている。</p>	<p>私たちは世界に目を向け様々な問題があることに気づき、それをスポーツを通じて課題解決をしたいと思った。これから外国人留学生と交流し、自分たちが学んだことを中学生にスポーツを通して伝える活動をしていきたい。この活動から、はやい年代から世界に目を向けてもらい、世界事情を理解してもらうことで課題意識をもってもらえる。また進路の拡大につながり将来的に活躍してもらえたら、自分たちの活動が意味のあるものになると思う。実現できるよう全力を尽くす。</p>	<p>今流行りの「TikTok」を活用し、高齢者の基礎体力、身体機能の向上を目指す。テーマ設定のきっかけは、広野町の課題である基礎体力や運動機能の低下をどうすれば楽しく改善することができるかを考えたことである。今後、老人ホームなどに訪問し、自分たちのプロジェクトを行い、その様子を撮影しイベントなどに来てもらえるよう宣伝を行っていくと考えている。そして、高齢者の方とTikTokを通して交流を深めていきたい。現在の悩みは、課題にもあった交流機会の充実を求めている人、基礎体力・身体機能の低下を心配している高齢者にとしたら集まってもらえるか、ということである。</p>
障がい者スポーツの振興	女子必見！貧血防止対策	体を動かして子どもの体力向上を目指す
<p>スポーツの課題を調べていた時に、障がい者スポーツに関わる人が少ないという課題が見つかった。そこで、スポーツの楽しさをしてもらいたく、このテーマを設定した。障がい者スポーツを調べていく中で、「スペシャルオリンピックス」というものを知った。これは、オリンピック・パラリンピックとは異なり、出場した選手全てが表彰されるものである。今後は、富岡支援学校へ行き、スペシャルオリンピックスの紹介をし、スペシャルオリンピックス実施のスポーツやスポーツの集いなどを行い、スポーツへの興味、関心を持ってもらいたいと考えている。</p>	<p>私たちは、栄養士さんの体験談を聞いて、貧血に悩んでいる女性がたくさんいると気づき、この問題を解決したいと思った。女性は貧血になりやすい十ヶ月経つためしっかりと食事を摂らなければホルモンバランスが崩れてしまう。貧血は鉄分不足から始まり、スポーツをしている女性も突然体力が低下し、動けなくなってしまうことがある。体重を落とすためにご飯を食べない女性もたくさんいるが、食べないダイエットは一時的なものであり、逆に太ったり、貧血にも影響する。今後は、スポーツをしている女子高校生を対象に講演をひらきたいと考えている。そして、貧血に悩む女性を少しでも減らしていければと思う。</p>	<p>このテーマにしたきっかけは、震災後、福島県の小学生の体力テストの結果が低下していることを知り、それを改善したいと思ったからである。具体的な活動内容は広野小学校へ行き、小学3、4年生の体育の授業を行うことである。小学3、4年生は手本を見たり、説明を聞いたりすれば自分たちで考え行動に移すことができる。できる・できないに関係なく、みんなが運動を好きになってもらえるようにする。3期生、4期生が継続して行ってきた活動を引き継ぎつつ、いかにオリジナリティを出していくかが現在の課題である。今後も広野小学校を訪問し、活動を続けさせていきたい。</p>
二ツ沼公園プロジェクトQ		
<p>練習場に行く際、いつも目している公園を有効に活用できないか。と感じたことがきっかけでこのテーマを設定した。これまでは主に、Webサイトでの情報収集、公園の管理担当者の方への連絡や現地視察などを行ってきた。その中で私たちは公園の内部からこそ分かるような良い点や、問題を発見することができたのである。今後は、担当者の方へ直接インタビューをさせていただいたり、ボランティア活動を行ったりしていきたいと考えている。</p>		

健康と福祉探究ゼミ		
高齢者の健康のために	音楽療法で認知症対策	からだを動かす楽しさを知ってもらおう
<p>私は日常生活の中で高齢者の方が困っていること、不安にしていることを知りたい、解決したいと思ったため、このテーマにした。私は高齢者体験キットや高野病院へのインタビューを行った。認知症の方、高齢者の方の現状を知った。広野町の今の現状は高齢者の方で孤独死、独居をしている方が多いということが分かった。今後、孤独死の原因や理由などを詳しく調べ、プロジェクトにつなげていきたいと思った。</p>	<p>①音楽で福祉に関わろうと思っていた。広野町には高齢者が多いので高齢者のために何かできることはないのかと考えた。親がテレビで認知症についての内容を見て気になっているように感じ、きっといろいろな人も気になっていると思うから。 ②「認知症」について調べた。 ③主に2つの症状があることが分かった。 ④高齢者で30分以上有酸素運動をしている人はどのくらいなのか、それをどうやって聞くのか。 ⑤オレンジカフェではどのような活動をしているのか聞いてみる。</p>	<p>①将来の夢が子どもに関わることで、対象を子どもにしたいと思っていたところ、3年生の先輩の話聞いて、広野町で小学生が放課後外で友達と遊んでいる姿を見たことが無いと思い、選バオが行っていたように小学生が遊べる場所を設定し、イベントを開き、外で遊ぶ日を増やしてほしいから。 ②中学・高校生向けアンケートの実施 ③自分の知らないことを多く知れた ④地域のことが知らないで、周りの学校や町へのインタビューをして、イベントを開きたい。</p>
動いて、食べて、元気もりもり	ハンドケアで高齢者と交流 ー私たち高齢者ができることー	健康にKizukou☺ ～Beautiful Life～
<p>①将来医療を通して、地域に貢献できる人になりたいと考えていた。広野町の高齢者の方々のQOLを向上させたい。 ②QOLを向上させるための事例探し、広野町高齢者福祉計画を閲覧した。 ③広野町に力を入れてほしい施策、問題点などを知ることができた。 ④コロナ対策はどうしたらいいのか。アクションを行うにあたって、どのような手順で行い、どうやって人を集めるのか、場所はどこののか。 ⑤ラジオ体操を行う。お菓子をその後に食べる機会を設ける。</p>	<p>広野町の高齢者と高校生との交流について調べたところ、減っていることが分かり、それが課題だと思った。そこで、私たち高校生が高齢者とかわる方法としてハンドケアがいいと思った。ハンドケアをすることで、疲れをいやしたり心も元気になると考えた。ハンドケアのやり方を調べたため今後、実践していきたい。</p>	<p>広野町の今後の課題である”幸福に生きるための交流と生きがいづくり”を交流会やイベントを通して高齢者に楽しみや生きがいを持ってもらえるように目指していきたい。認知症に不安を持つ高齢者が多いため、認知症ケアを取り入れながら実施していきたい。</p>
Make your life in a shelter better ーこれからの災害に備えてー	ヘルプマークをもっている人が幸せに過ごせるように♡	～心に癒しを～ Aroma & health
<p>①将来自衛隊員になり、災害派遣に行ったときに被災者の不安を少しでも無くしてあげたいから。 ②夏休みの課題でコロナ対策を通した避難所について調べた。 ・インスタグラムでアンケートを実施(1回目:投票、2回目:投票とアンケート) ・福祉避難所について調べた。 ・非常持ち出し袋について先生方にインタビュー ③避難所生活はとても不便だということ、プライバシーが無いということ。 ④最終的には学校全体を使った避難所体験を目標に、最初は少人数で実現させること。外国の避難所と比較して取り入れられることは取り入れること。</p>	<p>①先輩がヘルプマークについての探究行っていてやってみようと思った。また、ヘルプマークをつけている人が身の周りからいるから。 ②ヘルプマークについて調べた。 先輩方に話を聞き、アドバイスももらった。 広子先生の話も聞いた。 先生方にアドバイスももらった。 ③「なんでこうなるのか」、「この後どのように行動するのか」がたくさんあり難しい。アドバイスをもらい、探究を進めるコツを知ることができた。 ④今のところない。 ⑤アンケートなど。</p>	<p>若者との間に壁を感じる高齢者が多く、「ハンドマッサージ」や「足浴」などのイベントを通して笑顔と健康を届けたい。 今後、施設訪問やイベントに参加し、一人でも多くの人に元気になってもらいたい。</p>
世界の子どもの偏見・差別を伝える (健康と福祉ゼミ&メディアコミュニケーションゼミ)	広野町探検隊 ～with children～	認知症 もっと楽しく 毎日を(ゲーム編)
<p>小学生くらいの頃にCMやニュースでユニセフなどの活動や貧困の国の子供たちを見て気になっていた。差別や偏見では、実際に私たちの友達にジェンダー差別を受けている。そういったことをなくしたいと思った。</p>	<p>福島県の肥満率が高いというところに注目して、からだを動かして少しでも健康になってほしいと思ったことがきっかけである。そして、広野町についてもっと知ってみたいという気持ちから、みんなで楽しく広野町を探検しようと思った。今まで私達は、テーマの設定や広野町についての調べ学習などをしてきた。調べ学習では、広野町には運動できる所が多いということや福祉がたくさんあることに気づいた。また、広野町といったらみかんというイメージが強かったが、調べてみると「ハナナ」も特産物のひとつであるということが分かった。そして、福祉とは「幸せ」だということも学んだ。現在、この探究の対象を子どもだけでなく高齢者も含めようか迷っている。その理由は、普段関わりのない人たちにコミュニケーションをとってもらいたいからだ。今後は、自分たちで決めたコースを歩いて確認や集客、実際に子どもたちを招いてプロジェクトを実施する。事前と事後のアンケートも行う予定だ。</p>	<p>①親が「自分は認知症になる」と言ったことがきっかけである。高野病院に行き、さらに興味をもった。 ②認知症の人たちの毎日をもっと楽しく、認知症の進行を防ぐことを考えることである。 ③認知症の予防は難しく、認知症が治るわけではないことである。 ④そもそも、認知症患者にとって楽しいことは何か、進行を防ぐにはどうするかが悩みである。 ⑤認知症患者の楽しいことなどを考え、それを踏まえてどのように認知症の進行を少しでも防ぐ方法をゲームにしていこうとすることである。</p>

同時双方向型 オンデマンド型

組み合わせせて授業



オンライン授業を行う佐藤教諭(左)。右の画面には授業を受けている生徒の画面などが表示される。

ふたば未来学園中・高 (広野)

広野町のふたば未来学園中・高はリアルタイムで受講する「同時双方向型」と教員が作成した動画の後から視聴する「オンデマンド型」を組み合わせたオンライン授業を展開している。県立校では先進的な取り組みとして、県内外の学校関係者から問い合わせも多い。新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休校の

中、学びの継続に向けた挑戦が続く。同時双方向型で行われている中学二年の数学の授業。佐藤和義教諭が教室の黒板の前で「五角形の内角の和は何度になるかな」と画面に問い掛ける。五四〇度です。指をされた生徒の明るい声か、スピーカーを通して返ってきた。同校は全生徒がオンライン授業に参加できるよう、四月の臨時休校前にスマートフォンの所有状況や自宅の通信環境を確認した。一部の生徒にタブレット端末を貸し出し、全ての生徒が「Zoom (ズーム)」などのアプリを利用して授業を受ける環境を整えた。佐藤教諭は同時双方向型授業について「理解度を把握しにくい面はあるが、生徒とつながりを持つことが何より大きい」と意義を強調する。分からない部分は授業後にメールを送ってもらい、フォローする。一方、学校のネットワーク環境では同時にできる同時双方向型の授業数に限りがある。通信障害で授業が中断する恐れもある。システムに負荷を掛けないよう、じつじつと資料を蓄積する国語や社会はオンデマンド型を取り入れた。同時双方向型の授業は中学、高校とも四十五分授業を一日四コマずつ。毎朝の授業前に画面上でホームルームを開き、生徒の出席を確認している。

南郷市兵副校長は「近隣校にも経験を伝え、新型コロナウイルスに奪われた学びの機会を少しでも取り戻したい」と力を込めた。

福島民報 2020年5月3日 (日)

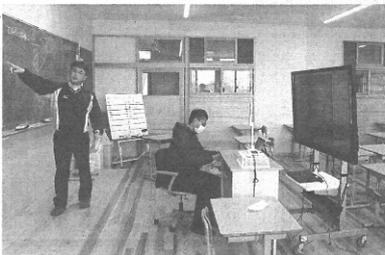
オンライン授業 模索続く

■ 分からない点あれば、何度でも視聴

「分からない点があれば、何度でも視聴できる」。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、県内各校が導入を進めているオンライン授業。福島高3年の渡辺弥生さん(17)は「本松市」は、通常の授業と比較して利点があると感じる。ただ、最初はスマートフォンで視聴していたが、目が疲れる。今はパソコンを使っている。スマホが当たり前の世代でも、長時間の視聴となれば課題が出てくる。県教委によると、4月24日時点で県立高88校のうち27校がオンライン学習を導入。17校が準備中、44校が導入検討中だった。オンライン授業を導入すると、生徒は自宅で授業を視聴し、教員への質問もネット上でできる。導入を支援するた

■ 生徒側の視聴端末に課題、目に疲れ

め、4日開会した県議会臨時会に提出した補正予算案には全ての県立中学、高校にウェブカメラを整備するための購入経費を計上。ただ、視聴環境は各家庭に依存するケースが多く、「生徒側の視聴端末が課題」どのような支援ができるか、検討していかなくてはならない(高校教育課と認める)。視聴環境の格差解消を進める学校もある。ふたば未来学園中・高(広野町)は3月、生徒のインターネット環境やスマホの有無などを調査。スマホを持っていない生徒にはタブレット端末を配布した。中学、高校で数学を受け持つ佐藤和義教諭(49)は「双方向のやりとりができ、授業として成り立っている。学校と生徒がつながりを保つことができるとオンライン授業の利点を挙げる。一方、学校側は限界も感じている。地域課題の解決策を探る同校独自の授業「未来創造探究」は、生徒同士が対面して直接議論を深める必要があり、オンライン授業には向かない」と、ノートを取る「ペン」の動きや表情から理解度を推し量ることができず、対面で行う授業の大切さを改めて実感している」と佐藤教諭。児童・生徒や教員にとっては模索の日々がさらに続く。



モニターに向かって授業を行う佐藤教諭(左)。生徒は配布されたタブレット端末などで授業を視聴する。ふたば未来学園中

福島民友 2020年5月5日 (火)

廃炉作業 地元の味で応援

「復興に向け頑張るって」

ふたば未来高生 開発商品を寄贈

広野町のふたば未来学園高の生徒は8日、東京電力福島第1原発の廃炉に携わる作業員らに対し、独自に開発した地元産のミカンやユズを使ったドレッシングなどを贈った。新型コロナウイルス感染症の影響で販売を失う中、商品が廃棄される食品ロスを防ぐとともに作業員を励ました。



商品を寄贈した林さん（右から2人目）と松本さん（同3人目）

贈呈したのは、広野町産のミカンと檜葉町産のユズを使った「青春ドレッシング」と焼き肉のたれ、丼もの用のたれなど計40本。いずれも東京都や岡山県などの高校に販売する予定だったが、各校が商品を活用しず、行はずだった販売実習が新型コロナウイルス感染

症の影響で中止となり、注文の取り消しが相次いだ。生徒は商品の原材料となるミカンやユズの収穫を通して、生産者の苦勞を肌で感じてきた。「大切に育ててきた生産者の気持ちを無駄にしたいくない」。そんな思いもあり、生徒は地元の飲食店などにも商品を届けて回った。

作業員に対する商品の贈呈式は富岡町の東電廃炉資料館で行われ、生徒代表、いずれも3年の林美夏海さん(18)と松本有加さん(18)が東電の職員に商品を託した。

商品は「福島のためにありがと」など生徒による激励のメッセージが記してあり今後、福島第1原発構内の食堂で作業員らに振る舞われるという。

林さんは「思いの込められたドレッシングやたれを味わいながら、復興に向けて頑張ってほしいと話した。



受章を喜ぶ隊



© 76, '20 SANRIO APPR. NO. G604163

ターネット上で開催されたため、伝達式が6月21日、同町の亀ヶ城公園で行われた。式では増子恵二ボーイスカウト日本連盟理事が、桑原瑛斗君(ビーバー隊)、橋本優輝君(カブ隊)、新田光一朗君(ボーイ隊)の各隊代表の3人に表彰状を手渡した。また、各隊旗に公共奉仕役を取り付けた。スカウトらは「とてもうれしい。先輩たちが行ってきた清掃活動や地域貢献をこれからも守って続けていきたい」と喜びを分かち合った。

「新しい生活様式」を実践しましょう。STOP コロナ

新型コロナウイルス感染症拡大防止にご協力をお願いします。

新型コロナウイルス感染症拡大防止には、私たち一人ひとりが感染予防を心がけることが何より

金成美怜さん考案

(富岡出身・ふたば未来高3年)



さくらタピオカと缶バッジを見せる金成さん

さくらタピオカ 始めました

古里の桜並木モチーフ

広野町のふたば未来学園高三年の金成美怜さん(も)は古里富岡町の夜の森地区の桜並木をイメージした「さくらタピオカ」を考案した。「町の魅力を若い世代に知ってもらおうきっかけにしたい」と意気込んでいます。

金成さんが富岡二小二年生だった時に東日本大震災が発生した。いわき市で避難生活を余儀なくされ、夜の森地区にあった自宅は帰還困難区域になった。自宅近くの桜並木の美しさを広く知ってほしいと商品を企画した。タピオカに牛乳と桜のフレーバーを加え仕上げた。ほのかな桜の香りと淡いピンク色が特徴で、桜の花を描いたカップと桜の木

オリジナル調味料贈る

ふたば未来高生が東電に



西脇室長にドレッシングなどを手渡す松本さん(中央)と林さん(左)

広野町のふたば未来学園高の生徒は八日、東京電力にオリジナルのドレッシングや焼き

肉のたれを贈った。双葉郡の復興に貢献しようと広野町産のミカンや檜葉町産のユズ

をイメージした絶品フードと共に提供している。富岡町の「cafe 135(ひゃくご)」で、期間限定の二百五十円(税込)で販売している。購入者には自らデザインした缶バッジをプレゼントしている。バッジに同封し

ている6Fフードを訪問すると桜並木の動画を楽しめる。今後は、学校の文化祭や郡内のイベントで販売を予定している。「桜並木の下を歩き、商品のイメージを膨らませた。これからも町のために活動を続けたい」と語った。

を使った商品を開発し販売している。新型コロナウイルス感染症拡大に伴うイベント中止で販売実習ができなくなった。福島第一原発の廃炉作業に従事する作業員に味わってもらおうと贈呈を決めた。贈ったのは「青春ドレッシングみかん」と「青春ドレッシングゆず」、「青春焼き肉のたれ」、「青春秘伝の丼たれ」各十本の計四十本。商品のキャップには、スペシャルリスト系列商標業を選択する生徒らが

九州豪雨

義援金

民報教育福祉事業団

◆8日▼富岡町の平山自動車工業が10万円、平山美弘社長が「東日本大震災のときには多くの人々の支援に励まされた。今回、

オンラインで復興議論 広野

早稲田大の「ふくしま学会」



世代や地域を超えて「六回ふくしま学(案) 福島復興を考える第 二回」は、ビデオ会議

オンラインで意見交換をする遠藤町長ら(左)＝広野町役場

システム「Zoom(ズーム)」を使い、オンラインで開かれた。参加者が震災復興や広野町の未来について意見を交わした。

早稲田大ふくしま広野未来創造リサーチセンター、早稲田大レジリエンス研究所の主催、広野町の共催。住民や大学関係者、高校生ら約百人が臨んだ。

「アトに載せたメッセージ」と「廃炉の今と先」、「コロナ禍と原発事故からの復興」の三テーマで、広野町のふたば未来学園高の生徒による発表やパネルディスカッションで、議論を深めた。

広野町役場からオンラインで参加した遠藤町長は「新型コロナウイルス感染拡大の影響で復興の現場を見てもらうことができませんが、参加者それぞれが復興への思いを持ち行動していくことが大事だ」と語った。

福島民報 2020年8月3日(月) 2面

ふたば未来学園高×保原高

モモのマドレーヌ考案

広野町のふたば未来学園高と、伊達市の保原高の生徒が伊達市産のモモを使って考案したマドレーヌは10月に発売される。マドレーヌのレシピ提供セレモニーが4日、ふたば未来学園高で開かれた。



10月 道の駅などで販売

伊達市や環境省が規格外のモモの活用に向けて取り組んでいるプロジェクトの一環。ふたば未来学園高の生徒がレシピを考案し、保原高の生徒が、生徒のレシピを基に商品化を実現し、後輩に取り組みを引き継いでいくと述べた。赤間さんは「商品の大事にした」という生徒の思いを感じた。イメージを崩さないよう商品化した」と語った。

赤間さんにレシピとマドレーヌを手渡す星さん(中)と白石さん(右)

市や環境省などから約十人が出席した。ふたば未来学園高の生徒が作ったマドレーヌを試食した後、同校三年の星亜紗美さんと白石祐奈さんが赤間さんにレシピを手渡した。

星さんと白石さんは「商品化が実現しうれしい。後輩に取り組みを引き継いでいく」と述べた。赤間さんは「商品の大事にした」という生徒の思いを感じた。イメージを崩さないよう商品化した」と語った。

蕎麦王

遠野ら(左)が落ち込んでいる会員の皆さんのお役に立てばうれしい」と話した。菅野会長は「活動の励みになる。県内全平子社長は同日、猪

あいつがマースカイを愛用している。首都圏にコロナウィルスを受けての対策を受けての対策

福島民報 2020年8月7日(金) 14面

等なと、地域の歴史を
付けて新たなビジネスモ
を構築したいと話した。

チャットイン時の対応や
場の3密対策、客室など共
用スペースの消毒・換気が
時代の集客を考えていき

チェックインの際の対応など
感染防止対策の実施状況を調
べた現地調査―福島県旅館

廃炉の課題に向き合う



廃炉資料館で廃炉に学びを深める生徒

ふたば未来高校生、原発視察

広野町のふたば未来学園
高の2年生19人が19日、東
原電力福島第1原発を視察
した。身近にある福島第1
原発の廃炉の課題に向き合
い、古里の復興のために何
ができるのかを考えた。

小中高に助産師派遣
要望に応え専門授業
いわき市

いわき市は本年度、小中
学校と高校10校を目安に助
産師を派遣する。思春期保
健や女性特有のがんなど専
門性の高い情報を児童生徒
に伝える命の教育を進め
る。希望校を募り、要望に
応じた取り組みを行う。同
中で19日に開いた「いのち
を育む教育推進協議会」で
示した。

県助産師会いわき会が協

した後、第1原発に移動。
1〜4号機建屋の外観や、
増え続ける汚染水を浄化す
る多核種除去設備（ALP
S）などを見て回った。
小学1年生の時に原発事
故を経験した浅川悠さん
（16）は「爆発したというこ
としか分からなかったが、
廃炉作業が進んでいる現状
を知ることができた。今後、
事故を知らない世代にも学
びの成果を伝えていきたい
い」と話した。

福島高専とロボテス協定

老朽インフラ整備連携

福島高専とロボット研究
開発拠点「福島ロボットテ
ストフィールド」は19日、
道路橋など社会基盤構造物
のメンテナンスに関する研
究開発、人材育成を進める
連携協定を結んだ。

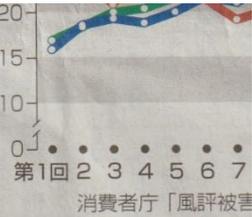
福島高専は昨年度、文科
省の産学共同インフラメン
テナンス人材育成システム
構築事業に採択され、協定
を進める。



協定書を取り交わした
山下校長と鈴木所長

協定では福島高専が拠点
内に設置した道路橋を活用
し、同校都市システム工学
科の生徒を中心にインフラ
メンテナンス分野の研究を
進める。
締結式は南相馬市の福島
ロボットテストフィールド
で行われ、山下治校長と鈴
木真二所長が協定書を取り
交わした。山下校長は「技
術者を育成し、浜通りの持
続可能な発展に寄与した
い」と話した。協定後初の
講座が開かれ、同校生徒ら
が目視点検での道路橋の調
査法などを学んだ。

消費者の目... 意識の実... 購入を... は直近の... が10... 減と、こ... った。... の2013... 調査では... 「う」と答... 割に上っ... を示してい... た今も約1... が消費者の... 戻せていな... 食品の産... ねた際に... くない食... えた人。割... の13.6%... っている。



消費者調査 購買意欲の回復難題

健康食品を開発へ

ふたば未来高生と水産加工業者ら

「常磐もの」ヒラメの栄養着目



広野町のふたば未来学園高女子サッカー部の部員や水産加工業者などがつくる商品開発チーム「SEVEN SEAS」(セブンシーズ)は、「常磐もの」のヒラメを使ったアスリート向け健康食品「FISH PROTEIN」(フィッシュプロテイン)の開発に乗り出した。ヒラメをミル



ヒラメを使った健康食品「FISH PROTEIN」を開発した高橋さん(中央)ら

フィッシュプロテイン)の開発に乗り出した。ヒラメをミル... 校トップアスリート系列の高橋七海さん(3年)だ。相馬市出身で父親が漁師の高橋さんは、同校の課題解決型の授業のテーマで本県の漁業について学んできた。3年生になり、県産魚のおいしい食べ方を提案して東京電力福島第1原発事故の風評を払拭しようと、同級生やいわき市で水産加工業者などを営む「福や」の

ヒラメを真空で加熱調理した健康食品「FISH PROTEIN」

み込ませたもので、運動後の疲労回復などを期待する。11月に浜通りでの販売会開催を目指す。商品作りの発起人は、同校トップアスリート系列の高橋七海さん(3年)だ。相馬市出身で父親が漁師の高橋さんは、同校の課題解決型の授業のテーマで本県の漁業について学んできた。3年生になり、県産魚のおいしい食べ方を提案して東京電力福島第1原発事故の風評を払拭しようと、同級生やいわき市で水産加工業者などを営む「福や」の井出拓馬さん(35)らに協力を求め、チームを結成した。チームは、アスリートの体づくりに役立つ商品を作りたいと考え、良質な高タンパク質を含むヒラメに行き着いた。ヒラメには、運動選手らが好んで食べるサラダチキンに比べ、疲労回復の効果があるビタミンB12が約7倍含まれている。試行錯誤を繰り返して、歯応えが感じられるようヒラメを重ねて味を染み込ませ、真空で加熱調理する方法にたどり着いた。23日には、同校のイベントに合わせ、試作品を生徒らに食べてもらった。生徒ら約30人は、バスケットボールやバレーボールなどの運動の後に、塩味とコンソメ味のフィッシュプロテインを試食した。同校アカデミック系列の齋藤康洋さん(1年)は「私も相馬市出身で、福島魚を使った商品を食べられるのはうれしい。スポーツ後に塩分も取りやすく、体づくりにいい食材だと思



ふたば未来学園高3年

稲田 凜さん 17

自身の経験伝えたい

震災・原発事故

10年目のふくしま

「震災を知らない世代にも災害の怖さや備えの大切さを知ってほしい」。ふたば未来学園高三年の稲田凜さん(モ)＝相馬市出身＝は二十四日、同市の中村二小で行われた三年生対象の防災学習授業で特別講師を務めた。震災から十年目を迎えた今、自身の経験を通じて教訓を伝えたいとの思いを強めている。

同校出身の稲田さんは、

自身が小学三年生だった東日本大震災直後の二〇一一(平成二十三)年五月、震災の混乱が続く中学校の授業で絵を描いた。同級生の作品には地震や津波に対する恐怖や未来の古里への願いが表れていた。稲田さんは、津波にのまれた土地が緑の草花が一面に芽吹く公園に再生した風景を描いた。「日常が震災で一変し、不安で楽しさも感じられない日々を乗り越えてくれたのが絵を描くことだった。自分の中で大きな転機になった」と振り返る。高校に進み、自身の経験を後輩たちに伝えたいと思うようになった。自ら小学校当時の担任教諭を通じて母校に働き掛け、今回の特別授業が実現した。「自分

の大切なもの」をテーマに絵画で思いを伝える楽しさを児童に感じてもらった。一方で、震災時に逃げ遅れそうになった自身の体験も語り「自分の命や大切なものを守るため、自ら考え行動できるようになってほしい」と呼び掛けた。将来は教員を目指している。「震災を風化させたくない。未来の世代と一緒に学び続け、自分も成長していききたい」と誓う。

相馬の母校で防災授業

福島民報 2020年9月25日(金) 22面



中村二小の3年生と絵画を通じた防災学習に取り組んだ稲田さん(奥・中央)と蟹江さん(同・左)

絵画制作通じ防災学ぶ

中村二小で未来プロジェクト

相馬市の中村二小三年生は二十四日、同校で防災学習「未来プロジェクト」に取り組んだ。同校卒業生の稲田凜さん(モ)ふたば未来学園高三年生と版画家の蟹江香さん(四)「東京都出身」を特別講師に招き、絵画制作の楽しさとともに自然災害に備える重要性についても考えを深めた。

卒業生の被災体験聞く

東日本大震災直後の二〇一一(平成二十三)年五月、当時小学三年生だった稲田さんは同校を訪れた蟹江さんとともに、総合学習の授業で「未来の相馬」をテーマに絵を描いた。稲田さんや同級生は震災や津波を体験して感じた恐怖や、古里の未来への願いを思い思いの絵に込めた。

こうした体験を、震災を知らない現在の母校の三年生に伝えたいと、稲田さんが今回の防災授業を提案。中村二小の協力で実現した。授業では、稲田さんと蟹江さんが自己紹介したあと、三年生児童五十六人が「自分の大切なもの」をテーマに絵を描いた。

後、稲田さんが被災体験を語り、震災によってふさがちだった気持ちが蟹江さんと絵を描いたことで大きな転機になったと伝えた。さらに稲田さんは「地震や災害が起きた時、みんな一人一人の大切なものを守るためにはどうしたらいい？」と児童に問いかけた。

佐藤和子校長は「絵画制作で交流を深めながら身近な先輩の被災体験を聞き、児童らも防災について改めて考えることの重要性を体感できたのでは」と成果を話した。

偏見の心理向き合おう

いま
ここから 11月

浪江町津島

同じ福島県内なのに、震災のことになると感じ方にズレが生じる。そのことを中島綾香さん(18)はずっと考えてきた。

最初に抱いた違和感は小学生のころに友達と交わした会話だった。中島さんの自宅は帰還困難区域の浪江町下津島にあり、8歳だった小2の春以来、帰ることができない。避難先の福島市のプレハブ仮設住宅は少し窮屈だったが、友達はずっとできた。「家に戻ってみたいんだよね」と何げなく話すと、友達は「私たちがあの時、停電したくらいだからよく分からないな」と言われた。悪気のない口調で「お金はいくらもあっていいの」と聞かれたこともあった。



だと分かっている。小学校はアートクラブ、中学では美術部やバレーボール部。充実した日々を過ごしながら、ふとした時にズレを感じた。違和感の正体をもう少し知りたくて、広野町の県立ふたば未来学園高校に進んだ。

中島さんには発達障害のある兄がいる。兄と一緒に過ごしてきて、障害者をめぐる状況と福島が置かれている現状はどこか似ている、と感じていた。生徒が課題を決め、解決方法を考える「未来創造探究」の授業で、このことをテーマに選んだ。

フィールドワークの一環として、障害者との交流イベントに同級生たちを招いた。普段は関わりが少ない人たちが、終了後、そろって「また遊びたい」と前向きな感想を

語った。

障害者への偏見も、被災地に対する誤解や無関心も、根っこは「知らないこと」にある。知らないことでも自分ごととして捉えようと理解が進む。だから、大事なのはまず体験してみることはないか。

授業の集大成として中島さんはカルタを作った。読み札に、震災や原発事故についての正しい情報と間違った情報をわざと交ぜてある。遊びという体験を通して、物事の真偽を改めて考えてみてほしい、という意図を込めた。

昨夏、両親と事故後初めて津島の自宅を訪れた光景がよみがえる。

防護服を着て約2時間。粟を拾った家の裏の土手や野菜の収穫を手伝った畑は荒れ果て、草木に覆われていた。悲しい気持ちになったが、懐かしさもあった。「また行きたいなと思うんです」。深い理由ははない。

まもなく10年。気づけば津島にいた歳月より避難生活の方が長くなり、進路を選ぶ時期に差しかかっている。来春大学に入ったら心理学を勉強してみたいという。

(石沢達洋)

*人口減をテーマに県内8か所を定点観測するシリーズです。

読売新聞 2020年11月19日(木) 25面

原発事故 悲劇を演じ



ふたば未来学園高

後の福島 災

ふるさと教育 ⑧

県立ふたば未来学園高（広野町）には演劇の授業がある。1年生全員が必修で、班ごとに分かれ、台本を練り、自ら演じる。スタイルは自由だが、題材は東日本大震災と決まっている。

演劇の授業を通して、原発事故について考えた大和田さん（中央）（昨年12月21日、県立ふたば未来学園高で）

劇づくりは、被災者や現場職員、東京電力社員ら関係者のインタビューから始まる。大和田紗希さん（16）の班6人は、あの日、津波被災地で救助活動にあたった双葉消防本部の男性職員に聞いた。

男性の同僚は、原発事故の放射能の影響を心配した妻が子どもを連れて北海道に避難し、離ればなれになったという。男性自身も震災直後、家族とはばらく別々に暮らした葛藤を聞かせてくれた。「幸せとは何ですか」と事前で考えていた質問に、「何げない家族の時間かな」と返ってきた。劇のテーマを「家族と原発」にするのが決まった。

心の傷、葛藤と向き合う

大和田さんも富岡町夜の森の自宅から避難を余儀なくされ、両親、姉とともに県内の避難所を転々とした。いわき市のアパートに落ち着いた後、地元の小学校に通い、中高一貫校に進んだ。

震災後初めて夜の森を両親と訪ねたのは、中3の夏だった。一軒家の自宅があった跡地に、雑草が生い茂っていた。両親に手を引かれて散歩した桜並木の沿道に、近くの池。思い出をたどると、断片的なシーンがよみがえる。避難した時は幼稚園の年長だった。景色が微妙に記憶とずれているのは、背丈が伸びたせいだと気づいた。

ちょうど進路を決める時期だった。夜の森を歩いてみて、古里のこともっと考えたいと思った。2015年開校のふたば未来は復興の核となる人材育成を目標とし、学力で測れない「課題解決力」に重きを置く。いわきでそのまま進学せず、ふたば未来に行きたいと周囲に告げると、先生や友達に驚いた。母親は「思うようにできるなら」と背中を押してくれた。

昨年12月の発表会。消防職員の妻役を演じた大和田さんは、避難所となった体育館での逸話を台本に織り込んだ。子どもたちを「外で遊ばせたい」と話す夫と言い合いになるシーンだ。「子どもに何かあったらどうするの」。熱がこもった。観客席の生徒たちの反応は上々だった。「幼い私たちを連れて避難した親の気持ちかわかった気がする」。大和田さんは充実した表情で振り返った。

原発事故がもたらした傷痕や心の葛藤を受け止め、さらに自分の言葉で誰かに伝えることは容易ではない。それに全員で挑み、時間をかけて表現方法を考える。演劇の授業を指導する斎藤夏菜子教諭は「被災地と生徒の学びの懸け橋になる取り組みにした」と語る。

（星野達哉、第7部おわり）



最高賞に輝いた金成さん(中央)と、銀賞の有賀さん(右)と吉田さん(左)



金成さん(ふたば未来学園) 金賞

全国高校グローバル探究発表 有賀さん(ふたば未来学園) 銀賞 吉田さん

全国の高校生が地域課題解決の取り組みを紹介する「全国高校グローバル探究オンライン発表会」は三十日、オンラインで開かれ

た。日本語部門で、広野町のふたば未来学園三年の金成美伶さん(こ)が最高賞の金賞・文科科学省初等中等教育局長賞に輝いた。英語部門出場の同校三年の有賀真尋さん(こ)と吉田智美さん(こ)のグループは銀賞だった。全国の文科科学省指定グローバル型地域協働推進校などから三十四校が参加し、日本語英語各部門で各校の代表が成果を発表した。立教大グローバル教育センター長の松本茂教授らが、事前に各校から提出された動画を審査し、賞を決めた。富岡町出身の金成さ

んは町を広く知ってもらおうと、夜の森地区の桜並木をイメージした「さくらタピオカ」を考案し、販売した経路を紹介。地域と連携して活動を進め、地元のカフェでの販売などに結び付けたことが高い評価を受けた。三十日のオンライン発表会では、最高賞に輝いた金成さんの発表や、各校の取り組み紹介などを行った。金成さんは「自分の思いを言葉に乗せて発表することを心掛けた。大学進学後も双葉郡とのつながりを持ち続け、古里の復興に貢献していきたい」と語った。

東邦銀行 相続関連 ほう遺言信 申し込み件 いる。公正 成から遺産 までまとめ 容。同行は 進展や円滑 のニーズの がある。同 行は信 二〇一七 年六月から 本体として 信託を取り 二〇一八年

金成さん(ふたば 未来高) 金賞

全国グローバル探究発表会

高校生に富岡を発信



活動内容をオンラインで発表した金成さん

ふたば未来学園高3年の金成美伶さん(17)は、地球規模の視点で地域課題の解決策を考え発表する「全国

高校生グローバル探究オンライン発表会」の日本語発表部門で最高賞の金賞・文部科学省初等中等教育局長賞

に輝いた。

富岡町出身の金成さんは「地元を多くの人に知ってもらいたい」と、町のシンボルでもある桜並木をイメージしたタピオカ飲料「さくらタピオカ」を、東日本大震災からの復興につながる商品として開発した。30日にオンラインで行われた発表会では、商品が地元のカフェの定番メニューになったことや地域のイベントで商品を提供したことなどを伝えた。

発表した金成さんは「全国の高校生に地元を発信できてうれしい」と感想を述べた。

べた。震災から10年の節目を迎える3月11日には双葉郡で開かれるバスツアーなどで商品を提供する予定で「富岡町に行ってみたくて、思うきっかけになる活動を続けたい」と話した。

発表会は、文部科学省指定グローバル型地域協働推進校探究成果発表委員会の主催で、全国34校が参加した。同校3年の有賀真尋さん(18)、吉田智美さん(18)は英語発表部門で銀賞を受賞した。

コロナ終息願いますから写真展

須賀川の佐藤さん

須賀川市の写真愛好家佐藤良儀さん(84)は2月1日

から、同ニック写真展「おいてく。佐藤して、来るくなわ3月31日知人の

「作品方々の心話。佐藤

ひとサンデー

地元産品で「プロテイン」

広野町のふたば未来と相馬産のみそ、塩こ
学園高女子サッカー部
の生徒と、いわき市の
水産加工業者らでつく
る商品開発チーム「S
EVEN SEAS
(セブンシーズ)」は、
高タンパクでヘルシー
な本県産ヒラメの身



本県産のヒラメと相馬産のみそなどを使
って開発した新商品を手にする高橋さん

と相馬産のみそ、塩こ
うじを使った新商品
「FISH PROTEIN
EIN (フィッシュプ
ロテイン)」を作った。
「浜通りの魚のおいし
さを広く発信し、県産
食品の風評払拭(ふっ
しよくにつなげたい)」

としている。
同校三年の高橋七海
さん(17)相馬市出身
が「未来創造探究」
の授業の実践テーマ
として商品開発を企画
した。震災後、漁師で
ある父親の姿を見て
県産水産物の風評
軽減へ思いを強くして
いた。一方、自身は小
学四年からサッカー
に打ち込み同校女子
サッカー部に入った
が、膝のケガで入院を
経験。その際に「病院
食でも魚をおいしく味
わうことができれば」
と考えたのを契機に、
食品の開発に取り組ん



買い求める生徒

だ。
自身の経験も踏まえ
てアスリートや健康志
向の人も食べやすいも
のをと、開発チーム
内で企画会議や試作を

ロックで
とロク
松の漆
のライ
ン

オンラインワークショ
ップを告知するチラシ



★ひとこと「釣りとスノーボードに夢中です。」

繰り返した。数種類の
白身魚の食べ応えを比
べ、相馬でも多く水揚
げされるヒラメを選
択。運動部の生徒らに
試食してもらい「みそ
味にしては」と提案を
受けた。最終的に、み
そと塩こうじを混ぜた
調味料を柵状のヒラメ
の身三枚に塗り、身を
重ね合わせて袋に入れ
て真空状態で加熱する
方法で商品化した。
高橋さんは九日、昼
休みに校内で新商品の
お披露目販売を行っ
た。教員や生徒が次々
と足を止めて買い求め
るなど好評で「開発段
階では苦労もあったが
商品化できてうれし
み」。

会津産の素材による。
めぐるは年に一
みそ造りなどを楽しめ
るオンライン発酵食
ワークショップを催
す。春、夏、秋ごとに
十五日) 受注期間を
け、手元に届けるま

「常磐もの」魅力伝える

ふたば未来高生ら ヒラメの健康食品完成

ふたば未来高女子サッカー部の部員や地元の水産加工業者などで作る商品開発チーム「SEVEN S EAS（セブンシーズ）」は9日、同校でヒラメを使ったアスリート向け健康食品「FISH PROTEIN（フィッシュプロテイン）」をお披露目した。

「県産水産物の新しい食べ方を提案して風評の払拭につなげたい」。そんな思いから相馬市出身で両親が漁師という3年の高橋七海さん（18）は昨年3月から試行錯誤を重ねてき

た。商品の材料は浜通りで水揚げされた「常磐もの」のヒラメで、相馬市で作られたみそなどで味付けした。タンパク質が豊富で運動後の疲労回復が期待できるといふ。

高橋さんらは校内に販売ブースを設け、生徒や教職員に商品の魅力を伝えた。14日午前11時から相馬市の復興市民市場「浜の駅 川浦」でも販売するほか、3月には東京都内で商品をPRする予定。価格は300円。高橋さんは「多くの人に味わってもらい、県産



の魚のおいしさと安全を伝えたい」と話した。

中ノ沢温泉135年記念 庄司さんが自費出版 ゆかりの人々紹介

日大東北高で非常勤講師を務める庄司一幸さん（70） 郡山市は、猪苗代町の

「金山生まれに誇りを」 写真家・星賢孝さん講演

金山町 賢孝さん た「こん 業で講演 を紹介し 星さん た奥会津 撮り続け もに、治 り組んで 復活させ の渡し」 星さん しさを皆 山町に生 持ってほ

福島県立ふたば未来学園の取り組み

「復興教育」巡るシンポから

福島大学大学院人間発達文化研究科など13日、「復興教育のこれまあと未来の教育」を主題としたシンポジウムをオンライン形式で開き、

震災後の学校統合により開校した福島県立ふたば未来学園高校（福島・広野町）の取り組みに関する報告などがあつた。NPOの「カタリバ」（東京・杉並区）と連携して、生徒が放課後を安心して過ごせる場を設け、学習と自立を支援してきたという。

放課後、生徒に安らぎの場

NPOと連携 自立支援など心のケア

同高校は平成27年に開校。平成31年4月には、県立ふたば未来学園中学校ができ、同じ敷地の中で中高一貫教育を行うようになった。

今回のシンポでは、ふたば未来学園中・高副校長の南郷市兵さん、同担任講師の神戸和佳子さん、カタリバシニアマネージャーの長谷川勇紀さんがそれぞれ立場から同学園について紹介した。

南郷さんは、東京電力福島第一原発の廃炉について専門家と住民が話し合う場を設けた生徒などを紹介した。

同高校では、地域課題の解決に向けて探究する学習を行っている

道徳で「哲学対話」

神戸さんは、同中学校の道徳を画面に映し出した黒板には、

生徒が黒板に書き出した問いを、

「なぜ学校に行くの？」「神様って何？」「カルロス・ゴーンはしゃく／＼保釈について!!」といった言葉が並んだ。



授業の目標は考えを深めることに置く、このため、話したくないときは黙っていいし、議論に役立つ発言に心掛ける必要もないという。

生徒の振り返りの中から、つまり「哲学対話について」「一部の人が主張する」、面白い哲学対話について「問いから発達した問いが生まれた時」といった言葉を紹介した。

神口さんは、「いつもうまくいっているわけではない」「探究的な社会にしたい」と思ってくれるとよい」などと報告を

校外の人も利用

カタリバの長谷川さんは、同学園での「心のケア」について、話した。生徒は小学生だった頃、震災・原子力災害に伴い、各地を転々とする避難生活を送るなどしてきた。不登校状態を経験した生徒も多く、学習の遅れと自己肯定感の低下という課題があった。

そこで、日中の学校教育活動に加えて、放課後も生徒が安心して過ごせる場所を設けることとなった。新築の校舎ができる前の平成29年に、まずは、技術室、続いて、校外のフレハブの施設を使って、「いつでもたれでも使える放課後フリースペース」ができた。

カタリバのスタッフが生徒と同じ時間を共有する。生徒は、自習したり、仲間とおしゃべりに興じたりする。併せて、親・教員とも同世代の友達とも違う人間関係の構築を目指した。このような人間関係をカタリバでは「オナメの関係」と呼ぶ。

平成31年に移った新校舎に福島県立ふたば未来学園の「地域協働スペース」＝平成31年撮影

は、「地域協働スペース」を設けた。カフェを営業し、誰でも利用できる。この部屋で、生徒は、カタリバの仲介により、学校の探究活動について、校外の人に相談するなどした。文化祭などの催しの場もなった。

長谷川さんは、この活動に關して、まずは、生徒に安心して安全な場を用意した上で、徐々に自分を取り戻したタイミングで主体性を高める関わりに移るといった考え方を紹介した。

併せて、「何もなければ成り行きで未来だった。10年かけて、着実に耕されてきた学びの土壌がある」などこれまでを振り返った。

ふたばの未来 切り開く

「バナナで脱プラ」街並み再現 実現模索

「環境ビジネスで地域を活性化したい」「消えていく街並みを仮想空間で再現できないか」。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

毎週水曜の5、6校時になる「環境ビジネスで地域を活性化したい」消えていく街並みを仮想空間で再現できないか。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

「バナナを使ったというアピールポイントだけでは普及しない。付加価値を高める方法を考えてほしい」。モニターに映る国立環境研究所の研究者は2人と真剣に向き合い、時に厳しい助言を送った。

「地元の企業の協力を得て紙作りを進める段階に入ったが、

「環境ビジネスで地域を活性化したい」消えていく街並みを仮想空間で再現できないか。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

毎週水曜の5、6校時になる「環境ビジネスで地域を活性化したい」消えていく街並みを仮想空間で再現できないか。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

「バナナを使ったというアピールポイントだけでは普及しない。付加価値を高める方法を考えてほしい」。モニターに映る国立環境研究所の研究者は2人と真剣に向き合い、時に厳しい助言を送った。

授業ルポ



環境ビジネスを創出する計画について説明する木田さんと草野さん

「バナナを使ったというアピールポイントだけでは普及しない。付加価値を高める方法を考えてほしい」。モニターに映る国立環境研究所の研究者は2人と真剣に向き合い、時に厳しい助言を送った。

「地元の企業の協力を得て紙作りを進める段階に入ったが、

「環境ビジネスで地域を活性化したい」消えていく街並みを仮想空間で再現できないか。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

毎週水曜の5、6校時になる「環境ビジネスで地域を活性化したい」消えていく街並みを仮想空間で再現できないか。広野町の高台にある洗練されたデザインの校舎では、あちこちで古里の再生に向けたアイデアが飛び交っていた。

「バナナを使ったというアピールポイントだけでは普及しない。付加価値を高める方法を考えてほしい」。モニターに映る国立環境研究所の研究者は2人と真剣に向き合い、時に厳しい助言を送った。

「地元の企業の協力を得て紙作りを進める段階に入ったが、

数字で見る

双葉郡の高校通学 震災前の25%

12市町村の小中学校の児童、生徒数の推移

	2010年度	2020年度
南相馬市小高区	1,087	113(10%)
飯館村	531	65(12%)
浪江町	1,773	27(2%)
葛尾村	112	13(12%)
双葉町(避難継続)	551	42(8%)
大熊町(避難継続)	1,127	12(1%)
高岡町	1,487	50(3%)
川内村	166	71(43%)
楡葉町	686	136(20%)
計(避難継続)	5,411	222(41%)

原発事故で避難指示が出た12市町村では27小学校、15中学校と6県立高・分校が移転や臨時休校を余儀なくされた。大熊町と双葉町の4小学校2中学校は現在も避難先で授業が続く。両町では子どもたちが古里に足を運ぶ機会を設けるなど、郷土愛を育む教育活動に力を入れる。

県教委によると、12市町村の小中学生は震災前年の2010(平成22)年度は8388人だったが、本年度はその11%となる960人ととどまる。双葉郡内の高校に通う生徒の数も10年度の1500人から大きく減り、本年度は378人(ふたば未来高三島長岡校舎を除く)と震災前の25%まで減



令和2年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
【グローバル】
研究開発実施報告書
第1年次

令和3年3月31日

編集・発行 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
校長名 柳沼英樹
住所 〒979-0408
福島県双葉郡広野町中央台1丁目6番地3
電話番号 0240-23-6825
FAX番号 0240-23-6828

印刷・製本 長瀬印刷株式会社
住所 〒971-8101
福島県いわき市小名浜字渚廻51-2
電話番号 0246-54-3819
FAX番号 0246-52-0234